

## 目次

序	1
第1章 RdF／RTFにおける音楽活動	
1-1. 実験スタジオの設立からフランス国営放送 RdF の設立まで	5
1-2. 実験クラブとその周辺	16
1-3. アンリ・バロー	27
1-4. バローの音楽放送観	44
1-5. 委嘱活動	53
1-6. 音楽委員会	58
第2章 フィリップおよびヴォズランスキー	
2-1. フィリップの経歴	62
2-2. フィリップの著述および発言	70
2-3. ナショナリズムとメディア	74
2-4. ヴォズランスキーの経歴	79
2-5. ヴォズランスキーの著述および発言	85
第3章 フランス・ミュージックとフランス・キュルチュール	
3-1. 両チャンネルにおける音楽放送	94
3-2. ダンドレルの主導による改革	100
第4章 フランスの公的音楽普及装置として	
4-1. 文化省の音楽政策	110
4-2. 文化省の2つの委員会	113
4-3. 「国際化」をめぐる議論	116
4-4. 国営放送の音楽活動に対する評価	120
結び	126
参考文献表	128

## 序

本研究は、1964 年から 1974 年まで運営されたフランスの国営放送、フランス・ラジオ放送・テレビ公社 Office de Radiodiffusion Télévision française（以下 ORTF）およびラジオ・フランス Radio France の 1987 年までの芸術音楽放送を対象として、2 人の音楽監督ミシェル・フィリップ Michel Philippot (1925-1996) とピエール・ヴォズランスキー Pierre Vozlinsky (1931-1994) の方針および思想を検証し、それがフランス国営放送の過去の音楽政策との関連でどのような意味および意義をもつか、また同時代のフランスの音楽界の重要なアクターである文化省や新聞・雑誌の評論家によって、彼らの音楽政策がどのように評価されたかを明らかにするものである。その作業を通して、1964 年から 1987 年までという、20 世紀半ばのフランスにおける国営放送の音楽活動が同時代において持ちえた意義、あるいはそれに求められた役割を浮かび上がらせることを目的とする。なお、研究対象とする 1964 年は ORTF の運営が始まった年、1987 年は、1981 年に始動したモーリス・フルーレ音楽局長の下での文化省音楽政策が安定期に入ったと思われる年であることから、対象期間を 1964～1987 年と設定した。

論文は、研究の目的・背景等を説明する「序」と、本研究の意義とそれが与える展望を確認する「結び」を冒頭・末尾におき、その間に 4 つの章を挟む。第 1 章「RdF/RTF における音楽活動」では、フランス・ラジオ放送 Radiodiffusion française（以下 RdF）およびフランス・ラジオ放送・テレビ Radiodiffusion Télévision française（以下 RTF）が設立された前後の状況を確認するとともに、1930 年代に始まる、フランスにおける国営放送と芸術音楽との関わりを記述する。第 2 章「フィリップおよびヴォズランスキー」では、ORTF およびラジオ・フランスで音楽監督を務めたフィリップとヴォズランスキーについて、それぞれの経歴を整理したうえで、彼らの発言にもとづきながら、両者が国営放送の音楽活動をどのように管理しようとしたのかを考察する。第 3 章「フランス・ミュージックとフランス・キュルチュール」では、フランス・ミュージックとフランス・キュルチュールという芸術音楽を放送する代表的なチャンネルに着目し、両チャンネルが芸術音楽をどのような方針のもとに扱っていたのかを確認したうえで、とりわけフランス・ミュージックにおける 1970 年代半ばの「改革」の経緯とその意義を検証する。第 4 章「フランスの公的音楽普及装置として」では、国営放送の音楽活動にたびたび関与し、20 世紀半ばのフランス音楽界で決定的な役割を果たした文化省音楽局の音楽行政を扱い、その設立前後の経緯を整理したうえで、音楽局の設置に先立って行われた 1960 年代半ばの「国際

化」をめぐる新聞・雑誌上の議論を参照し、国営放送が「国際化」をめぐる問題にどのように対処したのかを論じる。

#### ■参照した一次史料

パリのラジオ・フランス本社の一隅を占めるラジオ・フランス書誌アーカイヴ・博物館課 Service des Archives écrites et Musée de Radio France（以下 SAéM）は、主に国営ラジオ放送に関連する史料の所蔵・整理を行っている。本施設は、史料の保管のほか、放送に関する研究の推進を目的として、フランスの放送を対象とした論文や記事などの資料の目録を作成・更新しており、本研究でも文献表の作成にあたってその目録を参考にした。また、フランス国立公文書館 Archives nationales のピエールフィット＝シュル＝セヌ分館では、放送局内部あるいは放送局と作曲家との間に交わされた電報や通達などの一次資料を閲覧した。このほか、パリのマラー音楽資料館 Médiathèque Musicale Mahler およびバーゼルのパウル・ザッハー財団 Paul Sacher Stiftung でも史料を閲覧した。

国営放送が所有する音楽団体が行った演奏会の記録に関しては、ORTF のいわば広報部ともいえる「聴取者およびメディアへの対応部署 Service des Relations avec la Presse et le Public」が 1964 年 9 月から 1973 年 2 月にかけて出版した、『ORTF 音楽情報誌 *Cahiers musicaux de l'ORTF*』がもっとも網羅的な情報を提供している。毎月 1 号のペースで発行された本誌には、ORTF に所属する音楽団体の演奏会（研究課の演奏会を含む）のプログラム全体のほか、モーリス・フルレーが主導した「パリ国際音楽週間 *Semaines musicales internationales de Paris*」の内容を伝える記事、同時代の作曲家へのインタビューなどが含まれている。本誌は、その前身として『RTF 演奏会 : RTF 音楽雑誌 *RTF-Concerts: Bulletin musical de la R.T.F.*』をもち、こちらは 1959 年 10 月から 1964 年 7 月まで刊行された。1959 年に本誌の刊行が始まっていることは、このころまでに、RTF の演奏会の情報を一元的にまとめた定期刊行物の需要がある程度は存在したということを示しているだろう。『ORTF 音楽情報誌』はまたその後継として、『ORTF 情報 音楽 *O.R.T.F. Informations Musique*』をもったが、こちらは『ORTF 音楽情報誌』とは異なり、国営放送が主催する演奏会の情報のみを記した簡潔な冊子となっている。これらの刊行物は、『RTF 演奏会』、『ORTF 音楽情報誌』に関してはフランス国立図書館、『ORTF 情報 音楽』に関してはラジオ・フランスに収められているが、それ以外の図書館および資料館に所蔵が確認できないことから、書店等で市販されていたとは考えにくい。予約購読等についての情報も記されておらず、局内およびメディア向けに作成された一種の内部文書であるとみることができる。

これに対して、1975 年以降のラジオ・フランスの演奏会については、上記のような定期刊行物を通した周知は行われなかったと思われる。これ以後の演奏会資料は、1980 年代の演奏会のプログラム等の資料が網羅的にラジオ・フランスに収められているのみである。他方で、フランスとりわけパリの演奏会の情報については、戦前から刊行され、戦時中の中断を挟んで刊行が再開された『演奏会ガイド *Guide du concert*』が情報を提供しているが、こちらは 1970 年代前半で刊行を終了している。

筆者が 2013 年に発表した論文では、これらのオーケストラおよび室内管弦楽団が 1959 年から 1973 年にかけて行った演奏会について、すべての団体の演奏会を合計した演奏会数の年ごとの推移、オーケストラごとの演奏会数の分布、曲目に含まれる「現代音楽<sup>1</sup>」作品の割合を図および表の形で提示した。もっともこのような調査は、網羅的な仕方ではないとはいえ、国営放送の音楽放送関連部署そのものによってたびたび行われており<sup>2</sup>、20 世紀後半のフランス現代音楽に関する重要な著作であるピエール＝ミシェル・メンゲル Pierre-Michel Menger (1953-) の『音楽家の逆説 *Paradoxe du musicien*』でも行われている<sup>3</sup>。

## ■ 先行研究

参照した主な文献としては、フランス国営放送と芸術音楽との関連を扱った修士論文数点が挙げられる。そのなかで最も興味深いのは、1984 年にフレデリック・ティッセラン Frédérique Tisserand がパリ第 4 大学に提出した音楽学の修士論文『1945 年から 1965 年までのフランスラジオ放送における委嘱の方針』である。本論文は、フランス国営放送で音楽作品の委嘱に携わった主要な人物であるアンリ・バロー Henry Barraud (1900-1994)、アンリ・デュティユー Henri Dutilleux (1916-)、ミシェル・フィリポ Michel Philippot (1925-1996) の三者へのインタビューと、著者作成による委嘱作品リストを中心に構成されている。論文付属の委嘱作品リストは、当時ラジオ・フランスで芸術音楽番組の責任者であったシャルル・シェイヌ Charles Chaynes (1925-) から著者が閲覧を許された史料に基づいている。委嘱の過程や、委嘱される作曲家とラジオとの関わりなど、RTF の委嘱活動の実態を詳細に報告したという点で、本論文を参照する意義は

<sup>1</sup> ここでは、演奏会が行われた時点で存命であった作曲家によって創作された音楽作品と暫定的に定義している。

<sup>2</sup> たとえば AN20140048\_82 に収められている、フランス・ミュージックの番組主任 Chef du Programme のルネ・ケリングがラジオ・フランス社長ジャン＝ノエル・ジャヌニ Jean-Noël Jeanneney (1942-) に送った報告書を参照。

<sup>3</sup> Pierre-Michel Menger, *Le paradoxe du musicien: Le compositeur, le mélomane et l'Etat dans la société contemporaine*, Paris: L'Harmattan, 2002: 60.



大きい。ただ、RTF の委嘱活動が当時のフランスの音楽文化にとってどのような寄与をなしたか（あるいはなしえなかったか）といった問題までには触れておらず、委嘱活動のポリテクニカルないし戦略的な役割に関する考察にまでは至っていない。とはいえ、1984 年にこのような研究を行ったことの先見性は高く評価されてよいと考える。

ジュリー・マルシェッティ Julie Marchetti が 2005 年にパリ第 4 大学に提出した歴史学の修士論文『フランス・ミュージックの歴史：独占からラジオ・クラシックとの競合に至るまでの、ラジオにおけるクラシック音楽の扱いの進展』では、ORTF 以後の芸術音楽放送に関して、他文献にはみられない詳細な調査が行われており、第 1 章の記述において参照した。

## 第1章 RdF／RTFにおける音楽活動

### 1-1. 実験スタジオの設立からフランス国営放送 RdF の設立まで

本章では、第2次世界大戦直後に RdF が設立された 1944 年から ORTF が誕生する 1964 年までのフランスの国営放送の音楽活動を扱う。それ以前、すなわち第2次世界大戦以前あるいは戦時中のラジオ放送については、すでに多数の先行研究が存在している<sup>4</sup>。実際、これらの時代におけるフランスのラジオ放送を扱った研究は、以後すなわち第2次世界大戦後のラジオ放送を扱った研究よりもずっと多い。フランスでは、とりわけ 1920 年代後半から 1938 年ころにかけて、ラジオ受信機が家庭に普及し、視聴者参加型クイズなどの娯楽番組が人気を博すなど、ラジオが新聞と並ぶ主要メディアのひとつとなった。また音楽放送もこのころ充実し始め、芸術音楽もその重要な一翼を担っていた。1934 年 1 月には、指揮者ロジェ・デゾルミエール Roger Désormière (1898-1963) と同じく指揮者であり作曲家マニュエル・ロザンタール Manuel Rosenthal (1904-2003) の協力を得て、指揮者・作曲家デジレ＝エミール・アンゲルブレシュト Désiré-Emile Ingelbrecht (1880-1965) が、国営放送局「パリ PTT」の付属オーケストラとして国立管弦楽団 *Orchestre national*<sup>5</sup> を設立している。このように 1930 年代は、フランスにおけるラジオの第一の成熟期であった。

もうひとつ指摘しておくべきは、第2次世界大戦以前のフランスにおいては、多数の国営放送と民間放送が競合しながら共存していたことである。「国営放送」という語からは、国家の管理のもとにおかれた単一の放送局が国の放送全体を一元的に支配しているという状況が想像されるが、少なくとも第2次世界大戦以前のフランスにおいて、そのような事情は当てはまらない。

---

<sup>4</sup> 代表的な研究としては次のものが挙げられる。Cécile Méadel, *Histoire de la radio des années trente: Du sans-filiste à l'auditeur*, Paris: Anthropos/INA, 1994. 音楽放送に関する研究としては、フランスのラジオ放送における音楽全般を研究対象とするクリストフ・ベネ Christophe Bennet (1965-) がパリ第4大学に提出した博士論文に基づく次の著作がある。Christophe Bennet, *La musique à la radio dans les années trente: La création d'un genre radiophonique*, Paris: L'Harmattan, 2010. 次の研究ではポピュラー音楽の放送に関する記述が充実している。Joelle Neulander, *Programming National Identity: The Culture of Radio in 1930s France*, Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2009.

<sup>5</sup> 第2次世界大戦後、同管弦楽団は新設された国営放送の傘下に入り、のちフランス国立管弦楽団 *Orchestre national de France* となり、同じく国営放送に属するフランス放送フィルハーモニー管弦楽団 *Orchestre philharmonique de Radio France*、パリ管弦楽団 *Orchestre de Paris* とともに、フランスを代表する管弦楽団のひとつとなった。1974 年、ヴォズランスキーの提案により正式名称が「フランス国立管弦楽団 *Orchestre national de France*」となった。本論文では「国立管弦楽団」の呼称を使用する。

かった。フランス以外のヨーロッパのラジオ局はすべて国営であり、アメリカのラジオ局は民間であった。日本では、1925年に日本放送協会 NHK の東京放送局が仮放送を開始し、翌年には社団法人日本放送協会が発足している。国営局と民間局が並存するというフランスの状況は、他国ではただオーストラリアにのみ見いだされた。またイギリスでは、ラジオが聴取者に提供すべきは教養、娯楽、教育的内容であると位置づけられ、ドイツでは1933年までに、放送内容を国家がコントロールする体制が成立したという<sup>6</sup>。

1922年6月、BBCがロンドンで放送を開始する8日前、フランスで初めての民間放送局「ラジオラ Radiola」が開局した。ここではギュスターヴ・シャルパンティエ Gustave Charpentier (1860-1956) の弟ヴィクトル Victor Charpentier (1867-1938) がラジオラの芸術監督となり、その指揮するオーケストラの演奏会が電波に乗った。1924年には、すでに電波がアメリカまで届くようになっていたこのラジオ局が「ラジオ・パリ Radio-Paris」に改称し、この年から1929年まで、音楽放送を監督する立場にアンドレ・メサジェ André Messager (1853-1929) が就いた。1931年にはアンリ・ビュセール Henri Büsser (1872-1973) が彼を継いでこのポストに就いている。1933年、ラジオ・パリが国営化された際にビュセールを継いだのはアンゲルブレシュトであった。この放送局が設置した、ラジオにおける音楽放送のプログラミングに関する委員会には、パリ音楽院院長アンリ・ラボー Henri Rabaud (1873-1949)、モーリス・ラヴェル Maurice Ravel (1875-1937)、ルイ・オベール Louis Aubert (1877-1968) らが名を列ねた<sup>7</sup>。受信税が導入された1933年の時点で、14の国営、10の民間ラジオ局があった。1938年3月には国立管弦楽団が500回記念演奏会を行った<sup>8</sup>。1930年代、フランスのラジオの放送内容の53～84パーセントは音楽で占められたという<sup>9</sup>。以上の情報からは、1930年代のフランスでラジオが疑いなく主要なメディアであったこと、またそこでの音楽の役割はけっして小さくなく、パリ音楽院などアカデミックな場を代表する作曲家が放送の内容を審査していたことがわかる。

---

<sup>6</sup> ジャン・パスラー Jann Pasler は、1930年代のフランスおよびアメリカのラジオにおける音楽放送を扱った2015年の論文のなかで、1930年代フランスのラジオに関するジョエル・ヌーランダー Joelle Neulander の著書（註2参照）を参照しながら、この点に注意を促している。Jann Pasler, “Writing for Radio Listeners in the 1930s: National Identity, Canonization, and Transnational Consensus from New York to Paris,” *Musical Quarterly* (Fall 2015) 98 (3): 251.

<sup>7</sup> 他の局では、民間局「ポスト・パリジアン Poste parisien」でジャック・ドゥ・ラ・プレール Jacques de la Presle (1888-1969) が1930年から音楽監督を務め、エマニュエル・ボンドウヴィル Emmanuel Bondeville (1898-1987) は1935年から国営局「エッフェル塔局 Poste de la Tour Eiffel」で芸術監督を務めた。

<sup>8</sup> *Ibid.*: 219.

<sup>9</sup> *Ibid.*: 220.

こうしたラジオと芸術音楽の密接の関係を示すのが、当時誕生した「音楽家ミキサー *musicien-mélangeur*」あるいは「音楽家番組監督 *musicien metteur en ondes (MMO)*」とよばれる、ラジオ局に特有の職種である。1955年の国営放送社内報によれば、これは音楽家としての専門的な知識や能力を活かして、録音された音響の調整等を行うポストであり、録音そのものに携わる録音技師 *preneur de son*、あるいは番組の制作そのものを担うディレクター *metteur en ondes, réalisateur* とは区別されるという<sup>10</sup>。このポストがどのような経緯を経て生まれたのか定かではないが、作曲家が芸術監督や音楽監督として放送局に出入りするなかで、より具体的な製作の場で作曲家が音楽番組に携わることが要請されるなかで生まれたものと推測できる。あるいは、そうした要請はラジオ局から生じたものというよりも、むしろ芸術監督や音楽監督として放送局にいた作曲家によって行われていたのかもしれない。つまり、作曲家にとって放送局での活動が一種の生活の糧とみなされていたということである<sup>11</sup>。のちにその経歴を詳述するアンリ・バローがラジオ局に勤め始めたときも、やはり音楽家番組監督の職務内容ないしそれに準じる仕事内容を遂行していた<sup>12</sup>。

第2次大戦直前の国営ラジオ局は、750人の常任音楽家とフランス全土に設けられた17のオーケストラを擁する、フランスで最大の音楽機構だった。その他にも、エキストラで数百の音楽家を使っていたことを考えれば、その規模の大きさが著しいものであるとわかる。戦争の勃発に伴い、国営放送付属の管弦楽団員は召集され、残った音楽家は1939年9月、国営放送の芸術部門全体とともにレンヌへ移った。1939年9月から1940年5月に至る「奇妙な戦争 *drôle de*

---

<sup>10</sup> Roger Lutigneaux, “Notre métier: vocations nouvelles: les métiers de la radio,” *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1955. 1): 13-14. この職はその後も RTF、ORTF およびラジオ・フランスでも存続し、今日まで続いている。国営放送で音楽家番組監督として活動した作曲家としては、ジャン＝エティエンヌ・マリー Jean-Etienne Marie (1917-1989)、イヴアン・ドゥヴリエス Yvan Devriès (1909-1997)、少し後の世代ではジャック・ボワガレ Jacques Boisgallais (1927-) などが挙げられる。なお、RTF に設けられ、モーリス・マルトノ Maurice Martenot (1898-1980) が主任を務めた「番組の芸術面に関わる審査部署 *service du contrôle artistique des émissions*」は、音楽家番組監督と同様の職務を担う部署であった（平野貴俊「フランス国営放送 RTF による芸術音楽の普及 (1948-1964)——その実践と理念の対照研究」東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文、2011年、24頁。）

<sup>11</sup> このことは、キャリアの初期にあつて兵士として第2次世界大戦に従軍していたオリヴィエ・メシアン Olivier Messiaen (1908-1992) が、マリオ・ムニエ Mario Meunier (1880-1960) に宛てた手紙のなかで、ラジオでの仕事を行うことを切望すると述べていることから窺い知れる（Christopher Brent Murray, “Nouveaux regards sur le soldat Messiaen,” *Textuel* n° 63 2010: 245-246）。なお、メシアンの古くからの友人であったクロード・アリュー Claude Arrieu (1903-1990) は、ボンデュヴィルの下で音楽家番組監督を務めていた。

<sup>12</sup> バローは、放送が予定される番組の音源を試聴し、その内容の適切さや価値を判断する仕事をしていたという（本章第3節 3-1 参照）。

guerre」の期間中、数十の音楽家がこのレンヌの芸術部門で仕事をし、フランスの国威高揚のための音楽活動を行うことになった。この時代の国営放送の活動について、詳細かつ網羅的な研究を博士論文で行ったル・バイルは、当時の国営ラジオが、同時代の音楽よりも過去の音楽いわゆる「グランド・ミュージック *grande musique*」を重視し、それらの放送を通してフランス音楽を顕揚していたと指摘している<sup>13</sup>。

戦前から活動していた音楽家も、ユダヤ系であることを理由に粛清の対象となったり、あるいはレジスタンスを支援したりした。アンゲルブレシュトは、1943年6月フランス反共義勇軍 *Légion des Volontaires français* の演奏会を指揮した事で粛清の対象となり、戦後に活動を再開するまでには長い期間が必要だった。またロザンタールは、ユダヤ系であったために1941年7月国営放送によって粛清され、1943年からパリでアレキシ・ロラン＝マニユエル *Alexis Roland-Manuel* (1891-1966) に匿われることになった。同じく指揮者のジャン・フルネ *Jean Fournet* (1913-2008) は、ドイツ軍がプロパガンダ目的でパリに設立したラジオ局「ラジオ・パリ *Radio Paris*」<sup>14</sup>の管弦楽団を指揮し、ピアニストのアルフレッド・コルトー *Alfred Cortot* (1877-1962) はソリストとしてラジオ・パリの管弦楽団と共演するなど、対独協力活動を行った<sup>15</sup>。ラジオ・パリは戦時中にもっとも人気を博したラジオ局で、シャルル・ドゴール *Charles De Gaulle* (1890-1970) がフランス国民に徹底抗戦を呼びかけるのに利用した「自由フランス *France libre*」のBBC放送と「電波戦争 *guerre des ondes*」を戦わせたとされる。ル・バイルによれば、ラジオ・パリではベートーヴェン、ヴァーグナーの作品も積極的に取り上げられた。ただ、ベートーヴェンやヴァーグナーはパリの聴衆がもっとも好んだ作曲家であり、パリ管弦楽連盟 *Association symphonique de Paris* に属するパリ音楽院演奏会協会管弦楽団 *Orchestre de la Société des Concerts du Conservatoire*、ラムルー管弦楽団 *Orchestre Lamoureux*、パドルー管弦楽団 *Orchestre Passet*、コロヌ管弦楽団 *Orchestre Colonne* の演奏会プログラムの定番であった<sup>16</sup>。このこ

<sup>13</sup> Karine Le Bail, “Musique, pouvoir, responsabilité: La politique musicale de la Radiodiffusion française, 1939-1953,” 2005: 659. ル・バイルによれば「グランド・ミュージック」は第2次大戦以前から広く定着していた言葉で、バッハやベートーヴェン、モーツァルトといった広く知られた作曲家の作品であった (*Ibid.*, p. 7.)。

<sup>14</sup> ラジオラを前身とする、上述のラジオ・パリとは異なる。先に存在した人気のあるラジオ局と同じ呼称を用いることで、ドイツ軍はプロパガンダを効率的に進めようとした。

<sup>15</sup> コルトーの対独協力についてはすでにいくつかの研究が発表されている。Myriam Chimènes, “Alfred Cortot et la politique musicale du gouvernement de Vichy,” *La vie musicale sous Vichy*, Myriam Chimènes (ed), Bruxelles: Editions Complexe, 2001: 35-52. François Anselmini, “Incarnant le génie français: Alfred Cortot et Claude Debussy,” *Regards sur Debussy* (Chimènes, Myriam and Alexandra Laederich, eds). Paris: Fayard, 2013: 439-448.

<sup>16</sup> 平野貴俊、前掲書、87頁。

とからル・バイルは、ラジオ・パリがパリの聴衆の趣味に適合したレパートリーを放送したという指摘を行っている。<sup>17</sup>

こうした音楽を通したプロパガンダが一般的になるにつれて、レジスタンスに身を投じる人びとのなかから新たな国営放送を立ち上げようという動きが生じる。そうしたさまざまな試みを統合し、戦後国営放送を一本化しこれをフランスを代表する放送局としたのがピエール・シェフェール Pierre Schaeffer (1910-1995) であった。音楽史の文脈においてミュージック・コンクレート *musique concrète* の創始者として位置づけられることの多いシェフェールを、その多面的な業績の検討を通して、メディア論あるい 20 世紀フランスの文化史の枠組みに位置づける試みはすでに、シェフェールによる国営放送再建の経緯を豊富な資料をもとに再現したル・バイルらによって行われている<sup>18</sup>。

シェフェールは 1929 年にエコール・ポリテクニク *École Polytechnique* に入学した後、1934 年にストラスブールで通信技師として働き始め、1936 年から国営放送で音響関連の仕事に従事した。文学や神学に関心を深め、多数の論考を執筆する。バローによれば、シェフェールは、オペラ座で音響の実験を行ったことがきっかけでバローと知り合ったという<sup>19</sup>。1937 年には、バローとともにパリ万博の準備に携わり、1940 年に領域横断的な芸術家グループ「若きフランス *Jeune France*」<sup>20</sup>を結成する。1943、劇作家ジャック・コポー Jacques Copeau (1879-1949) と

---

<sup>17</sup> *Ibid.*, pp. 660-661.

<sup>18</sup> Martin Kaltenecker et Karine Le Bail (eds.), *Pierre Schaeffer: Les constructions impatientes...*, Paris: CNRS, 2012. その他のシェフェール論としてはたとえば次のものがある。Martial Robert, *Pierre Schaeffer: des Transmissions à Orphée*, Paris ; Montreal, L'Harmattan, 1999. Martial, Robert. *Pierre Schaeffer: d'Orphée à Mac Luhan: communication et musique en France entre 1936 et 1986*. Paris: L'Harmattan, 2000.

<sup>19</sup> Pierre Dellard et Louis Courtinat eds., “Henry Barraud: Une longue carrière radiophonique au cœur de la vie musicale et au service de la culture (1938-1965),” *Cahier d'Histoire de la Radiodiffusion* 11-12 (1986), p. 137.

<sup>20</sup> 1936 年にメシアン、アンドレ・ジョリヴェ André Jolivet (1905-1974)、ダニエル＝ルシュール Daniel-Lesur (1908-2002)、イヴ・ボードリエ Yves Baudrier (1906-1988) が結成した作曲家グループと同名であるが別の組織。シェフェールの団体を「若きフランス同盟 *association Jeune France*」、作曲家のグループを「若きフランスグループ *groupe Jeune France*」と呼んで区別することもある。シェフェールの若きフランスは、ヴィシー政権の意向に添うかたちで、フランスの文化・芸術を讃える愛国的イヴェントを企画することを使命とする組織であり、ダニエル＝ルシュールとモーリス・マルトノがリヨン、ジャック・シャイエがパリの事務局に派遣された。この団体に協力した作曲家には、ダニエル＝ルシュールのほか、メシアン、ジョリヴェ、ボードリエがいる。したがって、作曲家グループとしての若きフランスは、同名のシェフェールの組織の一員として活動していたのである（ただし、成立したのは作曲家グループのほうが先であり、シェフェールはこの名称を自身の団体に使ってもよいかをダニエル＝ルシュールに問うて承諾を得ている）。Lucie Kayas and Christopher Brent Murray, “Olivier Messiaen and *Portique pour une fille de France*,” *Messiaen Perspectives 1: Sources and Influences*, Christopher Dingle et Robert

ともに設立した「実験スタジオ Studio d'Essai」が国営放送の実質的な母体となった。

シェフェールは、当時の情報省 *ministère de l'information* で事務局長 *secrétaire général* を務めたギニューベール Jean Guignebert (1897-1958) とともに、レジスタンスに共鳴する音楽家のグループ「国民戦線 Front national」<sup>21</sup>に接近し、ラジオ局設立への協力を要請した。バローは国民戦線の集会で、新生ラジオ局の音楽部門の責任者に指名され、2ヶ月間ロジェ・プラダリエ Roger Pradalié (1913-2003) の助けを得て、ラジオ局の業務について調査・研究を行った。局自体が設立される以前から、バローは新生ラジオ局の音楽監督となることが内定していたのである。同時にバローは、かつてヴィシー政権の幹部を務めたルイ・シャカトン Louis Chacaton (1898-195?) やヴィシー政権下の国営放送で指揮者を務めたジュール・グレスイエ Jules Gressier (1897-1960) に協力を要請した。シェフェールもバローと同様、ヴィシー政権下の人員を再起用することを検討し、職員の暫定的ガリリストが作成され、その中には以前ラジオで活動していた人物も多く含まれていた。アンリ・ビュセールは保留扱いで最終的には除外され、アンゲルブレシュト、アンリ・トマジ Henri Tomasi (1901-1971)、ダニエル＝ルシュールも除外されたが、選定の基準は明確ではない<sup>22</sup>。実験スタジオでシェフェールは、ジャン・タルデュー Jean Tardieu (1903-1995)<sup>23</sup>、ポール・エリュアール Paul Eluard (1895-1952) やルイ・アラゴン Louis Aragon (1897-1982)、アルベール・カミュ Albert Camus (1913-1960) のレジスタンス的色彩の強い文学作品、およびロラン＝マニユエルやデゾルミエールの作品を録音したことにより、1944年5月から8月までのあいだ職務停止を命じられるが、ギニューベールの要請が通り復職した<sup>24</sup>。1945年5月5日、経済的理由と技術設備の不足という理由で、実験スタジオは解散に追い込まれた。

しかし、実験スタジオが使用していたパリ7区のリュニヴェルシテ通り *rue de l'Université* にあるスタジオは引き続き利用された。送信所の多くは戦禍から免れえなかったが、合計196キロワットにしか満たない5つの送信所のみが破壊から逃れていた。1944年9月2日にリュニヴ

---

Fallon eds., Aldershot: Ashgate, 2013: 45-68.

<sup>21</sup> デゾルミエール、エルザ・バレーヌ Elsa Barraine (1910-1999)、ロラン＝マニユエルによって1941年9月に設立された団体「フランスの自由と独立のための闘いの国民戦線 Front national de lutte pour la Liberté et l'Indépendance」。

<sup>22</sup> Karine Le Bail, *op. cit.*: 492.

<sup>23</sup> 詩人・劇作家 (1903～1995)。サミュエル・ベケット、ウジェーヌ・イヨネスコと並ぶフランス前衛劇の作者。のちに述べるように、実験クラブ代表を務めるなどして国営放送の音楽活動に貢献した。当時、同僚として国営放送に勤めていたデュティユーが最晩年に作曲した遺作、ソプラノと管弦楽のための作品《時 大時計 *Le temps l'horloge*》(2009) は、タルデューの詩のタイトルにちなんで名づけられ、うち1曲で同名の詩の全体が歌われる。

<sup>24</sup> Eliane Clancier, “Le Club d'Essai de la Radiodiffusion française (1946-1960),” *mémoire de maîtrise d'histoire*, Université Paris I Panthéon-Sorbonne Département d'histoire, 2002: 18.

エルシテ通りの大きなスタジオで開かれたパーティにおいて、シェフェールはアメリカのラジオ関係者も含めた連合国の人々に、パリの再興を象徴する音楽として、自作の《武装への呼びかけ *L'Appel aux armes*》というタイトルのモンタージュ作品を披露し、いくつかのレコードを聴かせた。《動員》はその日の 20 時 45 分から電波に流され、加えて《パリの解放》という番組や、作家フランソワ・モーリアック François Mauriac (1885-1970) による呼びかけも放送された。こうして始動した新たなラジオ局は「フランス・ラジオ放送 Radiodiffusion française (RdF)」と名づけられ、1944 年末には 1 チャンネルのみの放送が可能となった。1948 年に局名は「フランス・ラジオ放送・テレビ Radiodiffusion Télévision française (RTF)」に改称されている。RdF で初めて運営されたチャンネルはナショナル Programme national / Chaîne nationale と名づけられ、その名称は 1959 年 2 月にフランス 3 - ナショナル France III-National と改称されるまで用いられ続けた。初めて開設されたチャンネル名に「第 1」ではなく「国立」を意味する national という語が付与されたことは、この放送局の成立がナショナリスティックな意図のもとに行われたことを何よりもよく示している。ここでの national のこうした含意が、「国立管弦楽団」における「国立 national」にも共通していることは、後にみるとおりである。

国営放送にはフランスにおける独占的な放送の権利が与えられたが、その結果として、フランスの隣接国から、国内向けの放送を行うラジオ・リュクサンブール Radio Luxembourg やユーロップ・アン Europe 1 といった民間の周辺放送局 poste périphérique が登場し、しだいに国営放送を上回るほどの人気を得るようになった。1945 年 1 月には、中波による第 2 のチャンネル、パリジアン（パリジエンヌ）Programme Parisien / Chaîne parisienne が誕生した。パリジアンの導入をきっかけとして、ナショナルとパリジアンの放送内容は差異化され、前者が教養放送を中心とするやや高尚な内容を扱うのに対して、後者は娯楽放送を中心とするようになった。また 1946 年には、それまで米軍放送 American Forces Network in Europe によって使用されていたパリの放送スタジオが国営放送に譲渡され、第 3 のチャンネルであるパリ＝アンテル Paris-Inter が開設された。このチャンネルは最初「音楽とニュース」を放送内容の中心に据えたが、次第にジャンルの違いを乗り越え、娯楽色の強いものとそうでないものを混交しながら放送するチャンネルとなった<sup>25</sup>。

国営ラジオ放送が本格的な発展を遂げるようになるのは、それまでトップにあったシェフェールおよびギニューベールに代わって、ヴラディーミル・ポルシェ Wladimir Porché (1910-1984)

---

<sup>25</sup> Edith-Hélène Bousser-Eck, *La Radiodiffusion française sous la IVe République. Monopole et service public (août 1944-décembre 1953)*, 1997: 631.



が 1946 年 3 月に総監督として着任して以降である。ポルシェは、フランス国営放送の総監督としては最も長い 11 年間の在任期間を通じて、国営放送の立て直しに尽力した。

ポルシェは、チャンネルを横断して番組を制作する分野別の番組制作課を維持するとともに、各チャンネルにひとり監督をおくという体制上の改革を行った。ここでナショナル監督に任命されたのがアンリ・バローであった<sup>26</sup>。バローは、ポルシェとはきわめて友好的な関係にあったといい、ポルシェがバローに音楽放送の監督としての活動の場を与え、ナショナル監督のポストを委ねたことについて、回想録のなかで感謝を表明している<sup>27</sup>。チャンネル別の監督以外で、音楽放送に関する縦横なポストに就いたのがポール・ジルソン Paul Gilson (1904-1963)<sup>28</sup>である。ジルソンは 1946 年 9 月に、ポルシェから芸術関連活動 *services artistiques* の監督に任じられた。ジルソンはこの肩書をもって、ポルシェが放送内容の 3 つの柱と位置づけた音楽、文芸、娯楽を横断的に監督する責務を担った。その点でジルソンは、ラジオ局のヒエラルキーにおいては、ポルシェとバローの中間に位置したといえることができる。

RdF および RTF に雇用された音楽家の数は、第 2 次世界大戦直前における数を越えることはなかった。大戦前の国営放送は、750 人の音楽家とフランス全土に設けられた 17 のオーケストラを擁する、フランス最大の音楽機構であった。戦後は、これらのオーケストラのうち、ボルドー、リモージュ、グルノーブル、モンペリエそしてレンヌの管弦楽団が解散され、リール、ストラスブール、リヨン、ニース、マルセイユ、トゥールーズの管弦楽団が、戦前と同数の 55 の団員数を維持した<sup>29</sup>。このほか、植民地であったアルジェと保護領であったチュニスにも管

---

<sup>26</sup> 他の 2 チャンネルの監督には、パリジャンにアルノ・シャルル＝ブリュン Arno Charles-Brun (1898-1982)、パリ＝アンテルにジャン・ヴァンサン＝ブレシニャック Jean Vincent-Brechignac (1901-?) が任命された。

<sup>27</sup> Henry Barraud, *Un compositeur aux commandes de la Radio: Essai autobiographique* (Édité sous la direction de Myriam Chimènes et Karine Le Bail), Paris: Fayard / Bibliothèque nationale de France, 2010: 497. Edith-Hélène Bousser-Eck, *op. cit.*, p. 639.

<sup>28</sup> 1928 年、新聞の映画評論家として出発し、その後ラジオ・リュクサンブールの記者として活動する。戦時中はマルセイユの国営放送で、ジャン・ヴィエネール Jean Wiéner (1896-1982) らとともに娯楽番組を制作する。ルネ・クレール René Clair (1898-1981) の映画に心酔し、ジャン・ミトリ Jean Mitry (1907-1988) らと映画雑誌を創刊した。1945 年から 1 年間国営放送のアメリカ特派員として活動したあと、芸術業務部門監督に就任。詩人としても作品を多数残しており、その死に際してはジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963) も弔辞を寄せた。

Robert Prot, *Dictionnaire de la radio* (Grenoble: Presses Universitaires de Grenoble (coédition avec l'INA), 1998): 271-273.

<sup>29</sup> ニース管弦楽団のみ規模を縮小した。マルセイユ、リヨン、トゥールーズの各管弦楽団は 1964 年末に消滅し、これに伴い団員のオーディションが行われ、合格した者は残りの 3 つの管弦楽団に振り分けられた。

弦楽団を持っていたが、後者は10月から5月までの期間限定で編成されたものである<sup>30</sup>。

雇用される音楽家の数が減ったとはいえ、RdF/RTF はフランスを代表する音楽機関のひとつであり続けた。国立管弦楽団の演奏会はシャンゼリゼ劇場 *Théâtre des Champs-Élysées* で毎週木曜に行われ、それらはいずれも1週間の間隔をおいてラジオで放送された。毎日曜日午後には、コロンヌ、ラムルー、パドルー、パリ音楽院演奏協会の各管弦楽団が演奏会を行っていたが、復活祭 *Pâques* を過ぎた時期にそれらの演奏会が休止に入ると、代わってラジオ＝サンフォニック管弦楽団 *Orchestre Radio-Symphonique* (フランス放送フィルハーモニー管弦楽団の前身)<sup>31</sup>の演奏会がその穴埋めとして行われた。管弦楽団としては、国立管弦楽団とラジオ＝サンフォニック管弦楽団のほか、1952年にRTF室内楽課主任 *Chef de la musique de chambre* であるピエール・キャブドゥヴィエル *Pierre Capdevielle* (1909-1969) が設立した室内管弦楽団 *Orchestre de Chambre*<sup>32</sup> と、オペラの演奏を専門とするリリック管弦楽団 *Orchestre Lyrique* が定期的に演奏会を開いていた。合唱団 *Chœur* と児童合唱団 *Maîtrise* も、放送局の音楽活動においてともに重要な役割を果たした団体である。

国営放送が再建されてまもなく開始された演奏会のプログラムが、戦時中は演奏される機会のなかった作品を軸としていたことはよく知られている。たとえば、1944年9月28日にパリ解放後初めて行われた国立管弦楽団の演奏会は、「連合国の音楽 *Musique interalliée*」と題され、ロザンタール指揮のもと、最初にイギリス、ソ連、アメリカ、フランスの国歌が演奏された後、ドイツ軍によって殺されたフランスの作曲家アルベリック・マニャール *Albéric Magnard* (1865-

---

<sup>30</sup> Karine Le Bail, *op. cit.*: 493.

<sup>31</sup> 1937年6月に設立され、ルネ＝バトン *Rhené-Baton* (1879-1940) が指揮者を務めたラジオ＝サンフォニック管弦楽団を母体とする。1940年6月の休戦協定締結後は、占領下のパリに長く置かれていたが、1941年夏にヴィシー政権下の国営ラジオが「パリ・ラジオ＝サンフォニック管弦楽団 *Orchestre radio-symphonique de Paris*」を再結成した。団員は、アルフレッド・コルトーによるオーディションで選ばれた120人だった。1947年にウジェーヌ・ビゴ *Eugène Bigot* (1888-1965) を常任指揮者として迎え、「RTF ラジオ＝サンフォニック管弦楽団」、「ORTF ラジオ＝サンフォニック管弦楽団」として活動したあと、ジルベール・アミを音楽監督に迎えて「新フィルハーモニー管弦楽団 *Nouvel Orchestre philharmonique (NOP)*」(1976-1989) として一新された。アミとヴォズランスキーは、それまでRTF時代から放送局に付属されていたリリック管弦楽団と室内管弦楽団 *Orchestre de Chambre* を解散し、2つの管弦楽団の団員をNOPへ統合した (Odile Bergeon et Isabelle Canno, *Orchestre Philharmonique de Radio France 1937-2007*, Paris: Les Cahiers de la Doc Radio France no505: 81.). 1989年に「ラジオ・フランス・フィルハーモニー管弦楽団 *Orchestre philharmonique de Radio France*」となって2016年現在もこのように呼ばれている。日本では「フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団」という呼称が定着している。本論文では以下「フィルハーモニー管弦楽団」と称する。

<sup>32</sup> 1964年にキャブドゥヴィエルが退いてからは、アンドレ・ジラルド *André Girard* (1913-1987) が音楽監督を務めた。

1914) の《正義への讃歌 *Hymne à la Justice*》、ドビュッシー《海 *La Mer*》、ダリウス・ミヨー Darius Milhaud (1892-1974) の《プロヴァンス組曲 *Suite provençal*》のほか、イギリスのウィリアム・ウォルトン、アーノルド・バックス、ジョン・アイアランド、ソ連のプロコフィエフ、アメリカのロジャー・セッションズの作品が演奏された<sup>33</sup>。戦後まもない時期のこうした演奏会の曲目は、大部分がシェフェールによって決定されたという<sup>34</sup>。プログラミングには、まもなくバローとロザンタールも関わるようになった。ユダヤ系作曲家の作品もプログラムに加えられたが、シャルル・ミュンシュ Charles Munch (1899-1968) がミヨーの《セレナード *Sérénade*》を指揮した 1944 年 11 月の演奏会では、若い聴衆からブーイングが起こったという。

同様の趣旨をもつ企画としては、イゴール・ストラヴィンスキー Igor Stravinsky (1882-1971) の全作品を取り上げる演奏会シリーズが代表的である。この企画は、バローがデゾルミエール、ロラン＝マニュエル、ロザンタールと相談して組まれたものであった。その意図は、聴衆にロシア音楽の価値を広く認知させるというよりも、それまで何年もの間演奏されてこなかったストラヴィンスキーの音楽を知らしめることにあった。1945 年 1 月 11 日の演奏会では、ロザンタールの指揮によって《幻想的スケルツォ *Scherzo fantastique*》、《火の鳥 *L'Oiseau de feu*》、《春の祭典 *Le Sacre du printemps*》が披露され、同年 2 月 3 日に《結婚 *Les Noces*》が演奏されたときには、モニク・アース Monique Haas (1909-1987)、ジュヌヴィエーヴ・ジョワ Geneviève Joy (1919-2009)、ピエール・サンカン Pierre Sancan (1916-2008) そしてフランシス・プーランク Francis Poulenc (1899-1963) という名手たちが一同に会し、ピアノを担当した。デュティユーの言葉を借りれば、「世界のすみずみから驚くような勢いで音楽が湧き出てくる un prodigieux jaillissement de musique provenant du tous les coins du monde」<sup>35</sup>状況がこの時期の国営放送の音楽活動の特徴づけていた。同時代音楽への国立管弦楽団とラジオ＝サンフォニック管弦楽団の貢献については、本論文の論述の対象ともなるため、ここで詳述することは控えるが、1964 年までに両管弦楽団が行った世界初演のリスト<sup>36</sup>はその一端を示している。これとは別に、すでに世界初演が行われた作品のフランス初演において、とりわけ国立管弦楽団が果たした貢献は大

<sup>33</sup> Leslie Sprout, *The Musical Legacy of Wartime France*, Berkeley; Los Angeles; London: University of California press, 2013: 38-39.

<sup>34</sup> Karine Le Bail, *op. cit.*: 501.

<sup>35</sup> Henri Dutilleul, “Au service de tous,” *Roger Désormière et son temps* (Monaco: Éditions du Rocher, 1966): 119.

<sup>36</sup> Dominique Gandin-Morlet, *Orchestre National de France 1934-2004*. (2 tomes, Paris: Radio France, 2004): 390-421. および Odile Bergeot et Isabelle Canno, *Orchestre Philharmonique de Radio France 1930-2007* (Paris: Les Cahiers de la Doc Radio France, 2007): 147-158.

きい。代表的な例を挙げるとすれば、メシアンの《トゥランガリーラ交響曲 *Turangalila-symphonie*》、アルバン・ベルクの《ヴォツェック *Wozzeck*》およびグスタフ・マーラーの《大地の歌 *Das Lied von der Erde*》の各フランス初演が国立管弦楽団によって行われている。

## 1-2. 実験クラブとその周辺

第2節では、戦後再建された国営放送 RdF および RTF が展開した音楽活動の概要を記述する。多面的な様相を呈する国営放送の音楽活動のうち、とりわけ詳述する必要があると判断される3つの側面については、第3節で項を分けて論じることとし、本節ではそれらの記述では扱われないいくつかの側面を採り上げる。したがって、ここに挙げる事例は、本論文の展開において一義的な重要性をもつとはいえないものの、国営放送の音楽活動を概観するにあたり無視することができないものである。

まず言及すべきは、ピエール・シェフェールが創設した実験スタジオに端を発し、「実験クラブ Club d'Essai」、「ミュージック・コンクレート・グループ Groupe de musique concrète」、「研究課 Service de Recherche」および「音楽研究グループ Groupe de Recherches Musicales (GRM)」に受け継がれた「研究 recherche」の潮流である。20 世紀後半にフランスの電子音楽の主流を形成した、「楽派」とよぶことすら可能であるようなこの重要な分野については、1948 年から 1980 年までのレパートリーを網羅したフランソワ・ベイル François Bayle (1932-) 編纂のデータベース<sup>37</sup>、音楽研究グループを扱ったエヴリン・ゲイウ Evelyn Gayou の著作<sup>38</sup>などがあり、フランスの電子音楽創作においてははまだ健在の一派であることから、基礎的情報の整理が比較的進んでいるといえる。ただし、本研究において筆者がラジオ・フランスおよび国立公文書館等で参照した一次資料からは、上記団体に関して得られる情報の量が乏しく、この潮流を国営放送の他の諸活動と比較したときにどのような共通点ないし相違点がみられるか、また国営放送の音楽活動の方針がこの分野にどのように適用されえたか（もしくは適用されえなかったか）を見きわめることが難しい<sup>39</sup>。また資料を読む限り、これらの団体の活動と、国立管弦楽団など、国営放送の音楽団体のそれとの接点を見いだすのは難しい。電子音楽を管弦楽団の演奏会で扱うことの困難さを考慮すれば、それも当然のことと考えられるとはいえ、演奏会に関する一次資料には電子音楽の演奏会に関する情報がほとんど含まれていない。そこで本項では、あくまで RdF および RTF の時代における一次資料にもとづきながら、国営放送における電子音楽創作

<sup>37</sup> François Bayle (ed.), *Répertoire acousmatique: 1948-1980*, Paris: INA, 1980.

<sup>38</sup> Evelyn Gayou, *GRM Le Groupe de Recherches Musicales: Cinquante ans d'histoire*, Paris: Fayard, 2007.

<sup>39</sup> 2016 年 3 月のラジオ・フランスでの調査において筆者は、ラジオ・フランス書誌アーカイブ課で GRM 関連の史料を担当するリーズ・ガイヨ Lise Gayot 氏から、GRM およびその前身の諸組織についての史料はいまだ整理段階にあり、ラジオ・フランスおよび国立公文書館では公開されていないという情報を得た。

の初期段階を概観する。

シェフェールが国営放送の特派員として派遣されていたアメリカから帰国してまもない 1948 年 10 月、初のミュージック・コンクレート作品とよばれる《噪音のコンセール *concert des bruits*》がチャンネル・パリジアンで放送された。この年はミュージック・コンクレートにとって元年ともよべる年で、以後数年間でこのジャンルをめぐる動きは大きく進展した。シェフェールとピエール・アンリ *Pierre Henry* (1927-) の共作《ひとりの男のための交響曲 *Symphonie pour un homme seul*》が発表されたのは 1950 年であり、ミュージック・コンクレートというジャンル名を局内で認知させたミュージック・コンクレート・グループ *Groupe de musique concrète* が設立されたのは 1951 年である。音楽研究グループ (1958 年設立) および研究課 (1959 年設立) はこの後進に当たる。

一方、1946 年 3 月にジャン・タルデューのもと発足した実験クラブは、名前こそ実験スタジオと似ているものの、その活動内容は最終的に、実験的な性格をもつ番組の創作という当初の枠組みを超えて広がっていった。筆者は 2012 年の日本音楽全国大会における研究発表で、実験クラブの活動内容と趣旨が実験スタジオのそれらを超えて、しだいにそこから乖離していったことを述べた<sup>40</sup>。この分岐は、国営放送の音楽活動の歴史を眺めたときにはけっして小さくない意味をもつだろう。この分岐ないし分裂は、聴取者の趣味への迎合と、製作者自身の関心の追究という、芸術音楽の番組の製作において中核的な役割を果たす 2 つの動機を両立させようとした結果生じたものと考えられるからである。

実験クラブは、タルデューを代表として 1946 年に発足、1960 年に解散した *RdF・RTF* の内部組織である。番組表などの一次資料では、そこから派生して、チャンネル「パリ IV」において実験クラブが制作した番組が放送された時間帯を指すこともある。実験クラブの目的を一言で示すならば、それは音楽・文学・演劇の境界を横断したラジオ固有の芸術ジャンル「ラジオ芸術 *art radiophonique*」の創造であった。この目的はやや壮大にすぎるようにも響くが、その活動内容の実際は、芸術音楽放送全般に新風を吹き込み、ユニークな音楽番組の制作を行うことであった。

もと詩人であったタルデューは、1944 年の国営放送再建に際して演劇番組主任 *chef des émissions dramatiques* に任じられた。1945 年 5 月に実験スタジオが解散すると、1946 年 4 月、

---

<sup>40</sup> 平野貴俊「フランス国営放送 *RTF* による音楽番組制作の実践とその理念——「実験クラブ」の活動を中心に——」(2012 年 11 月 24 日、西本願寺聞法会館にて行われた日本音楽学会第 63 回全国大会における研究発表)。以下の記述では、本発表の内容を適宜再掲している。

タルデューを代表者として実験クラブが創設された。その呼称が示すように、実験クラブは、実験スタジオのいわば後継として位置づけられたのであろう。実験クラブの職員となった音楽家にはデュティユーおよびアリュールがいる<sup>41</sup>。両者は国営放送再建の直後、バローらとともに「国民戦線」に属していたことから、バローと同時に国営放送に入局したと推測される。実験クラブの製作した番組は、実験クラブ用に充てられた放送枠のなかで放送され、当初は週に3回夜の放送だったが、後に毎日に拡大され、再び週2回合計7時間の放送枠となった。その後、パリ向けにソルボンヌ Sorbonne の講義などを放送する国営放送の一チャンネル「パリ・キャトル Paris IV」の送信所を使って、日曜午後に放送されるようになった<sup>42</sup>。

また1948年12月、タルデューは実験クラブのいわば姉妹組織として、ベルナール・ブラン Bernard Blin (1922-) <sup>43</sup>とともに「ラジオ放送研究センター Centre d'Etudes Radiophonique<sup>44</sup>」を開設した。同センターは、RTF 社内報の紹介記事によれば、「①ラジオ放送とテレビの役割と発展に関連する様々な思想が対決されうる「論座」、②ラジオおよびテレビの表現技法に特化した「養成センター」、③研究者のグループが明確に限定された問題を論じ、その解決策を放送の改良、実現および構成に応用するための「研究所」であった<sup>45</sup>。第一の役割としては、バローやポルシェといった RTF の首脳部もしくはラジオ・テレビの放送を社会的・美学的に論じる外部の識者による職員向けの講演が行われた<sup>46</sup>。第二の役割では、放送の専門的な知識・技能を備

---

<sup>41</sup> Jean Tardieu, *Note pour Monsieur Porché Directeur Général* 22 mars 1946, AN19950218 article 26: Club d'Essai. (以下 Article Club d'Essai)

<sup>42</sup> 当初は、214 メートルの伝達距離をもつ非常に短い電波が与えられた。1947年にはパリ近郊リュエユの送信所が使用され、一時はパリ地域圏全体に電波が届くようになった。だが同送信所は、まもなくパリ＝アンテル専用となったため、以後実験クラブはチャンネル「パリ IV」の電波を使って放送した。フランス全土の放送網を整備することは、RTF の運営期間全体を通しての課題であったが、実験クラブの放送をパリ地域圏以外で聴取することはできなかった。放送枠は1954年3月のFMチャンネル開局後、徐々に減少し、1959年3月31日をもって放送を終了した。Eliane Clancier, *op. cit.*

<sup>43</sup> 国営放送職員。1980年代までフランス国営放送でさまざまな業務の主任を歴任し、パリ大学のフランス新聞研究所 Institut français de presse で教鞭も執った。同センターの開設と『ラジオ・テレビ研究誌』の創刊にあたってタルデューと共働した。

<sup>44</sup> 1954年に「ラジオ・テレビ研究センター Centre d'études de radiotélévision」に改称。

<sup>45</sup> “La vie de la Radio: Les activités du Centre d'Études Radiophoniques,” *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 2 (1954. 2): 9.

<sup>46</sup> “Centre d'Études Radiophoniques: Première série de conférences,” *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1948. 12): 21 によると、たとえば哲学者のガストン・バシュラール Gaston Bachelard (1884-1962) は、1949年2月5日の17時からリュニヴェルシテ通り37にある実験クラブのスタジオで、ラジオ研究センター主催の講演「夢とラジオ Rêverie et Radio」を行っている。この講演の原稿は同名の論考としてまとめられ、『夢みる権利 *Le droit de rêver*』(Paris: Presses Universitaires de France, 1970) に収められた。

えた職員を養成するという教育的役割であり、後の INA にもその役割は引き継がれている。また 1954 年タルデューは、同センターが外部に研究成果を発信するための季刊誌『ラジオ＝テレビ研究』を創刊している。

ラジオを介して音楽家と文学者のコラボレーションを行うという実験クラブの方針をもっともよく示すのが、1947 年に刊行された実験クラブの機関誌『共鳴箱——フランスラジオ放送実験クラブ機関誌 *La chambre d'écho: Cahiers du Club d'Essai de la Radiodiffusion Française*』の執筆陣であろう<sup>47</sup>。ジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963) が装幀を手がけ高級な紙を用いて印刷されたこの美しい小冊子には、コクトーをはじめポール・クロードル Paul Claudel (1868-1955)、アルテュール・オネゲル Arthur Honegger (1892-1955) らの文章が収められている。この機関誌に収められた文章ではないが、実験クラブの活動の趣旨を示した文章として、タルデューの次の文章を挙げておくのがよいだろう。

「ラジオの領域における芸術的進歩は、近代の機械芸術のあらゆる分野と同様に、技術の進歩と相関した関係にある。これと相補的な形で、あらゆる技術の進歩は、ただ芸術による十全な利用があつてのみ正当化されうる。」<sup>48</sup>

タルデューが目ざした「ラジオ芸術」の創造は、根本的には芸術と技術の親和性を示そうとする試みであったといえることができる。製作された番組を具体的に挙げるならば、1949 年にイタリア賞 *prix Italia*<sup>49</sup>を受賞したジャック・コンスタン Jacques Constant (1907-?) 台本、アリュール作曲の《将軍フレデリック *Frédéric Général*》などがある。音楽作品の初演も積極的に行われており、上記機関誌の初演作品リスト<sup>50</sup>には、ピエール・ブーレーズ Pierre Boulez (1925-2016) が作曲しその後カタログから撤回した《オンド・マルトノ四重奏曲 *Quatuor pour ondes Martenot*》

<sup>47</sup> タイトルには *cahiers* と複数形が用いられているが、1 号しか刊行されなかった。

<sup>48</sup> 'Il est, en effet, évident, que les progrès [sic] artistiques dans le domaine radiophonique comme toute branche des arts mécaniques modernes, sont fonction des progrès [sic] techniques et que, réciproquement, tout progrès [sic] technique ne trouve en justification que dans une utilisation artistique adéquate.' Jean Tardieu, *Rapport sur un projet de réorganisation et de réforme du Club d'Essai* 10 mars 1947: 3. (Article Club d'Essai)

<sup>49</sup> 1948 年にイタリア国営放送の総監督ジャン＝フランコ・ザッフランニ Gian-Franco Zaffrani によってカプリで創設された、ラジオ・テレビの音楽番組のための国際コンクール。公共放送局で制作された作品のみを対象とする。RTF はその運営期間中に、1949 年のほか、1951 年、1952 年、1955 年、1958 年、1960 年、1961 年、1963 年に受賞している。

<sup>50</sup> *La chambre d'écho: Cahiers du Club d'Essai de la Radiodiffusion Française*, s. v., "Premières auditions," p. 65.



(1945-6) なども含まれている。実験クラブが制作した番組のなかには、《レコード批評家の座談会 *La Tribune des critiques de disques*》<sup>51</sup>や《大作曲家たち *Les Grands Musiciens*》、《仮面とペン *Le Masque et la Plume*》<sup>52</sup>など、その後長く続いた番組も多い。

しかしながら、ジャンル横断的にさまざまな専門家の協力を得ながら番組を製作するという実験クラブの方式は、番組製作という面でかならずしも効率がよいものということではできなかった。タルデューは1946年3月、ポルシェに提出した報告書のなかで、実験クラブの活動における「研究」の側面の重要性を暗に強調している。

「しかしながら、一部の研究は、ほんの一部分のみであるが、新奇でありそのためリスクも大きいため、放送内容を定期的に提供するという義務から免れなければならない。それによって、時間と予算における一定の余裕を、きわめて限られた量ではあるが確保することができ、実験を推進するのに役立てることができる。」<sup>53</sup>（傍線タルデュー）

こうしたタルデューの主張の背景には、実験クラブがつねに十分な人員あるいは予算を確保できたわけではないという事情があった。上に引用した報告書が書かれた2か月後の1946年5月、タルデューはポルシェに宛てた報告で、「もし1週間以内に人員の十分な増員が得られない場合、放送の継続はもはや不可能になるだろう」<sup>54</sup>と述べている。こうした状況に応じて、実験

---

<sup>51</sup> 1946年に放送が開始された、音楽評論家アルマン・パニジェル Armand Panigel (1920-1995) が司会を務める番組。司会のほかに3人の出演者（ジョゼ・ブリユイル José Bruyr (1889-1980) やアントワヌ・ゴレア Antoine Goléa (1906-1980) など著名な音楽評論家を中心）が、よく知られた音楽作品の複数の録音を比較し、その特徴などの相違を論じる番組。

<sup>52</sup> 1954年に放送が開始された番組。毎回、映画・書籍・演劇のいずれかが採り上げられ、その時点で話題となっている作品について複数の評論家が意見を戦わせる。《レコード批評家の座談会》と並ぶラジオ・フランスの長寿番組のひとつであり、タイトルの変遷を経ながら放送が続けられている。

<sup>53</sup> “Toutefois, une partie des recherches, mais une partie seulement, en raison de son caractère de nouveauté, et des risques qui en découlent, devrait être soustraite à l’obligation de fournir un programme fixe, afin de lui laisser, dans une proportion restreinte, une certaine marge de temps et de crédits, permettant de pousser les essais le plus loin possible.” Jean Tardieu, *op. cit.*: 2. (Article Club d’Essai)

<sup>54</sup> “[...] la situation est telle que si dans une semaine nous n’obtenons pas une augmentation suffisante de personnel, nous ne serons plus en mesure d’assurer nos émissions.” Jean Tardieu, *Note pour Monsieur le Directeur Général* 22 mai 1946: [première page sans numéro]. (Article Club d’Essai)

クラブでは、番組の製作に関心をもつ学生と一般の愛好家をボランティアのスタッフとして雇い、製作にかかわる人件費をできるだけ削減しようとした<sup>55</sup>。また、すでに放送した番組のなかから、聴取者に好評を博したものを再放送することも行われた。

限られた手段を用いて、製作者の好奇心や関心を満たすのに十分な「実験」を行うかたわら、番組を供給するという指導陣からの実際的な要請に応えることは、その後もタルデューの関心事であり続けた。1947年3月に彼は、やはりポルシェへの報告書のなかで、「研究とこれらの研究の表現、用いられる手段と獲得される結果、実験と制作、ひとことで言えば、充てられる予算と固定した放送内容の実現との間の、理想的な関係を定義すべきである」<sup>56</sup>と述べている。また1948年12月にタルデューがポルシェに宛てた報告では、「クラブの行う「実験」の活動と「アンテナ」の活動は、実のところ、大多数の場合密接に関連しています。とりわけ今年度は、あなたとの合意に従い、教育的性格を強調しなければなりません。したがって、その関連性はより強調されることになります」<sup>57</sup>と述べられている。これらの発言からは、タルデューが予算の削減という実際的な要請に応じて、研究内容を実践すなわち番組制作に密接に関連＝従属させ、非実用的な研究を活動内容から次第に排除していこうとしたことが読み取れる。

一方、実験スタジオの設立者でありながら、実験クラブの活動には直接的に関与せずミュージック・コンクレート・グループを立ち上げたシェフェールは、タルデューが番組製作の実際の制約に縛られるあまり諦めざるをえなかった「純粋な」研究を、ミュージック・コンクレートというジャンルの確立を通して継続しえたといえる。ミュージック・コンクレートの概念についての議論はここでは措き、シェフェールによる次の簡潔な定義を紹介するにとどめたい。

「ミュージック・コンクレートの概念が依拠しているのは、新しい設備が音楽創作に提供する技術の力によって、基本的な音素材をあらゆる仕方で生成、分離、変形、つまり構成＝作曲 *composer* することができるという事実である」。<sup>58</sup>

---

<sup>55</sup> *Rapport sur l'activité du Club d'Essai*, [sans date]: 2. (Article Club d'Essai)

<sup>56</sup> “Il importe donc de définir un rapport convenable entre les recherches et l'expression de ces recherches, entre les moyens à employer, et les rélutats à obtenir, entre l'essai et la production, en un mot entre les crédits accordés et l'Exploitation d'un programme fixe.” Jean Tardieu, *Rapport sur un projet de réorganisation et de réforme du Club d'Essai*, 10 mars 1947, p. 3. (Article Club d'Essai)

<sup>57</sup> “En effet l'activité ‘essais’ et l'activité ‘antenne’ du Club d'Essai sont intimement liée dans la majeure partie des cas, d'autant plus que nous devons, cette année, avec votre accord, accentuer le caractère pédagogique du service.” Jean Tardieu, *Note pour Monsieur le Directeur Général*, 5 octobre 1948, p. 1. (Article Club d'Essai)

<sup>58</sup> “On rappelle que le principe de la musique concrète repose sur le fait qu'il est possible de produire et d'isoler des matériaux sonores élémentaires, de les transformer de toutes les façons possibles et, enfin, de

ここでも、タルデューが実験クラブの趣旨に記したのと同様、芸術とりわけ音楽と技術の組み合わせに価値が見いだされている。タルデューとシェフェールは、この点において発想を共有しているといえる。ただしシェフェールは、実験クラブという放送枠を用いてこの構想を番組創作に結実させたタルデューと異なり、これを創作において具現化することで、ミュージック・コンクレートというジャンルを確立するに至った。またシェフェールは、ポルシェに対して「研究」の必要性を繰り返し強力に説いた。彼がミュージック・コンクレート専門の部署を国営放送に設けることで、その実験を幾年にもわたり存続させることができたのは、国営放送再建で中心的役割を担ったことに由来する彼の権威に加えて、指導部に対する根強い説得を怠らなかったからであると考えられる。

シェフェールは 1948 年の時点で、研究を継続することの必要性を、ポルシェに対して次のように説いている。「理解していただきたいのですが、私はパリのスタジオが、何かしらの規模のある純粋な研究を行うことのできる、おそらく世界で唯一の場所であると確信しています」<sup>59</sup>。同じ文章のなかで、さらに彼は次のように力説する。

「このような研究が推進されねばならないならば、時間と人員を自在に使うことのでき、非常にさまざまな録音機材を備え、また研究中にもたらされる技術的な改良を可能にするスタジオを見つけることが少なくとも必要です。」(同上) <sup>60</sup>

ミュージック・コンクレート・グループが創設されたのは、上記の文章が書かれた 3 年後 1951 年である。このグループは 1960 年ころまで活動を続け、以後はその後身として「研究課」が設けられ、ラジオ・フランスが設立される 1974 年まで存続することとなる。研究課が設立された際、シェフェールがその使命として定義したのは「表現・放送の手段を並行的に研

---

les composer d'après une technique dont les ressources nouvelles s'offrent à l'invention musicale." *La musique concrète*, février 1951 (sans nom d'auteur, mais probablement Pierre Schaeffer), première page sans numéro. Carton 'Club d'Essai', Service des Archives écrites et Musée de Radio France (SAéM).

<sup>59</sup> "[...] je suis persuadé que les studios parisiens sont sans doute les seuls au monde où un travail désintéressé de quelque envergure puisse être entrepris." Pierre Schaeffer, *Mémoire pour Monsieur le Directeur Général de la Radiodiffusion Française* (Copie à M. le Directeur des Services Techniques), le 28 juin 1948 Copenhague, première page sans numéro. (Carton 'Club d'Essai', SAéM)

<sup>60</sup> "[...] si des recherches semblables doivent être poussées, il est nécessaire de trouver au moins un studio disposant de facilités de temps et de personnel et doté des moyens d'enregistrement les plus divers et des perfectionnements techniques qui peuvent être apportées en cours de recherche." *Ibid.*: 2.

究し、ラジオ・映画・テレビの間、そしてより広くは芸術と技術の間にありうる相応関係の探究」<sup>61</sup>（傍点シェフェール）であった。「芸術と技術の間にありうる相応関係の探究」という表現からは、シェフェールのミュージック・コンクレートとタルデューの実験クラブ双方の理念が根底では共通していることを読みとることができる。

以上の記述を整理すると、次のように言うことができる。すなわち実験クラブは、芸術と技術を組み合わせる形で実験的な番組製作を構想したにもかかわらず、人員あるいは予算面での制約のためにその実現が十分に果たされなかった。一方シェフェールの試みは、実験クラブと理念を共有しつつも、それを作品の創作と結びつけ、また指導陣に環境の整備を強力に求めることによって、試みを継続することができた。

以上のようにまとめたうえで、さらにもうひとつのエージェントに言及しておくことが必要だろう。それは、1954年3月28日にタルデューの主導で開局した芸術音楽専門チャンネル「FM 特別チャンネル programme spécial en modulation de fréquence」である。実験クラブの放送が終わる1959年3月に先立って放送を開始したこのチャンネルは、1956年2月26日以降、実験クラブの放送枠を利用して、13時30分から17時30分にかけて同時放送を行っていた。本チャンネルにも、その他のチャンネルと同様監督がおかれた。当初は、作曲家で国営放送の現代音楽アンサンブル「アルス・ノヴァ Ars Nova」<sup>62</sup>の設立者および監督であったマリウス・コンスタン Marius Constant (1925-2004)<sup>63</sup>が就いたが、のちコンスタンの紹介で、やはりパリ音楽院出身の作曲家であるシャルル・シェーヌ Charles Chaynes (1925-2016)<sup>64</sup> が本チャ

---

<sup>61</sup> “l’étude parallèle des moyens d’expression et de diffusion, le perfectionnement des corrélations possibles entre la Radio, le Cinéma et la Télévision, et plus largement entre les Arts et les Techniques.” Le programme de prospection du Service de la Recherche,”(sans nom d’auteur) *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1961. 10): 8. 1961年7月17日にRTFで開かれた記者会見でシェフェールが述べた言葉として伝えられている。

<sup>62</sup> アルス・ノヴァに関してはフランソワ・マデュレルの網羅的な研究が存在する (François Madurell, *L’Ensemble Ars nova: Une contribution au pluralisme esthétique dans la musique contemporaine: 1963-1987*, Paris: L’Harmattan, 2003.)。

<sup>63</sup> フランスの作曲家、指揮者。フランス国営ラジオ放送での活動を経てロラン・プティ・バレエ団の音楽監督に就任。パリ・オペラ座バレエ団の音楽監督を歴任。パリ音楽院で楽器法と管弦楽法を教えた。1992年、メシアンを継いでフランス学士院アカデミー・デ・ボザール会員となり、死去後はシェーヌ（註64参照）がそのポストを継いだ。

<sup>64</sup> シェーヌはトゥールーズで生まれ、パリ音楽院でヴァイオリンと作曲（ミヨーとリヴィエに師事）を学んだのち、1951年カンタータ《そして男は門が再び開くのを見る Et l’homme se vit les portes rouvrir》でローマ大賞を受賞。“5 minutes avec Charles Chaynes,” *Musica* mai 1969: 44-45. ラジオ・フランスでは、委嘱を担当する音楽創作部署 Service de création musicale の主任として1975～1990年まで活動。2005年、フランス学士院アカデミー・デ・ボザール Académie des beaux-arts de l’Institut de France 作曲部門で、マリウス・コンスタンの死去に伴

ンネルの職員として採用され、ORTF の運営期間中（1964～1974）本チャンネルの監督を担った。なお本チャンネルの呼称は「フランス・キャトル France IV」、1963 年には「フランス＝ミュージック France-Musique」<sup>65</sup>となり現在に至っている。1954 年 12 月 2 日にヘルマン・シェルヒエン Hermann Scherchen (1891-1966) 指揮する国立管弦楽団がエドガー・ヴァレーズ Edgar Varèse (1883-1965) の《砂漠 *Déserts*》の世界初演をシャンゼリゼ劇場で行ったときには、ステレオ放送が演奏会の中継に初めて用いられた。当初、18 時から 24 時まで毎日 6 時間の放送枠を持っていた FM 放送は、しだいに放送時間を拡大し、1958 年の初めには 9 時から 24 時までになった。FM チャンネルは他のチャンネルと異なり、放送時間のすべてが芸術音楽に充てられた。

FM 放送の登場の背景には、フランス国内におけるラジオ受信機の急速な普及があった。受信機の台数は、1946 年には 530 万台であったのに対し、1958 年には 1050 万台にまで増加した。一方、テレビ受像機の所有者が増えるペースは遅かった。第四共和政が終焉を迎えた 1958 年の 6 月、テレビ受像機は 99 万台しか普及しておらず、1000 万台の大台を突破したのは 1980 年代に入ってからである。20 世紀フランス史の概説書に「ある意味で、第四共和政はラジオの共和政であるといえる」<sup>66</sup>と記されているように、ラジオは 1950 年代フランスを代表するマスメディアであった。戦後まもない時期のフランスの文化において国営放送の音楽放送が果たした重要性がこうした状況から察せられるだろう。

しかしながら、FM 放送の受信には専用の受信機が必要とされたため、FM 放送特別チャンネルの設置が同チャンネルの聴取率を急速に上昇させる結果には至らなかった。実際、ORTF へと体制が変更されて後の 1965 年には、FM 放送の聴取者層を開拓することを目的としたキャンペーンが地方都市で行われている<sup>67</sup>。また、FM チャンネルの意義についてはほかならぬ総監督が懐疑的な態度をとっていた。ポルシェの後任として、1957 年 2 月に総監督に着任したガブリエル・ドロローネー Gabriel Delaunay (1907-1998) は、FM チャンネルを「金持ちのラジオ *radio des riches*」とみなし、その意義に批判的であった。こうした姿勢が、FM 放送の扱う内容が芸術

---

い、コンスタンの占めた第 8 席 Fauteuil VIII に就任。興味深いことに、フランス・ミュージックで黎明期を支えた 2 人の人物が学士院の同じ席で交替することとなった。

<sup>65</sup> のち、ハイフンを除いた表記が一般的になった。本論文でもそれを踏襲し、本箇所以外では「フランス・ミュージック」という表記を採用している。

<sup>66</sup> Jean-Pierre Rioux et Jean-François Sirinelli, *Histoire culturelle de la France: 4. Le temps des masses Le vingtième siècle* (Paris: Seuil, 2005 (1<sup>ère</sup> édition: 1998)): 280.

<sup>67</sup> Julie Marchetti, “L’histoire de France Musique: L’évolution du traitement de la musique classique à la radio, du monopole à la concurrence de Radio Classique,” mémoire de maîtrise, Université Paris Sorbonne IV, 2005: 20.

音楽に限られることと関係している可能性は否定できない。FM 放送をめぐるこうした賛否が存在したことについて、本論文ではこれ以上掘り下げて論じないものの、この賛否の存在は、本論文のテーマのひとつである教養をめぐる議論に関係しているだろう。

注目すべきは、FM チャンネルの掲げた理念の一部が、実験クラブないしシェフェールのミュージック・コンクレートの試みにおけるそれと共通していることである。1961～1962 年の番組の概要を記した RTF 社内報の記事には、FM チャンネルの「二重の使命 double vocation」として「FM とハイファイの普及 *propagation de la modulation de fréquence et prestige de la Haute-Fidélité*」と「放送の技術的質の高さおよび芸術的な質の高さを両方とも活かして、あらゆる時代、国、ジャンルの音楽レパートリーを提供すること *en servant le répertoire musical de tous les temps, de tous les pays et de tous les genres grâce à une conjugaison de la qualité technique des émissions et de leur qualité artistique*」(傍線筆者)<sup>68</sup> が挙げられている。このうち技術と芸術という要素の組み合わせは、タルデューやシェフェールが実験クラブおよびミュージック・コンクレートにおいて理念として掲げていたものにほかならない。FM チャンネルがタルデューの主導によって開設されたのだとすれば、タルデューは実験クラブ創設時の目標をいまだに理想としており、実験クラブの活動が予算等の面で制約を受けるようになるにあたり、新設された FM チャンネルの目標としてかつての理念を掲げるに至ったと推測することができる。

しかしながら、FM チャンネルが実際に放送した内容は、上記の目標とは裏腹に、かつての実験クラブの放送内容に比べると新奇性が後退しているように思える。たとえば、1960 年 1 月 3 日に同チャンネルで放送された曲目をラジオ番組表で確認すると、【資料 1】のようになっている。すなわち、午前 9 時 30 分から 11 時まで放送された「午前の管弦楽 *Matinée Symphonique*」では、J. S. バッハの《音楽の捧げもの》、モーツァルト《フィガロの結婚》および《ドン・ジョヴァンニ》からのアリア、ベートーヴェン《「コリオラン」序曲》が放送されている。以降の番組および曲目については【資料 1】を参照されたい。この曲目の一覧を見る限り、FM チャンネルは、音質を向上させたという点では技術の進展を利用しているとはいえ、選曲における実験性や新奇性はそれほどはっきりとは現れていない。むしろ、芸術音楽の愛好家を対象として組まれた曲目と解釈するのが妥当であろう。他方で、このようなプログラミングを実施していながら、先に引用した社内報の記事では、FM チャンネルの役割について「色調と音の刷新は、当然ながら、この放送のもつ百科事典的で教養にかかわる役割を変える

---

<sup>68</sup> “La vie de la Radio: physionomie des programmes pour la saison 1961-1962,”(sans nom d’auteur) *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1962. 8-9): 6.

ことはない<sup>69</sup>」と述べられている。ここで用いられている「百科事典的 *encyclopédique*」という語は、バローの音楽放送観を特徴づけるキーワードのひとつであるが、ここではまだそれについての議論には立ち入らないでおく。

実験クラブとその周辺の組織に関する以上の議論から読み取れるのは、次のことである。すなわち、ジャン・タルデュー率いる実験クラブは、予算の削減という実的な要請に応じて、研究内容を実践すなわち番組制作に密接に関連＝従属させ、非実的な研究を活動内容から次第に排除していった。これとは反対に、シェフェールは実験クラブから独立してミュージック・コンクレートの創作を専門に行うグループを立ち上げ、「純粋な」研究を続した。また、FM チャンネルの放送理念は、芸術音楽放送における技術革新の重要性を再び重視しているとはいえ、そのなかで番組内容の斬新さはもはや追求されていなかった。

つまり、RdF・RTF の音楽放送において当初「研究」あるいは「実験」は、放送の新しいジャンル・形式の考案と同様、番組の内容つまり作品の創作にも結びつくものとして構想されたが、シェフェールがみずからの主導する実験を続し、同時期に FM チャンネルが放送を始めたのと連動して、創作に関連する研究と普及方法に関連する研究との乖離が次第に顕著となったといえる。

---

<sup>69</sup> “[...] la tendance vers un renouvellement de la couleur et du ton ne modifiant naturellement pas la vocation culturelle et encyclopédique du programme,” *Ibid.*: 4.

### 1-3. アンリ・バロー

第1節ですでに扱ったように、アンリ・バローは、第2次大戦後のフランス国営放送の再建で中心的役割を担った人物のひとりであった。だが、やはり第1節で言及したとおり、バローの功績は、たんなる国営ラジオの再建の手助けという局所的領域にとどまらず、20世紀後半のフランス音楽界の再編という大きな枠組みのなかに位置づけられるべきものである。同時に、彼の業績がそのように広範な射程でとらえられるべきであるのは、バローにとって、ラジオでの活動が直接的にフランス音楽界での影響力の確保につながっていたからである。言い換えれば、国営ラジオの音楽監督というポストそれ自体が、文化省設立以前のフランスにおいて、国家的なレベルでの音楽政策を統括する役割を担っていた。この点は、第2次大戦前後の国営ラジオの音楽放送に関する先行研究に通底する認識のひとつであり、本論文の冒頭以降たびたび触れられているように、本研究においても議論の前提をなす。

上に述べたように、国営ラジオの音楽監督バローが、放送局内部のみならずフランス音楽界において発言力を行使していたとすれば、そのような広い領域での権力の行使が具体的にどのような事例に現れているのかを確認および整理し、どのような要因がそうしたバローの影響力の広がりを実現させたのかを考察しておく必要があるだろう。そこで、本節ではまず、アンリ・バローの経歴および功績の概要を示す。バローの音楽放送観については、本研究の全体を通してたびたび言及することとなるので、ここでは扱わないこととする。

バローの経歴や功績、思想に関しては、筆者が2009年に東京藝術大学音楽学部楽理科に提出した卒業論文<sup>70</sup>、および2011年に同大学院音楽研究科に提出した修士論文<sup>71</sup>の第2章で既に取り扱った。筆者がこれらの研究を行ったのはほぼ時を同じくして、フランスではバローに関する注目すべき資料が登場した。バローが80歳を過ぎてから書き始め、約8年のあいだ執筆された文章を編纂した『自伝的エッセー』である<sup>72</sup>。これは、フランス国立図書館の出版計画の一環として企画されたもので、ミリアム・シメヌ Myriam Chimènes (1952-) とカリン・ル・バイルが編纂

<sup>70</sup> 平野貴俊「戦後フランスの公共ラジオ放送による現代音楽の普及——アンリ・バローの方針とその意図」、東京藝術大学音楽学部楽理科卒業論文、2009年。

<sup>71</sup> 平野貴俊「フランス国営放送 RTF による芸術音楽の普及 (1948-1964)——その実践と理念の対照研究」東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文、2011年。

<sup>72</sup> Barraud, Henry. *Un compositeur aux commandes de la Radio: Essai autobiographique*. (Édité sous la direction de Myriam Chimènes et Karine Le Bail) Paris: Fayard / Bibliothèque nationale de France, 2010. 本書で、バローはミシェル・ド・モンテーニュ Michel de Montaigne (1533-1592) の『エッセー *Essai*』を意識して題名を決定したと述べている。



を担った。それまでバローを扱った研究書としては、作品と彼の経歴の概要をまとめたフランス＝イヴォンヌ・ブリル France-Yvonne Bril の著書<sup>73</sup>しかなかったこと、編纂を担った音楽学者シメーヌが 20 世紀フランス音楽研究の重鎮であること<sup>74</sup>を考慮すれば、1000 ページを超えるこの『自伝的エッセー』の刊行のもつ意義は大きい。本書刊行の翌年 9 月には、バローの孫であるピアニストであり指揮者、ニコラ・クリューガー Nicolas Krüger (1972-) がバローの歌曲・ピアノ曲を録音した CD が発売され<sup>75</sup>、それにちなんだ演奏会がバローの親族の臨席のもとに開かれる<sup>76</sup>など、バローに対するフランス音楽学界の関心の高さを窺わせた。

自伝では、国営放送でのポストを得た経緯や数々の音楽家との関わりのみならず、間大戦期のパリにおける文化人・芸術家の活動の諸側面（サロンやミュージック・ホールの様子）や、被占領期のパリにおける人々の生き様が鮮明に描き出されており、20 世紀フランスの文化に関する貴重な証言集ともなっている。ただ、老齢に達してから執筆が始められた記録であることとも関連して、自身の脳裏に刻みこまれた出来事の数々を回想するといった手法で記述が行われていること、したがって日記とは異なり、日付とともに活動内容の詳細を網羅的に記した書物でないことは注意すべきであろう。シメーヌとル・バイルによる脚註は、そうした点を考慮に入れたうえで、登場する事象や人物に関する詳細かつ正確な情報を提供するものとなっている。バローのバイオグラフィーの詳細に関して、『自伝的エッセー』の記述以上の情報は、筆者の知る限り現段階では現れていない。本節では、『自伝的エッセー』の刊行に伴って、国営放送に入る以前のバローの経歴の詳細が初めて明らかになったことを考慮して、それらの新情報を整理したうえで、国営放送における音楽放送についてのバローの考えに言及する。

バローは 1900 年 4 月 23 日、ボルドーの富裕なワイン商人の家に生まれた<sup>77</sup>。リセ・ロンシャン lycée de Longchamp を優秀な成績で卒業した後、17 歳の時バカロレアに合格する。伯母ア

---

<sup>73</sup> Bril, France-Yvonne. *Henry Barraud: propos recueillis par France-Yvonne Bril*. London; Neuilly-sur-Seine : Boosey and Hawkes, 1982.

<sup>74</sup> 国立科学研究センター CNRS の研究監督 directrice de recherche。1870～1970 年代のフランスにおける音楽と公的政策・メセナ（パトロン）等、ドビュッシー研究、音楽家の著述の批判校訂の分野で数点の著作を発表している。デュラン社のドビュッシー全集では、ブーレーズとともに《遊戯 *Jeux*》の校訂を行った

(Claude Debussy. *Jeux* (édition de Pierre Boulez et Myriam Chimènes). Paris: Costallat et Durand, 1988. (Édition critique des œuvres complètes de Claude Debussy) )。

<sup>75</sup> Henry Barraud, *Mélodies & impromptus*. Nicolas Krüger, Salomé Haller, Christophe Crapez.

<sup>76</sup> CD を発売したアンテグラル社 Intégrale 主催の演奏会。2011 年 6 月 7 日、パリのシャトレ座ホワイエで行われた。

<sup>77</sup> 名前の綴りはもと Henri Barraud であったが、本文で後述する理由により Henry に改められた。

ントワネットは、作家フランソワ・モーリアックの兄レイモン Raymond Mauriac の妻であり、バローとこの 20 世紀を代表する作家<sup>78</sup>のあいだには交流があったようだ。

12 歳のとき、ボルドー音楽院 Conservatoire de Bordeaux 教授のルイ・ロソール Louis Rosoor (1883-1969) にチェロを習い始めた。このころシューマンの《ピアノ五重奏曲》を分析した経験が、作曲家こそ天職であるという確信を彼に根づかせたという。第 1 次世界大戦において、バローの父モーリス Maurice Barraud は予備士官で、兄も 1916 年に戦争に召集された。しかしボルドーでは、戦時中にも様々な演奏会が行われ、音楽界は活況を呈していたという。バローはボルドー音楽院で、フェルナン・ヴォブルゴワン Fernand Vaubourgoin (1880-1952)<sup>79</sup> に作曲のレッスンを受け、15 歳のときはすでに弦楽四重奏や歌曲などを作曲していた。19 歳のときにはヴァンサン・ダンディ Vincent D'Indy (1851-1931) に自作を送っており、ダンディは講評のなかで、スコラ・カントルム Schola Cantorum で学ぶことをバローに勧めている。ボルドーで英語の学士号を取得したあと、バローは 1922 年 10 月から 1 年間ライン軍の士官として軍役に就き、ルール占領 (1923～1924) に直面した。1923 年からは、父の命令に服して、イギリスで 3 年間ワイン商人としての修業を積んだが、この経験については苦々しい思い出しかないと言っている。

作曲家になることを志し 1926 年パリに渡ったバローは、パリ音楽院教授ポール・ヴィダル Paul Vidal (1863-1931) に自作の歌曲を見せた。しかし、ヴィダルはバローの入学を許可しなかったため、バローはジョルジュ・コサード Georges Caussade (1873-1936) に個人的にフーガを師事した。同時に、音楽院の聴講生として、シャルル・ヴィドール Charles Vidor (1900-1959) の作曲クラスとダンディの管弦楽法クラスに出席した。ヴィドールのクラスではメシアンと知り合ったようだ。また、バローと同郷のギュスターヴ・サマズイユ Gustave Samazeuilh (1877-1967) の助言を得て、バローはエコール・ノルマル音楽院 Ecole Normale de Musique de Paris でデュカの作曲クラスを聴講した。デュカに学んだ経験は、バローにとって大変有益なものとなったという。

パリ音楽院の入学試験では、「ストラヴィンスキー風の」弦楽四重奏曲を書き、不合格となっ

---

<sup>78</sup> 1952 年にノーベル文学賞を受賞した。

<sup>79</sup> フェルナン・ヴォブルゴワンの息子マルク Marc Vaubourgoin (1907-1983) は、RTF の「音楽学研究・復元課 service des recherches et réalisations musicologiques」の監督をルイ・オベールとともに務めた。オベールがバローの師であることを考慮すれば、このポストがマルク・ヴォブルゴワンに与えられたのはバローの意向によるものと推測される。

た<sup>80</sup>バローは、その後フォーレの弟子であったオベールに作曲、分析、管弦楽法を学んだ。バローとオベールは良好な師弟関係を結び、バローはオベールを通して音楽関連の仕事に携わりはじめた。バローが師について音楽を学んだのはこれが最後である。若手作曲家の登竜門であるローマ賞 *prix de Rome* に応募していないどころか、パリ音楽院に正規の学生として在籍することすらなかったというのは、パリ音楽院での一等賞の獲得およびローマ大賞の受賞が一流作曲家にとって必須であると認識されていた当時のフランスの音楽界で、作曲家として認められるにあたって、間違いなくディスアドバンテージとなったであろう。しかしながらこのことは、バローがフランス音楽界で作曲家もしくはラジオの音楽監督として地位を築く妨げにはならなかった。

ラジオでの活動を通して、バローはトニー・オーバン *Tony Aubin* (1907-1981) やレイモン・ルシュール *Raymond Loucheur* (1899-1979) といった音楽院を代表する作曲家と交流し<sup>81</sup>、国家音楽委員会 *Comité national de la musique* や国際音楽評議会 *Conseil international de la musique* といった公的な組織で要職を務め、ついにはオペラ座で自作のオペラが初演されるという荣誉に浴することになる。『自伝的エッセー』を編纂したル・バイルは、本書に寄せた序言のなかで、バローのこうしたアカデミズムとの距離を同時代人のフランシス・プーランク *Francis Poulenc* (1899-1963) のそれに比較している。この比較はたしかに示唆的ではあるが<sup>82</sup>、バローがプーランクとは異なり、行政に近い立場に身を置いていたことには留意しておくべきだろう<sup>83</sup>。また、後に述べるように、バローは音楽放送に携わるにあたって、「美学 *esthétique* ではなく倫理 *éthique*」を優先するという理念を掲げていた。こうした理念が、パリ音楽院を優秀な成績で卒

---

<sup>80</sup> 当時のパリ音楽院の院長はアンリ・ラボーであった。

<sup>81</sup> オーバンは 1946 年からパリ音楽院作曲科教授、ルシュールは 1956 年から 1962 年までパリ音楽院院長を務めた。

<sup>82</sup> Barraud, Henry. *Un compositeur aux commandes de la Radio*, pp. 7-8.

<sup>83</sup> この点で、比較の対象として引き合いに出すべきはむしろジョルジュ・オーリック *Georges Auric* (1899-1983) であろう。パリ音楽院に 1 年在籍した後、作曲家としてデビューし、映画音楽等の分野でもキャリアを築き、作家・作曲家・音楽出版社協会 *Société des Auteurs, Compositeurs et Editeurs de Musique (SACEM)* 会長および国立オペラ劇場連合 *Réunion des théâtres lyriques nationaux (RTLN)* のトップを務めた彼の経歴は、20 世紀初頭に生まれたフランスの作曲家にとって、パリ音楽院での長年の修学が作曲家としてのキャリアを築くうえでかならずしも必須条件ではなくなっていたことを示唆している。同様に、オーリックが *SACEM* 会長に就く直前に同ポストを占めていたのがアルテュール・オネゲル *Arthur Honegger* (1892-1955) であること、またバローもその活動に携わった国家音楽委員会委員長にダリウス・ミヨー *Darius Milhaud* (1892-1974) が就いていたことは、バローや「六人組」の世代の作曲家にとって、公的な音楽組織で指導的な地位に就くことがひとつの名声の証となっていたことを示している。

業しローマ大賞を受賞するという、フランスの作曲家にとって王道ともいえるキャリアをバローがたどらなかったことと関係している可能性については、筆者の修士論文ですでに指摘されている通りである<sup>84</sup>。「美学ではなく倫理」を第一に据えるという発想は、後にみるとおり、バロー退任後の数十年間、したがって本論文が扱う期間の全体を通じてフランス国営放送の音楽放送を枠づけることになる。バローを継いだ音楽監督あるいはその周辺の音楽放送責任者は、バローが打ち出したこの理念を忠実に受け取り具現化するか、あるいは敢えてそこからの脱却を図るかという、2つの方向性のいずれかを指向していたとみることができる。

バローの経歴に関する叙述に戻ろう。バローはオペールのゴーストライターとして音楽批評を書くかわら、彼の紹介により SACEM で著作権法の違反をチェックする仕事を行った。6年間続いたこの仕事を通して、バローはパリの様々なミュージック・ホールに出入りする機会を得た。このほか、ミュージック・ホールで演奏される音楽のための編曲、音響研究所 l'Institut de phonétique でのレコードの整理、『ジュルナル *Journal*』紙のオルフェオン欄の執筆なども行ったという。バローが音楽の分野で人脈を拓けるうえで、故郷ボルドーで築かれた人脈は有効に機能したようだ。先述したとおり、サマズイユはバローをデュカに紹介し、当時ストラスブル音楽院 Conservatoire de Strasbourg の院長であったジョゼフ＝ギー・ロパルツ Joseph-Guy Ropartz (1864-1955) は、息子がボルドーに住んでいたため、バローをフロラン・シュミット Florent Schmitt (1870-1958) に引き合わせる事ができた。また、若い頃の友人の紹介で、バローはロジェ・デゾルミエール Roger Désormière (1898-1963) と知り合った。シュミットが開催していた木曜会 jeudis では、アルテュール・オネゲル、シュミットの縁戚にあたるピエール＝オクターヴ・フェルー Pierre-Octave Ferroud (1900-1936) と知り合ったという。

1929年12月19日、独立音楽協会 Société musicale indépendante の演奏会で、『ピアノ・ソナタ *Sonate pour piano*』が、バローの作品としては初めて公開で演奏された<sup>85</sup>。その3年後の1932年12月18日、ピエール・モントゥー Pierre Monteux (1875-1964) 指揮するパリ交響楽団 Orchestre symphonique de Paris は、サル・プレイエル Salle Pleyel でバローの『田舎風のフィナーレ *Finale en mode rustique*』を初演した。モントゥーにこの作品の指揮を勧めたのはオペールであり、フロラン・シュミットはこの作品を高く評価したという。また、1934年2月4日に初

<sup>84</sup> 平野貴俊「フランス国営放送 RTF による芸術音楽の普及 (1948-1964)——その実践と理念の対照研究」、2011年、115頁。

<sup>85</sup> この演奏会では、他にラヴェルの歌曲、リヴィエ Jean Rivier (1896-1987) およびフェルーの作品の初演が行われた。

演されたバローの《詩曲 *Poème*》は、シュミット、オベール、サマズイユのみならず、エミール・ヴュイエルモーズ Emile Vuillermoz (1879-1960) やルイ・デュメニル René Dumesnil (1879-1967) といった高名な批評家をも満足させたようだ。またこのころ、オベールは「アンリ・バロー」の「アンリ」の綴りを Henri から Henry に変えるよう勧めている。これには、当時コンセルヴァトワールの院長であったアンリ・ラボーとの混同を避けるとともに、アカデミズムと距離をおくことを明確に主張するという意図が込められていたようだ。

バローはこのころ、ロベール・ブリュッセル Robert Brussel (1874-1940) <sup>86</sup>の紹介を通して、公教育省 *ministère de l'Instruction publique* <sup>87</sup>の下部組織である美術局 *direction des beaux-arts* に所属し、「芸術アクションのフランス同盟 *Association Française d'Action Artistique (AFAA)*」<sup>88</sup>の展示の責任者となった。『自伝的エッセイ』が刊行される以前から、バローの経歴の記述においてしばしば言及されてきた、「トリトン Triton」<sup>89</sup>におけるバローの活動<sup>90</sup>も、組織の運営への関与という点で AFAA での仕事と共通しているといえるだろう。ここでは、自作の《ピエール・

---

<sup>86</sup> フランスの音楽評論家。フォーレおよびデュカと交流し、『ル・フィガロ *Le Figaro*』紙に音楽批評を執筆する。当時パリであり知られていなかったセルゲイ・ディアギレフ Sergei Diaghilev (1872-1929) のロシア・バレエ団 (バレエ・リュス) Ballet russe を高く評価し、後にフランスにおける文化・芸術面での対外交流の窓口となった「芸術アクションのフランス同盟」の母体となる組織を設立した。ブリュッセルはバローに、後にバローの妻となるドゥニーズ・パルリ Denise Parly を紹介している。

<sup>87</sup> 文化省 *ministère de la Culture* の前身に当たる組織。

<sup>88</sup> 外務省および国民教育省 *ministère de l'Éducation nationale et des Beaux-Arts* の下におかれ、フランス芸術の対外的な普及を促進するために設立された組織。1922年に設立された「芸術における拡大と交流のフランス同盟 *Association Française d'expansion et d'échanges artistiques*」を母体とする。

<sup>89</sup> 1930年代のパリで活躍する同時代の作曲家の作品を、作曲家の国籍を問わず普及することを目的として設立された団体。ベルク Alban Berg (1885-1935) の《抒情組曲 *Lyrische Suite*》のパリ初演、シェーンベルク Arnold Schoenberg (1874-1951) の弦楽四重奏曲の演奏なども行われた。マルセル・ドラノワ Marcel Delannoy (1898-1962)、エマニュエル・ボンドウヴィル Emmanuel Bondeville (1898-1987)、アンリ・トマジ、マニユエル・ロザンタール Manuel Rosenthal (1904-2003)、リヴィエなどのほか、グスタボ・ピットルーガ Gustavo Pittaluga (1906-1975)、ルイージ・ダッラピッコラ Luigi Dallapiccola (1904-1975)、セルゲイ・プロコフィエフ Sergei Prokofiev (1891-1953)、イゴール・マルケヴィッチ Igor Markevitch (1912-1983)、ティボーール・ハルシャーニ Tibor Harsányi (1898-1954)、マルセル・ミハロヴィチ Marcel Mihalovici (1898-1985)、ボフスラフ・マルティヌー Bohuslav Martinů (1890-1959) といった非フランス人作曲家が積極的に扱われた。Henry Barraud, *La France et la musique occidentale* (Paris: Gallimard, 1956), 1956: 157-158.

<sup>90</sup> たとえば、ニューグローヴ音楽大事典所収のバローの項目を参照。Jonathan Griffin and Richard Langham Smith. "Barraud, Henry." *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed October 21, 2016, <http://www.oxfordmusiconline.com.rproxy.univ-psl.fr/subscriber/article/grove/music/02106>.

ルヴェルディの3つの詩 *Trois poèmes de Pierre Reverdy*》(1934)、2台のピアノのための《前奏曲とフーガ *Prélude et fugue*》(1935)、《トリオ・ダンシュ *Trio d'anches*》(1936)などが初演された。トリトン結成者のフェルーが1936年に自動車事故でこの世を去ると、実質的にバローがトリトンの代表となった。

美術局での職務の遂行は、国家的プロジェクトへバローが参画する手がかりとなった。バローは美術局旧局長のポール・レオン Paul Léon (1874-1962) から、1937年のパリ万博 *Expositions universelles de Paris* における音楽展示の責任者に任命されたのである。当時フランスには、のちにアンドレ・マルロー André Malraux (1901-1976) が推進するのと同様の性質の国家主導的文化政策は存在しなかった。とはいえ、パリ万博の例が端的に示すように、国家的規模でフランス文化の威容を対外的にアピールする機会がないわけではなかった。バローはそのような機会を逸することなく、公的機関での音楽事業の組織において一翼を担うようになっていった。バローは以後、作曲家でありながら、そうした公的な音楽行政を活動の重要な場とする「音楽官僚」<sup>91</sup>として、2種類の活動を相互的に組み合わせることで音楽界での地位を築いていったとみることができる。ただしバローが、自伝やインタビューなどで、公的な音楽事業への参画によって自作を普及しようという功利的な意図をもっていなかったと強調していることは留意すべきだろう。バローは1951年の『ラ・ヌーヴェル・エキップ・フランセーズ *La Nouvelle équipe française*』誌でのインタビューで、チャンネル・ナショナルの監督と作曲家を兼職していることについて問われ、「チャンネル・ナショナル監督としてのアンリ・バローは、アンリ・バローという作曲家を、ラジオがその音楽を放送する使命をもつひとりの作曲家と考えている」と述べている<sup>92</sup>。自身の職業倫理として彼が掲げた「美学ではなく倫理」はこの言葉にも表れているだろう。とはいえ、晩年にオペラ座で自身のオペラが初演されたことにも示されているとおり、

---

<sup>91</sup> 1966年に文化省音楽局が設立されるずっと前から、フランス音楽界におけるアカデミズムの牙城ともいえるパリ音楽院の院長、およびオペラ座監督、アカデミー・デ・ボザール作曲部門会員等が、「音楽官僚」の代表たる地位を実質上占めていたといえる。1960年代半ば、文化省音楽局局長にランドウスキが就任したことで、官僚ではなく音楽家が音楽行政を統括しうる可能性が明白となった。しかしそれに先立って、美術局とパリ万博で活動し、長年国営放送音楽監督を務めたバローを一種の音楽官僚とみなすことは不可能ではないだろう。ランドウスキの退任後、文化省音楽行政の責任者はつねに音楽家であったわけではない。とはいえ、パリ音楽院でピアノの一等賞を得て、パリ政治学院 *Sciences Po* および国立行政学院 *Ecole nationale d'administration* を経て文化省の遺産担当 *directrice du patrimoine* などに就いたマリヴォンヌ・ド・サン＝ピュルジャン Maryvonne de Saint-Pulgent (1951-) の例に代表されるように、音楽家が文化行政に関与することは以後けっしてめずらしくなくなった。

<sup>92</sup> Wladimir Porché et Henri Barraud. “Quelques questions posées.” In *La Nef* numéro special (1951. 2-3): 172.

音楽官僚としての公的な立場を確保することが、自作の普及に際して有利に働くことがなかったとは考えにくい。ローマ大賞に象徴されるアカデミズムの本流に位置しないバローにとって、楽壇の一翼を担う作曲家としてみずからを認知させ続けるためには、創作とは別の領域で地歩を固めることが必要だった。美術局でのポストに始まる彼の行政領域でのキャリアは、間接的な形で彼の作曲家としての名声にも貢献したとみてよいだろう<sup>93</sup>。バローがパリ音楽院で一等賞を得たりローマ大賞を得たりした「王道」を歩む作曲家を押しつけて、上記の公的なイベントの企画・組織に携わるようになった経緯について、自伝で語られている情報よりも詳細な事情はまだ明らかになっていない。自伝では、音楽評論家・音楽史家ポール・ランドルミー Paul Landormy (1869-1943) らとのやり取りが回想の形で記されているとはいえ、そうした交渉を手紙等の資料をもって裏づけることは今後の研究において必要であろう。いずれにせよ、美術局やパリ万博といった場での仕事が、行政的・政治的音楽活動のメカニズムに関する経験・知識をバローに与え、国営放送での職務を担うに至る間接的な動機ないし誘因を彼に提供したことは推測に難くない。

バローは万博の準備を通して、オペラ座監督ジャック・ルーシェ Jacques Rouché (1862-1957)、文学者ポール・ヴァレリー Paul Valéry (1871-1945)、俳優ジャン＝ルイ・バロー Jean-Louis Barrault (1910-1994) などと知り合った。万博では、オリヴィエ・メシアン Olivier Messiaen (1908-1992) がこの機会に際して6台のオンド・マルトノのために書いた《美しき水の祭典 *Fête des belles eaux*》などが光の様々な効果を伴ってセーヌ川沿いで演奏されるなど、さまざまな作曲家に活躍の場が与えられた。翌1938年、バローは文化省の前身にあたる国民教育・美術省による委嘱を受け、中世に書かれた同名の戯曲にもとづくオペラ＝コミック《ピエール・パトラン先生 *La Farce de Maître Pathelin*》を作曲した。そして同年、ボンドウヴィルの誘いを受けて、郵政・電信・電話省 *Ministère des PTT* (Postes, télégraphes et téléphones) が管轄する国営ラジオ局「パリ PTT」に音楽家番組監督<sup>94</sup>として入る。ラジオ局での仕事は、第2次世界大戦の勃発に伴い歩兵中尉として動員されて以降中断した。しかし創作への意欲は失われておらず、《弦楽四重奏曲 *Quatuor à cordes*》の楽譜を畳んで軍服につねに忍ばせていたという。

<sup>93</sup> 「六人組」のメンバーとして、一時パリ楽壇の注目の的となったミヨーやオーリック、あるいはその周辺にいたアンリ・ソーゲ Henri Sauguet (1901-1989) が、戦後みな音楽行政で影響力のあるポストを保持したのも、創作活動を継続しながらパリの楽壇にとどまるための手段であったと考えることができる。ソーゲは国家音楽委員会委員長、アカデミー・デ・ボザール作曲部門会員を歴任した。

<sup>94</sup> 7 ページ参照。

1940 年 7 月に除隊となつてからは音楽家＝ミキサーとしての仕事を再開し、トゥールーズ、モンペリエ、そしてマルセイユで活動した。1943 年 3 月にパリに戻った後は作曲に専念し、《ピアノのための 6 つの即興曲 *Six impromptus pour piano*》 (1941)、《ピアノとヴァイオリンのためのソナチネ *Sonatine pour violon et piano*》 (1941)、《ある影への捧げ物 *Offrande à une ombre*》<sup>95</sup> (1941-1942)、《ランザ・デル・ヴァストの 4 つの詩 *Quatre poèmes de Lanza del Vasto*》 (1942)、交響組曲《村祭り *La Kermesse*》 (1942-1944) といった作品が生みだされた。ボンドウヴィルの下では、放送の対象となる音源を試聴し、批評的なコメントを行う仕事を行っていたが、この仕事はかなり楽なものだったという。

バローのこうしたパリ PTT での活動が、戦後、国営放送音楽監督としてポストを得たことに関係していることは疑いえない。ここで注意しなければならないのは、パリ PTT と戦後の国営放送のあいだには連続性が存在しないということである。つまり、バローおよびその周辺の人びとが運営に携わった戦後の国営放送は、戦前のラジオ局を延命したものではなかった。そもそも、第 1 節で触れたように、戦前のフランスでは民間放送、国営放送ともに小規模のラジオ局が乱立していた。パリ解放時に国営放送が一本化され、その後長らく民間放送の存在が認められなかったことを考慮すれば、独占的な形で運営されたこの国営放送が強力なマス・メディアとして機能したこともおのずと了解されるだろう。このことは、ラジオの歴史の記述において、戦時中のフランスのラジオが「電波戦争 *guerre des ondes*」の手段として用いられたこととも関係しているとも推測される。やはり第 1 節で述べたとおり、ドイツ軍による占領下のパリでは、ドイツ軍が運営したラジオ・パリがプロパガンダに音楽を積極的に利用した。国営放送はこれに対して、ラジオ・パリほどの人気と求心力を得ることはなかった。そうしたなか、ピエール・シェフェールを中心とする人びとが着手したのが、パリ解放とともにフランスの新たな国営放送を開局し、これを独占的組織とすることであった。戦後の新たな国営放送が、このような政治的できわめて対独的な企図のもとに誕生したことは、ここで再度確認しておくのがよいだろう。

実験スタジオの創設から国営放送の誕生までの経緯については、第 1 節で整理した通りである。バローとこの経緯との関わりについて、バローは自伝のなかで、共産主義に近い作曲家のグループ「国民戦線 *Front National*」の果たした役割を強調している。国民戦線の会合は、彫刻家イリナ・コドレアヌ *Irina Codreanu* (1896-1978) かオルガン奏者・作曲家のガストン・リテ

---

<sup>95</sup> 戦争で亡くなった作曲家、モーリス・ジョベール *Maurice Jaubert* (1900-1940) を追憶して書かれた管弦楽作品。



ーズ Gaston Litaize (1909-1991) の自宅で開催されていた。情報省で一時的に事務局長を務めていたジャン・ギニューベールは、シェフェールとともに、戦後のラジオ局の創設を目論む複数のレジスタンス運動を束ねる活動を行っており、国民戦線とシェフェールとの話し合いの結果、戦後のラジオ局の音楽部門責任者としてロジェ・デゾルミエールを指名した。だが、デゾルミエールは 1944 年 10 月からオペラ座の助監督に就くことが決定していたため、国民戦線においてデゾルミエールを補佐する立場にあったバローが、代わりに音楽部門を担うことになった。しかし、バローは密かにオペラ座のポストを狙っていたため、デゾルミエールにそれが充てられたのは残念だったと後に語っている<sup>96</sup>。

後にシェフェールは、音楽部門のトップとしてジャック・イベール Jacques Ibert (1890-1962) を招き、その補佐としてバローを充てる計画を立てているとバローに伝えた。バローによればこれは、イベールがヴィラ・メディチ Villa Médicis の監督であり、学士院会員でないにもかかわらず公的な影響力を発揮していたことを考慮して構想された人選であった<sup>97</sup>。しかしバローは、これをシェフェールによる裏切りとみなし、イベールの補佐に就くことを断固として拒否した。こうして国営放送音楽監督のポストはバローに与えられることになった。またその後、国営放送総監督ポルシェとバローは、バロー自身によれば非常に良好な関係にあったため、ポルシェが重視していた教養放送の監督にバローが就くことは早くから内定していたようだ<sup>98</sup>。バローがこのように、シェフェールやポルシェといった周辺の人物との交渉を経ながら、音楽と教養両分野の放送における責任者となったことは、本論文の後の内容からも明らかとなるように、その後の音楽放送にとって重要な意味をもっている。バロー退任後の音楽放送においても、「教養」はつねに音楽放送の方針と非常に密接な関係をもつ概念であり続け、この概念をどのように受け取るかが音楽放送の方向性を決定づける鍵となったからである。

ここでは、国営放送 RTF におけるバローの活動の詳細を網羅的に記述することは控える。活動の詳細については、『自伝的エッセー』を参照するのがもっとも適当であるが、回想録であるため、記述の正確さはかならずしも保証されていない。詳細な脚注ではそうした点への顧慮がみられるとはいえ、証言の正確さを国営放送の史料から可能な限り裏づけるという段階には至っていない。また回想という形式上、網羅性をそなえているとはいいがたい。一次資料によるド

---

<sup>96</sup> Dellard, Pierre et Louis Courtinat eds., “Henry Barraud: Une longue carrière radiophonique au cœur de la vie musicale et au service de la culture (1938-1965),” in *Cahier d’Histoire de la Radiodiffusion* 11-12 (1986), p. 174.

<sup>97</sup> Barraud, Henry. *op. cit.*, p. 388.

<sup>98</sup> Ibid., p. 497.

キュメンテーションを基礎としたバローの業績の詳細な整理が、今後行われて然るべきであろう。とはいえ、筆者が研究の過程で種々の一次資料を参照する限り、バローの業務の大半は、枚挙にいとまのないほどの量のさまざまな実際的問題に対処することから成り立っていたと推測することができる。それらはスタジオの確保、国立管弦楽団のツアーの準備、放送の予定の承認、音楽家の推薦などであり、これらの問題をめぐる局内および局外の人びととの書簡のやり取りは、国立公文書館の国営放送関連資料に分散された形で収められている。

ここでは、バローの音楽監督としての功績のうち、具体的な事績として国立管弦楽団の発展への寄与および児童合唱団の設立、教養番組の充実への貢献、作曲家への委嘱に着目したい。国立管弦楽団は、第1節で言及したとおり、デゾルミエールとロザンタールの協力を得て、戦前にアンゲルブレシュトが設立したオーケストラであり、国営放送パリ PTT に所属していた。この管弦楽団の戦時中の活動については、団員が発行した機関紙を参照したル・バイルの博士論文<sup>99</sup>がもっとも詳細かつ興味深い情報を提供している。バローが国立管弦楽団の活動の充実に貢献したのは、「フランス音楽の大使 *ambassadeur de la musique française*」<sup>100</sup>としての役割をこのオーケストラに託し、1947年にその初の外国ツアーを北米で実現させたことを通してである。シャルル・ミュンシュ Charles Munch (1891-1968) 指揮のもと、アメリカだけでなくカナダも回ったこのツアーで、バローは「道中で拍手を受けたのはフランスの本当の顔だった」<sup>101</sup>と述べている。『自伝的エッセー』で本ツアーの回想が「国立管弦楽団アメリカ・ツアー *L'Orchestre national en tournée aux Etats-Unis*」という章のもとにまとめられており、「1950年代 *Les années 1950*」や「国家ラジオの再建 *Reconstruire une radio d'Etat*」といったタイトルの章と並べられていることは、このツアーがバローのキャリアにとって非常に大きな意味をもつものであったことを示している。

しかしバローの貢献は、国立管弦楽団の名声を高めたこと以上に、「フランス音楽の大使」という使命を国立管弦楽団に付与したこと自体にあるということもできる。アンゲルブレシュトによって設立された際、同管弦楽団にこのような称号が付されたことはなかった。第1節では、第2次世界大戦以前のフランスでのラジオ放送において、ラジオ局が独自に音楽家を雇う慣行

---

<sup>99</sup> Karine Le Bail, “Musique, pouvoir, responsabilité: La politique musicale de la Radiodiffusion française, 1939-1953,” thèse de doctorat d’histoire, sous la direction de Jean-Pierre Azéma, Institut d’études politiques de Paris, septembre 2005.

<sup>100</sup> Henri Barraud, “L’O. N. ambassadeur de la musique française,” *L’Orchestre national de la radiodiffusion télévision française* (éd. par Barraud, Daniel-Lesur et Manuel Rosenthal, préface de Wladimir Porché, [s. l.]: [s. n.], [1957]): 8.

<sup>101</sup> “[...] le vrai visage de la France que l’on acclame sur son chemin.” In *ibid.*.

が存在したことを指摘したが、初期の国立管弦楽団もそのような意図のもとに設立された団体であり、放送で用いる音源を録音ないし中継の形で提供することを第一の目的としていた。その後、第2次世界大戦を経て国営放送の再建にバローが着手したときはじめて、国立管弦楽団は「フランス音楽の大使」という、「国立 national」という呼称通りナショナルスティックな使命を与えられたのである。この表現は、バローを継いで音楽監督となったフィリップも同様の視点で国立管弦楽団をとらえていること<sup>102</sup>、またフランスを代表する管弦楽団としての座が、ランドウスキの主導によって 1967 年に新設されたパリ管弦楽団に対して用いられるようになったことにも示されている<sup>103</sup>。

国立管弦楽団に「大使」としての役割を与えたこと以外に、ラジオ局の音楽活動に対するバローの貢献を象徴するのは、1946 年 4 月 29 日の児童合唱団の設立である<sup>104</sup>。公教育省の視学官長 inspecteur général でありセーヌ県教育部門監督 directeur du Service d'enseignement de la Seine のモーリス・ダヴィド Maurice David (1891-1974) の協力を得て設立されたこの団体は、その活動の特殊性と、同時代音楽の普及に果たした役割という点で、国営放送が擁する音楽団体のなかでも特筆すべき存在である。団員となることができるのは、オーディションに合格した 9 歳以上の男女で、団員は専門の学校で音楽と一般の学科を並行しながら受ける。同合唱団の初期の活動において、レパートリーの核をなしていたのは同時代の作品であり、メシアン《神の臨在のための 3 つの小典礼曲 *Trois petites Liturgies de la Présence Divine*》(1943-4) の演奏は作曲家に高く評価された<sup>105</sup>。また、国営放送が創作に関与した作品にもたびたび起用されており、

---

<sup>102</sup> フィリップは、ORTF ラジオ放送監督ピエール・ド・ボワドゥッフル Pierre de Boisdeffre (1926-2002) に宛てた「ラジオ・テレビにおけるパリ管弦楽団との共同製作計画」と題する報告で、国立管弦楽団とフィルハーモニー管弦楽団は「1945 年以降、フランス内外において、わが国の音楽の威光を認知させてきた唯一の団体であった Depuis 1945, cet orchestres ont été les seuls à faire rayonner, en France et à l'étranger, notre prestige musical national」と述べている。Michel Philippot, *Note pour M. le Directeur de la Radiodiffusion: Projet de co-production radio-télévision avec l'Orchestre de Paris*, le 19 août 1968: 2. (AN20090288/5305)

<sup>103</sup> たとえば、1968 年のパリ管のソ連ツアーを扱った『クーリエ・ミュジカル・ド・フランス』の記事（執筆者不明）では「パリ管弦楽団はフランス音楽の非常に理想的な姿を示した l'Orchestre de Paris a donné une très haute idée de la musique française」とされている。“Nouvelles de la musique et des musiciens l'Orchestre de Paris a donné une très haute idée de la musique française français,” *Le Courrier musical de France*, 2e 1968: 133.

<sup>104</sup> この団体の活動の詳細については次の論文を参照。田崎直美「フランス・ラジオ放送児童合唱団「メトリーズ」la Maîtrise de la Radiodiffusion française——設立初期（1945～49）の活動内容とその意義について」、『お茶の水女子大学人文科学研究』 第 8 号、2012 年、69～80 頁。

<sup>105</sup> 児童合唱団がみずから作成したプロフィールにおいて、「私はラジオ・フランス児童合唱団の魅力的な声に大きな称賛を抱いています。[...] パリで私の《神の臨在のための 3 つの小典

イタリア賞を受賞したコンスタンの《笛吹き *Le Joueur de flûte*》(1952)、1955年に同賞を受賞したモーリス・ジャール Maurice Jarre (1924-2009) の《せせらぎ *Ruisselle*》を演奏している。児童合唱団がその後フランスで広く知られる合唱団のひとつとなり、その演奏の質の高さにより同国の児童合唱を牽引する存在であり続けていることは、2014年に公開されたフランス映画『ベリエー家 *La Famille Bélier*』（日本での公開時の邦題は『エール！』）において、歌手を目指す主人公が同合唱団のオーディションを受けるという筋書にも表れている。

委嘱活動についてはのちに詳述するため、ここではバローのキャリア形成におけるこの活動の意義を指摘しておくにとどめたい。後で触れるとおり、委嘱に関連する部署は存在したとはいえ、委嘱の発注を行っていたのは実質的にバローとデュティユーの2人であった。そして、委嘱の対象となった作曲家の多くは、単発で委嘱を受けるのではなく、何度かにわたり委嘱を受けた。このことは、委嘱を行ううえでの効率や放送局と作曲家の信頼関係といった点に鑑みれば、まったく驚くにあたらないどころか、むしろ不可欠であるとさえいえる。重要なのは、委嘱に際して、バローが網羅的な作曲家のリストを参照し、そこから委嘱を行うのに適した人物を適宜選んでいたことである<sup>106</sup>。彼が多くの作曲家のなかから発注すべき人物を選別していたことは、国営放送の音楽放送の充実にはもとより、バロー個人の音楽界での権威を付与することにつながった。国営放送音楽監督としてのこうした権力の提示は、1960年以後、バローが同ポストと兼務しながらいくつかの公的な地位に就くにあたって有力に働いたであろう。実際バローは、ユネスコ United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO) の国際音楽評議会で副議長 *vice-président* を務め、1962年、マルローの主導のもとに発足した「音楽問題の検討のための国家特命委員会 *Commission nationale pour l'étude des problèmes de la musique*」（以下、特命委員会）の委員を務めるなど、文化省音楽局の設置に先立つ音楽行政の揺籃期で要職を務めた。

---

礼曲》が演奏されるときはいつも、若さと喜びに魅了されます」というメシアンという言葉が紹介されている ([http://www.carteblanchemusique.com/wp/wp-content/uploads/dossierpdf/maitrise\\_radio\\_france.pdf](http://www.carteblanchemusique.com/wp/wp-content/uploads/dossierpdf/maitrise_radio_france.pdf) 最終閲覧日：2016年10月23日)。

<sup>106</sup> バローは、国営放送の委嘱活動に関するパリ大学の修士論文の執筆のため、彼にインタビューした著者ティッセランに対して次のように述べている。「私はすべての作曲家を知っていました。400から500の作曲家の名が載っている網羅的なリストも持っていました。当然、私はそのなかから選んでいました。第1列におかれる作曲家は100人、次の列に100人といった感じです。こうして選別していたのです *Je connaissais tous les compositeurs et j'avais même une liste exhaustive de quatre ou cinq cents noms. Naturellement, je faisais un choix : il y avait ceux que je mettais en première ligne, puis ceux que je mettais en seconde. Alors, je choisisais.*」。Frédérique Tisserand, “La politique de commande à la radiodiffusion française de 1945 à 1965,” *mémoire de maîtrise d'éducation musicale*, U. F. R. de musicologie, Paris IV, 1984, 1984, p. 31.

以上がバローの主要な業績の概要であるが、より重要性は少ないながらも、彼が具体的な番組の構想および製作にも多大な関心を払っていたことに言及する必要があるだろう。音楽監督という重要な公的ポストを担っていたバローは、フランス国営音楽放送のいわば代表者として局外の関係者と多数のやり取りを交わしており、それらのなかに番組製作における実際的で些末な問題に言及したものはかならずしも多くない。また、監督としての職務に専念したためか、司会を務めるなど番組そのものに登場することも少なかった。しかし、監督としての任期の後半および引退後には、これらの仕事を積極的に引き受け、ている。バロー自身が、退任前に企画に携わった番組として頻繁に挙げているのは教養番組《西欧のスペクトル分析 *Analyse spectrale de l'Occident*》である。これは、あらゆる学問を対象として、毎回特定のテーマについての解説を専門家が行うというもので、その構想の壮大さにこの企画の特色があった。1957年から1969年まで12年間の間毎土曜の午後12時から午前0時まで放送されたこの番組は、フランス国営放送を代表する教養番組としての地位を獲得した。バロー自身が司会を務めたわけではないものの、その企画を立案して放送を実現させたことをバローは感慨深くインタビューで振り返っている<sup>107</sup>。引退後、彼が国営放送で関与した番組として重要なのは《音楽へのまなざし *Regards sur la Musique*》である。これは毎週日曜午前11時から放送された番組で、1967年に始まり15年間続いた。毎回さまざまなテーマが扱われ、現代の音楽を扱うときには存命の作曲家をゲストとして招くなどした。こうして、ゴッフレド・ペトラッシ Goffredo Petrassi (1904-2003) やモーリス・オアナ Maurice Ohana (1913-1992)、セルジュ・ニグ Serge Nigg (1924-2008)、アンドレ・ブクレシュリエフ André Boucourechliev (1995-2007)、フィリップ、フランソワ＝ベルナール・マーシュ François-Bernard Mâche (1935-)、ジャン＝ルイ・フロレンツ Jean-Louis Florentz (1947-2004) などが番組に招かれた。同時代の音楽に関しては、自身が司会を務めた《20世紀の音楽言語への導入 *Initiations aux langues musicales du XX<sup>e</sup> siècle*》などでも特集した。

これらの活動と並行して、バローは啓蒙的な音楽書の執筆活動も行った。音楽監督としては、委嘱の対象となる作曲家を選別するなどして権威を示した一方、番組製作では聴取者の音楽の教養に資する番組の製作に努めていたのは興味深い。とりわけ、上記ラジオ番組のタイトルである「20世紀の音楽言語への導入」をその趣旨とする書『現代音楽を理解するために』<sup>108</sup>には、同時代の音楽に対するバローの見解を端的な形で伝える文言が数多く含まれ、彼の音楽史観の要諦が示されている。また、1955年にコスタール社 Costard から刊行されたベルリオーズの伝

<sup>107</sup> Dellard et Courtinat, *op. cit.*, 204.

<sup>108</sup> Henry Barraud, *Pour comprendre les musiques d'aujourd'hui*, Paris: Seuil, 1968.

記『エクトル・ベルリオーズ』は、増補版が1979年にファヤール社 Fayard の作曲家伝記シリーズの一冊として刊行された。当時フランスで出版されたベルリオーズの伝記としては、入手容易で詳細なものだった<sup>109</sup>。

バローの経歴の概要として最後に、バローとオペラとの関わりについて一言しておきたい。国営放送でポストを得る以前、バローがオペラ座監督の地位を羨望していたことは先に述べたが、彼はオペラという媒体に終生強い関心を抱いていたようだ。『5つの偉大なオペラ』という著書を彼が刊行していることにもそれは表れている<sup>110</sup>。また彼は、国営放送音楽監督としての地位を利用して、室内オペラを放送局内のスタジオで上演する試みを主導し、この実験を継続的に行うことに強いこだわりをもっていた。1964年10月、『ル・フィガロ *Le Figaro*』はバローのこうした計画についての記事を掲載している<sup>111</sup>。それによれば、バローはベンジャミン・ブリテン Benjamin Britten (1913-1976) のオペラに想を得て、およそ30人のオーケストラを用いて、短いオペラを一夜に2作品上演した。初の試みでは、ピエール・プティ Pierre Petit (1902-1990)<sup>112</sup> 作曲、ミシェル・デオン Michel Déon (1919-2016) 台本の《フリア・イタリアーナ *Fulia italiana*》とクロード・プレ Claude Prey (1925-1998) 作曲、フィリップ・スーポー Philippe Soupault (1897-1990) 台本の《告げ口心臓 *Le Cœur révélatrice*》が上演されたという。こうした試みの趣旨は、オペラ上演からその華やかさと高級感を排し、日本の能や古代ギリシアの演劇などが備えていた総合演劇としての性格を回復することにあつたという。ティッセランによるインタビューのなかでバローは、もしこの試みがもう少し早く始まっていれば、成功に導くことができただろうと述べている<sup>113</sup>。

より多くの人びとをオペラ鑑賞へ誘うことを目的としたこうした実験を行う一方、バローは、

<sup>109</sup> Idem, *Hector Berlioz*, Paris: Fayard, 1989.

<sup>110</sup> Idem, *Les cinq grands opéras*, Paris: Seuil, 1972. 本書で扱われているのは《ドン・ジョヴァンニ》、《トリスタンとイゾルデ》、《ボリス・ゴドゥノフ》、《ペレアスとメリザンド》、《ヴォツェック》である。

<sup>111</sup> Pierre Dupont, “Résurrection du théâtre lyrique par des opéras de Chambre: Tel est le vœu du compositeur Henry Barraud,” *Figaro* le 5 octobre 1964. フランス国立図書館オペラ座分館所収 Le Dossier Henry Barraud より。

<sup>112</sup> パリ音楽院でデュセルに作曲を学び、1946年ローマ大賞を受賞。1960年から1975年までフランス国営放送の音楽放送に携わり、軽音楽課主任（1960～1965）等のポストにあつた（1975年の改革時には室内楽課主任）。1965年、ベルナール・ガヴォティ Bernard Gavoty（1908～1981）を継いで『ル・フィガロ』の音楽評論家となる。1963年から亡くなる直前までエコール・ノルマル音楽院院長を務め、1982年にはロン＝ティボー国際音楽コンクール審査員長を務めた。筆名としてはハイフンを用いて「ピエール＝プティ Pierre-Petit」と名乗った。

<sup>113</sup> F. Tissérand, “La politique de commande à la radiodiffusion française de 1945 à 1965,” p. 34.

みずからオペラの創作にも務めた。生涯に作曲した5つのオペラのうち、ミゲル・デ・セルバンテス Miguel de Cervantes (1547-1616) の戯曲にもとづく《ヌマンシア *Numance*》(1947-1952) について、自伝では多くのページが割かれている。音楽監督退任後には、文化省からオペラの委嘱を受けている<sup>114</sup>。ポール・クロードル Paul Claudel (1868-1955) の戯曲『黄金の頭 *Tête d'Or*』にもとづいて書かれたこの戯曲と同名のオペラは、1978年から1980年にかけて作曲され、1985年4月20日にシャンゼリゼ劇場で初演（演奏会形式）された。6万フランの委嘱料が支払われたこの大作は、バローの遺作となった。

『自伝的エッセー』の副題は「ラジオを支配した作曲家 *un compositeur aux commandes de la Radio*」であり、作曲家とラジオの音楽放送の監督を兼務したことがアンリ・バローという人物のキャリアを特徴づける最大の点であると示唆されている。その点に異論をさしはさむことはできないにしても、作曲家として活動するかたわら放送局の音楽放送に携わることは、20世紀の作曲家にとってはけっしてめずらしいことではない。第1節で述べたとおり、メサジェ、ビュセール、アンゲルブレシュトといった作曲家はラジオの草創期に音楽監督を務め、国際的な名声を得る以前のデュティユーがフランス国営放送で長年働いていたことは、彼自身の証言を通して広く知られていた<sup>115</sup>。フランス以外の国では、バローとほぼ同年代の作曲家、たとえばスイスのオトマール・ヌッシオ Otmar Nussio (1902-1990)<sup>116</sup>やポーランドのローマン・パレステル Roman Palester (1907-1989)<sup>117</sup>のみならず、バローの年上にあたる作曲家であるボンドゥヴィルやドゥ・ラ・プレールも放送局で活動していた。彼らがラジオの仕事に携わるようになった経緯は一樣でないとはいえ、放送局の仕事が、少なからぬ数の作曲家にとって創作と並ぶ生活の糧として存在していたことは疑いえない。

バローもそうした状況を利用した作曲家のひとりであるが、彼のキャリアにとって国営放送がひときわ重要な位置をもつのは、第2次世界大戦後の国営放送の再建においてバローが中心的な役割を果たした人物のひとりであったからである。すなわちバローは、たんに戦後20年間にわたり国営放送の音楽放送監督を担ったのみならず、20世紀後半のフランスを代表するメデ

<sup>114</sup> “« Tête d'Or » va devenir Opéra,” *L'Aurore*, le 12 septembre 1979.

<sup>115</sup> Claude Glayman et Henri Dutilleux, *Mystère et mémoire des sons: Entretiens avec Claude Glayman* (première édition, Paris: Belfond, 1993), Arles: Actes Sud, 1997.

<sup>116</sup> 1938年から1966年まで、スイス・イタリア語放送管弦楽団 Orchestre de la Suisse italienne の音楽監督を務め、同局の音楽番組のプログラミングに携わった。

<sup>117</sup> 1947年からパリに定住した。1952~72年まで、ミュンヘンのラジオ局ラジオ・フリー・ヨーロッパ Radio Free Europe のポーランド・セクションで教養部門を率い、音楽のみならず文学、演劇、哲学に関するラジオ番組の制作にも携わった。

ィアである国営放送の立ち上げに参画したのであり、その点で彼の貢献は、20 世紀フランスの文化史の枠組みにも位置づけられる。また先に述べたように、バローは「六人組」の作曲家たちと同年代であり、プーランクやミヨーといったその一部の作曲家の成功に証されるように、パリ音楽院に代表されるアカデミズムとは距離をおきながら音楽界で頭角を現すことが可能である時代を生きた。パリ音楽院に正規の学生として在籍せず、ローマ賞の制度とも無縁であったバローにとって、放送局での仕事は、音楽界でみずからの地位ないし権威を確保するための手段でもあった。国営放送退任後のバローは、委員会の委員を務めるなどのほかに特定のポストを得ることはなかったが、それは在任中の 20 年間でバローが行使しえた影響力が、彼をフランスの楽壇の重要な一作曲家として認知させ続けることができたからであろう。



#### 1-4. バローの音楽放送観

RdF が設立されてまもない 1944 年に『フランス情報誌 *Cahiers français d'information*』に掲載された国営放送の組織概要には、バローが執筆したと推測される音楽放送についての記事がある。ここでは、「あらゆる時代のフランス音楽の擁護と、13 世紀から 20 世紀までの時代における放送内容の拡大<sup>118)</sup>」(傍点<sup>118)</sup>は原文の執筆者)が国営放送の音楽放送の目的として掲げられている。

音楽放送を論じたバローの文章は数多いが、これほど明快な形で音楽放送の目標が提示された文章は他に見られないといってよい。無署名の記事ではあるが、執筆者をバローと断定することがほぼ可能と思われるのは、国営放送が再建されてまもない 1947 年当時、RdF で音楽放送の監督にあたった人物として、バローの他にほとんど候補が存在しないからである。また、ここに提示された目的のうち、2 つ目の「放送内容の拡大」については、すぐ後にみるように、その後さまざまな媒体で同様の趣旨が繰り返し表明されている。このことは、見方を変えれば、最初の目的「フランス音楽の擁護」は、この記事が書かれた 1947 年以後、それほど前面に打ち出されなくなったということでもある。バローが国営放送音楽監督在任中の 1956 年、『フランスと西欧音楽』と題された著書を刊行していること<sup>119)</sup>、あるいは国立管弦楽団に「フランス音楽の大使」としての使命を託したことからは、「フランス」あるいは「フランス音楽」が依然としてバローにとって優先的に考慮されるべきであったことが読み取れるが、音楽放送の方針として「フランス音楽の擁護」が、以後声高に主張されることはなくなったとみてよい。代わりに浮上したのが、「放送内容の拡大」を謳う発言である。

先の 2 大目標が提示されてから 4 年後の 1951 年、バローは RTF の社内報に「ラジオのおかげで音楽は生きた芸術となる」と題する短い文章を執筆し、そのなかで音楽放送における「放送内容の拡大」への志向がなぜ必要であるかを示唆している。バローによれば、「教養があるとされている非常に多くの人々が、音楽は [J.S.] バッハで始まりヴァーグナーで終わる(ドビュッシーやラヴェルまで行く人もいるが)と堅く信じている<sup>120)</sup>」。ここでは、なじみの深い作曲家

<sup>118)</sup> “Défense de la musique française à toutes les époques et élargissement des programmes dans le temps, du XIII<sup>e</sup> siècle au XX<sup>e</sup> siècle.” [Henry Barraud], “Trois grands services producteurs: Service de la Musique,” *Cahiers français d'information* 81, 1947: 7.

<sup>119)</sup> Henry Barraud, *La France et la musique occidentale*, Paris: Gallimard, 1956.

<sup>120)</sup> “[...] la grande masse du public réputé cultivé est fermement convaincue que la musique commence avec Bach et se termine avec Wagner (d’aucuns vont jusqu’à Debussy et Ravel).” Henry Barraud, “Grâce à la radio, la musique est un art vivant,” *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 3 (1951. 3): 16.

として、バッハとヴァーグナーという 2 人のドイツ人作曲家の名が代表的な形で挙げられている。このことを、ドビュッシーとラヴェルという 2 人のフランス人作曲家の名前が挙げられていることと対照して、バローがここで戦時中のドイツ軍によるプロパガンダに対する反発を込めていると読むことは、やや飛躍が過ぎるように思えるかもしれない。しかしながら、この文章が書かれてから 3 年経ったところにバローが発表した、やはり RTF の社内報の記事には、次のような一節がある。

「室内楽は死に、歌劇場は滅び、管弦楽はベートーヴェンの 3 つの交響曲、バッハの協奏曲とヴァーグナーの 2 幕をしつこく繰り返すことで何とか細々と続いている。あたかも、火のない暖炉の片隅で、たったひとつしかないストッキングを永遠に繕いつづける、小さくなった老女のように<sup>121</sup>」。

バローは、国営放送再建後、ロラン＝マニユエルが司会を務めた啓蒙的音楽番組《音楽のたのしみ *Plaisir de la musique*》に出演している。29 回目の放送は「新旧論争 *La querelle des Anciens et Modernes*」と題され、ゲストはバローであった。ここで彼は、次のように述べている。

「平均的フランス人は、不幸にも、音楽をすでに死んだものと考えている。古い本をほとんど読まず、古典悲劇をほとんど観に行かない人びとが、ドイツのロマン派の偉大な作品に好奇心を限定しているというのは奇妙ではないか？<sup>122</sup>」

「ラシーヌよりもジロドゥーを褒め、ラファイエット夫人よりもモーリアックを熱心に読むようなこうした人びとが、ラヴェルやストラヴィンスキーよりもベートーヴェンを好んで聞いている。これは怠惰であり、やる気がないということではないか？<sup>123</sup>」

---

<sup>121</sup> “La musique de chambre est morte, le théâtre lyrique agonise, la musique symphonique vivante en ressassant trois Symphonies de Beethoven, un Concerto de Bach et deux actes de Wagner, comme une vieille petite rentière qui reprise éternellement son unique paire de bas au coin d’une cheminée sans feu.” Henry Barraud, “Centre d’Études Radiophoniques : Musique...,” *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1954. 11): 14.

<sup>122</sup> “On dirait malheureusement que le Français moyen considère la musique comme une chose morte. N’est-il pas singulier que le même public, qui ne lit guère les livres anciens et ne va que rarement voir jouer des tragédies classiques, limite sa curiosité musicale aux grandes œuvres du romantisme allemand ?” Roland-Manuel (avec la collaboration de Nadia Tagrine), *Plaisir de la musique*, Paris: Seuil, 1947: 313.

<sup>123</sup> “Le même homme qui va plus volontiers applaudir Giraudoux que Racine et qui lit Mauriac plus

最初に挙げた文章でバローは、バッハとヴァーグナーという2人のドイツ人作曲家の名を代表的な形で挙げていた。そして、バッハとヴァーグナーがここで選ばれているのは、ともすると偶然の選択によるものではないかと指摘した。しかしながら、その後に挙げた2つの同様の趣旨の発言においても、やはりバッハとベートーヴェンが挙げられており、2番目に引用した発言ではそれらにヴァーグナーが加わっている。このようにみると、「ラジオのおかげで音楽は生きた芸術となる」でバッハとベートーヴェンが挙げられていることは、けっしてたんなる偶然ではなく、バローにとってこの2人の作曲家がある音楽のカテゴリーを象徴する作曲家であるということが推測される。

バッハとベートーヴェン、およびヴァーグナーが、バローにとってどのような音楽を代表する作曲家であるかということについては、以下の推測に対する決定的な証拠は存在しないにしても、これらの名がドイツないしドイツ語圏の作曲家の代表として持ちだされた可能性はけっして低くはないだろう。あるいは、より無難な受け取り方をするならば、『音楽のたのしみ』における発言で、ベートーヴェンがラヴェルやストラヴィンスキーと対比されていることを、文学に関して行われている比較とたんに類比的にみなすことも可能である。すなわち、17世紀の劇作家ジャン・ラシーヌ Jean Racine (1639-1699) と20世紀前半のジャン・ジロドゥー (1882-1944)、またラファイエット夫人 comtesse de La Fayette (1634-1693) と20世紀のモーリアックが対照されていることから、文学においては遠い過去に属する作品よりも同時代の作品が好評を得ているといえるが、音楽においてはかならずしもそうではない、というものである。ここで挙げられているのはベートーヴェンのみであり、他の箇所と異なりバッハやヴァーグナーの名が現れていない。そのため、ここでベートーヴェンが挙げられていることの意味を一義的に確定することは他の場合と比べて難しいが、ベートーヴェンが過去の音楽を代表する作曲家として持ちだされていることはほぼ確かとみてよいだろう。先にみたように、ベートーヴェンとヴァーグナーがパリ管弦楽団連盟の演奏会プログラムの常連であり、19世紀以降パリの聴衆にもっとも気に入られた作曲家の一群に数えられるを思い起こすならば、上記の推測はさらに確かさを増すであろう。

こうしたバローの発言から、彼が戦後数年を経たのちもドイツ人作曲家の音楽に対して反発を抱いていたと推測することは早計であろう。とはいえ、バローがバッハ、ベートーヴェンおよびヴァーグナーという名を挙げるとき、これらの作曲家の音楽はパリの聴衆に人気があるけ

---

assidûment que Mme de la Fayette, écoute Beethoven de préférence à Ravel et à Stravinsky. Est-ce paresse, mauvaise volonté ?” *Ibid.*: 314.

れども、彼らの作品が繰り返し演奏される状況が続くことは望ましくない、という考えがほめかされていることは確かである。ここで、最初に挙げた音楽放送の第2の目標である「放送内容の拡大」を思いだすならば、バッハやベートーヴェンの作品が重点的に扱われることへの忌避が、聴取者に馴染みの深いレパートリー以外の音楽をも積極的に採り上げなければならぬという「放送内容の拡大」への意志と表裏一体であることがわかるだろう。「放送内容の拡大」の原語は *élargissement des programmes* であり、*programme* は国営放送関連の史料を参照する限り、2つの意味で用いられている。ひとつは音楽放送を構成する個々の「番組」という意味であり、この意味で *programme* は *émission* と同義である。もうひとつは、これらの番組の総体からなる放送内容全体という意味であり、ナショナルやパリジャンといったチャンネル名がときおり「プログラム・ナショナル *Programme national*」あるいは「プログラム・パリジャン *Programme Parisien*」と呼ばれたとき、*programme* にはこの2つ目の意味が充てられていたといえる<sup>124</sup>。バローが「放送内容の拡大」というとき、そこには放送される作品やレパートリーの拡大といった意味と、放送される内容全体が拡張されていくというイメージが込められていたと推測される。

バローが「放送内容の拡大」の実質がどのようなものかについて語った機会は数多い。バローは音楽監督を退任して20年以上経ってから、ピエール・ドゥラール *Pierre Dellard*<sup>125</sup>とルイ・クルティナ *Louis Courtinat* (1908-1992)<sup>126</sup>の要請に応じて受けたインタビューで、音楽監督在任時の方針としてもっとも言及するに値するものとして、「放送内容の拡大」についての実質的な説明を行っている。

私の方針は、次のようなものでした。すなわち、決して——決してないというわけではなく、ほとんどないということです、というのはどんな規則にも例外があるから——ロマン派音楽、古典派の音楽、現代音楽、古い音楽 *musique ancienne*<sup>127</sup> いずれか1つだけを扱

---

<sup>124</sup> それぞれのチャンネルの名称が「フランス・キュルチュール」あるいは「フランス・アンテル *France Inter*」と改称される以前、両局は「シェーヌ・ナショナル」・「プログラム・ナショナル」および「シェーヌ・パリジェンヌ」・「プログラム・パリジャン」と呼ばれており、いずれの名称も同様の頻度で用いられていた。

<sup>125</sup> バローが音楽監督に在任していた1957年から1964年ころにかけてラジオ運営部 *Administration de la radiodiffusion* の責任者 *responsable*、国立管弦楽団の芸術関連部署運営者 *administrateur des services artistiques* を務めた。

<sup>126</sup> 国立管弦楽団創設時より同管弦楽団のホルン奏者を務めた。

<sup>127</sup> 中世・ルネサンスの音楽を指すものと判断できる。

う演奏会は行わないということです。おのおのの演奏会において、古典の作品、現代の作品、もっと古い時代の作品がそれぞれ取り上げられることを望んでいました。音楽の偉大な伝統の軌跡を描きだそうと努めること、これこそラジオにおける私の音楽政策＝方針すべての基調をなすテーマでした。そうです、けっして切断を行わないということです。しかし私が退任して以後、切断が行われてしまいました。多少とも熱狂的な人々、あるいは多少とも上流気取りの人々が何百人という前で、演奏会が行われたのです。そして、スノッパな人びとと熱狂的な人びとのあいだには、大衆が決して跨がないであろう穴がぽっかりと開いてしまった。まさにこの状況をこそ私は回避したかったのですが<sup>128</sup>。

『フランス情報誌』における「放送内容の拡大」の説明に、「13世紀から20世紀までの時代における」という補足がなされていたことを考慮すれば、広い時代の幅を対象とすることを重視するという点で、『フランス情報誌』における説明と上のインタビューでの発言は共通している。上の発言では、「おのおのの演奏会において」と言われているように、主として国立管弦楽団等における演奏会が念頭におかれているが、「ラジオにおける私の音楽政策すべて」という語があるように、ここで語られている方針は演奏会活動のみならず放送内容の吟味等に関しても当てはまるものと考えてよいだろう。

上の発言ではまた、「切断を行わない」という表現に注目すべきである。これは、その直前に「音楽の偉大な伝統の軌跡を描きだそうと努める」という表現があることを考慮すれば、その軌跡を切断してしまうのは避けるべきであろうという意味で受け取ることができるだろう。そして、バロー退任後にそうした切断が行われてしまった結果、熱狂的な聴衆とスノッパな聴衆のあいだに空隙 *trou* が生じてしまい、そのどちらにも属さない大衆 *le public* はけっしてそれを乗り越えることができないだろう、と語られている。したがってバローは、専門家あるいは愛好家とは異なる立場にある一般の人びとつまり *public* に対しては、「音楽の伝統」の一部分

---

<sup>128</sup> “Ma politique consistait à dire: ne jamais – ne presque jamais, car comme toute règle il y a eu des exception – mais ne jamais faire un concert où il y a uniquement de la musique romantique, ou de la musique classique ou uniquement de la musique contemporaine, ou de la musique ancienne. Je souhaitais, dans chaque concert, une œuvre classique, une œuvre contemporaine, une œuvre plus ancienne. Essayer de tracer la trajectoire d’une grande tradition musicale, voilà ce qu’a été le thème fondamental de toute ma politique musicale à la radio. Ça a été ça, de ne jamais faire de coupure. On l’a fait après mon départ et cela a produit des concerts devant quelques centaines de personnes plus ou moins fanatisées, ou plus ou moins snobs, et puis entre cela et ce qui a précédé, un trou béant que le public ne franchira jamais. C’est précisément ce que je voulais éviter.” Pierre Dellard and Louis Courtinat, eds., “Henry Barraud: Une longue carrière radiophonique au cœur de la vie musicale et au service de la culture (1938-1965),” *Cahier d’histoire de la radiodiffusion* 11-12 (1986): 160.

のみ切り取って提示するべきではなく、中世・ルネサンスの時代から同時代に至るまでの「伝統」の端から端まで、その全体を示すべきであると言っている。

この見解がバローの持論であったことは、それが別の場所でも語られていることからわかる。上記『フランス情報誌』の記事が掲載されたのと同じ 1947 年、バローは、第 1 号が刊行されたのみの状態で刊行を終了した実験クラブの機関誌『共鳴箱』で、次のような文言を用いて、こうした観方を提示している。

「古典派音楽、ロマン派音楽あるいは現代音楽のあいだに断絶は存在しない。一方において行われることは、他方においても行われる。どの音楽作品に対しても、それにふさわしい尊敬の念をもって接近しようとするので努めるならば、派閥間の論議がおのずから崩れるのに時間はかからないだろう。」<sup>129</sup>

バローが上のような持論を形成するに至った背景および経緯について、バロー自身は言及しておらず、またバローの音楽観を扱った先行研究においてもそうした言及は行われていない。ただ、バローの見解の背景をなした可能性のある事情として、当時フランスの一部の評論家が行った同時代音楽に対する非難を指摘しておくことはおそらく的外れではないだろう。メシアン（Messiaen）の当時の新作をめぐるいわゆる「メシアン事件 *Le cas Messiaen*」はそのひとつである<sup>130</sup>。この出来事に対して、バローがどのような反応をしたのかは定かではないが、国営放送音楽監督としてこのころ活動していたバローが、パリの音楽界で大きく話題になった本件を知らなかった可能性はまず考えられない。1945 年 10 月、メシアン事件についての小論「音楽と神秘」を

---

<sup>129</sup> “Il n’y a pas de solution de continuité entre musique classique ou romantique et musique contemporaine. Ce que l’on fait pour l’une, on le fait pour l’autre. Si l’on voulait bien se donner la peine d’aborder toute œuvre musicale avec le respect qui lui est dû, toutes les querelles de tendances ne tarderaient pas à tomber d’elles-mêmes.” Henri Barraud, Arthur Honegger and René Leibowitz, “La radio et ses prétendants: enquête,” *La chambre d’écho: Cahiers du Club d’Essai de la Radiodiffusion Française* (1947): 28.

<sup>130</sup> 1945 年 3 月 26 日に行われたメシアン《幼な子イエスにそそぐ 20 のまなざし *Vingt Regards sur l’Enfant-Jésus*》の初演を聴いた批評家ベルナール・ガヴォティ Bernard Gavoty (1908-1981) は、メシアンが初演の際に配布し読み上げた解説において、神学と音楽理論の用語を混ぜ合わせていることに対して批判を行った。ガヴォティは、同年 4 月 21 日に行われた《神の臨在のための 3 つの小典礼曲》の初演に際しても批判を加えて、これにメシアンと親交のある音楽家ギー・ベルナール＝ドラピエール Guy Bernard-Delapierre (1907-1979) らが反論した。註 130 で述べるように、「メシアン事件」という名称はガヴォティ自身がみずからの記事にタイトルを付ける際に用いている。でメシアン事件については Peter Hill et Nigel Simeone, *Messiaen*, New Haven ; London: Yale University Press, 2005: 142-175. などを参照。

雑誌に発表した評論家ベルナール・ガヴォティは<sup>131</sup>、メシアン事件に関わった他の評論家（クロード・ロスタン Claude Rostand [1912-1970] など）とともに、同時代の音楽の与えるインパクトや衝撃に敏感な評論家のひとりだった。

メシアン事件から約 10 年を経て、彼はダニエル＝ルシュールとともに、国営放送で『現代音楽に賛成か反対か *Pour ou contre la musique moderne ?*』という番組の製作・司会を務めている<sup>132</sup>。この番組は、同時代の音楽界を代表する作曲家を毎回ゲストとして招き、同時代音楽の傾向ないしそれとの関連におけるみずからの立ち位置などについて質問を行うというものだった<sup>133</sup>。本番組の内容をまとめた書籍の序文では、この番組を製作するガヴォティとダニエル＝ルシュールの立場はあくまで中立的なものであることが示唆されているが<sup>134</sup>、両者が内容に関する責任を全面的に負っており<sup>135</sup>、放送終了後に続編の製作をガヴォティがバローに求めている

---

<sup>131</sup> Bernard Gavoty, “Musique et mystique: le “Cas” Messiaen,” *Les Etudes*, 10 (October 1945): 21-37. 本論はのち独立した形で小冊子として刊行された。

<sup>132</sup> 番組のタイトルに含まれる *musique moderne* をここでは「現代音楽」と訳した。本番組のスピノフとして製作された、作曲家へのインタビューを文字に起こした書籍の序文には、*moderne* がここで *contemporaine* 「同時代の」と同義であること、また *moderne* は中立的な *contemporaine* と異なり、侮蔑的な価値判断を含みうる語であることが記されている（Bernard Gavoty et Daniel Lesur, *Pour ou contre la musique moderne ?*, Paris: Flammarion, 1957: 10.）。本番組の放送日が 1954 年 1 月 1 日から 1955 年 7 月 2 日までとされている。しかし、フランス国立図書館音楽部門が所蔵するダニエル＝ルシュールのアーカイヴでは、第 1 回が 1954 年 1 月 9 日にデュティユーを迎えて行われたとされている。Yves Balmer, “Portrait de Daniel-Lesur en critique musical: *Pour ou contre la musique moderne ?*,” *Regards sur Daniel-Lesur: compositeur et humaniste (1908-2002)*, Cécile Auzolle dir., Paris, Presses de l’Université Paris-Sorbonne, 2009: 251-272.

<sup>133</sup> 出演したゲストには、フランスで活動する作曲家が当然多く含まれる。スタジオでの収録に参加できない人びとには、書面での回答が求められた。2 人の司会者によれば、ストラヴィンスキー、ヒンデミット、ショスタコーヴィチ、ブーレーズは出演を拒否したという（Bernard Gavoty et Daniel Lesur, *op. cit.*: 9, 69.）。ブーレーズは、出演する代わりに、番組の趣旨に反発する旨の文章を送っている。

<sup>134</sup> *Ibid.*: 9.

<sup>135</sup> 原稿はすべて両者がみずから作成していた。本番組をめぐるガヴォティとダニエル＝ルシュールのやり取りは、フランス国立図書館音楽部門のダニエル＝ルシュールのアーカイヴおよびフランス学士院図書館のガヴォティのアーカイヴに収められている（Balmer, *op. cit.*: 254, 261）。

ことから<sup>136</sup>、本番組の趣旨はガヴォティとダニエル＝ルシュール両者の関心を反映したものと考えてよい。

番組の内容に関して責任を負っていたのは2人の司会者であったとしても、番組の実現にあたっては当然バローが企画に目を通し承諾を与えているはずである。そのことは、ほかならぬバロー自身が作曲家としての立場でこの番組に出演していることに現れている。彼は番組のなかで、まず同時代の音楽にはよいものとそうでないものがあり、後者に対する「大衆の敵意」が以前より増していることはたしかであると指摘する。そして、教養のある人びとはそうでない人に比べて、馴染みの薄い音楽様式を受け入れることが可能であるとする。いわゆる「前衛」とアカデミズムの乖離についても話がおよび、バローはそのどちらをも支持するものではないと示唆しつつ、誠実な創造者としての役割を果たすことが作曲家にとって重要であると語る<sup>137</sup>。音楽放送において特定の時代や様式を優遇することなく、音楽史の全体を提示しようというバローの発想は、さまざまな音楽を扱うことで聴取者の教養の涵養に貢献し、聴取者にとって一般的に馴染みがないとされる同時代の音楽に対しても、聴取者の耳を慣れさせることを目的としていたといえる。

なお、「現代音楽に賛成か反対か」でのバローの発言には、上でみたように「教養 culture」という語が用いられており、最初に引用した「ラジオのおかげで音楽は生きた芸術となる」においても、「教養がある cultivé とされている非常に多くの人々が、音楽は [J. S.] バッハで始まりヴァーグナーで終わる（ドビュッシーやラヴェルまで行く人もいるが）と堅く信じている」という一節が含まれていた。バローにとって「教養」とは、したがって、バッハからヴァーグナーまでの著名な作曲家の音楽のみを西洋芸術音楽とみなすかのような狭隘な視野をもつことなく、これらの「大作曲家」以外の作曲家の音楽にも積極的に価値を見いだしていく姿勢、およびそれを可能にする音楽に対する好奇心および知識、ということができよう。バロー自身は「教養」をこのように積極的な形で定義してはいないものの、彼が「放送内容の拡大」を音楽放送の目標として掲げたことは、聴取者が音楽に関する百科事典的知識ないし幅広い好奇心をもつことを望んでいたということを意味するだろう。ここで、バローが国営放送の音楽監督であったばかりでなく教養放送のチャンネル「ナンショナル」の監督でもあったことを思いだすならば、「教養」がバローにとってきわめて大きな意味をもつ概念であることが了解されるだろう。実際「教養」は、バロー以後の音楽監督も、その音楽政策を打ち出すにあたって扱いに

<sup>136</sup> *Ibid.*: 254. 続編が放送されたか否かは確認されていない。

<sup>137</sup> Bernard Gavoty et Daniel Lesur, *op. cit.*: 56.



顧慮を要する語となった。バロー以後の音楽監督による「教養」の扱いについては、のちに論じることとなる。

### 1-5. 委嘱活動

RdF および RTF の音楽活動の諸側面のうち、委嘱活動が音楽監督バローの権威を高めるのに寄与したことについては先に確認したとおりである。国営放送による同時代の作曲家への委嘱は、バロー在任時から 2016 年現在に至るまで行われており、文化省による委嘱いわゆる国家委嘱 *commandes d'Etat* と並んで、フランスの作曲家の活動に対する公的支援制度として重要な位置を占めている。本研究では、国立公文書館およびラジオ・フランスの書誌アーカイヴ課に収められた国営放送の委嘱活動に関する史料<sup>138</sup>を参照し、記録が残る 1952 年から、本研究が対象とする 1987 年までに国営放送によって行われた委嘱をすべて転記した資料を添付した（【資料 2】）。本資料は、本研究が主として対象とする 1964～1987 年の期間を扱った第 3 章でもつばら分析の対象となる。RdF および RTF の時代に行われた委嘱活動については、パリ第 4 大学ソルボンヌに 1984 年に提出されたフレデリック・ティッセランの修士論文（Frédérique Tisserand, “La politique de commande à la Radiodiffusion française de 1945 à 1965,” *mémoire de maîtrise*, Paris IV, 1984）が貴重な情報を多数提供している<sup>139</sup>。筆者の修士論文の 32～33 頁および 67～70 頁でも、この研究にもとづきながら委嘱活動の概要を記したが、ここでは先のバローについての記述を踏まえ、また【資料 2】に含まれるこの時代の委嘱に関するデータを確認しながら、委嘱活動の実態、およびその目的と意義が音楽監督によってどのように認識されていたかを述べる。

再建された国営放送において、委嘱活動は最初からそのような形で行われていたわけではない。RdF の設置から 2 年を経た 1946 年、バローの師にあたるルイ・オベールを主任として、

---

<sup>138</sup> ラジオ・フランス書誌アーカイヴ課所蔵 *Comité de Commandes DMUS 1516W 38* および 39 に収められた委嘱台帳 *registre* を参照。5 冊に分かれており、2009 年までの委嘱に関するデータが記されている。本研究で参照した年代の情報はすべて手書きで記されている。1960 年代までの国家委嘱については、文化省が毎年作成したリストが AN19970068/1 に収められている。

<sup>139</sup> ティッセランは、RdF および RTF で委嘱活動に携わったバロー、フィリップ、デュティユー三者へのインタビューを行っている。この論文にも、本研究の【資料 2】と同様、国営放送による委嘱作品のリストが添付されているが、これはティッセランがシャルル・シェーヌ（1984 年当時ラジオ・フランスの音楽創造関連部署責任者 *responsable de création musicale de Radio France* だった）から閲覧を許可された史料にもとづいているという（Frédérique Tisserand, *op. cit.*: 5）。ティッセランはこの史料がどのようなものであるか詳述していないが、本論文に添付した委嘱作品のリストは、ティッセランが作成したリストと同じタイトルの作品を同一の順番で掲載しているため、彼女がシェーヌから閲覧を許された史料は筆者が参照したものと同一である可能性が高い。ただしティッセランのリストには委嘱料が記されていない。

「演劇・文学番組の音楽関連部署 *service musical des émissions dramatiques et littéraires*」が設置された。これは、その名称から予想されるのとは異なるが、委嘱をも担当する部署として位置づけられていた。バローとデュティユーは、オペールのもとで作曲家に委嘱を直接行っていた。委嘱料はラジオの受信料から支払われ、基本的には演奏時間の分単位で計算されていたという<sup>140</sup>。ただ、当初こうした委嘱の対象は、財務省 *ministère des finances* によって、いわゆる「付随音楽 *illustration musicale*」<sup>141</sup>に限って認められていた。すなわち、委嘱の対象として当初想定されていたのは、ラジオ劇やラジオ・ドラマといったラジオ用音楽、また番組の冒頭や番組間に挿入される音楽であった。

しかしながらバローは、こうした制約を取り除くため、作曲家のアニヴァーサリーといった記念日の音楽を委嘱することに対する認可を情報省から得ることに成功し、それによって、イベントとは関係なく音楽作品を委嘱することが次第に可能になった。【資料2】を通覧すると、当初の委嘱作品はもっぱらいわゆる付随音楽であり、特定の番組のために使用される音楽であったのに対して、ORTF に改組されて以降の委嘱作品には室内楽作品や管弦楽作品といった、番組での使用を目的としない「純粋な」音楽作品が増えていくことがわかる<sup>142</sup>。バロー在任中にはいまだに付随音楽が多数を占めていたとはいえ、彼が委嘱活動を通して重視したのは、番

<sup>140</sup> ただし、映画音楽等の場合とは異なり、長さが厳密に指定されているわけではなく、また期日もおおむね余裕をもって設定されていた。付随音楽以外の「純粋音楽」では、たとえばミヨーの合唱交響曲《地上の平和 *Pacem in terris*》(1963)のように、期日が設定されていないまま委嘱に出されたものもあった。とはいえ期日を守ることは優先されていたため、ジャン・ヴィエネールなど速筆の作曲家が重宝された (*Ibid.*: 84-85.)。ヴィエネールは、当時の国営放送でもっとも多く委嘱を受けた作曲家であった(平野、前掲書、68頁)。彼に委嘱された作品には、番組のオープニング用音楽といった機会的なものが多かったが、デュティユーによれば、この種の作品の委嘱だけで委嘱料はかなりの額に上ったという (*Tisserand, op. cit.*: 63)。

<sup>141</sup> フランス語の *illustration* には、ある事物などを図や音などを用いて説明するといった意味があり、したがって *illustration musicale* は「説明的に用いられる音楽」といった含意をもつが、ここでは「付随音楽」という定型的な表現を当てた。なおデュティユーは、*illustration musicale* という語を嫌い、代わりに「創作された音楽 *création musicale*」という語を充てたいと考えていたという (*Ibid.*: 45)。この表現は、1974年にラジオ・フランスが設立されてシェーンが音楽創作関連部署 *service de création musicale* の長 *chef* に就いたとき初めて用いられることとなる。

<sup>142</sup> ティッセランは、委嘱を通して演奏会用作品が生まれた初期の例として、1962年に委嘱が行われたポール・アルマ Paul Arma (1905-1987) の《管弦楽のためのポリディアフォニー *Polydiaphonie pour orchestre*》、1963年のアレクサンドル・タンスマン Alexandre Tansman (1897-1986) の《弦楽器のためのムーヴマン *Mouvements pour cordes*》、同年のジェルメーヌ・タイユフェール Germaine Tailleferre (1892-1983) の《1台あるいは2台のギターのための協奏曲 *Concerto pour une ou deux guitares*》そしてルチアーノ・ベリオ Luciano Berio (1925-2003) の《ラボリントゥス2 *Laborintus II*》を挙げているが (*Ibid.*: 66)、本論文の【資料2】からもほぼ同様の時期に同様の例が見られる。

組での使用とは関係なく作曲家に作品を書く機会を与えることであった。バローが、作曲家と放送局との互恵的な関係を保つための手段として委嘱活動をとらえており、委嘱されていない作品でも彼がラジオで採り上げようとしていたことは、ティッセランのインタビューに応じて彼が述べている次の一言からも明らかである。

「[バローが選んでいたのは] 委嘱を受けていなくても、作曲家がラジオで放送してもらいたい作品です。作曲家たちはそれを作品審査委員会 *Comité de lecture* [「音楽委員会 *Comité de la musique*」のこと。音楽委員会はのち「作品審査委員会」と名称を改めた] に提示していました。」<sup>143</sup>

委嘱に関わる予算の配分の方法は厳密に規定されておらず、そのため委嘱料を支払うことはできても、録音のための予算が不足するといった事態が生じることがあった。また、バローやデュティユーが独自の裁量により、オベールを通さずに委嘱を行うこともあり、委嘱方法についてはある程度の自由が許容されていた。ただ、予算はかならずしも潤沢というわけではなかったようだ。バローは委嘱活動の重要性を関係大臣に説いたが、いずれの人物もその意義を認めようとしなかったという<sup>144</sup>。なおバローは委嘱にあたって、さまざまな傾向の作曲家を扱うよう努めていたと語っている。次の言葉はバローのそうした方針を表している。「あらゆる作曲家に関心を抱いていました。音楽院を卒業しているかいらないか、アカデミックな教育を受けたかどうか、ローマ賞受賞者であるかそうでないかには関係なく……」<sup>145</sup>。こうした方針は、のちにみるように、バローの重視した公平性を示すものとして注目すべきである。

バローとデュティユーは、同じ時期に委嘱活動に携わっていたが、委嘱に関する両者の見解はかならずしも一致したものではなかった。バローが委嘱活動において、ラジオでの一度の放送機会しか与えられない作品ではなく、断続的な形で演奏会で採り上げられる作品を増やす、すなわち演奏会のレパートリーの充実をその最終的な目標としていたのに対して、デュティユーは委嘱活動がそれほど広い射程をもつことに期待をかけていなかった。デュティユーは次のように述べている。

---

<sup>143</sup> “Il s’agissait d’œuvres non commandées que les compositeurs voulaient faire jouer à la Radio. Ils présentaient cela au comité de lecture [...],” *Ibid.*: 32.

<sup>144</sup> *Ibid.*: 33.

<sup>145</sup> “Nous nous intéressions à tous les compositeurs, qu’ils aient suivi la filière du Conservatoire ou pas, qu’ils aient été formés à un enseignement académique ou non, qu’ils soient Prix de Rome ou pas Prix de Rome...” *Ibid.*: 38.

「彼 [バロー] はそれ [委嘱された作品] が舞台で再演される可能性をもつことに大変こだわっていました。作曲家の仕事が一夜限りで終わってしまうという点で、ラジオが限られたものであることは明らかなです。アンリ・バローはそのことを考えていました。私の視点は、これとは少し違っています。ラジオ用の作品——それはかならずしも舞台で成功するとは限りません——を創ることで、まずはラジオに意識を向けてほしいと私は願っていたのです。」<sup>146</sup>

デュティユーの関心はむしろ、タルデューが実験クラブを創設したときに目標としたような、音楽・詩・演劇が融合した「ラジオ芸術」の創造にあったというべきだろう。このことはたとえば、彼が国営放送に勤めていた最中の 1953 年に作曲されたロラン・プティ Roland Petit (1924-2011) のバレエ団のための《狼》など、1940 年代後半から 1950 年代半ばにかけて、いくつかの「付随音楽」を彼自身が作曲したこととも関係しているのかもしれない<sup>147</sup>。このことと関連して、デュティユー自身によって創作されたものは存在しないとはいえ、1957 年にはラジオ・バレエ *ballet radiophonique* というジャンルが生まれたとコンスタン是指摘している。

「これは、言葉と舞踊が加わった音楽作品です。もちろん、聴き手は踊り手を見ることができません。すべてが巧みに喚起され、聴衆の想像力を最大限にまで働かせるように演奏されることが必要でした。」<sup>148</sup>

RTF は運営期間内にイタリア賞を 8 回受賞しているが、その候補作品はすべて、委嘱作品のなかから選出されていた。選出の過程としては、まず作曲家が自分の作品をイタリア賞に出品

<sup>146</sup> “Il tenait beaucoup à ce que cela ait possibilité d’être repris à la scène. Evidemment, la Radio est limitée en ce sens que le compositeur ne travaille que pour un soir. Henry Barraud pensait à cela. Mon optique était un peu différente car je souhaitais que l’on pense d’abord à la Radio en créant des œuvres radiophoniques, qui ne seraient pas forcément réussies à la scène.” *Ibid.*: 53.

<sup>147</sup> Caroline Potter. “Dutilleux, Henri.” *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed October 26, 2016, <http://www.oxfordmusiconline.com.rproxy.univ-psl.fr/subscriber/article/grove/music/08428>. 1946 年には、《波のまにまに *Au gré des ondes*》と題された 6 曲からなるピアノ小品集を作曲している。ここで「波 *ondes*」が「電波」の意ももち、このタイトルに彼自身が携わっていたラジオでの仕事を示唆されていることはすでに広く知られている。

<sup>148</sup> “Il s’agissait [...] d’une œuvre musicale agrémenté d’un texte et d’une chorégraphie. Evidemment, les auditeurs ne pouvaient voir les danseurs. Tout devait être habilement suggéré et il fallait faire jouer au maximum l’imagination du public.” *Ibid.*: 64.

したい旨を放送局に伝え、それを受けて音楽委員会委員の会議で委嘱対象の作曲家が決定される。完成された作品は録音され、委員会による評価の対象となる。こうして選出された作品がイタリア賞に出品された<sup>149</sup>。

また、【資料2】からは、国営放送内部で行われるオーディション用の初見視奏曲が定期的に委嘱の対象となっていることが読み取れるが、この種の音楽の委嘱にバローらは関係していなかったという。ニュースのオープニング用の音楽は、アンドレ・ポップ André Popp (1924-2014) やピエール・デュヴェヴェ Pierre Devevey といった、いわゆる軽音楽を専門とする作曲家に委嘱された。

---

<sup>149</sup> *Ibid.*: 72.

## 1-6. 音楽委員会

委嘱活動と並んで、RdF および RTF 時代の国営放送の音楽活動の重要な側面として見過ごすことができないのが、音楽委員会の活動である。この委員会は、委嘱活動とともに、RTF が ORTF そしてラジオ・フランスに改組されて以降も、名称と機能を多少変更させながら活動を続けた。したがって、ORTF 時代以降は「査読委員会」と称されたこの組織の初期の活動を一瞥しておくことは、ORTF およびラジオ・フランスの音楽政策を今後扱うに先立って不可欠であるといえる。

委嘱活動とほぼ同等あるいはそれ以上の重要性をもつにもかかわらず、音楽委員会の活動については、当事者の貴重な証言を含む論文が存在する委嘱活動の場合と異なり、まとまった形式の研究は行われていない。筆者の修士論文の 26～32 頁に、とりわけその設置の経緯と初期の活動についての概要が記されており、またそれ以降の箇所でも音楽委員会についてたびたび言及が行われている。

音楽放送に関する諮問委員会は、第 1 節で触れたとおり、第 2 次世界大戦以前とりわけ 1930 年代の国営放送においても存在した。そこではパリ音楽院院長のアンリ・ラボーやラヴェルといった、当時すでにフランスで名声を獲得していた作曲家が、放送される曲目の承認等に関わっていた。作曲家とラジオの芸術音楽放送との関わりが、バローが就いたような音楽家番組監督や音楽監督といったポストが設けられる以前から、このような一種の諮問委員会への参加を通して始まったことは注目に値する。また、こうした委員会に参加していたのが作曲家のみであり、演奏家や評論家がそこに加わっていなかったことは、芸術音楽の作曲家の社会的地位の高さを物語っているように思われる。

1944 年に国営放送が再建されたときも、こうした委員会の設置はそれほど時を経たずして行われた。この委員会には、ジャック・イベール Jacques Ibert (1890-1962)<sup>150</sup>、ロジェ・デゾルミエール、ロラン＝マニユエルらが加わり、まもなくジョルジュ・オーリックとフランシス・プーランクらもこれに加わった。1946 年には、ポルシェによって委員会の再編が行われ、同年 7 月に音楽委員会が新たに発足するとともに、同年 7 月に娯楽委員会 Comité des Variétés、1947 年 3 月に文学・演劇作品委員会 Comité des Lettres et œuvres dramatiques が設けられた。1948 年に

---

<sup>150</sup> 1937 年にヴィラ・メディチ館長 directeur de la Villa Médicis に任命され、ヴィシー政権下では活動の公的な停止を余儀なくされたものの、戦後は 1955 年に国立オペラ劇場連合 (RTLN) の代表 directeur に任命された。

は、芸術関連活動 *services artistiques* が再編され、それに伴って音楽委員会は音楽評議会 *Conseil de la musique* と名を改めた。委員長および 18 の委員の任命は、総監督ポルシェによって行われた<sup>151</sup>。音楽評議会では、音楽番組の企画書、RTF 所属管弦楽団の演奏曲目の受理および却下、同管弦楽団の指揮者の任命、局に所属する演奏家の登用ないし罷免、局外から送られる新作のスコアの受理および却下などが行われ、しだいにその権能が強化された。そして 1950 年には再び音楽委員会 *Comité de la musique* という名称が復活し、新たに内規が制定された<sup>152</sup>。

公文書館には、1950 年から 1964 年までの音楽委員会の議事録 *procès-verbaux* が所蔵されている<sup>153</sup>。それらから明らかになる委員会の機能は、大まかにいって、製作者によって提出された番組企画、国立管弦楽団等の放送局付属団体の演奏会プログラム、番組で扱われる曲目のそれぞれについて認否ないし関連する意見を表明するというものであった。しかしそこから、委員会が電波に乗る直前の段階での一種の検閲を行っていたと単純に結論づけることはできない。バローがインタビューで語っているように<sup>154</sup>、総監督の判断により、委員会の審議結果が覆される場合もあった。音楽委員会はあくまで諮問機関であって、最終的な判断の権限は総監督に委ねられていたということである。またバロー自身は、音楽監督およびチャンネル・ナシオナル監督という立場にあったため、局外の人物から構成される委員会に委員としての資格で参加することはなかった。ただし、委員会の審議は聴講していたようである。

委員会の審議は月に 2 回、そのあいだに 1 週間を挟む形で行われ、凱旋門 *Arc de Triomphe*

---

<sup>151</sup> RdF および RTF 初期における文化関連活動の運営の経緯を、国立公文書館の史料にもとづき博士論文で詳細に報告したエレーヌ・エックは、委員の選任は総監督ポルシェによって行われたと推測している (Edith-Hélène Bousser-Eck, “La Radiodiffusion française sous la IV<sup>e</sup> République. Monopole et service public (août 1944-décembre 1953),” thèse de doctorat d’histoire, Université de Paris X-Nanterre, 1997: 614.)

<sup>152</sup> バローの『自伝的エッセー』に、編纂者のひとりであるル・バイルが音楽委員会について詳細な脚註を提供している。Henry Barraud, *Un compositeur aux commandes de la Radio: Essai autobiographique*. (Edité sous la direction de Myriam Chimènes et Karine Le Bail, Paris: Fayard / Bibliothèque nationale de France, 2010), p. 448.

<sup>153</sup> AN19900214, -article 20 [sans titre], dossier 2: Comité de la Musique (créé par décret du 1er juin 1950) Procès-verbaux de réunion du Comité [de 1950 à 1958], dossier 3 [suite] [1959 et 1960]. および 同じ AN19900214 の article 21 [suite], dossier 1 [de 1961 à 1964] に所収。議事録は書記によってタイプ打ちされた文書であり、委員の発言など審議内容の概要が書記によってまとめられている。ただし一部の議事録では、委員の発言が完全な形で転記されている。

<sup>154</sup> Pierre Dellard et Louis Courtinat, “Henry Barraud: Une longue carrière radiophonique au cœur de la vie musicale et au service de la culture (1938-1965),” *Cahier d’Histoire de la Radiodiffusion* 11-12 (1986): 167.



近くのフリドラン通り Avenue de Friedland にある RTF の事務所で、午前 10 時～午前 11 時の間に開会し、正午過ぎから 13 時までの間まで審議が行われた。委員として出席した、もしくは委員の候補に挙げた例として、たとえば次の人びとを挙げることができる。オーリック、エルザ・バレーヌ Elsa Barraine (1910-1999)<sup>155</sup>、マルセル・ビツチュ Marcel Bitsch (1921-2011)<sup>156</sup>、デュメニル、モーリス・デュリュフレ Maurice Duruflé (1902-1986)<sup>157</sup>、ジャック・デュポン Jacques Dupont (1906-1985)、ルイ・フレスティエ Louis Fourestier (1892-1976)<sup>158</sup>、レイモン・ガロワ＝モンブラン Raymond Gallois-Montbrun (1918-1994)<sup>159</sup>、ジャン＝ジャック・グリュネンヴァルト Jean-Jacques Grünenwald (1911-1982)、ジャン・ユボー Jean Hubeau (1917-1992)<sup>160</sup>、アンリ・マルテリ Henri Martelli (1895-1980)、マルセル・ミハロヴィチ Marcel Mihalovich (1898-1985)、クロード・パスカル Claude Pascal (1921-)<sup>161</sup>、ジャン・リヴィエ Jean Rivier (1896-1987)<sup>162</sup>、モーリス・イヴァン Maurice Yvain (1891-1965)<sup>163</sup>。プーランクやメシアンなど、委員として選任されたがまもなく辞任を申し出た人びともいる。委員は年度初めに毎年半数が改選され、緩やかな形で入れ替わりが行われていたが、1958 年に候補となった上記の面々は、比較的長期にわたり委員会に関係した人びとであるといえる。パリ音楽院で長年教鞭を執った人物が多いことも注目される。このほか、オーリックは SACEM 会長 (1954～1978) および国立オペラ劇場連合 (RTLN) の長 (1962～1968) を務め、1962 年からはフランス学士院アカデミー・デ・ボザールの会員であったほか、デュメニルも 1965 年からアカデミー・デ・ボザールの会員であった。このように、委員はフランス音楽界の要職にある者から選ばれていたといえる。この時代にはまだ文化省が存在せず、同省が主導する音楽行政も始動していなかったが、RdF/RTF の音楽委員会は、音楽院やオペラ座といった公的な組織のトップが集っていた点でそうした行政的組織の役割を担

---

<sup>155</sup> 1954～1975 年にパリ音楽院で初見視奏および分析を教えた。

<sup>156</sup> 1956～1988 年にパリ音楽院対位法およびフーガクラス教授を務めた。

<sup>157</sup> 1943～1970 年にパリ音楽院和声クラス教授を務めた。

<sup>158</sup> 1945～1963 年にパリ音楽院指揮クラス教授を務めた。

<sup>159</sup> 1962～1983 年にパリ音楽院院長を務めた。

<sup>160</sup> 1957～1982 年にパリ音楽院室内楽クラス教授を務めた。

<sup>161</sup> 1967～1987 年にパリ音楽院

<sup>162</sup> 1947 年からミヨーと交替でパリ音楽院作曲クラスで教え、1962～1966 年に正規の教授を務めた。

<sup>163</sup> 1958 年 12 月 9 日の審議で次期委員の候補として挙げた人物。このうち、オーリック、デュメニル、デュポン、リヴィエは 1950 年の委員、イヴァンは 1954 年の委員をすでに務めている。また、ミハロヴィチは 1961 年、フレスティエは 1963 年に務めることになる。これらの候補のうち順当に 1959 年に委員となったのは、デュリュフレとグリュネンヴァルトである。それ以外の人びとは委員にならなかった。

っていたといえる。

音楽委員会では、通常の審議とは別に、外部の作曲家から放送局に送られたスコアを審査する査読会 *séances de lecture* も行われていた。この会の開催は、1週おきに開催される月2回の音楽委員会の合間を縫う形で月2回行われ、委員会と同じメンバーが出席した。ただし出席者の数は、おしなべて委員会本体のそれよりも少なかった。出席者はその場でスコアを渡され、ピアノによる視奏を聴きながら、放送で扱われるのにふさわしいか否かを判断した。1950年から1964年まで、すべての会でピアノで視奏したのは、査読会専用のピアニストとして雇われていたアンリエット・ロジェ *Henriette Roget* (1910-1992) である。議事録は、音楽委員会の議事録とは別に作成され、審議された作品の受理番号・作曲家・作品名・審議結果を記したものとなっている。また、議事録とは独立した形で、扱われた作品のリストが作成された。査読会に関する史料は国立公文書館にも収められているが、筆者が参照した限りでもっとも完全な形の史料はラジオ・フランスの書誌アーカイヴ課が管理する査読委員会関連資料に見いだされる。ここには、査読会の議事録および作品リストのほか、送付された作品のデータを整理するために作成された作曲家別のカードが収められており、それらの全体は30箱におよぶ。本論文では、【資料3】として、カードに記録された作曲家の名をアルファベット順に記載した。カードには作品名およびスコアが受理された日付も記されているが、情報量があまりに多いため、本論文では作曲家名のリストを添付するにとどめた。

## 第2章 フィリップおよびヴォズランスキー

### 2-1. フィリップの経歴

ORTF で実質的に音楽監督の座にあったミシェル・フィリップの方針について考察する前に、彼の経歴に関わる情報を整理しておきたい。フィリップの経歴については、1970年代半ばから国営放送の音楽番組の製作に関わったジェラルド・コンデ Gérard Condé (1947-)<sup>164</sup> が『ニューグローヴ世界音楽大事典』にフィリップの項目を執筆しており、そこに簡潔な要約がみられる<sup>165</sup>。しかしながら、本研究で参照した一次資料および新聞・雑誌記事の読解を通して、事典類の項目には記されていない多数の詳細が判明した。またフィリップの2番目の妻であったピアニスト、アンナ・ステラ・シック Anna Stella Schic (1925-2009)<sup>166</sup> は回想録『ピアノ、人生』<sup>167</sup>のなかで、フィリップとの出会いに始まりその晩年に至るまでのあいだに起こった、フィリップの経歴に関する出来事について記している。以下、それらの資料に記載された情報を交えながら、フィリップの経歴についてできる限り詳細に記しておきたい。

フィリップは1925年2月2日にフランス北部のヴェルジー Verzy で生まれ、カトリックの寮制のコレージュを卒業後、レジスタンスに加わった。その後まもなく、17歳のときに捕虜となる。ランスの音楽院で学んだあと、ルネ・レイボヴィッツ René Leibowitz (1913-1972) に作曲を師事。レイボヴィッツからはセリーの扱いについて手ほどきを受けたとされる<sup>168</sup>。ブーレーズをはじめとする、レイボヴィッツの教育に反感をもつ生徒と異なり、フィリップは彼の教え方に嫌悪を抱くことはなかったという<sup>169</sup>。1946年、パリ音楽院のジョルジュ・ダンドウロ Georges Dandelot (1895-1975) の和声（初級）クラスで第3メダルを得ているが、同音楽院にお

<sup>164</sup> フランスの作曲家、音楽評論家、音楽学者。マックス・ドイチュ Max Deutsche (1892-1982) に作曲を学ぶ。1975年から『ル・モンド Le Monde』に寄稿し始め、2015年までに約2700の記事を執筆。シャルル・グノーの詳細な伝記 (Charles Gounod, Paris: Fayard, 2009) は音楽学者としての代表的な業績である。

<sup>165</sup> Gérard Condé, “Philippot, Michel Paul.” *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press. Web. 26 Oct. 2016. <<http://www.oxfordmusiconline.com.rproxy.univ-psl.fr/subscriber/article/grove/music/21567>>.

<sup>166</sup> ユダヤ系であった。

<sup>167</sup> Anna Stella Schic, *Un piano, une vie: Chronique de mon temps*, Paris: Editions Rive droite, 2000. 本書はポルトガル語からの翻訳（翻訳：Marie Hautbergue）である（原書の情報については不明）。

<sup>168</sup> Menger, Pierre-Michel. *Le paradoxe du musicien : Le compositeur, le mélomane et l'Etat dans la société contemporaine*. Paris: L'Harmattan, 2002: 235-236.

<sup>169</sup> Célestin Deliège, *Cinquante ans de modernité musicale: De Darmstadt à l'IRCAM: contribution historiographique à une musicologie critique (nouvelle édition; première édition en 2003)*, Sprimont: Mardaga, 2012: 127.

けるその後の成績の記録は残っていない<sup>170</sup>。1946年には《ピアノ・ソナタ *Sonate pour piano*》がクロード・エルフェ Claude Helffer (1922-2004) によって初演されている<sup>171</sup>。

セーヌ県で音楽を教えたあと<sup>172</sup>、1949年に音楽家番組監督として国営放送に入局した。同年、ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会 Internationale Ferienkurse für neue Musik in Darmstadt に参加したとされるが、その後同講習会に参加した記録は確認されていない<sup>173</sup>。このころからすでにフィリップがパリの音楽界で活動していたことは、ブーレーズがドメヌ・ミュージカル *Domaine musical* の前身となるマリニー小劇場 Petit Théâtre Marigny の演奏会シリーズを始めるとあって、モーリス・ル・ルー Maurice Le Roux (1923-1992)、ミシェル・ファノ Michel Fano (1929-)、ジャン・バラケ Jean Barraqué (1928-1973)、アンドレ・オデル André Hodeir (1921-2011) と並んでフィリップの協力をとり付けたことから読みとれる<sup>174</sup>。フィリップはこのころ、ブーレーズがパリで最初に暮らしたポートル通り rue Beautreillis の住居に、上記の人びととともに出入りしていたという<sup>175</sup>。1952年に旧音楽院ホールで行われたミュージック・コンクレートの演奏会では、ブーレーズらの作品と並んで自作が披露されており、先鋭的な音楽の創作に関心をもつ作曲家のひとりとして認知されていたことが窺われる<sup>176</sup>。1956年にはドイツ・グラモフ

---

<sup>170</sup> パリ音楽院メディアテークに所蔵されたパリ音楽院の受賞者一覧を参照。 *Distribution des prix. Palmarès*. Conservatoire national de musique et d'art dramatique de Paris, 1834-2008.

<sup>171</sup> Delière, *op. cit.*: 127. 《ピアノ・ソナタ第2番 *Deuxième Sonate pour piano*》は1973年に書かれた。

<sup>172</sup> “Henry Barraud et les directeurs de la Musique,” *Cahier d'Histoire de la Radiodiffusion* n°95 (janvier-mars 2008): 203.

<sup>173</sup> Delière, *op. cit.*: 127-128.

<sup>174</sup> Jésus Aguila, *Le Domaine musical: Pierre Boulez et vingt ans de création contemporaine*. Paris: Fayard, 1992: 54. なお、ドメヌ・ミュージカルでは、1954年3月23日に行われた第2回演奏会で、バルトーク、ベルク、ドビュッシー、ラヴェル、シェーンベルク、ストラヴィンスキー、ヴェーベルンの作品と並んで、メシアン《カンテヨジャヤー *Cantéyodjayâ*》(初演)、《4つのリズムのエチュード *Quatre études de rythme*》、フィリップの《三重奏の小品 *Pieces en trio*》(初演)、ファノの《2台ピアノのためのソナタ *Sonate pour deux pianos*》(初演)が演奏された。François Porcile, *Les conflits de la musique française, 1940-1965*, Paris: Fayard, 2001: 189. ドメヌ・ミュージカルではその後、1957年3月30日に《10楽器のための変奏曲 *Variations pour dix instruments*》が初演されているが、フィリップが国営放送に入局して以降彼の作品は扱われていない。ブーレーズは、フィリップが放送局に入ったことを残念に思い、それ以降フィリップは突然官僚的な態度をとるようになったとみなしている。François Porcile, *op. cit.*: 197.

<sup>175</sup> Jésus Aguila, *op. cit.*: 49.

<sup>176</sup> 1952年5月21日に行われた演奏会。オデルの《ジャズ・エ・ジャズ *Jazz et jazz*》(テープとピアノのための3分の小品)、ブーレーズの《2つの習作 *Deux Etudes*》、モニク・ロラン Monique Rollin (1927-2002) の《声の習作 *Etude vocale*》、ピエール・アンの《ヴォカリーズ *Vocalise*》とメシアン《音色・持続 *Timbres-durées*》、ボードリエとフィリップによるバレエ・パントマイム《騒音奏者 *Le Joueur de bruits*》、シェフェールの音楽によるマックス・ドゥ・アース Max de Haas (1899-1983) の映像作品《マスカラージュ *Masquerage*》(カンヌ映画祭にも

オン Deutsche Grammophon のトーンマイスターも務めた。

1957年には音楽研究グループ（GRM）に入り<sup>177</sup>、1959年6月1日にはサル・ガヴォー *salle Gaveau* の同グループの演奏会で、クセナキス《コンクレ *PH Concret PH*》、シェフェール《シミュルタネ・カメルネ *Simultané Camérounais*》と、フランソワ＝ベルナル・マーシュ *François-Bernard Mâche* (1935-) の《前奏曲 *Prélude*》、アンドレ・ブクレシュリエフ *André Boucourechliev* (1925-1997) の《テキスト II *Texte II*》と並んで、フィリップの《アンビアンス *Ambiance*》が初演された<sup>178</sup>。1960年に同グループの後身研究課が主催した最初の公的な催し「研究フェスティヴァル *Festival de la Recherche*」で、情報理論の研究者アブラハム・モール *Abraham Moles* (1920-1995)<sup>179</sup> らとともに講演を行った。1960年にはまた、クセナキス、モールとともに、アラン・ド・シャンビュール *Alain de Chambure* (1933-2010)<sup>180</sup>が設立した研究グループであるミナム *MYAM*<sup>181</sup> では、音楽における情報理論の最初の応用が行われた。1961年には研究課で音楽研究グループ主任、およびチャンネル・ナショナル監督であるアンリ・バローの補佐を務め<sup>182</sup>、1963年に ORTF の音楽創作・音楽学関連部署主任 *chef de service des créations musicales et de la musicologie* に就任。このポストはその後ピエール・プティによって引き継がれた<sup>183</sup>。

---

出品）が披露された。François Porcile, *op. cit.*: 177.

<sup>177</sup> 同年音楽研究グループに入ったのは、他にイヴォ・マレク *Ivo Malec* (1925-)、イアニス・クセナキス *Iannis Xenakis* (1922-2001)、リュック・フェラーリ *Luc Ferrari* (1929-2005)、ミレイユ・シャマス＝キルー *Mireille Chamass-Kyrou* (1931-)。Evelyne Gayou, *GRM Le Groupe de Recherches Musicales: Cinquante ans d'histoire*, Paris: Fayard, 2007: 114. しかしながら、シックによれば、フィリップとシェフェールのあいだの関係はつねに良好というわけではなかった。

Anna Stella Schic, *op. cit.*: 169.

<sup>178</sup> Porcile, *op. cit.*: 182

<sup>179</sup> 『コミュニケーションの構造理論と社会 *Théorie structurale de la communication et société*』(1986)などで世界的に著名な情報理論の研究者であるが、音あるいは音楽への理論的アプローチにも関心を抱き、シェフェールやフィリップとともに活動した。ストラスブールのルイ・パスツール大学（現ストラスブール第1大学）*Université Louis Pasteur* で長年教鞭を執った。Christine Leteinturier, “Moles Abraham - (1920-1992),” *Encyclopædia Universalis* [en ligne], consulté le 26 octobre 2016. URL : <http://www.universalis.fr/encyclopedie/abraham-moles/>

<sup>180</sup> エコール・ノルマル音楽院 *Ecole normale de Musique de Paris* とパリ音楽院（器楽、エクリチュール、美学、音楽史）に学び、国営放送の実験クラブに入る。1968～1970年、テレビ監督 *Directeur de la Télévision* のアンドレ・フランソワ *André François* の技術顧問 *Conseiller Technique* を務める。1970年に ORTF を離れ、ゴーモン社 *Gaumont* のテレビ担当となり、さまざまな番組シリーズを製作。1976年、フランソワの呼びかけに応じ、サウジアラビアでのテレビの普及活動を支援。1979年8月、フランス・ミュージックの番組主任 *Chef du Programme* に就任した。*La Radiale informations internes*, n°182 79, mercredi 18 juillet 1979: 1-2.

<sup>181</sup> 4人のメンバーの名の頭文字をとって命名された。

<sup>182</sup> シックによれば、フィリップとバローのあいだの関係は非常に良好だったという。Anna Stella Schic, *op. cit.*: 164.

<sup>183</sup> France-Yvonne Bril, “Portaits musicaux de l’O. R. T. F. 3 Le service des créations musicales,” *Musica*

そのあいだ、1962年には、クロード・バリフ Claude Ballif (1924-2004)、バイル、マーシュ、マレク、ベルナール・パルメジャーニ (1927-2013)、クセナキスらとともに集団演奏会 *Concert collectif* の企画に携わる<sup>184</sup>。ラジオ音楽関連部署担当 *chargé des services musicaux de la Radiodiffusion* を経て、ORTF 運営期の 1964 年から 1972 年まで音楽放送・制作責任者 *chef des Services Musicaux* となり、実質的に放送局の音楽放送を監督する立場に就く<sup>185</sup>。この資格で、フィリップは欧州放送連合 *Union Européenne de Radio-Télévision (UER)* におけるフランス代表として、イギリスやドイツの放送局の代表とやり取りを行った<sup>186</sup>。また、1965 年に始動したボルドーのフェスティヴァル「シグマ SIGMA」では、設立者ロジェ・ラフォス Roger Lafosse (1928-2011)<sup>187</sup> の主導のもと、文学者のロベール・エスカルピ Robert Escarpit (1918-2000)、モールらと同フェスティヴァルに参加した<sup>188</sup>。文化省が音楽行政を始動した 1966 年半ばには、マルローによって委嘱委員会の委員に任命されている<sup>189</sup>。このほか、同時期にはラジオ協力局スタジオ学校と ORTF 職員養成センターでの講師、ORTF 社長の下での科学および文化顧問 *Conseiller Scientifique et Culturel auprès du Président Directeur Général* (1973) も務めた。シックによれば、この顧問の職は、ORTF がラジオ・フランスへ改組されるにあたり、フィリップがこの再編に難色を示したため、音楽監督を継続する代わりに与えられたポストであったという<sup>190</sup>。このころフィリップは、INA 代表顧問 *conseiller du président de l'Institut national de*

---

n°157 mai 1967: 34.

<sup>184</sup> Gayou, *op. cit.*: 117. この演奏会は同年 7 月 20 日にラヌラグ・ホール *salle de Ranelagh* で行われた。

<sup>185</sup> 国営放送が 1966 年に製作した、国立管弦楽団についての短いドキュメンタリーでは、バローの後任としてフィリップが紹介されている (<http://www.ina.fr/video/CPF86625866>、最終閲覧日：2016 年 10 月 26 日)。

<sup>186</sup> UER 関連の国立公文書館所蔵資料 (AN20090288/5305 など) 参照。英国放送協会 *British Broadcasting Company (BBC)* の音楽監督としてイギリス代表を務め、フィリップらとやり取りしたハンス・ケラー *Hans Keller* (1919-1985) は、最初フィリップに対してよい印象を抱かなかったと語っている (Garnham, Alison K. *Hans Keller and the BBC: The musical conscience of British broadcasting, 1959-79*. Aldershot: Ashgate, 2003: .131)

<sup>187</sup> ラフォスはシェフェールと交流しており、1951 年パリからボルドーに戻りミュージック・コンクレートのスタジオを作った。その後「同時代の芸術と研究 *Arts et Recherches contemporaines (ARC)*」を設立し、モールらをゲストに呼んだ。Roger Lafosse, “Remuer la cuillère,” *Le Nouvel Observateur* le 9 novembre 1966 n°104: 47.

<sup>188</sup> *Ibid.*

<sup>189</sup> この他の委員は次の通り。セルジュ・ボド *Serge Baudo* (1927-)、ピエール・キャプドゥヴィエル、マリウス・コンスタン、ダニエル＝ルシュール、アンリ・デュティユー、アンリ・グイン *Henry Gouin* (1900-1977)、アンドレ・ジョリヴェ、オリヴィエ・メシアン、アンリ・ソーゲ、ピエール・シェフェール、ロベール・シオアン *Robert Siohan* (1894-1985)。“Installation de la nouvelle commission des commandes musicales,” *Combat* le 8 octobre 1966.

<sup>190</sup> Anna Stella Schic, *op. cit.*: 164.

l'audiovisuel (INA) のポストにも就いたが、ブラジルでの仕事が忙しくなり、やがてこのポストを辞している。

放送局でのポストとは別に、1969 年から 1990 年までにはパリ音楽院作曲クラス教授を務めたが、彼は学生が提出する作品に対して意識的に距離をおいていたという<sup>191</sup>。彼に学んだ人びとにはフィリップ・マヌリ Philippe Manoury (1952-)、フランソワ・ニコラ François Nicolas (1947-)、ドニ・コーエン Denis Cohen (1952-)、イヴ＝マリー・パスケ Yves-Marie Pasquet (1946-)、ニコラ・バクリ Nicolas Bacri (1961-)、牧野縑 (1940-1992)、松本日之春 (1945-) らがいる<sup>192</sup>。1976 年にはサン・パウロ大学 Universidade de São Paulo の音楽学部の設立に携わった。フィリップのブラジルとの縁は、妻のシックがブラジル出身であり、彼がグルベンキアン財団 Calouste Gulbenkian Foundation の招きで自作の《ピアノ協奏曲 *Concerto pour piano*》をシェーンベルクの《ピアノ協奏曲 *Piano Concerto*》とともに指揮した（ソリストはシック）ことがきっかけとなって生じた<sup>193</sup>。その後、同地で開いた作曲等の講座が好評を博し、サン・パウロ大学音楽学部の創設とともに定期的に作曲を教えるようになった<sup>194</sup>。また、これとほぼ時期を並行して、ORTF がラジオ・フランスに改組されたが、彼はヴォズランスキーと良好な関係にあったわけではなく、ラジオ・フランスでは音楽政策への関与を実質的に行わなかったようだ。実際彼は、1980 年のインタビューで、ORTF の解体はこの放送局が BBC やイタリア国営放送 Radiotelevisione Italiana (RAI) と同様に備えていたprestigeを失わせたと言っている<sup>195</sup>。

一方、ブラジルでの活動はフランス文化省からも認知され、公的な形で同地へ赴くこともあった。1965 年にノーベル生理学・医学賞を受けた生物学者ジャック・モノー Jacques Monod (1910-1976)、マックス・ドイチュといった人びととともに、ブラジルでのシンポジウムに参加している。フィリップがブラジルで教えた生徒には、ホセ・アウグスト・マンニス Jose Augusto Mannis (1958-)<sup>196</sup>、指揮者となったオスヴァウド・コラルッソ Osvaldo Colarusso (1958-) および

---

<sup>191</sup> Delière, *op. cit.*: 127.

<sup>192</sup> Gérard Condé, *op. cit.*

<sup>193</sup> Anna Stella Schic, *op. cit.*: 173.

<sup>194</sup> パリ音楽院の作曲クラスでは、最初イヴォ・マレク、のちにセルジュ・ニグとともにひとつのクラスを分担して受け持っていた（ブラジルでのヴァカンスのあいだにパリ音楽院で教えた）。パリでの教育とは異なり、ブラジルでは和声、対位法、フーガといったエクリチュールを中心に教えていた（Raymond Lyon, “Entretien avec Michel Philippot,” *Le Courrier musical de France* n°69 1er trimestre 1980: 3.）。フィリップは「アシミル」とよばれる教材でパリにいるあいだにポルトガル語を速習した（Anna Stella Schic, *op. cit.*: 173.）。

<sup>195</sup> Raymond Lyon, *op. cit.*: 4.

<sup>196</sup> カンピーナス大学 Universidade Estadual de Campinas 教授。

ファビオ・メケッティ Fabio Mechetti (1957-)<sup>197</sup> などがいる。また、マンニス、作曲家のエロイザ・フルリー Heloisa Fleury、ピアニストでシックに学んだマーガレット・ファズリーネ Margaret Fazoline には、フランス政府給費が与えられるよう取り計らった<sup>198</sup>。しかしやがてフィリップは、ブラジル出身者以外の人物が教育陣に加わることに否定的な一部の教員の圧力を受け、サン・パウロ大学を離れリオ・デ・ジャネイロ州立大学 Universidade do Estado do Rio de Janeiro に移った<sup>199</sup>。また、ラジオ・フランスで音楽番組の製作に携わっていたミルドレッド・クラリー Mildred Clary (1931-2010) から連絡を受け、ブラジルの代表的な文化人・政治家に、独裁政権からの離脱についてインタビューするなど、ジャーナリスティックな活動にも関わった<sup>200</sup>。

ブラジル滞在中のフィリップがパリから受けた報せのなかには、彼に文化省音楽局長のポストを譲りたいというランドウスキからの通知もあったが、フィリップがフランスに帰国してランドウスキに連絡をとったところには、フィリップがすでに候補から外されていたという<sup>201</sup>。パリ音楽院では、作曲クラスを受け持つのと並行しながら、視聴覚研究監督 Directeur des études d'audiovisuel をも務め、1988 年にはミシェル・ファノ、クリスティアン・ユゴネ Christian Hugonnet (1955-)<sup>202</sup>、ジャック・ジュアノー Jacques Jouhaneau、ピエール・ラヴォワ Pierre Lavoie とともに「音の職業への上級訓練 Formation Supérieure aux Métiers du Son」という教育プログラムを立ち上げた。上記のほか、アカデミー・シャルル・クロ Académie Charles-Cros<sup>203</sup> の会長 président を務め、音楽雑誌『レペルトワール Répertoire』誌の評論家、フランス・サイバネティクス協会 Société française de Cybernétique、フランス学術系作家協会 Association des Écrivains

---

<sup>197</sup> マレーシア・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者を経て、ミナス・ジェライス・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督。

<sup>198</sup> マンニスはパリ音楽院で、フィリップの作曲クラスとギー・レイベル Guy Reibel (1936-) の電子音響創作のクラスに出席した。

<sup>199</sup> Anna Stella Schic, *op. cit.*: 188-189.

<sup>200</sup> のち大統領を務めたルイス・イナシオ・ルラ・ダ・シルヴァ Luiz Inácio "Lula" da Silva (1945-) にもインタビューした。Anna Stella Schic, *op. cit.*: 194.

<sup>201</sup> *Ibid.*: 197.

<sup>202</sup> ルイ＝リュミエール国立高等学校 École Nationale Supérieure Louis-Lumière での教職を経て、フランス国立工芸院 Conservatoire national des arts et métiers で教えている。

<sup>203</sup> 1946 年に評論家と録音技術の専門家（アルマン・パニジェル、ジョゼ・ブリュイル、アントワヌ・ゴレアら）によって設立されたグループ。会長にはマルク・パンシェル Marc Pincherle (1888-1974)、ダニエル＝ルシュール、フィリップ、ユグ・デュフル Hugues Dufourt (1943-) が就いた。毎年この団体が授与しているレコード大賞 Grands Prix du disque はフランスの音楽界で影響力をもつ。フィリップは死去する 3 か月前まで会長としての職務を遂行した (Anna Stella Schic, *op. cit.*: 225.)。



scientifiques de France のメンバーも務めた<sup>204</sup>

作曲家としてのフィリップについて、セレスタン・ドリエージュ Célestin Deliège (1922-2010) は、同じ編成の作品を断続的に書く傾向があり<sup>205</sup>、《作曲＝構成 *Composition*》や《小品 *Pièce*》といった無機質なタイトルの作品をシリーズとして作曲していることに注意を促している。また、音楽研究グループの一員として活動した経験にも示されているとおり、とりわけ 1950～60 年代には電子音響作品を多く作曲しており、そのなかには器楽と電子音響を組み合わせたいわゆる「ミクスト作品 *œuvre mixte*」も含まれている。1994 年すなわち亡くなる 2 年前には、ラジオ・フランスで個展 *retrospective* が開かれている。『ラ・ルヴュ・ミュージカル *La Revue musicale*』のシェフェールを特集した号では、アントワヌ・ゴレアが数人の作曲家によるミュージック・コンクレートの近作を評価し、フィリップの作品について次のように述べている。

「ついに、抽象的なミュージック・コンクレートは、ミシェル・フィリップのごく最近の研究にその古典を見いだしたばかりである。この作品は、メシアンとブーレーズの習作の制作を司っていたような原理と厳格さに従って構築され、固有の音楽的なそして表現的な価値を示している。それによって本作品は、抽象的な作品と、われわれが今ここで言及しているミュージック・コンクレートの最も純粋に音楽的な作品との間の架け橋となる位置を、当然のごとく得ることになる。」<sup>206</sup>

人物としてのフィリップについては、1950 年代から国営放送で音楽番組の製作に携わるかわらいくつもの雑誌で音楽評論を手がけ、メシアンら同時代の作曲家の活動を広く知らしめるのに貢献した<sup>207</sup>クロード・サミュエル Claude Samuel (1931-) が、率直な回想および人物評を行

---

<sup>204</sup> Fonds INA: personnalités.

<sup>205</sup> たとえば、弦楽四重奏曲は 1975、1982、1985、1988 年に書かれている。

<sup>206</sup> “Enfin, la musique concrète abstraite vient de trouver son classique dans la toute récente étude de Michel Philippot. Cette œuvre, construite selon des principes et avec une rigueur analogue à ceux qui ont présidé à l’élaboration des études de Messiaen et de Boulez, présente en outre une valeur musicale et expressive propre, qui lui assigne tout naturellement une place de transition entre les œuvres abstraites et les œuvres les plus purement musicales de la musique concrète, que nous allons évoquer à présent.” Antoine Goléa, “Tendances de la musique concrète,” *La Revue musicale* n° 236 1957: 43.

<sup>207</sup> メシアンとの対話を収めた Claude Samuel, *Permanences d'Olivier Messiaen: Dialogues et commentaires*, Arles: Actes Sud, 1999. (*Entretiens avec Olivier Messiaen*, Paris: Belfond, 1967 および *Musique et couleur: nouveaux entretiens avec Claude Samuel*, Paris: Belfond, 1986 の増補版。いずれも戸田邦雄による邦訳『現代音楽を語る：オリヴィエ・メシアンとの対話』（東京：芸術現代社、1975）と『オリヴィエ・メシアン その音楽的宇宙：クロード・サミュエルとの新たな対話』（東京：音楽之友社、1993）がある）はとりわけこの作曲家の代表的なインタビュー集で

っている。2007年にリール第3大学に提出された、RdF および RTF による現代音楽の普及を扱ったサンドリーヌ・コウジャ＝コワイエの修士論文には、付録としてサミュエルへのインタビューの書き起こしが含まれている。このインタビューでサミュエルは、フィリップが与えた大まかな印象として「よい人物だったが、理想主義的で、夢見る知識人であり、作曲家としてはひじょうに生産力が低かった」<sup>208</sup>と述べている。シックもまた、彼が学識ゆたかな人物ではあったけれども、自作のプロモーションには関心がなく、むしろシックのほうがフィリップの作品の普及を推進したいと考えていたと述べている<sup>209</sup>。また、バローは「奇妙にも、退任するにあたって、後継にフィリップを指名した」が、バローは数年後「その選択はよくなかった」<sup>210</sup>とサミュエルに打ち明けたという。サミュエル自身、「フィリップは気に入っていたが、部屋に入ると彼はとりわけレーシングカーへの情熱を語っていた」<sup>211</sup>、「彼はその職務に必要とされる厳格さと決定を欠いていた」<sup>212</sup>と手厳しい。サミュエルはとりわけ、「ブーレーズはドメヌ・ミュジカルの演奏会の中継を提案したが、フィリップはその提案に耳を貸さなかった」<sup>213</sup>ことに不満を表明している。

---

ある。

<sup>208</sup> “Michel Philpott était un homme de qualités, mais c’était un utopiste, un intellectuel rêveur et très peu fécond en tant que compositeur.” 2007年6月22日パリで行われたインタビュー。Sandrine Khoudja-Coyez, “La diffusion de musique contemporaine en France à la radio d’Etat [1944-1963]: histoire, esthétique et politique,” mémoire de master II, Université de Lille-III, 2007: 2 (annexe).

<sup>209</sup> Anna Stella Schic, *op. cit.*: 173.

<sup>210</sup> “Curieusement, lorsque Henry Barraud prit sa retraite, il suggéra pour lui succéder le nom de Michel Philpott, mais je me souviens que Barraud me confia quelques années plus tard qu’il n’avait pas fait le bon choix.” *Ibid.*

<sup>211</sup> “J’aimais bien Michel Philpott mais je me souviens que lorsque j’arrivais dans son bureau il me parlait surtout de sa passion pour les voitures de courses.” *Ibid.*

<sup>212</sup> “Il n’avait pas la rigueur et la détermination que ses fonctions nécessitaient.” *Ibid.*

<sup>213</sup> “A cela, s’ajoute le fait que Philpott fit, semble-t-il, la sourde oreille vis-à-vis des concerts du Domaine musical dont Boulez avait proposé la retransmission.” *Ibid.*

## 2-2. フィリップの著述および発言

国立公文書館およびラジオ・フランスが所蔵する一次資料に現れたフィリップの発言は、バローおよびヴォズランスキーの言葉にしばしば強い意志や決意の表明がほのめかされているのに比べて、概してそれらほどのインパクトを与えるものではない。分量の点からいっても、フィリップの署名をもつ通達、報告書等の文書は、バローおよびヴォズランスキーが署名した同種の文書と比較して、それらほどには多くない。アーカイヴに収められた文書の量という点で、ヴォズランスキーの残した文書の多量さは際立っており、それはフィリップの在任期間に比してヴォズランスキーの監督としての任期が短かったことを考慮すれば、よりいっそう著しいものに映る。フィリップの署名した文書がそれほど多くないことについて、筆者は2016年4月、ラジオ・フランス書誌アーカイヴ課のリーズ・ガイヨ氏に口頭で質問を行ったが、ガイヨ氏もその点については同意し、ORTF時代の資料はその運営期間の長さにもかかわらず、残された資料の量は少ないといわざるをえないと認めている。

ただしフィリップの場合、音楽監督としての立場で署名した文書は決して多くないとはいえ、それ以外のさまざまな媒体で文章ないし講演原稿を残しており、その機会は雑誌記事、国外での講演など多岐にわたっている。この点は、バローが音楽監督としてではなく独立した音楽著述家 *musicographe* としての立場から、オペラ、現代音楽、フランス音楽史等の概説書を生涯に複数執筆したとと相似的であるといえるかもしれない。対してヴォズランスキーは、音楽監督としての資格において、やり取りした関係者のあいだにおいてのみ、巧みなレトリックを駆使した含蓄ゆたかな文章を発表したが、啓蒙的な著作を執筆するどころか、単著を発表したことは一度もなかった。また、音楽監督を務めるかわり作曲家としての活動も続けたバローおよびフィリップとは異なり、放送局に入る以前はピアニストとして国際コンクールで入賞するなどしていたヴォズランスキーは、放送に携わって以降ピアニストとしての活動を完全に停止したものと推測される。20世紀後半にフランス国営放送の音楽監督を務めたこの3人が、音楽監督としての職務とその他の活動との配分をどのように調整したのかという問題は、ここでは論じる余裕はないものの、国営放送の音楽政策を考察するにあたって示唆的な論点を提供する可能性がある。

フィリップが生涯にわたって発表した文章および講演原稿は、これまでに3度、第三者によってまとめられている。1度目は国立視聴覚研究所（INA）によるもので、100本以上の文章が収められた約500ページの冊子である。本資料は、フランス国立図書館に設けられたINAの

研究者用施設イナテーク *Inathèque* に収められており、本施設でのみ閲覧が可能となっている<sup>214</sup>。2 度目にフィリップの文章がまとめられたのは、ラジオ・フランスでフィリップの個展となる演奏会シリーズが1週間にわたって開かれたときである。この際にミシェル・フィリップ協会 *Association Michel Philippot*<sup>215</sup> が作製した50ページほどの小冊子にも、フィリップと彼に關係する人びとの文章が収められている。しかし、フィリップの文章がまとめられた機会としてもっとも重要なのは、2010年にドゥラトゥール社から行われた著述集の出版である<sup>216</sup>。2巻に分かれたこの著作集は、INAによってまとめられた小冊子を超える分量をもち、現時点で参照することのできるフィリップの著述集としてはもっとも大部なものとなっている<sup>217</sup>。これらの著述集に収められている文章は、フィリップの関心を反映している。すなわち、新ウィーン楽派以降の音楽を歴史上に位置づけること、音ないし音響の物理的特性、放送における技術的問題、国営放送による音楽放送の意義や責務などである。

このほか、フィリップの発言を記した資料としては、国立公文書館に収められているラジオ番組委員会 *Comité des programmes de Radiodiffusion* の議事録が挙げられる。フィリップはラジオの音楽監督 *chargé des services musicaux de la Radiodiffusion* として、同委員会の審議においてたびたび報告を行った。

フィリップの著述がその他の音楽監督のそれと異なるのは、上に「音ないし音響の物理的特性」と記したように、物理現象としての音・音響に着目した論考が上記の著作集にも少なからず含まれる点である。バローおよびヴォズランスキーが残した著述の大半は、国営放送による音楽放送の方針や意味についての考察に割かれており、フィリップの執筆した文章とは異なり、物理的観点からの音響現象に言及したものは皆無といってよい。ヴォズランスキーに至っては、自身の音楽史観を披歴するような文章すら残していないといえる。しかしこのことは、翻っていえば、フィリップの視点の独自性が際立っているということであり、むしろそうした視点を

---

<sup>214</sup> イナテークのカタログに本資料に関する情報が掲載されている

([http://inatheque.ina.fr/index.php?urlaction=doc&id\\_doc=DE/4566&form=ecrit&rang=6](http://inatheque.ina.fr/index.php?urlaction=doc&id_doc=DE/4566&form=ecrit&rang=6)、最終閲覧日：2016年10月16日)。

<sup>215</sup> 本協会については、協会のホームページにメンバーなどが記されている。

<http://www.entretemps.asso.fr/Philippot/>

<sup>216</sup> Michel Philippot, *Écrits (en 2 volumes)*, Sampzon: Éditions Delatour France, 2010.

<sup>217</sup> この出版社からは、他にもエルザ・バレーヌに関する研究書 (Odile Bourin, Pierrette Germain-David, Catherine Massip et Raffi Ourgandjian, *Elsa Barraine: Une compositrice au XXème siècle*, Sampzon: Delatour, 2010)、ピエール・バルボ Pierre Barbaud (1911-1990) の書簡集 (Pierre Barbaud, *Correspondances et écrits de Pierre Barbaud*, Sampzon: Delatour, 2011) など、これまで研究が豊富とはいえない20世紀フランスの作曲家についての資料が出版されている。

そなえた人物が音楽監督として国営放送で活動しえたことに注意を促すべきであろう。

フィリップがこうしたユニークな視座を活用して論考を執筆したことは、彼がバリの音楽界で当初ブーレーズらと交流し、まもなくシェフェール率いる音楽研究グループに入ったという経歴と無関係ではありえないだろう。フィリップはまた、音楽を修めるかたわら数学の研究を行ったとたびたび主張しており<sup>218</sup>、上の著述集においても、音・音響の物理的特性を論じた文章では多数の数式を用いて議論を行っている。他方で、ラジオ・フランスが所蔵する、フィリップが音楽監督およびその後のいくつかのポストに任命された際に作成された経歴には、数学を専門的に学んだことを示す情報は含まれていない。フィリップの論考における数学および物理学の援用の方法について論じることが本論文の枠内を超えるため、ここではそうした専門的な内容には踏み込まない。ただ、数学および物理学を援用したアプローチを論考において採用するフィリップの関心が、国営放送音楽監督に彼が就任することを妨げるものではなかったことには留意する必要があるだろう。それは、こうした関心をもっていたフィリップの音楽監督就任が、シェフェールとその周辺の人びとが携わったいわゆる「研究 *recherche*」の潮流が局内で公認されていた、いかなる重要視されていたことを示唆するものだからである。

フィリップが経歴の初期段階から、論考やみずから数学を研究した経歴を強調することで、音楽と数学ないし物理学を連関すべきものと提示していたことは、20 世紀後半のフランスの音楽創作における、いうなれば学際的な傾向に位置づけることも可能であろう。こうした傾向を代表するのが、建築家としての素養を創作に援用したクセナキスであろうが<sup>219</sup>、メシアンによる鳥の歌の使用およびインスピレーションの多様性の強調<sup>220</sup>、あるいはユグ・デュフルなど

---

<sup>218</sup> フィリップは、サン・パウロ大学で教鞭を執る以前にカナダのサイモン・フレーザー大学 Simon Fraser University から招かれ講演を行った際、NASA の高官と会い、NASA で研究を行う可能性を提示された。その際フィリップは、数学と作曲を同時に修めたことを強調したが、高官はその経歴の信憑性に疑念を抱き、以後フィリップに連絡することはなかったという (Anna Stella Schic, *op. cit.*: 210-211.)。

<sup>219</sup> 1976 年 5 月 18 日、メシアンらの審査のもと行われたクセナキスの博士論文の審査会で発表された文章は『芸術 - 科学、融合』と題されている。Iannis Xenakis, *Arts-Sciences, Alliances*, Paris: Casterman, 1979.

<sup>220</sup> メシアンは『リズム、色彩、鳥類学総説 *Traité de rythme, de couleur, et d'ornithologie*』第 1 巻冒頭に、重なり合う時間 *temps superposés* についてのセクションを設けている。そこでメシアンは、フランスの地理学者ピエール・テルミエ Pierre Termier (1859-1930) の著作『地の栄光へ *A la gloire de la terre*』、H. G. ウェルズの『タイムマシン *The Time Machine*』などを引用しながら、「時間と変化」、「宇宙の拡大」、「星々の時間」、「地に対する星々の距離」、「星々固有の運動」、「天体の事象の相関性」、「山々の時間」、「人間の時間」について論じている (Olivier Messiaen, *Traité de rythme, de couleur, et d'ornithologie 1949-1992, 1. Le temps, le rythme, la métrique grecque, analyse des 39 choeurs du Printemps* de Claude Le Jeune, les rythmes hindous, Paris: Alphonse Leduc, 1994 :18-20)。

スペクトル楽派として分類される作曲家の音響現象への着目、数学の理論を援用した音楽理論を発展させようとしたエルネスト・アンセルメ Ernest Ansermet (1883-1969) にも、広くこうした学際的傾向を認めることができるだろう。この学際的傾向を、国営放送という公的組織に属する官僚的立場にある音楽家もみずからの活動を特徴づける属性として強調できたことは、国営放送というともすれば保守的・閉鎖的組織というレッテルを貼られがちな場であって、特筆すべきこととみてよいだろう。他方で、ヴォズランスキーが音楽監督としてフィリップを実質的に継いだとき、彼がピアニストとしてのかつての自身のキャリアを一顧だにすることなく、演奏家としての立場とは完全に独立した地点に立って国営放送の音楽活動を監督したのは、バローとフィリップがともに作曲家＝音楽放送監督としての二重のキャリアを強調したことへの反発に裏づけられてのことであつたと推測することもできる。

### 2-3. ナショナリズムとメディア

フィリップが先に紹介した著述集、ないし国立公文書館で閲覧できる資料のなかで残している著述および発言のうち、国営放送の音楽活動に関連するものを読むと、そこにはバローの表明した見解との共通性がみられると同時に、バローの関心とは異なるフィリップ独自のそれを読み取ることができる。

フィリップが音楽監督に就任してまもない時期に、ORTF の社内報『マイクとカメラ *Micro et Caméra*』に掲載されたフィリップの記事「生きた音楽のために *Pour une musique vivante*」<sup>221</sup>は、音楽監督としてのフィリップの抱負が語られている文章と読むことができる。その内容の密度から、これをバローの「ラジオのおかげで、音楽は生きた芸術となる」と同様の性質の文章とみなすことも不可能ではないだろう。「生きた音楽のために」にはいくつかの鍵となる考えが含まれているが、そのうちひとつはフランス音楽の擁護である。バローがフランス音楽の擁護を、音楽監督就任当初に目標として掲げたことは先にみたとおりであるが、フィリップもまたその目標を受け継いでいるといつてよい。具体的にそれが語られているのは、国営放送が「フランスの文化活動を無力な状態から解放し、外国に向けてそのもっとも輝かしい威光を保証する」<sup>222</sup>機関であり、「われわれの使命と義務は、未来のラヴェルやドビュッシーとなる人物の活躍を奨励すること」<sup>223</sup>にあるとする部分である。国営放送がフランス文化の威信を体現する使命を負っている点で、フィリップとバロー双方の理念はこのように共通していた。

ただし、ここで注目したいのは、フィリップが上の部分でラヴェルやドビュッシーといった名を具体的に出していることである。ラヴェルとドビュッシーは、いうまでもなくフランスを代表する音楽家ないし作曲家として挙げられているが、ラヴェルとドビュッシーの名を出すこ

<sup>221</sup> フランス国営放送に関連する史料において、*musique vivante* は基本的に、「(録音されたものではない) 生の音楽」と「(過去のものではない) 同時代の音楽」という2つの意味をもっている。ここでの *musique vivante* はそのどちらにもあてはまらず、*vivante* はたんに「生き生きとした」という意味を与えられているにすぎないだろう。なお、バローが RTF 社内報に発表した、彼の音楽観を端的に表明した文章は「ラジオのおかげで、音楽は生きた芸術となる *Grâce à la radio, la musique est un art vivant*」と題されていた。フィリップがここで用いる *vivante* も、バローのこの文章のタイトルにおける *vivant* と同様の含意をもつと考えてよいだろう。

<sup>222</sup> “libérer l’activité culturelle française de ses impuissances et de lui assurer à l’extérieur son plus rayonnant prestige.” Michel Philippot, “Pour une musique vivante,” *Micro et Caméra* n°3 (novembre 1965):5.

<sup>223</sup> “Notre vocation et notre devoir nous engagent donc à favoriser la promotion de ceux qui seront les Ravel et les Debussy de demain.” *Ibid.*

とは、フィリップの場合とバローの場合とで多少とも異なる意味合いを持っていると考えられる。バローは先にみたとおり、「ラジオのおかげで、音楽は生きた芸術となる」でラヴェルとドビュッシーの名を出していたが、そこでは「教養があるとされている非常に多くの人々が、音楽は [J.S.] バッハで始まりヴァーグナーで終わる（ドビュッシーやラヴェルまで行く人もいるが）と堅く信じている<sup>224</sup>」とされていた。ここでドビュッシーとラヴェルは、バッハおよびヴァーグナーとは異なり、より時代の近い作曲家として扱われている。また、同じく先に挙げた『音楽のたのしみ』では、「ラシーヌよりもジロドゥーを褒め、ラファイエット夫人よりもモーリアックを熱心に読むようなこうした人びとが、ラヴェルやストラヴィンスキーよりもベートーヴェンを好んで聞いている<sup>225</sup>」とされ、ラヴェルとストラヴィンスキーが比較的新しい時代の作曲家として挙げられている。こうした例を見るかぎり、フィリップがフランス音楽を代表する作曲家として、ラヴェルとドビュッシーを挙げていたのに対して、バローはこの両者を、バッハやベートーヴェンほどパリの聴衆に馴染みのない作曲家として扱っていることがわかる。

ただしバローは、ラヴェルとドビュッシーがフランスの音楽家として代表格ともよべる地位を得ているという認識も示している。『フランスと西欧音楽』と題された<sup>226</sup>著書において、バローは、フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルの3者が「三位一体 *trinité*」をなすという観方が一般的なものであることを認めているからである<sup>227</sup>。フィリップがラヴェルとドビュッシーをフランスの代表的作曲家として持ちだすのは、こうしたいわばクリシェを踏まえてのことでもあろうが、フィリップの記事でラヴェルとドビュッシーという組み合わせが2度言及されているように<sup>228</sup>、両者がフランス音楽の作曲家として筆頭に挙げられるという観方はここで明確に打

<sup>224</sup> Henry Barraud, “Grâce à la radio, la musique est un art vivant,” *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 3 (1951. 3): 16.

<sup>225</sup> “Le même homme qui va plus volontiers applaudir Giraudoux que Racine et qui lit Mauriac plus assidûment que Mme de la Fayette, écoute Beethoven de préférence à Ravel et à Stravinsky. Est-ce paresse, mauvaise volonté ?” *Ibid.*: 314.

<sup>226</sup> Henry Barraud, *La France et la musique occidentale*, Paris: Gallimard, 1956: 114, 135.

<sup>227</sup> フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルの「三位一体」の国営放送における扱いについては、2015年に日本音楽学会第66回全国大会で行われたパネルディスカッション「近代フランス音楽」のカノン形成——なぜ、いかに、はたして「フォーレ - ドビュッシー - ラヴェル」なのか」における、筆者の研究発表「1947～1977年のフランス国営放送の音楽番組におけるプログラミングから」で重点的に扱われた（11月15日、青山学院大学における発表）。

<sup>228</sup> 2つ目の言及は、「もっとも多くの〔著作権から来る〕収入は、古典的作曲家（そのレパートリーはパブリックドメインに属している）ではなくドビュッシーとラヴェルに負っている [...] nous constatons que les rentrées de devises les plus importantes sont dues non à des compositeurs classiques (dont le répertoire appartient au domaine public) mais à Debussy et à Ravel.」という箇所。Michel Philippot, *op. cit.* ここではラヴェルとドビュッシーが、その作品の演奏が著作権料をもたらすという点で、過去の「古典的作曲家」と区別されている。ここでフィリップはバローと



ちだされているといつてよいだろう。

フィリップはまた、別の文書で、ベルリオズの作品を多く採り上げることの重要性にも言及している。音楽監督に就任してから約4年経った1968年、フィリップは『ル・モンド *Le Monde*』紙の評論家ジャック・ロンシャン Jacques Lonchampt (1925-2014)<sup>229</sup> のインタビューに応じ、「(まもなく没後100年を迎える) ベルリオズは過去5年間で957回扱われ、そのうち145回は《幻想交響曲》に充てられた<sup>230</sup>」と述べている。もっとも、ベルリオズがラヴェルやドビュッシーと並んでフランスを代表する音楽家であるというのは、当然フィリップの観方に限ったものではない。ベルリオズの没後100年にあたる1969年には、文化省による公的な記念行事が大々的に催されている<sup>231</sup>。フランス音楽の擁護を国営放送の音楽活動の目標と設定したバローが、ベルリオズの大部の伝記を執筆しているのも、この作曲家のフランス音楽史における重要性に鑑みてのことであろう。

以上のように、ラヴェルやドビュッシー、ベルリオズといった、フランス音楽史においてもっとも重要とされる作曲家に着目し、フランス音楽の「威光」を保証しようというフィリップの考えは、フランス音楽史のこのようなカノンに立脚しているかぎりでは、特筆すべきほどに独自性のあるものとはいえない。しかしフィリップが、フランスの音楽界が対外的にそのプレゼンスを主張することを重視していたことは、やはり疑いえない。

フィリップは、先に述べたとおり、国営放送のラジオ番組委員会などの場で、音楽放送の責任者として発言を行うことがしばしばあった。「生きた音楽のために」が発表された時期からはやや離れているが、フィリップは1974年、ORTFの「科学・人文科学・経済・社会学」委員会 commission “Science-Sciences humaines-Economie-Sociologie” で報告を行い、音楽放送という話題の枠内を超えて次のように語っている。

---

同様、ラヴェルとドビュッシーを比較的時代の近い作曲家とみなしている。

<sup>229</sup> 1961年から1990年まで、『ル・モンド』に音楽関係の記事を執筆した。Jacques Longchampt と綴られることもある。当時ロンシャンが『ル・モンド』に執筆した記事の署名は Jacques Longchampt となっているが、2014年12月30日に同紙のウェブサイトに掲載された彼の訃報では Lonchampt と表記されている。“Mort de Jacques Lonchampt, critique musical au « Monde »,” [http://www.lemonde.fr/culture/article/2014/12/30/mort-de-jacques-lonchampt-critique-musical-au-monde\\_4547425\\_3246.html](http://www.lemonde.fr/culture/article/2014/12/30/mort-de-jacques-lonchampt-critique-musical-au-monde_4547425_3246.html) (最終閲覧日：2016年10月29日)

<sup>230</sup> “Un compositeur comme Berlioz (dont nous allons prochainement[sic] célébrer[sic] le centenaire de la mort) a bénéficié, en cinq ans de 957 auditions (dont 145 fois la symphonie fantastique).” “La musique à l’O. R. T. F.,” AN20090288-5067: 5.

<sup>231</sup> “Nouvelles de la musique et des musiciens français,” *Le Courrier musical de France*, 2e 1969: 126.

平均的フランス人が、アメリカとソ連の知識人に対して劣等感を持っている以上、フランスもまた先端技術に関心を持っており、全世界に向けてたいへん有用なことを行っているのだと知らしめることは、実に時宜に適ったことであろう。<sup>232</sup>

音楽放送について語るフィリップの語調と比較すると、やや挑発的な色合いの濃い文言である。この言葉からは、音楽放送とはほぼ接点のない分野においてではあっても、フィリップがフランスの国際的な地位の向上を希望していたことが窺える。しかし、ここで言及されている「先端技術」は、フィリップの思想において、かならずしも音楽放送と無関係であるということとはできない。フィリップが作曲家としての創作活動において、音楽と数学を両方学んだことを強調したり、音響現象についての論文において数学や物理学の数式を援用するなどしていたことは、先に確認した。そうしたフィリップの関心において、「先端技術」が音楽と無縁ではなかったであろうことは想像に難くない。

実際フィリップは、録音技術など音楽に関わる技術の進展に強い関心を抱いていたようである。先に引用した「生きた音楽のために」で、フィリップは、「音楽は自動車やアルミニウムと同等の資格をもった「産業」のひとつとなった」<sup>233</sup>と述べている。音楽を産業の一形態とみなすこのような見解は、音楽監督としての前任者バローの発言には皆無だったといつてよい。フィリップとバローのあいだに横たわる思想上の相違を指摘するとすれば、そのもっとも著しいものは、おそらくこの音楽産業への関心の有無であろう。フィリップの著述集に収められている「ラジオ的思考によって規定される音楽形式：ラジオのための音楽 - ラジオによってつくられる音楽」と題された論考においては、音楽放送が果たす文化上の役割だけでなく、それが社会のおよび経済的な観点からも考慮に入れられるべきであることが説かれている<sup>234</sup>。ここでフィリップは、ラジオによる音楽放送が音楽を取り巻く社会にとってもつ意味は、大まかに「「実際の」、経済的、社会学的 *«pratique», économique, sociologique*」なものに分けられる、としている。「実際の」というのは、ラジオ放送が音楽を、マス・メディアの一形態として万人に接近可能なものにしたということ、経済的には、ラジオ放送が数々のオーケストラに予算を充てるこ

<sup>232</sup> AN19900214 article 43.

<sup>233</sup> “La musique est devenue une ‘industrie’, au même titre que l’automobile ou que l’aluminium.”

Michel Philippon, *op. cit.*

<sup>234</sup> Michel Philippon, *Écrits (en 2 volumes)*, Sampzon: Éditions Delatour France, 2010: 541. 1976 年、シンポジウム「テネリフェ島会合 *Rencontres de Tenerife*」で行われた講演の原稿。“Les formes musicales déterminées par une pensée radiophonique: musique pour la radio – musique créée par la radio,” *ibid.*: 541-551.

とを通して、音楽界における重要な経済機構として存立しているということ、社会的には、ラジオ放送のおかげで、これまでとは異なる仕方で音楽と聴き手との関係が構築されているということ、とされている。タルデューが実験クラブの姉妹組織として「ラジオ・テレビ研究センター」を創設し、バシュラルなどを招いて、現在でいうメディア論の研究に貢献したように、フィリップもまた音楽監督在任中そして退任後にも、メディアとしてのラジオを論じた文章を発表している。

先にみたように、タルデューが主導した実験クラブは1959年に終わりを迎え、その後はFM放送が、その衣鉢を継いだ組織として位置づけられるようになる。他方、1960年には、シェフエールが研究課を創設し、ミュージック・コンクレートの研究を継続していく。こうした状況にあって、研究課に所属し、また音楽監督バローの補佐をしていたフィリップが次期音楽監督に選ばれた。以上の経緯は、フィリップがバローの後継として選ばれたのは、彼が「研究」に携わり国営放送の実験的試みに精通していたから、他方で、バローの主導する音楽政策にも共感を示していたからであると考えられる。フィリップの著述に現れる、フランス音楽の「威光」とメディアとしてのラジオ双方に対する関心は、彼が音楽監督としてこの2つの領域をもっとも重視していたことを表わしているとみてよいだろう。

## 2-4. ヴォズランスキーの経歴

ミシェル・フィリップを継いで、ラジオ・フランス時代から同放送の実質上の音楽監督を務めたヴォズランスキーについて、ここでもフィリップの場合と同様、まずは経歴に関する情報を整理しておきたい。先に指摘したように、国営放送入局後も作曲家としての活動を続けたフィリップと異なり、放送局に入ると同時にピアニストとしての活動を中止し、局内および行政の分野でのみキャリアを築いていったヴォズランスキーについて、経歴に関して入手できる情報の量は比較的限られている。そのためフィリップとは異なり、『ニューグローヴ世界音楽大事典』や MGG といった網羅的な音楽事典にヴォズランスキーの項目は見当たらない。ただ、『ラルース音楽事典』にはヴォズランスキーの項目が設けられており、「フランスにおける音楽を取り巻く状況に革新をもたらした主要な功労者のひとり l'un des principaux artisans du renouveau de la vie musicale en France」とされている<sup>235</sup>。このようにフランスの事典では高く評価されているものの、ヴォズランスキーの経歴に関して収集することのできた情報は、その多くが断片的なものであった。典拠としては主として、彼の活動を扱った新聞記事、および賞を受けた際に作成された経歴に関する書類であるが、訃報に関係者の興味深い証言が含まれていることもあった。

ピエール・ヴォズランスキーは 1931 年 8 月 11 日、パリに生まれた<sup>236</sup>。父は屑屋、母は家政婦であり、けっして裕福な家庭に育ったわけではなかったが、ヴォズランスキーはそうした出自に誇りを抱いていたという<sup>237</sup>。1947 年、パリ音楽院ソルフェージュ（中級）クラスで 3 等賞を獲得し、1950 年、リュセット・デカーヴ Lucette Descaves (1906-1993) のピアノ・クラスで 2 等賞<sup>238</sup>、1951 年、ジョゼフ・ベンヴェヌーティ Joseph Benvenuti (1898-1967) の室内楽クラスで

<sup>235</sup> “Vozlinsky, Pierre,” *Dictionnaire Larousse de la Musique* (éd. 2005), p. 1121.

<sup>236</sup> パリ音楽院の受賞者名簿（1946～7 年度）では 8 月 2 日生まれとなっている。 *Distribution des prix. Palmarès*. Conservatoire national de musique et d'art dramatique de Paris, 1834-2008.

<sup>237</sup> “Je suis fier de mes origines, aimait-il à rappeler, mon père était marchand de chiffons et ma mère ménagère,” Dn., J, “Mort de Pierre Vozlinsky: Un musicien devenu manager,” *Le Figaro* le 29 mars 1994. 他方、ヴォズランスキーが亡くなる 1 年前に掲載された彼についての新聞記事では、「忠実で野心家の愛国者つまりはゴースト patriot, fidèle et ambitieux, bref gaulliste」と紹介されている。François Hauter, “Pierre Vozlinsky: « Un orchestre est un commando d'élite »,” *Le Figaro* le 3 août 1993.

<sup>238</sup> 同年、フィリップ・アントルモンがジャン・ドワイヤンのクラスで 1 等賞、ラザール・レヴィのクラスでフランス・クリダが 1 等賞、マルセル・シアンピのクラスでセシル・ウーセが 2 等賞、ガブリエル・タッキーノがジャン・バタッラのクラスで第 2 次席、高野耀子がヴォズランスキーと同じくデカーヴのクラスで第 2 次席を獲得している。

1 等賞、1952 年、同じくベンヴェヌーティの室内楽クラスで第 1 メダル<sup>239</sup>、同年デカーヴのピアノ・クラスで 1 等賞を獲得<sup>240</sup>。1957～65 年にサン＝ジェルマン＝アン＝レのクロード・ドビュッシー地方音楽院 Conservatoire à Rayonnement Départemental Claude Debussy で教え、1962～3 年度にはパリ音楽院で非常勤講師 professeur intérimaire として視奏のクラスを受け持っている。このクラスでは、シルヴィ・カルボネル、カトリーヌ・コラル、サチコ・タカハシ [漢字表記不明] にメダルを与えている<sup>241</sup>。

演奏活動として最初に記録されているのは、1958 年、ブカレストで開かれたジョルジュ・エネスク国際コンクールで 2 等賞を獲得したことである。ヴォズランスキーは、フランス政府の助成を受けて、ヴァイオリニストのセルジュ・ブラン Serge Blanc (1929～2013) とデュオを組み、エネスクの《ヴァイオリン・ソナタ第 3 番》を演奏した<sup>242</sup>。別の史料によれば、このときにはドビュッシーの《ヴァイオリン・ソナタ》も演奏されたという<sup>243</sup>。1960 年には、「フォンダシオン・ド・ラ・ヴォカシオン Fondation de la Vocation」<sup>244</sup>の第 1 回奨学生に選ばれる。1964 年 6 月末～7 月初めにかけては、ヴァイオリニストのフィリップ・アリー＝ブラシェット Pierre Arrii-Blachette とともに南米で演奏旅行を行い、アルゼンチン、チリ、ベネズエラ、メキシコで演奏した<sup>245</sup>。ここで演奏されたのは、ジャン＝マリー・ルクレールの 3 つの《ヴァイオリン・ソナタ》(オリヴィエ・アランによる復元<sup>246</sup>)、ドビュッシーの《ヴァイオリン・ソナタ》、アントワヌ・ティスネ Antoine Tisné (1932-1998) の《ヴァイオリン・ソナタ》<sup>247</sup>に加えて、ペー

<sup>239</sup> 同じ年、モーリス・エウィットの室内楽クラスで田中希代子がやはり第 1 メダルを獲得している。

<sup>240</sup> 同じ年、シアンピのピアノ・クラスでジャン＝ポール・セヴィラが 1 等賞と併せて名誉賞 prix d'honneur、イヴ・ナットのピアノ・クラスでイヴ・プランが第 1 メダル、レヴィのピアノ・クラスで山根弥生子が第 1 メダルを獲得。

<sup>241</sup> それぞれ第 1 メダル、第 2 メダル、第 3 メダル。この時期に視奏クラスを担った正規の教員にはジュヌヴィエーヴ・ジョワ Geneviève Joy (1919-2009) などがいる。

<sup>242</sup> Jean Roy, [sans titre] [sans indication du nom de périodique], le 15 septembre 1958. (マラー音楽資料館の Pierre Vozlinsky: Dossier documentaire に収められているが、記事の日付および題名の記載がない)

<sup>243</sup> Olivier Alain, “Courrier musical: Brillants débuts de P. Vozlinsky boursier de la Vocation,” [sans indication du nom de périodique] le 21 novembre 1961.

<sup>244</sup> フランスの広告大手パブリシスの創設者マルセル・ブルーステイン＝ブランシェが 1960 年に設立した奨学金制度。

<sup>245</sup> パラグアイとパナマでも演奏した可能性がある。

<sup>246</sup> アランは、J. S. バッハの《14 のカノン (BWV1087)》を発見したことでも知られる。

<sup>247</sup> 1946 年にヴォズランスキーとアリー＝ブラシェットののために書かれ、1966 年まで 2 人が独占演奏権をもった。“Nouvelles de la musique et des musiciens français,” *Le Courrier musical de France*, 3e 1964: 111.

トーヴェンの作品、ブラームスの作品をそれぞれ2つずつ採りあげ、最後に入野義朗の作品<sup>248</sup>が演奏された。

国営放送に入局したのはこの数年後の1967年に、テレビの音楽映画製作者 *producteur de films musicaux pour la télévision* としてであった。この年以降、ヴォズランスキーのピアニストとしての経歴は中断している。1990年、グレン・グールド賞 *Glenn Gould Prize* に推薦された際は<sup>249</sup>、推薦者のひとりブーレーズが推薦文を寄せているが、それによれば、ヴォズランスキーがブーレーズと知り合ったのも1967年だったという<sup>250</sup>。1968年から1969年5月にかけて、指揮者・作曲家のモーリス・ル・ルーが製作を行ったテレビの音楽番組「奥義 音楽の知識 *Arcana Connaissance de la musique*」<sup>251</sup>の製作に協力する。1969年6月（5月とする説もある<sup>252</sup>）から1972年12月には、ダニエル・ルシュールの後任として、テレビ音楽部門主任 *Chef du Service de la Musique de la Television* を務め、1971年には文化省の「文化発展審議会 *Conseil du Developpement Culturel*」のメンバーとなる。1972年に製作されたパブロ・カザルスのドキュメンタリーは、約20の国で放送された。彼が手がけたテレビ番組にはクイズ番組「それは誰のこと？ *De qui est-ce ?*」、アマチュア音楽家の活動を扱う「夜の音楽家 *Les Musiciens du Soir*」、「ひとつ下の調で *Un ton au-dessous*」、「音楽と私たち *La Musique et Nous*」、「音楽の路 *Chemins de la Musique*」などがある。

ヴォズランスキーが国営放送の音楽活動を統括する職に初めて就いたのは、1972年12月19日、ORTF 社長アルテュール・コント *Arthur Conte* (1920-2013) によって ORTF 音楽総合特使 *Délégué général pour la musique de l'O. R. T. F.* および管弦楽団・合唱団監督 *Directeur des orchestres et chœurs* に任命されて以降である。このポストはヴォズランスキーのために準備された。彼がこの地位に就いたことは、ORTF の刷新を部分的に象徴する出来事として、自身ヴォズランスキーと並んで音楽放送の責任者に任じられた、ジルベール・アミ *Gilbert Amy* (1936-) の文章<sup>253</sup>

---

<sup>248</sup> 《ヴァイオリンとピアノのための二重協奏曲 *Doppelkonzert für Violine und Klavier*》(1957) ほか。

<sup>249</sup> この年受賞したのはユーディ・メヌーインだった。

<sup>250</sup> *Nomination of Pierre Vozlinsky for the Glenn Gould Prize 1990* (Pierre Vozlinsky: Dossier documentaire).

<sup>251</sup> 1968～1990年にわたって放送された。芸術音楽を中心とするさまざまなジャンルの音楽が、毎回特定のテーマのもとに扱われた。

<sup>252</sup> Sichler, Liliane. “Pierre Vozlinski: Nouveau directeur de la Musique à la TV.” In [Le Figaro ?, sans date].

<sup>253</sup> Gilbert Amy, “La musique n’est pas seulement un objet de consommation et de digestion,” *Le Monde* le 10- lundi 11 juin 1973. アミはラジオ総監督 *directeur général de la Radio* のジャック・サルベール *Jacques Sallebert* (1920-2000) のもとでの音楽顧問 *conseiller musical* および音楽関連製作部

でも強調されている<sup>254</sup>。なお、同ポストに任命されて数か月経って行われた『ル・モンド』紙のインタビューでは、彼がパリ 13 区の低家賃住宅 *Habitation à loyer modéré (HLM)* に暮らしていることが記されており、先の出自についての説明と併せて、ヴォズランスキーが自身の生活ぶりが庶民的水準にあることを好んで強調していたことが窺える<sup>255</sup>。この期間中の主な業績としては、1978 年のロリン・マゼール *Lorin Maazel* (1930-2014) 指揮フランス国立管弦楽団日本ツアーの企画および同行、北京中央交響楽団の演奏会を西洋で初めてテレビ放送したこと、などがある<sup>256</sup>。1977 年には、中央アフリカのジャン＝ベデル・ボカサ皇帝の戴冠式、およびエリザベス・テイラーが出演する映画の裏番組として放送された、ベートーヴェンの《交響曲第 9 番》を扱ったテレビ番組が、63 パーセントの視聴率を獲得したという。

ヴォズランスキーは引き続き、1974 年に設立されたラジオ・フランスでも音楽監督に相当する立場にあった。ラジオ・フランスでは、それまでの音楽特使 *Délégation à la musique* に代わって設置された音楽番組・関連部署 *Direction des Programmes et Services Musicaux* の長 *Directeur des Programmes et Services Musicaux* となった。同時に、テレビ・チャンネル「フランス・トロワ FR3」の音楽番組顧問 *Conseiller pour les Programmes Musicaux* も務めた。ヴォズランスキーの権限はこの時代にもっとも強かったと推測される。ヴォズランスキーが音楽番組・関連部署長に就任すると、それまで存続してきたフランス・ミュージック監督 *directeur de France Musique* ポストが消失した<sup>257</sup>。この消失がヴォズランスキーの命によるものであるかどうかは確認でき

---

署主任 *chef des services de production musicale* となった。当時ヴォズランスキーが 42 歳、アミが 36 歳であることが上記記事では強調されている。

<sup>254</sup> 同ポストへの就任を扱った『ル・モンド』の記事でも、ヴォズランスキーについて「彼がその莫大な潜在力を活用できるのであれば、フランス人が音楽について抱くイメージと、彼らの音楽教養は、オペラ座の監督よりもはるかに大きくヴォズランスキーに依存している[...] *de lui dépendent l'image que se feront les Français de la musique, et leur culture musicale, infiniment plus que l'Administrateur de l'Opéra, s'il est capable de faire vivre cet énorme potentiel*」と説明されており、その手腕に大きな期待がかけられていたことが窺える。Jacques Longchamps, “« Je veux donner à tous la rage de s'élever » nous déclare M. Pierre Vozlinsky, délégué général pour la musique de l'O. R. T. F.,” *Le Monde* le 11-12 février 1973.

<sup>255</sup> *Ibid.*

<sup>256</sup> 他方で、ヴォズランスキーの死去に際して、メシアンなどと交流した打楽器奏者フランソワ・デュパン *François Dupin* (1933-1994) は、国立管弦楽団の演奏会に関するヴォズランスキーの交渉態度は、このオーケストラの活動にとってネガティブな結果をしかもたらさなかったと辛い評価を下している。“*La disparition de Pierre Vozlinsky,*” *La lettre du musicien*, n°147 le premier mai 1994.

<sup>257</sup> 代わりに、実質的に監督にあたる役職として編集長 *rédacteur en chef* が設けられ、はじめルイ・ダンドレルが就き、次いで調整役 *coordinateur* としてドニ・ルムリ *Denis Lemery*、番組主任にアラン・ド・シャンビュールが就いた。監督という名のポストが復活したのはルネ・ケリング *René Koering* (1940-) の監督就任を以てである。

ていない。ボードリエが辞任してミシェル・コッタ Michèle Cotta (1937-) が2代目の社長となると、コッタとの関係の悪化を主な理由として<sup>258</sup>、1981年に音楽番組・関連部署長を辞任し、以後国営放送には戻らなかった<sup>259</sup>。しかし、国営放送という公的音楽機関でのそれまでの功績が認められ、1981年には芸術文化勲章オフィシエ Officier de l'Ordre National des Arts et Lettres、翌1982年にはレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ Chevalier de la Legion d'Honneur を受章している<sup>260</sup>。

国営放送との関わりがなくなったとはいえ、ヴォズランスキーはその音楽監督としての地位を通して築いた影響力を利用して、フランスの音楽界において重要な立役者としての役割を演じ続けた。1975～82年には、ユネスコの下部組織である国際音楽+メディアセンター International Music + Media Centre の副所長 Vice-President を務めた。1983年以降、ヴォズランスキーは官民をまたにかけて、フランス音楽界の要職を次々と歴任する。1983年から1986年にかけては、エラート社ないし「ソラフィ（フランス視聴覚・映画協会）」社長 Directeur d'Erato Production et de la Sorafi (Societe Francaise pour l'Audiovisuel et le Cinema)、ミデム・クラシック芸術監督 Directeur Artistique du Midem Classique を務めた。また、フランス＝アメリカ音楽財団代表 President de la Fondation Musicale France/USA、「ランコントロール・ミュージカル・アンテルナショナル」代表 Président de l'association “Rencontres Musicales Internationales”、「アルテナ（芸術史普及協会）」代表、トタル財団芸術監督（音楽） Directeur Artistique de la Fondation Total pour la Musique

---

<sup>258</sup> コッタとの決裂に言及して、ヴォズランスキーは「協力者として望まないであろうような人を、私は上司として受け入れたことはこれまでに一度もない Je n'ai jamais accepté comme patron quelqu'un dont je n'aurais pas voulu comme collaborateur」と述べたという。Dn., J. *op. cit.* また、1980年9月から新フィルハーモニー管弦楽団監督補佐を務めたフレデリック・ジクラー Frédéric Sichler と、同管弦楽団の労働組合が、ヴォズランスキーの辞任への圧力をかけたという説もある。Arlette Stroumza, “Un entretien avec l'ancien directeur musical de Radio-France: l'Etat Vozlinsky (propos recueillis par Arlette Stroumza),” *Le Monde* le 6 novembre 1981.

<sup>259</sup> コッタは、同年11月3日、アンドレ・ジューヴ André Jouve (1929-) をヴォズランスキーの後任に任命した。ジューヴはマルセイユに生まれ、パリ音楽院でエクリチュールと合唱指揮を学んだあと指揮者となり、ヨーロッパの多数のオーケストラを指揮。1969～1973年、サラベール社 Salabert とジョベール社 Jobert で働く。1973年、新設された音楽特使でリリック管弦楽団と室内管弦楽団の芸術監督に就任。1975年のラジオ・フランス設立後は、音楽製作関連部署主任 Chef des Services de Production Musicale となり、委嘱等に関する職務を行う。1978年以降、音楽番組・関連部署副部長 sous-directeur des programmes et services musicaux を務めていた (*La Radiale informations internes*, n°109 78 le 28 février 1978)。1980年には現代音楽資料センター事務長 secrétaire du Centre de documentation de la musique contemporaine、また同年、パリ音楽院運営委員会委員 conseil d'administration du Conservatoire national supérieur de la musique de Paris をも務めた。

<sup>260</sup> Nomination of Pierre Vozlinsky for the Glenn Gould Prize 1990.



などである。1985 年から務めたトタル財団でのポストでは、現代音楽の普及に努め、ジェルジ・クルターク György Kurtág (1926-)、クラウス・フーバー Klaus Huber (1924-)、ブライアン・ファニーホウ Brian Ferneyhough (1943-)、トリスタン・ミュライユ Tristan Murail (1947-)、フィリップ・マヌリ、マルコ・ストロッパ Marco Stroppa (1959-) などへ委嘱を行うかたわら、ベリオ、クルターク、カルロス＝ロケ・アルシナ Carlos Roqué Alsina (1941-)、マルク＝アンドレ・ダルバヴィ Marc-André Dalbavie (1961-)、ジャン＝クロード・エロワ Jean-Claude Eloy (1938-) らの作品の上演に携わった。

1980 年代後半以降は、フランスを代表する 2 つの公的音楽団体である、パリ管弦楽団そしてパリ・オペラ座バステュー Opéra Bastille の総監督を同時に務めた。1987 年からパリ管弦楽団総監督となったヴォズランスキーは、ダニエル・バレンボイム Daniel Barenboim (1942-) の後継として音楽監督にセミヨン・ビシュコフ Semyon Bychkov (1952-) を任命するとともに、同管弦楽団の財政の立て直しに貢献した。ビシュコフは 1994 年のヴォズランスキーの死去に際して、「彼は私にとって忠実な助言者であり、私が夢みていることを実現するために可能なことをすべてやり遂げた友人であり、それ [その死] はオーケストラにとっての損失です」<sup>261</sup>と述べている。また 1987 年 7 月にはオペラ・バステューの総監督も引き受け、翌年までという短い期間ではあるものの、このポストにとどまった。1994 年 3 月 28 日、パリの自宅で死去した。

---

<sup>261</sup> “Il a été pour moi un mentor fidèle et un ami qui a fait tout ce qui était possible pour réaliser ce que je rêvais et c’est en plus une perte pour l’orchestre.” *Le Figaroscope* 18/24 mai 1994. (マーラー音楽資料館の Dossier Vozlinsky に所蔵されている資料。記事のタイトルおよびページ数の記載はない)

## 2-5. ヴォズランスキーの著述および発言

フィリッポについての項目でも述べたように、ヴォズランスキーの発言を記した資料は、国立公文書館およびラジオ・フランスに収められた、国営放送の音楽活動に関する史料にもっぱら見いだすことができる。このほかヴォズランスキーは、音楽監督に就任あるいは監督を退任するとき、また在任中にも何度かにわたり一般雑誌・新聞のインタビューを受けている。そこでは、一般の読者向けにラジオ・フランスの音楽活動の意義を強調することを目的とした、やや戦略性の高い言葉選びが頻繁に目に付く。先に述べたとおり、ヴォズランスキーは単著を刊行しておらず、その著述がフィリッポの場合のように第三者によってまとめられていないという点で、その他の2人の音楽監督とは異なっている。フランス国立図書館のカタログに存在する、ヴォズランスキーを著者とする資料としては、彼が製作に携わった映像資料が大半を占めており、書誌資料としてはフランスの政治家ガストン・パレウスキ Gaston Palewski (1901-1984) に宛てた手紙1通が収められているのみである。国営放送の音楽監督として長年務めたあと、パリ管弦楽団およびオペラ座バステューユの総監督となったフランス音楽界の立役者が、このように公の場での出版物をほとんど残していないというのは、奇妙であるように思われる。そしてそれとは裏腹に、ラジオ・フランスや国立公文書館の関連資料において、ヴォズランスキーの署名した書類は膨大な量に上っており、それは彼が国営放送音楽監督を務めた期間が10年にも満たなかったことを考えれば、なおさら特筆すべきことのように思われる。

ヴォズランスキーの音楽監督としての地位は、ORTF時代のORTF音楽総合特使 *Délégué général pour la musique de l'O. R. T. F.* および管弦楽団・合唱団監督 *Directeur des orchestres et chœurs* (1972～1975) とラジオ・フランスに入ってから音楽番組・関連部署長 *Directeur des Programmes et Services Musicaux* (1975～1981) に分けられるが、関連資料を読むかぎり、ポストの変更によってヴォズランスキーの音楽監督としての方針にも変更が生じたと考えることはむずかしい。むしろ、彼の方針はこれらの時期を通じてかなり一貫しているとみてよいだろう。

ヴォズランスキーの発言をある程度まとめた形で読むことのできる媒体として、ここでは週刊誌『レクスプレス *L'Express*』1980年2月16～22日号に掲載されたソフィー・ランヌ Sophie Lannes (1927-)<sup>262</sup> の記事「音楽を聴いてください——『レクスプレス』によるピエール・ヴォズ

---

<sup>262</sup> パリ政治学院とケンブリッジ大学で学び、法学の学士を取得。『レクスプレス』の副編集長。とりわけ音楽に関する記事を手がけた (1964～89)。

ランスキーへの直撃インタビュー<sup>263</sup>」を糸口に、彼の発言を検証したい。このインタビュー記事は、分量の点では、ヴォズランスキーが受けたものとしてはもっともページ数が多く、そのぶんヴォズランスキーは自身の方針について、詳細な情報の提供および正当化を試みている。

彼がインタビューの冒頭でまず指摘するのは、「音楽を消費する仕方には、実践、受動的実践、代用による実践の3つがある」<sup>264</sup>ことである。このうちヴォズランスキーが注意を促すのは、このうちの2つ目すなわち受動的実践である。そして、音楽の聴き方がかつてとは同じではないことは確かであり、昔はより注意深く聴いていたという趣旨の内容<sup>265</sup>を彼は述べ、先に挙げた3通りの「消費」の仕方のうち最初の「実践」にもっとも高い位置を与える。この観点から、ヴォズランスキーは複製技術であるレコードの役割に対しては否定的であり、レコードが生の演奏を忠実に再現するという考え方には抵抗を感じる<sup>266</sup>と率直に述べている。ここで彼が「レコードの教育的価値についてはつねに控えめな態度をとってきた。レコードは強力な音楽教養の道具である——すでにそれ[教養]をもっている人にとっては」と述べていることは示唆的である。すなわち、ヴォズランスキーにとってレコードないし録音産業は、あらかじめ音楽に関心をもつ人にとっては教養を涵養するきっかけを提供しうるが、そうでない人びとにとっては教養を与えるものにはならない、ということである。

ここでは「教養」という語が登場しているが、バローの方針を特徴づける鍵概念のひとつであったこの言葉は、ヴォズランスキーの政策においては、バローの場合とは少し異なる意味合いが与えられているように読みとれる。上記のインタビュー記事でこの言葉が登場しているの

---

<sup>263</sup> Sophie Lannes, “Ecoutez la musique: *L'Express* va plus loin avec Pierre Vozlinsky,” *L'Express* n°1493 du 16 au 22 février 1980: 114-131.

<sup>264</sup> “Il y a trois manières de consommer la musique : la pratique musicale, la pratique passive et la pratique par substituts...” *ibid.* : 114.

<sup>265</sup> “Que la nature de l’écoute soit modifiée est une évidence. Même si l’on écoute la même musique, on l’écoute autrement. Pourquoi ? D’abord, à cause de la multiplication des possibilités d’écoute. Combien de fois un mélomane pouvait-il, jadis, entendre les symphonies de Beethoven au cours de sa vie, sauf à les jouer à quatre mains ? Très peu de fois. Si bien qu’il les écoutait avec une formidable concentration, sachant que l’événement ne se reproduirait pas avant longtemps. Il les écoutait aussi avec une fraîcheur beaucoup plus grande, car son système de références n’était pas fondé sur la répétition. Ensuite, son oreille, moins sollicitée, était beaucoup plus sensible.” *ibid.*

<sup>266</sup> “J’ai toujours été réservé quant à la valeur pédagogique du disque. Le disque est un formidable instrument de culture musicale... pour ceux qui en ont déjà. De même qu’aucun livre d’art ne remplacera le musée. [以下 p. 117] Pourquoi ? Parce que ce qui se passe dans l’oreille quand on écoute est déterminant pour ce qui se passe dans la tête. Et l’idée qu’il puisse y avoir un disque fidèle est, pour moi, insoutenable. Je comprends parfaitement les très rares artistes qui refusent, comme Celibidache, d’enregistrer des disques. L’enregistrement est une surinterprétation qui se superpose à l’interprétation. La position des micros, leur nombre, le mixage ne sont pas des opérations innocentes. Elles ne peuvent pas l’être. Ce n’est pas une critique, c’est une donnée de fait. Et, parce qu’il y a routine de l’effet, il y a surenchère sonore.” *ibid.*: 114, 117.

は、上に挙げた一度のみである。他の機会にヴォズランスキーが受けたインタビューで、「教養」が登場する文章としてはたとえば、「私は ORTF の独占を熱心に支持する。ORTF がなければ、フランスの音楽教養はどうなるのだろうか？」<sup>267</sup>、あるいは「フランス・ミュージックはいつでもどこでも、教養の道具ではなく背景音とみなされてきた」<sup>268</sup>などがある。これらの言葉を読むかぎり、「教養」はヴォズランスキーにおいても重視されていたとみることができる。先に挙げた「レコードは強力な音楽教養の道具である」という一文のみをとっても、愛好家が教養を培うことがヴォズランスキーによって重視されていることが示されている。

しかし、「教養」が実質的に何を意味するのかについて、ヴォズランスキーの文章では、バローの場合におけるほどには、明快な定義がなされていない。バローは「放送内容の拡大」という目標を大々的に掲げ、音楽がバッハで始まりヴァーグナーに終わるというナイーブな想定を聴取者から取り除くために、中声・ルネサンスから同時代までの音楽を幅広く紹介することを重視していた。この場合の「教養」とは、いわゆる「大作曲家」の作品のみを繰り返し愛聴するのとは異なり、さまざまなジャンルや傾向の音楽へ関心を抱いて柔軟な感性でそれらを聴く、という姿勢を指すものとみてよいだろう。しかしながらヴォズランスキーは、音楽に対するそのような幅広い好奇心を聴取者もしくは視聴者が抱くことを期待しているとは至っていない。あるいは、より精確にいうならば、彼にとってさまざまな傾向の音楽が存在することは聴取者にとってもはやすでに了解済みのことであり、日常的に彼らが慣れ親しんでいる音楽以外の音楽に接しようと努める姿勢が「教養」を涵養するという考え方自体が、ヴォズランスキーにとっては古いものと映ったのかもしれない。「教養」を重視しながらも、バローと異なり「教養」への重視をことさらに謳わないヴォズランスキーにとって、国営放送の音楽放送の使命が聴取者の「教養」の向上にあることはもはや自明であったのだろう。

そのことを裏づけるかのように、先のランヌによるインタビューでヴォズランスキーは、さまざまなジャンルの音楽を放送で扱うことの自明性に言及している。たとえば「他文明の音楽を扱うことの重要性は、あまりにも自明であるので議論の対象にはならないだろう」<sup>269</sup>、「音楽は複数形のさまざまな音楽からなり、そこには趣味がきわめて多様なかたちで存在する。そし

---

<sup>267</sup> “Je suis pour cela un défenseur acharné du monopole de l’O. R. T. F. Sans lui, que serait la culture musicale en France ?” Jacques Longchamp, “« Je veux donner à tous la rage de s’élever » nous déclare M. Pierre Vozlinsky, délégué général pour la musique de l’O. R. T. F.,” *Le Monde* le 11-12 février 1973.

<sup>268</sup> “Partout, toujours, on a parlé de France-Musique comme fond sonore, jamais comme instrument de culture.” M. F. [Maurice Fleuret], “La musique qui dérange,” *Le Nouvel Observateur*, le 29 décembre 1975: 60.

<sup>269</sup> “Les [les « musiques d’ailleurs »] connaître, les diffuser me semble une donnée si évidente du monde d’aujourd’hui que je ne vois même pas comment on peut le discuter.” Sophie Lannes, *op. cit.* : 127

てこれらの趣味は変化する。絶対的な美学など存在しない」<sup>270</sup>などの発言がそれである。これらの言葉を通して、ヴォズランスキーは、バローが積極的に主張していた「複数形の音楽 musiques」<sup>271</sup>の重要性を暗に認めている。

それでは、ヴォズランスキーは「複数形の音楽」という概念を念頭においたうえで、放送ないし音楽活動で扱う音楽を選定する際に、どのようなヒエラルキーを設けていたのだろうか。この点についてヴォズランスキーは、明確な回答を与えているとはいいがたい。そもそも、フランス国営放送の音楽監督たる立場にある人物が、放送で扱う音楽の選定基準を明言するというナイーヴな言動を行うとは想像しがたい。この点については、ヴォズランスキーのみならず、バローおよびフィリップも同様であり、何らかの美的、政治的等々の基準にもとづき放送ないし普及すべき音楽を選定しているなどという、あからさまに「政治的」な性質を帯びた発言を行うことは当然避けていたはずである。

しかしヴォズランスキーは、「複数形の音楽」という理念を前提としたうえで、そのなかで放送に値するものとそうでないものがあるという区別に敢えて言及している。ランヌによる先のインタビューで、ヴォズランスキーは、聴衆の趣味が多様であることは前提としているとしつつも、彼の姿勢は、あらゆる時代の、あらゆる国の、あらゆる文化の音楽を扱うというものではないと述べている。そして、他の普及手段と比較したときのラジオの特殊性は、ラジオが、その固有の価値が永続的な性質を暗示しているような音楽表現に関心を向けるということであり、ただ売られ、消費され、忘れられる音楽は、ラジオから排除される<sup>272</sup>と述べている。原文

---

<sup>270</sup> “La musique est faite de musiques au pluriel, où se manifeste l’extrême diversité des goûts. Et ces goûts changent. Il n’y a pas d’absolu esthétique.” *Ibid.*: 125.

<sup>271</sup> のちにみるように、ヴォズランスキー監督下でフランス・ミュージックの「編集長」を務め、西洋芸術音楽以外の音楽も積極的に採り入れようとしたルイ・ダンドレルは、フランス・ミュージックを *France Musique* ではなく *France Musiques* と表記すべきであると考えていた (Sophie Mangin, *Analyse du programme de France-Musique 1986*, mémoire de maîtrise, Université Paris Sorbonne IV Paris, 1989: 8.)。バロー自身はこの語を用いていないものの、彼がさまざまな音楽に対して関心を開いていくべきだというとき、非西洋の音楽もそこに含まれていたことは確かである。たとえば、1967年1月15日にフランス・キュルチュールで放送された、バローが製作・司会を務める番組「音楽へのまなざし」では、ブルーーズの《主なき槌 *Le Marteau sans Maître*》と併せてバリの音楽が放送されている。

<sup>272</sup> “Ce qui nous distingue des autres canaux de diffusion, c’est que nous nous intéressons, nous, à l’expression musicale dont la valeur intrinsèque implique une donnée de permanence. Le jazz, lui, n’est plus un objet de consommation commerciale, il a atteint des formes d’expression classiques, où la créativité s’exprime à un niveau très élevé. Il n’y a pas grande différence aujourd’hui entre l’amateur de jazz et celui de Monteverdi. Chanson ou disco, la finalité est la même : ce sont des objets qui se vendent, se consomment, et s’oublient. Donc, nous les éliminons. Tout autre est le problème des formes musicales d’autres civilisations.” *Ibid.*: 126-127.

に表れているように、ここで「永続的な性質を暗示しているような音楽表現」の例として挙げられているのは、たとえばジャズであり、それはモンテヴェルディの音楽と同様の価値をもつとされる。対して、「売られ、消費され、忘れられる」ことを「最終的目的 *finalité*」とするような音楽はシャンソンやディスコである。そして「残りはすべて、他の文明の音楽形式の問題である」とされ、非西洋の音楽の場合は事情がまったく異なるという旨で発言を終えている。

この発言からは、ヴォズランスキーがシャンソンやディスコといった大衆音楽を、放送の対象として重視していないことがわかる。一方、積極的に採りあげられる価値をもつ音楽は何かという点に関して、ヴォズランスキーは同じインタビューのなかで、聴衆の好みに合わないものを敢えて提供することが大事であり、聴衆の趣味に迎合するだけでは不十分であると言っている<sup>273</sup>。そして、聴き手が即座には想像できなかったであろうものを、説いて示してやることが重要である<sup>274</sup>と続ける。こうして、聴衆を「追う *suivre*」ことよりも聴衆に「先行する *précéder*」ことが重要であるという点で、現代音楽を採りあげることはほとんど義務であるという<sup>275</sup>。それは、「すでに知っているものを繰り返し扱い続けることで事足れりとなれば、それは不毛な反芻以外の何ものでもなくなってしまう」<sup>276</sup>からである。

放送および音楽活動で採りあげる音楽は何かをめぐる以上のヴォズランスキーの見解および発想の流れを、ここで一度まとめておくと、次のようになるだろう。すなわち、バローが「放送内容の拡大」を謳い、あらゆるジャンルや傾向の音楽を採りあげることを重視してから約30年以上が経過していた当時、ヴォズランスキーは、「音楽は複数形である」ということを聴取者および視聴者に知らしめることはもはや時宜に適っていないと考えた。そこで、いったん視野を西洋音楽に定めたのち、そこから放送に確実に値しないと判断されるシャンソンやディスコの音楽を排除した。そして、残りの音楽に関しては、聴取者および視聴者が同じレパトリー

<sup>273</sup> “On devrait lui donner la tolérance des goûts des autres ! Bien entendu, il faut répondre à l’attente des auditeurs. Mais, lorsqu’on a dit ça, on n’a rien dit, car ces attentes sont infiniment contradictoires, infiniment diversifiées. Pour quelqu’un qui rejette complètement un type de musique, la seule façon de ne pas en avoir trop, c’est de ne pas en avoir du tout ! C’est une réaction qu’il faut assumer. L’éclectisme est une donnée fondamentale de la responsabilité que j’exerce. Mais il ne faut pas confondre éclectisme et compromis, éclectisme démocratique qui aboutirait à faire la moyenne des aspirations de tout le monde, ça donnerait quoi ?” *Ibid.*: 125.

<sup>274</sup> “Notre rôle, à la radio, est de faire comprendre aux auditeurs, par une certaine prédication, mais aussi par la démonstration, qu’ils peuvent s’intéresser à ce qu’ils n’auraient pas, spontanément, imaginé.” *Ibid.*: 125.

<sup>275</sup> “Il entre, par exemple, dans nos obligations de jouer de la musique contemporaine, de jouer les partitions acceptées par le Comité de lecture.” *Ibid.*

<sup>276</sup> “Si l’on se contente de redonner toujours ce que l’on connaît déjà, on ne peut que favoriser une rumination stérile.” *Ibid.*: 126.

に反復的に接することを避けるために、現代音楽や査読委員会が承認したスコアを適宜プログラムに加えるのがよいとされた。このようにみると、ヴォズランスキーの方針は、彼自身が形容するように、まさに「折衷主義 *éclectisme*」を特徴としているといえる<sup>277</sup>。

しかし、以上のようにヴォズランスキーの方針を整理したところで、彼が重点的に普及を目指したのがどのような傾向およびジャンルの音楽であったのかを特定するに至ったとはいえない。そもそも、国営放送の音楽監督という立場にある以上、ヴォズランスキーが彼個人の趣味を選曲などに反映させること自体、職責上望まれることではありえない。とはいえ、ヴォズランスキーの監督がおよぶ範囲が国営放送の音楽活動全体であり、フランス・ミュージックの監督<sup>278</sup>よりも権限の点で上に位置するというポストが、戦後の国営放送で彼のために初めて設けられたことを考慮すれば、彼が音楽活動全体を統括する際に何らかの具体的なイニシアティブをとったと考えることは不可能ではないだろう。

そうした観点から、ヴォズランスキーの理念のみならず彼が実際に取ったアクションにも目を向けるならば、彼が在任中、国営放送音楽監督として主導したプロジェクトとして、国際的に著名な指揮者を国立管弦楽団の演奏会に招聘したことがまず挙げられる。ここで招かれた指揮者の代表はレナード・バーンスタイン *Leonard Bernstein* (1918-1990) とセルジュ・チェリビダッケ *Sergiu Celibidache* (1912-1996) であろう。国立公文書館に収められた国営放送関連史料には、指揮者本人とヴォズランスキーおよび局側の人物とのやり取りは確認されなかったが、とりわけチェリビダッケの客演に言及した通達や報告書が多数収められている。チェリビダッケは、1970年初頭にもパリ管弦楽団に客演しており<sup>279</sup>、国立管弦楽団に客演したのはその3年後の1973年である<sup>280</sup>。ヴォズランスキーはこの年の2月のインタビューで、チェリビダッケが本

<sup>277</sup> “L’éclectisme est une donnée fondamentale de la responsabilité que j’exerce.” *Ibid.*: 125.

<sup>278</sup> 先に述べたとおり、厳密には「監督 *directeur*」とよばれる名のポストは、ヴォズランスキー在任期間中は存在せず、復活するのは彼が退任した1981年である。

<sup>279</sup> 1970年1月20日、21日、22日、24日に、ヴァル＝ド＝マルヌ劇場 *Théâtre Val-de-Marne*、シャンゼリゼ劇場 *Théâtre des Champs-Élysées*、メゾン・ドゥ・ラ・キュルチュール（どの地方のメゾン・ドゥ・ラ・キュルチュールかは不明）でジョヴァンニ・ガブリエリの *Tre Canzone*[sic]、ヒンデミット《画家マティス》、ラヴェル《ダフニスとクロエ 第2組曲》を指揮している。パリ管弦楽団ホームページ (<http://www.orchestredeparis.com/>) に掲載された同管弦楽団の過去のプログラム一覧参照（2012年8月11日閲覧。2016年現在閲覧不可）。

<sup>280</sup> 1973年12月22日から1974年10月5日までのあいだに、8つのプログラムで11回の演奏会を行った。扱われた作曲家は、ケルビーニ、ストラヴィンスキー、リヒャルト・シュトラウス、ラヴェル、シューベルト、ヨハン・シュトラウス2世、ベートーヴェン、ブラームス、ミ

年中に国立管に客演することを予告し、チェリビダッケを「現時点でもっとも偉大な指揮者」と形容している<sup>281</sup>。

ヴォズランスキーのこうした方針は、国営放送の音楽活動の動向に関心を寄せる一部のメディアでも注目されたが、興味深いのは、チェリビダッケの招聘に対するかなり批判的な記事が見いだされることである。極右の論調で知られる大衆週刊誌『ミニュット *Minute*』は、のちにみるように、1970年代後半のフランス・ミュージックの改革全般に対して批判的であったが、ヴォズランスキーが主導したチェリビダッケの客演に対しても批判の矛先を向けている。それによれば、ポール・パレー Paul Paray (1886-1979)、ジャン・マルティノン Jean Martinon (1910-1976)、セルジュ・ボド、ピエール・デルヴォー Pierre Dervaux (1917-1992) といった指揮者<sup>282</sup>は、1演奏会あたり 6000 から 7000 フランを支払われていたが、チェリビダッケは 12000 フランであり、モーツァルトの《レクイエム》を振ったときには<sup>283</sup>24000 フランが与えられているとされる。またリハーサルの回数も法外であり、財政上の理由により演奏会の中止もめずらしくなかつたとされる<sup>284</sup>。そして団員たちは、ヴォズランスキーとダンドレルが主導する権威主義と、ジルベール・アミが招聘する指揮者の無能さに憤っているとされる<sup>285</sup>。

ヴォズランスキーがこうした試みを行っていたのは、彼が国営放送の音楽活動に「国際性」を付与したいと望んでいたからであると考えられる。彼はこの「国際性」という概念に、インタヴューでたびたび言及している。チェリビダッケの招聘に触れた先の 1973 年のインタヴューでは、次のように語られている。

---

ヨー、レスピーギ、モーツァルト、ウェーバー、ハイドン、シューマン、プロコフィエフ。 *Cahiers musicaux de l'ORTF*, Paris: le Service des Relations avec la Presse et le Public, 6<sup>e</sup> année n°1 (1964.9)-14<sup>e</sup> année n°12 (1973.2). *O.R.T.F. Informations Musique*. Paris: le Service des Relations avec la Presse et le Public, [sans numéro] (mars 1973)-[sans numéro](décembre 1974).

<sup>281</sup> Longchamp, Jacques. “« Je veux donner à tous la rage de s’élever » nous déclare M. Pierre Vozlinsky, délégué général pour la musique de l’O. R. T. F.,” *Le Monde* le 11-12 février 1973.

<sup>282</sup> いずれもたびたび国立管弦楽団で指揮した。マルティノンは 1968～1973 年の国立管弦楽団音楽監督 *directeur musical*。

<sup>283</sup> 1974 年 2 月 22 日、シャンゼリゼ劇場での演奏会。

<sup>284</sup> [non signé] “Pour un peu, ils mordraient ! : Qui protège les roquets de “France-Musique” ?,” *Minute*, du 17 au 23 décembre 1975: 30-31.

<sup>285</sup> “Cette grève des musiciens n’est pas une revendication salariale. Outre une manifestation de colère devant le caporalisme que veulent instaurer **Vozlinski** et Dandrel, elle est principalement provoquée par l’incompétence des chefs qu’a installés à la tête des formations Gilbert **Amy**, disciple du « révolutionnaire » **Boulez**.” *Ibid.*: 30.



「あらゆるところで国際的なレベルに達し、芸術家に自分の仕事に対する誇りを抱かせ、フランスの若きヴィルトゥオーゾを効率的に支援し、われわれが仕えている多数の人びとに到達しなければならない。」<sup>286</sup>

国営放送の音楽団体とりわけオーケストラが国際的な水準を獲得することはヴォズランスキーにとって、監督在任中終始実現すべき点として認識されていたといえる。彼の希望は、一見すれば、国立管弦楽団が「フランス音楽の大使」たることを望んだバローのそれと一致しているように思えるかもしれない。しかしヴォズランスキーは、バローおよびフィリップが、国営放送の音楽活動の対外的なアピールについて語る際に好んで用いた語のひとつである「威信／威光 *prestige*」という語<sup>287</sup>を用いるのを、敢えて避けている傾向がある。1974 年に行なわれた『ル・フィガロ』のインタビューで、ヴォズランスキーは、「私は威光よりも質を好みます」と発言している<sup>288</sup>。別のインタビューにおいても、ショルティやカラヤンといった大指揮者が国営放送に客演に来る機会を設けるためには、管弦楽団の質を向上させなければならないと述べられており<sup>289</sup>、管弦楽団の質の向上がヴォズランスキーにとって重視されていたことがわかる。

ここで言及されている「質」は、フランス語の定型的表現に「上質な *de qualité*」があることから推測されるように、「上質」といったほどの意味をもつと考えてよいだろう。管弦楽団の演奏において質の向上を目標とするという姿勢については、ヴォズランスキーにとどまらず、あらゆる音楽監督であれば掲げるであろう目標であるが、これとは別に、「上質な音楽」とは何かという点は検討の余地があろう。ここでもやはり「上質な音楽 *musique de qualité*」という語の用法を参照するならば、1963 年 3 月 1 日に『ル・モンド』に掲載された執筆者不明の記事「フ

---

<sup>286</sup> “Il faut atteindre partout le niveau international, pour donner aux artistes la fierté de leur métier, pour soutenir efficacement les jeunes virtuoses français, pour atteindre la vaste public au service de qui nous sommes.” Longchamp, *op. cit.*.

<sup>287</sup> バローは、国立管弦楽団についての文章の北米ツアーに触れた箇所です。「この立派な軍隊がメロヴィング朝の戦車でアメリカの道々を跋扈するとき、その芸術の威光、そのプログラムの美しさが、その輜重部隊のみすぼらしさをかき消していた Lorsque cette illustre phalange arpente les routes américaines dans des chars mérovingiens, les prestiges de son art, la beauté de ses programmes effacent la pauvreté de son train d’équipage.」と書いている (*L’Orchestre national de la radiodiffusion télévision française* (Henry Barraud, Daniel-Lesur et Manuel Rosenthal. préface de Wladimir Porché), [s. l.]: [s. n.], [1957]: 8.)。

<sup>288</sup> “[...] j’aime mieux la qualité que le prestige [...].” G. G. “Pierre Vozlinsky, Délégué Général pour la musique à l’O.R.T.F.: ‘J’ai même rencontré des administrateurs que je dérange, mais qui m’acceptent...’” *Le Figaro* le 4 janvier 1974.

<sup>289</sup> Pierre Combescot, “Radio-France: La boîte à musique: Un entretien avec Pierre Vozlinsky” *Les Nouvelles littéraires* le 7 juillet 1976.

ランス IV は音楽チャンネルにとどまるべきだ」がひとつの参考となる。ここで本記事の執筆者は、「[曲目の] 紹介を装った「おしゃべり」による導入も、「上質な」音楽を犠牲にしたいいわゆる娯楽のレコードの過大な増加」もフランス・キャトル（フランス・ミュージックの旧称）にふさわしくないと言っている<sup>290</sup>。ここでいう「上質な」音楽とは、いわゆる軽音楽とは対極にある芸術音楽を指すとみて間違いないだろう。「上質な *de qualité*」という表現は、質が高いことがすでに評価として定まっているということを含意しており、そうした点で「高級な」と言い換えることも可能であるはずだ。

ここでヴォズランスキーが「質の高い」音楽の提供を目ざしていたことを思いだすならば、彼が希望していた国際的に評価の高い指揮者の招聘は、すでに評価の定まった「上質な」指揮者を招くことと同じであるといえる。そして、そうした指揮者を招くことによって彼が聴取者・視聴者に提供しようとしていた「質の高い」音楽とは、軽音楽や娯楽のための音楽ではむしろなく、カノン化された西洋芸術音楽のレパートリーをもっぱら指すものと解釈してよいだろう。ヴォズランスキーが排除しようとしていたシャンソンやディスコは、こうした「質の高い」音楽の対極にある音楽であろう。

先ほど言及した「国際性」および「質の高い音楽」をめぐる議論には、本節以降もたびたび触れることとなる。これらのキーワードが 20 世紀後半、とりわけ 1950 年代から 1970 年代のフランスの音楽界における状況の変化を象徴するものであることが、以下の記述から明らかとなるだろう。

---

<sup>290</sup> “l’introduction du “ bla-bla-bla ” en guise de présentation ni l’augmentation immodérée des disques dits de variétés au détriment de la musique “ de qualité.” “France IV doit demeurer une chaîne musicale.” D. C., “France IV doit demeurer une chaîne musicale,” *Le Monde* le 1 mars 1963.

### 第3章 フランス・ミュージックとフランス・キュルチュール

#### 3-1. 両チャンネルにおける音楽放送

第1章でみたとおり、フランス・ミュージックは、1954年に設立された「FM 特別チャンネル」を母体とし、RTF時代からラジオ・フランス時代を通じて、芸術音楽専門チャンネルとして位置づけられてきた。ORTF時代の監督は終始シャルル・シェーヌであったが、ORTFがラジオ・フランスへ改組されて以降は、まず「編集長」としてルイ・ダンドレルが就き、その後ドニ・ルムリとアラン・ド・シャンビュールが実質的に監督職を担った。ヴォズランスキーが辞任して以降は、1981年にルネ・ケリングが「監督 directeur」に就き、以後この役職が継続している。

フランス国営放送の音楽活動における特殊性のひとつは、フランス・ミュージックが芸術音楽専門チャンネルであるからといって、このチャンネルの監督職にある者が局の音楽監督に相当するわけではない、つまりフランス・ミュージックの監督と放送局音楽監督とは別個のポストであったという点である<sup>291</sup>。このことは、国営放送がさまざまな音楽団体を擁し、したがってそれらの活動を統括することが必要であったことを考えれば、驚くべきではないことではないかもしれない。とはいえ、バローやヴォズランスキーの場合に象徴されるように、音楽監督が国営放送の音楽活動をさまざまなメディアを通して宣伝し、音楽政策を策定およびアピールするという、多分に政治的性格の強い役割を与えられていたことは確かである。

このように、フランス・ミュージックの監督が音楽監督による管理あるいは監視のもと活動していた体制において、両者の見解ないし方向性が衝突することがあったとしても、それは驚くにあたらないだろう。その代表的な事例については第2節で検討するとおりである。

その検討に入る前に、フランス・ミュージックとともに、フランス・キュルチュールも芸術音楽の放送で大きな役割を果たしたことを付記しておきたい。先に述べたとおり、1944年に国営放送が再建されて初めに開設した、バローが監督を担った教養放送のチャンネル「ナショナル」は、1964年にフランス・キュルチュールと名を変えた。放送内容は、それまでと変わらず教養番組であったが、そこでは音楽番組も少なからぬ分量を占めていた。代表的な番組を挙げれば、バローもゲストのひとりとして出演し、のちに書籍にその内容がまとめられたロラン＝マニユ

---

<sup>291</sup> ケリングがフランス・ミュージックの監督に就任して以後、フランス・ミュージックの監督が実質的に国営放送の音楽監督としての役割も果たすようになったといえる。ケリングは1985年、モンペリエ・ラングドック＝ルシヨン・ラジオ・フランス・フェスティヴァル Festival de Radio France Montpellier Languedoc Roussillon を創設し、局全体の音楽政策を方向づけるような施策を打ちだしている。

エルの《音楽のたのしみ》(1944～1966)、ジャン・ヴィトルド Jean Witold (1913-1966) の《大音楽家たち Grands musiciens》(1964～1970)、フレッド・ゴールドベック Fred Goldbeck (1902-1981) の《一にして分割不能な音楽 La Musique une et indivisible》(1965～1977) などである<sup>292</sup>。

このようにして音楽番組を多数放送していたフランス・キュルチュールであるが、このチャンネルにおける芸術音楽の重要性を強調し、「フランス・キュルチュールの音楽放送 Programme musical de France Culture」をもって自任したのがギー・エリスマン Guy Erismann (1923-2007) である<sup>293</sup>。註 293 で示したように、エリスマンはフェスティヴァル・ダヴィニョンを取り仕切っ

---

<sup>292</sup> 本研究が対象とする期間に放送が開始され、ラジオ・フランスが作製した過去の主要番組リストに掲載されているのは以下の番組。バローの《音楽へのまなざし》(1967～1983)、ジョルジュ・レオン Georges Léon の《同時代の音楽 Musique de notre temps》(1968～1982)、モーリス・フルーレらの《出来事＝音楽 Événement-musique》(1973～1982)、ドミニク・ジャムー Dominique Jameux (1939-2015) の《音楽が語る La Musique prend la parole》(1973～1983)、エリアーヌ・ツアフルー Eliane Zurfluh らの《音楽の王国で Au royaume de la musique》(1974～1985)、レミー・ストリッケル Rémy Stricker (1936-) らの《音楽と人間 La Musique et les hommes》(1976～1981)、ジェラルド・オフレー Gérard Auffray らの《音楽の権力 Pouvoirs de la musique》(1977～1982)、フランソワーズ・マレットラ Françoise Malettra の《ミュージコマニア Musicomania》(1984～1997)、ジョルジュ・レオンの《自己の鍵 Clé de soi》(1986～1990) Cadic, Catherine [et al.] *Panorama des émissions 1963-2006*. Paris: Radio France, Cahiers de la Doc n°172, 2006.

<sup>293</sup> エリスマンは1945年2月、レコード整理係 *discothécaire* としてRTFに入局。1958年11月、製作補佐 *attaché de production*、1960年2月、芸術系製作グループ主任 *Chef de groupe artistique*、1976年1月、芸術系製作グループ指導管理者 *Cadre artistique de direction* となる。1978年1月、運営責任者 *Administrateur*、1981年11月、フランス・キュルチュールの副監督 *Directeur Adjoint*。1967年には、ジャン・ヴィラルール Jean Vilar (1912-1971) からフェスティヴァル・ダヴィニョン Festival d'Avignon の音楽監督を任され、1969年にその音楽イベントの放送の責任者となった。ラジオ・フランス常設団体担当副監督 *sous-Directeur chargé des Formations permanentes de Radio France* を経て、1984年11月に社長ジャヌニから「音楽と公共ラジオとの関係についての歴史的・展望的研究 *mission d'étude historique et prospective sur les relations entre la Musique et la Radiodiffusion de service public*」を託され、報告書を執筆。「フランス・キュルチュールの音楽放送」の責任者として、フェスティヴァル・ダヴィニョンに関連する冊子などに文章を執筆するなどしたが、独立した音楽著述家としても活躍し、ヤナーチェクおよびドヴォルザークの詳細な伝記を執筆している (*Dvorak* [1966, Seghers, 2004年にフアヤール社より増補版が刊行された]、*Janáček* [2007, Seuil])。芸術文化勲章シュヴァリエ *Chevalier des Arts et des Lettres* を受章、アカデミー・シャルル・クロの副総書記 *Secrétaire Général adjoint de l'Académie Charles*

ていたジャン・ヴィラルから同フェスティヴァルの音楽監督に任命され、このフランスを代表する演劇フェスティヴァルにおける現代音楽関連の催し全般に関与した。たとえば1970年7月18日から8月3日まで開かれた同フェスティヴァルでは、クロワートル・デ・セレストン Cloître des Célestins で、ORTF とフェスティヴァルの協力による3つのスペクタクルが上演された。このほか、期間中にはジャズと現代音楽の演奏会が合計で10回、またオルガンのリサイタルが6回行われた<sup>294</sup>。

エリスマンは、国営放送におけるこのフェスティヴァルの責任者としての立場を通して、フランスにおける「テアトル・ミュージカル théâtre musical」を代表する人物としてみずからをアピールし、またそのように国営放送内外で認知されていた<sup>295</sup>。エリスマン自身、フランス・キュルチュールの音楽番組の概要を記した書類で、フェスティヴァル・ダヴィニョンではテアトル・ミュージカルが重視されており、キュルチュールはアヴィニョンの催しの放送をその放送内容の重要な柱としている、と述べている。そして、その成功したテアトル・ミュージカルの例として、1975年にはベッツィー・ジョラス Betsy Jolas (1926-) の《川のほとりの小屋 *Le Pavillon au bord de la rivière*》<sup>296</sup>がフェスティヴァル・ドートンヌ、ブリュッセルそしてロンドンで再演されるという例が挙げられている。

---

Cros も務めた。

<sup>294</sup> “Nouvelles de la musique et des musiciens français,” *Le Courrier musical de France*, 2e 1970: 83.

<sup>295</sup> メンゲルは『音楽家の逆説』で、20世紀後半におけるフランスの音楽創作の潮流を整理しながら、フランスにおけるテアトル・ミュージカルを、エリスマンのアヴィニョンにおける活動、ピエール・バラ Pierre Barrat (1931-) の「アトリエ・リリック・デュ・ラン Atelier Lyrique du Rhin」、およびジョルジュ・アペルギス Georges Aperghis (1945-) がバニョレで創始した「アトリエ・テアトル・エ・ミュージック Atelier Théâtre et Musique」の3つに代表させている (Pierre-Michel Menger, *op. cit.*: 145)。また1984年モントリオールで開かれた「世界音楽の日々」で、同イベントの責任者のギー・ユオは、エリスマンを招聘する際に彼の旅費・滞在費を社長ジャヌニに申請するための文書で、エリスマンを「現代のテアトル・ミュージカルのパイオニアのひとりであり、支柱のひとりであり続けている l'un des pionniers et demeure l'un des piliers du théâtre musical contemporain」と形容している (*Lettre de Guy Huot à Jean-Noël Jeanneney*, le 21 juin 1984 AN20140048/82)。

<sup>296</sup> “L’opération Avignon se signale du point de vue musical par l’union du théâtre et de la musique, sous le titre du théâtre musical, dont l’initiative revient à France-Culture qui connaît chaque année[sic] une curiosité plus grande comme en témoigne par exemple, les prochaines reprises du “Pavillon au bord de la rivière” de Betsy Jolas et Bernard Sobel au Festival d’automne, à Bruxelles et Londres.” Guy Erismann, *Programmes musicaux 1975, SAÉM 1745W*, [p. 2]. ジョラスの《川のほとりの小屋》については、ウェブ上で公開されているフェスティヴァル・ダヴィニョンのアーカイブ (<http://www.festival-avignon.com/fr/spectacles/1975/le-pavillon-au-bord-de-la-riviere>) を参照。同フェスティヴァルで上演された作品の情報は、上記ウェブサイトのアーカイブで閲覧可能。

エリスマンがこうしたアヴィニョンでの試みを重視する理由として、彼は 1976 年に受けたインタビュー（インタヴューアーは不明）で、次のように説明している。

「なぜならアヴィニョンは、あらゆる芸術の分野が集う場所だからです。アヴィニョンは「潜在的な観衆」——すなわち今日そして明日の観衆が出会う場所だからです。そして、さまざまな分野のあいだにまったく差別がない場所だからです。造形芸術、演劇、映画、振付、テアトル・ミュージカルそして音楽が対決する場所なのです。」<sup>297</sup>

このエリスマンの発言から、実験クラブを創設した際にジャン・タルデューが掲げた、芸術と科学との組み合わせという理想を想起することは難しくないだろう。エリスマンがこうした諸ジャンルの結合という理想のもとに、ラジオという媒体の同時代的意義を強調していたことは、局内での彼の地位にも関係しているように思われる。というのは、彼は脚註に示した略歴でも触れられているように、フェスティヴァル・ダヴィニョンでの活動に長年携わった末、「音楽と公共ラジオのラジオとの関係についての深化した研究」を行うことを社長ジャヌニから託されているからである<sup>298</sup>。

一方フランス・ミュージックでは、本節の冒頭に示したように、シャルル・シェーナが監督を務めていた（シェーナの略歴については第 1 章の脚註を参照）。シェーナがフランス・ミュージックの音楽政策について行った発言は、フィリップの場合と同様、ORTF の社内報『マイクとカメラ』に掲載された記事<sup>299</sup>で読むことができるが、その他の発言は、公刊された資料にはほとんど記されていないといってよい。その代わり、ラジオ・フランス書誌アーカイヴ課に収められている、毎年作成されたフランス・ミュージックの報告書には、同チャンネルの運営方針に関するシェーナの問題提起を反映した文言が多く掲載されている。

そこにみられるシェーナの発言には、フランス・ミュージックが芸術音楽専門チャンネルであ

---

<sup>297</sup> “Parce qu’Avignon est le lieu qui réunit toutes les disciplines artistiques. Parce qu’Avignon est le lieu des rencontres du “public potentiel” – le public d’aujourd’hui et de demain. Le lieu enfin, où il ne se produit aucune ségrégation entre les différentes disciplines – le lieu où se confrontent les arts plastiques, le théâtre dramatique, le cinéma, la chorégraphie, le théâtre musical et la musique.” *Avignon: La Radio, une “discipline d’expression” parmi les autres 1976*, SAéM 1745W, [p. 1].

<sup>298</sup> ジャヌニは 1985 年 8 月 30 日、エリスマンが「音楽と公共業務としてのラジオとの関係についての深化した研究 *une étude approfondie sur les rapports de la musique avec la radio de Service Public*」を行う目的で、フランス国立図書館を利用することを許可すると証明書を発行している。 *Attestation de Jean-Noël Jeanneney*, le 30 août 1985. AN20140048/82.

<sup>299</sup> Charles Chaynes, “Le point de vue de Charles Chaynes, conseiller délégué pour France-Musique.” In *Micro et Caméra* 1974 93 année n°52: 20.

ることに関連する、解説における言葉の量の調整、また多様な傾向の音楽を扱うことに対する顧慮がみられる。たとえば、1968～1969年度の報告書 *rapport* では、これまでフランス・ミュージックを特徴づけてきた博物館的仕方による放送領域の拡張のほか、アニメーション *animation*<sup>300</sup> にも力を注ぐ必要があると述べられている<sup>301</sup>。また同年度に作成された活動報告 *rapport d'activité* では、本年度のフランス・ミュージックが「起源から今日に至るまでの、あらゆる傾向の音楽をつねに扱うこと *l'exposition sonore permanente de tous les genres de musique, des origines à nos jours*」に成功したのではないかという評価が下されている。

先にアニメーションという語が登場することから予測されるように、フランス・ミュージックの報告書では、聴取者との関係の構築についてもたびたび言及されている。たとえば1967～1968年度の報告書では、フランス・ミュージックの目的そして存在理由は何よりもまず、あらゆる傾向の音楽を聴取者に日常的に知らしめること、そしてそれを聴取者との対話の形で、聴取者と関係を築きながら行うことにある、とされている<sup>302</sup>。また1970年度の活動報告では、これまで音楽にあまり縁のなかった人びとをフランス・ミュージックの聴取者とすることの重要性が強調されている<sup>303</sup>。こうした目的を達成するために、フランス・ミュージックでは、たとえば時間帯に応じた放送内容の性格づけを行うなどしていた。たとえば1971年度の活動報告では、番組内の解説の配分を適切に調整するよう努めたとされている。具体的には、20時から23時までの時間帯にはコメントを入れない一方で、10時から11時30分および14時30分から17時30分までの時間帯は、曲目の紹介を主とした番組を放送するとされた<sup>304</sup>。また1972年には、水曜日の午後に、聴取者として学校帰りの生徒を対象とした番組を放送した<sup>305</sup>。

このようにフランス・ミュージックは、とりわけ ORTF 時代の初期すなわちこの呼称が採用されてまもないころにおいて、バローが国営放送再建時に掲げた「放送内容の拡大」の実現を目

---

<sup>300</sup> 1959年に発足した文化省では、芸術と人びととの距離を縮める（このこと自体ひとつの概念として議論の余地を孕んでいるが）ことを目的として、文化アニメーション *animation culturelle* が提唱された。

<sup>301</sup> *France-Musique 1968-1969*, [p. 1], SAéM, BD non numérotée : « Fonds France Musique et la Direction de la musique » (92W).

<sup>302</sup> “Le but, la raison d’être de FRANCE-MUSIQUE est, avant tout, la présentation journalière à son auditoire de toutes les formes de musique, de tous les styles, de toutes les époques. Cette présentation FRANCE-MUSIQUE la poursuit depuis plusieurs saisons parallèlement à un effort de dialogue, de lien avec son public.” *France-Musique n°320 Saison 1967-1968*, [p. 1], *ibid.*

<sup>303</sup> “Dépasser le cadre des discophiles, mélomanes plus ou moins spécialisés et atteindre une couche de la population peu touchée jusqu’ici par la musique, tel doit être notre objectif.” *Rapport d’activité 1970*, p. 5, *ibid.*

<sup>304</sup> *Rapport d’activité 1971*, [p. 1], *ibid.*

<sup>305</sup> *France-Musique Octobre 1972*, [p. 1], *ibid.*

ざしていたといえる。そして同時にそこには、1960年代半ばに文化省率いる文化行政が打ちだした、芸術と享受者との関係をより密なものにするというアニメーションへの顧慮も働いていた。

なお、シェーヌ自身に関していえば、彼はフランス・ミュージックの監督を退いたあと、委嘱を担当する音楽創作部署の長を約15年にわたって務めた。この部署に関しては、現段階で公開されている資料の種類が十分でないが<sup>306</sup>、ピエール＝ミシェル・メンゲルのインタビューに応じてシェーヌが行った次の発言は、国営放送がフランスの音楽創作界で期待された役割を示唆している。

「音楽創作部署については、やや反伝統主義的すぎるのではないかという批判が総じて行われます。ラジオは若い人びとのしていることを、もはや今日では20歳ではなくなってしまった人びとを皆殺しにすることなく、示す義務があると思います。その意味で、均衡をとるのはかなり難しいことです。しかしラジオのアクションは今日、8あるいは10年前のそれに比べてはるかに開けたものとなっています。これは局の全体的な方針です。15あるいは20年前にここで披露した刷新は、当時の最先端ではなかったのです。」<sup>307</sup>

---

<sup>306</sup> 委嘱を受けた作曲家とシェーヌら音楽創作部署とのやり取りに関する書簡等の史料は、筆者が調査したかぎりでは、ラジオ・フランス書誌アーカイヴ課による管理の下にあると判明している。しかし同課によれば、それらの公開は現段階では不可能であるといい、委嘱台帳のみが閲覧可能となっている。

<sup>307</sup> “On nous reproche d’une manière générale d’être un peu trop antitraditionalistes pour la création musicale. Je crois que la radio se doit de montrer ce que font les jeunes sans pour autant tuer tous ceux qui n’ont plus 20 ans aujourd’hui. En ce sens, l’équilibre est assez difficile. Mais l’action de la radio est beaucoup plus ouverte aujourd’hui aux tendances nouvelles qu’elle ne l’a été il y a 8 ou 10 ans: c’est la politique générale de la maison. Le nouveau qu’on donnait ici il y a 15 ans ou 20 ans n’était pas la pointe de la nouveauté d’alors.” Pierre-Michel Menger, *op. cit.*: 176.



### 3-2. ダンドレルの主導による「改革」

上にみたように、フランス・ミュージックはフランス・キュルチュールとともに、ラジオ・フランスでの芸術音楽の放送を担う主要なチャンネルであった。そしてフランス・ミュージックの年次報告書および活動報告からは、同チャンネルがバローのいう「放送内容の拡充」の実現を目ざしており、また聴取者にとって「身近」なチャンネルとすべく、時間帯や放送内容に工夫を凝らしていたことがわかる。フランス・キュルチュールの音楽放送を統括したギー・エリスマンが、ジャン・タルデューの実験クラブに端を発する、領域横断的な芸術を理想とする思想に共振し、かつてのこうした「ラジオ芸術」の理念をいわば引き継いでいたのに対し、フランス・ミュージックは、バローの教養への重視を受け継ぎながら、放送内容が過度に高尚となることのないように配慮を行っていたといえる。

ここでは、これまでいずれの音楽監督も重視し、フランス・ミュージックにおいても上記のように考慮されていた「教養」の概念をめぐるひとつの出来事を探りあげる。1975年から1977年にかけて、フランス・ミュージックの監督ルイ・ダンドレルが「改革 *réforme*」と称する取り組みを行った。この出来事については、クリストフ・ベネの雑誌論文2本<sup>308</sup>と、パリ第4大学に提出された、ジュリー・マルシェッティの修士論文<sup>309</sup>で扱われ、筆者はこれらの先行研究を参照しながら、2015年に「改革」を扱った研究発表を行っている<sup>310</sup>。筆者がこの「改革」を発表そして本論文で扱う経緯に至ったのは、このように先行研究がひとつの出来事めぐって複数存在するということが、フランス国営放送の音楽放送ではほとんど異例といえるからである。本論文冒頭で先行研究を整理した際に述べたように、本研究を除いて、ORTFからラジオ・フランスに至るまでのフランス国営放送による音楽放送を包括的に扱った研究は存在しな

---

<sup>308</sup> Christophe Bennet, “France-Musique en 1975: Une réforme qui décoiffe,” *Cahiers d’Histoire de la Radiodiffusion* n° 86, octobre-décembre 2005: 120-149. および Christophe Bennet, “France-Musique: La fin de l’épisode Dandrel,” *Cahiers d’Histoire de la Radiodiffusion* n° 94, octobre-décembre 2007: 147-168.

<sup>309</sup> Julie Marchetti, “L’histoire de France Musique : l’évolution du traitement de la musique classique à la radio, du monopole à la concurrence de Radio Classique,” mémoire de maîtrise, Université Paris Sorbonne IV, 2005.

<sup>310</sup> 平野貴俊「1970年代後半のラジオ・フランスにおける芸術音楽チャンネル「フランス・ミュージック」の改革」、日本音楽学会第66回全国大会研究発表（2015年11月14日、青山学院大学）。

い。そのような状況にあって、このように特定の出来事に研究者の関心が集中するのは、「改革」が国営放送の音楽活動の意義や趣旨を議論するうえで有益な材料を提供しているからであろう。そして、筆者によれば、「改革」が目的としたのは、これまでどの音楽監督もその扱いを考慮せざるをえなかった概念である「教養」の意味を問い直すことにほかならなかった。

ルイ・ダンドレル<sup>311</sup>は、ORTF がラジオ・フランスに改組されてから、初めてフランス・ミュージックを率いた人物である。それまで同チャンネルの監督だったシェーヌは、先に述べたとおり、ダンドレルの着任に伴い音楽創作部署の長となった。ラジオ・フランスへの改組に伴い、ORTF では音楽総合特使であったヴォズランスキーが音楽番組・関連部署長となったことは、第2章でみたとおりである。同時に、フランス・ミュージックで「監督 directeur」とよばれていたポストが廃止されたのもこの機会においてであり、ダンドレルは「編集長 rédacteur en chef」という肩書でフランス・ミュージックのトップを務めることになった<sup>312</sup>。ここでヴォズランスキーが、局内の音楽活動全体を統括する責任者として、ダンドレルに対していわば上司のような位置づけにあったことは、両者のあいだのやり取りを分析する際に念頭においておくべきだろう。

ダンドレルの「改革」の内容に触れる前に、まずそのインパクトの大きさを証しておくならば、彼が「編集長」としてとどまったのは1975年から1977年までの約2年間であった、という事実をもってすれば十分であろう。彼の「改革」は、さまざまな新聞や雑誌で批判の対象となり、そのことがかえって聴取者の増加に結びつきはしたものの、1977年9月にはダンドレルとその部下にあたる製作者たちが一斉に辞任した。1979年には、ダンドレルと辞任した製作者たちが『放送禁止』という著作を出版し、「改革」を振り返っている<sup>313</sup>。

ダンドレルが「改革」のスローガンとして打ちだしたのは「初のカラー・ラジオ Première

---

<sup>311</sup> フランスの音楽評論家、作曲家。パリ音楽院和声クラスを卒業後、1968年9月から1975年7月まで『ル・モンド *Le Monde*』に音楽評論、音楽時評を定期的に寄稿。フランス・ミュージック監督（1975～1977）を経て雑誌『ル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージック *Le Monde de la Musique*』の創刊および民間ラジオ局「ラジオ・クラシック *Radio Classique*」の創設に携わる。その後、公共空間における音響デザイン *design sonore* の専門家としていくつかの作品を発表している。

<sup>312</sup> もっとも、「編集長」という肩書をもったのはダンドレルだけである。内部文書に *rédacteur en chef* と記されているので、これは一応は正式な名称であったが、「改革」のインパクトを強調するために暫定的に作られた呼称ととらえるのが無難であろう。

<sup>313</sup> [L'équipe démissionnaire de France-Musique.] *Interdit d'antenne*, Paris: Le dernier terrain vague, 1979. なお、外科医・泌尿器科医で数々の一般向けの著書を執筆しているジェラルド・ズワン Gérard Zwang (1930-) は、「改革」が行われたのとほぼ同時期に、これを非難するための著書を発表している。Gérard Zwang, *A contre-bruit*, Paris: J. C. Simoën, 1977.

radio en couleur」である<sup>314</sup>。ここでいう「カラー」とは、西洋芸術音楽以外の音楽、すなわち非西洋音楽、非芸術音楽あるいは同時代の新作など、従来フランス・ミュージックではあまり積極的に採りあげられてこなかった、あるいはとくに人気があるとはいえないジャンルの音楽であるといっていよう。これに加えて、ダンドレルは楽曲分析のレクチャー、マスター・クラス、あるいは幼児を対象とした音楽講座など、教育に関する活動も放送の対象として積極的に扱った。このような、従来のフランス・ミュージックでほとんど扱われてこなかった内容を、これまでフランス・ミュージックを代表してきた演奏会の番組などと並列させることで、西洋芸術音楽の放送に偏りがちのフランス・ミュージックの放送内容に新風を送り込むというのが、ダンドレルらの企ての意図するところであった。

ダンドレルが率いたのは約 15 人からなる製作者のチームで、当時 20 代前半だったドゥニ・ルヴァイヤン Denis Levaillant (1952-) <sup>315</sup>など、それまでマイクの前に座ったことのない人びとが製作・司会を担当した。興味深いのは、これらの人びとがパリ音楽院出身者ではなく、その後のキャリアにおいても、アカデミックなポストとは距離をおきながら活動していることである。バローがパリ音楽院の正規の学生でないことは第 1 章で確認したが、それでもバローはのちに文化省の委員会やユネスコの国際音楽評議会で活動し、フランスの公的音楽行政における代表的人物となるに至った。バロー以外に、フランス国営放送で音楽放送、ないしフランス・ミュージックの監督を務めたのは、すべてパリ音楽院出身者であり、またヴォズランスキーを除けばみな作曲家でもあった。一方ダンドレルは、パリ音楽院で和声を学んだとはいえ、音楽院に在籍した期間は決して長いとはいえない<sup>316</sup>。

ダンドレルら製作者の経歴に関してもうひとつ指摘しておくべきは、フランス・ミュージックに着任する以前、ダンドレルが『ル・モンド』で音楽評論を執筆していたこと、またダンドレルがフランス・ミュージック監督となつてからは、その製作に加わっていたジェラルム・コンデが彼の跡を継いだ、ということである。左寄りの新聞として知られる『ル・モンド』の音楽評論は、のちにみるように、たとえば『ル・フィガロ』のそれとは論調を大きく異にしている。

ダンドレルが ORTF の関係者とどのような経緯で接触し、それまで同放送局で活動した経

---

<sup>314</sup> Louis Dandrel, *France Musique: La première radio en couleur*, SAéM 869W.

<sup>315</sup> フランスの作曲家、ピアニスト。1970 年代に関心を芸術音楽からジャズや即興へ移し、1980 年に著書『即興音楽 *L'improvisation musicale*』を刊行。1990 年代から 2000 年代にかけて、アンサンブル・アンテルコンタンポランとオペラ座から映画音楽とバレエ音楽の委嘱を受けた。

<sup>316</sup> 和声はパリ音楽院において、作曲家を目指す生徒がまず最初に取り組む、エクリチュールのもっとも基礎的な分野である。

験をもたないにもかかわらず、フランス・ミュージックの責任者という要職を手にしたのかについて、一次史料から得られる手がかりは存在しない<sup>317</sup>。他方で、極右の論調で知られる大衆週刊誌『ミニュット』は、1968年の五月革命の際にヴォズランスキーはナンテールでピアノを弾いており、彼が自身と同じく共産党員で『ル・モンド』に批評を書いていたダンドレルを引き抜いたのだ、という説を紹介している。ただし、ゴシップ的色彩の強い語調で書かれている記事であるため、その信憑性に関しては疑いが残る<sup>318</sup>

こうして「改革」が始まると、フランス・ミュージックは左派の出来損ないの音楽家たちによって乗っ取られた、という批判が現れ<sup>319</sup>、ヴォズランスキーは「人びとが驚くであろうことはわかっていました。ラジオは浴槽になっていました。お湯の温度を変えたのです」<sup>320</sup>と釈明するなど、フランス・ミュージックは新聞・雑誌に格好の記事の材料を提供するようになった。プログラムの例として、1977年1月25日日曜日のフランス・ミュージックで放送された内容は次のとおりである。すなわち、午前7時から8時にかけて軽音楽、8時から9時にバッハのカンタータ、9時から11時には情報番組と音楽番組の中間的性格の番組、11時から12時には古楽、12時から12時45分にはフラメンコ、次いでボワエルデューのオペラ、ハイドンのピアノ・ソナタと続き、映画監督ジャック・ドゥミが選曲する番組がある。夜は、ジャズ、古楽、オーケストラの演奏会、ブラームスの室内楽と続き、南インドの音楽で幕を閉じる。

この「改革」は、上にその一端を示したように、多くの新聞・雑誌でこぞって採りあげられたが、そこで主張されている内容にはある程度共通点が認められる。以下、それらを典型的な形で示している3人の評論家の記事を読み解き、「改革」に対する新聞・雑誌の反応がどのよ

---

<sup>317</sup> 雑誌『ミニュット』によれば、製作者たちはみなダンドレルの友人で、彼らは同じ建物に住んでおり、その一人であるドイツ人のインゲ・タエス Inge Thaes は、同じく製作者のアラン・デュレル Alain Durel (1941-) が、フェスティヴァル・ダヴィニョンで知り合ってラジオへの出演を依頼した、とされている。彼らのなかには、ルヴァイヤンやコンデのように、その後も音楽界で活動した者もいるが、インゲ・タエスなど、その後の活動に関する手がかりがつかめない人物もいる。なおデュレルは、1981年からエリスマンの後任としてフランス・キュルチュールの音楽放送主任を務めたあと、1982年に音楽プログラム・関連部署調整特使 Délégué à la coordination des Programmes et Services musicaux として、アンドレ・ジューヴとともに、実質的に国営放送音楽監督の座にあった。

<sup>318</sup> “Cet orchestre rouge qui tient la baguette à France Musique,” *Minute*, du 15 au 21 octobre 1975: 32-33.

<sup>319</sup> “La réforme de France-Musique est une formidable entreprise de mystification pseudo-artistique et de manipulation gauchiste, orchestrée par un clan de musiciens ratés.” “Cet orchestre rouge qui tient la baguette à France Musique,” *Ibid.*: 32.

<sup>320</sup> “Je savais bien que le public serait surpris, commente Pierre Vozlinsky. La radio était devenue un bain. Nous avons changé la température de l’eau...” “Le scandale du nouveau France-Musique: Les sondages le condamnent; Jacqueline Baudrier explique,” *Paris-Match* n° 1385 le 23 novembre 1975: 12.

うな意図のもとに行われたのかを確認しておきたい。まず、『フランス＝ソワール *France-Soir*』紙のジャン・デュトゥール Jean Dutourd (1920-2011)<sup>321</sup> が展開するのは、「改革」が音楽史の古典的レパートリーを軽視しているという主張である。彼は「リーヴル・ドゥ・ポッシュ」<sup>322</sup>といういわゆる文庫本に言及しながら、評価の定まった古典的文学作品が改革によって重視されなくなったことに不満を表している。

「フランス・ミュージックはここ 11 年間、音楽においては文学作品のリーヴル・ドゥ・ポッシュ、もっといえば古典作品のリーヴル・ドゥ・ポッシュに相当するものであった […] つまり、モンテヴェルディからバルトークに至るまでの音楽の宝庫である」<sup>323</sup>

同様の主張を行っているのが、『ル・フィガロ』のピエール＝プティ<sup>324</sup>である。彼の記事は、古典の軽視がなぜ非難されるべきであるかを時代の趨勢に鑑みながら説いている点で、デュトゥールの言葉に対する注釈づけとなっている。

「なるほど、モーツァルト、ベートーヴェン、ラヴェルがおそろしく時代遅れであることは承知している<sup>325</sup> [...] フランス人は音楽的ではないといわれている。[だが] 同時に、ここ 20 年間、フランス人はその方面で莫大な進歩を遂げたと認めることはできる。われらの同胞が音楽的に成年に達しようとしているまさにそのとき、ルーヴル美術館ほどに不可欠な教養の道具を取り去ってしまうのは意地悪というものではないか」<sup>326</sup>

---

<sup>321</sup> フランスの作家。第 2 次大戦中捕虜となり、のちレジスタンスに参加。1952 年、小説『上質のバター *Au bon beurre*』でアンテラリエ賞受賞。『フランス＝ソワール』では演劇、テレビ等についての時評を執筆。1978 年以降フランス学士院会員。

<sup>322</sup> 1953 年からアシェット社 Hachette が刊行するフランス最大手のペーパーバック。

<sup>323</sup> “[...] France-Musique a été pendant onze ans l’équivalent, pour la musique de ce qu’est le livre de poche pour la littérature et plus particulièrement le livre de poche classique. [...] bref tout le trésor de la musique, de Monteverdi à Bartok [...]” Jean Dutourd, “La grande pitié de France-Musique,” *France-Soir* le 23-24 novembre 1975.

<sup>324</sup> 第 1 章で触れた作曲家のピエール・プティと同一人物。

<sup>325</sup> プティは 1970 年にラヴェル (*Ravel*, Paris, Hachette)、その後モーツァルト (*Mozart ou la musique instantanée*, Paris, Perrin, 1990) の伝記を執筆している。

<sup>326</sup> “Mozart, Beethoven ou Ravel, je le sais, sont terriblement démodés [...] On dit que le Français n’est pas musicien. On peut également affirmer que, depuis vingt ans, il a fait des progrès immense sur ce terrain. Est-il donc bien malin, au moment où nos compatriotes parviennent à grand peine à l’âge adulte sur le plan musical, de leur supprimer un instrument de culture aussi indispensable que le musée du Louvre ?,” Pierre-Petit. “France-Musique: Dissonances et bavardages,” *Le Figaro* le 27 novembre 1975.

ここでピエール＝プティが言及している「20 年間」という具体的な期間は、のちの内容との関連において重要な意味をもつであろう。デュトゥールとピエール＝プティの記事からは、フランス・ミュージックの聴取者は古典的で限定されたレパートリーを求めており、またそれを放送することは、同時代のフランスにおいて果たされるべき責務である、という考え方が読み取れる。

デュトゥールらの記事はまた、読者への共感あるいは連帯を前面に打ち出している点で特徴的である。デュトゥールは先の記事のなかで、「フランス・ミュージックは、貧者のオペラ座、サル・プレイエル、コンセール・コロヌであったのが、今では郊外の文化センターのように恐ろしくなってしまった」<sup>327</sup>と述べている。古典的レパートリーの軽視への批判が、専門的な知見を有する音楽評論家としての立場から行われたとすれば、読者への共感ないし連帯は、音楽愛好家という立場から行われたものだといえる。あるいはそれは、より一般的なレベルにおいて、対象を攻撃する際に文字メディアがとるレトリックの一環とみることもできるかもしれない。ルネ・シルヴァン<sup>328</sup>は、「[改革は] 孤独な人々、引退した人びと、労働者からなる聴取者、手紙が示しているように、フランス・ミュージックの聴取者に対する、満たされた思想家の小グループによる軽蔑 [である]」<sup>329</sup>と書いている。

デュトゥールやシルヴァンの言葉にみられるのは、フランス・ミュージックはパリの高級なホールとは異なり、高尚な文化＝教養を誰にもアクセス可能なかたちで提供する、という発想である。これは、FM 放送が始まった当初、FM 受信機は奢侈品であり、庶民の手の届くものとみなされていなかったこととは、きわめて対照的であり、のちに触れるように、1950 年代から 1970 年代にかけては、FM の受信が普及しその表象が変化したと推測できる。こうしたアクセス可能性と関連して、高尚なクラシック音楽に日常的、反復的に接することが精神的な満足をもたらす、という記述もみられる。デュトゥールは先の記事で、「音楽はすぐさま私たち

---

<sup>327</sup> “France-Musique qui était l’Opéra, la salle Pleyel et les Concerts Colonne du pauvre, est devenu sinistre comme une maison de la Culture de banlieue.” Jean Dutourd, *op. cit.* FM 放送開始当初、国営放送総監督のガブリエル・ドローネー Gabriel Delaunay (1907～1998) が、FM を「金持ちのラジオ」とみなし、普及を見込んではいなかったこと（第 1 章参照）を思いだしてもよいだろう。

<sup>328</sup> René Sirvin [生没年不詳]：フランスの舞踊評論家。ゾラの「私は弾劾する J’accuse…!」を掲載したことで知られる新聞『ローロール』で音楽・舞踊評論（1959～1979）、『ル・フィガロ』で舞踊評論（1979～）を執筆。

<sup>329</sup> “le mépris d’un petit groupe de penseurs satisfaits pour cet auditoire de solitaires, de retraités ou d’ouvriers qui, comme le courrier nous l’a montré, est celui de France-Musique.” René Sirvin, « France-Musique: Nos lecteurs s’en mêlent », *L’Aurore* le 3 décembre 1975, p. 18a.

を幸福あるいは平和で満たしてくれる」<sup>330</sup>と述べていた。ここで好まれるであろう音楽は、モーツァルトやベートーヴェンではあっても、メシアンやブーレーズではありえないことは、先にみた古典的レパートリーの重視から明らかである。

すなわち、これらの記事においてフランス・ミュージックは、クラシック音楽という文化＝教養を、万人の手に届きうる、カタログ化、パッケージ化されたものとして提示することによって精神的充足を聴く人に与える媒体、として捉えられている。このとき、聴き手が覚える、あるいは覚えるものとされている精神的充足は、「ディスタンクシオン」の意識と無縁ではないだろう。なおデュトゥールは、読者との連帯を表明するために「フランス人」という属性を持ち出し、「フランス・ミュージック」という名のチャンネルが、異国の野蛮な音楽を放送することとは、フランスの感受性を貶めるばかりか、西欧文化の威信をも傷つける、と大胆にも述べている。「フランス・ミュージックは、その名が示すように、特定の文明、特定の芸術的感受性に浸っており、何世紀もの間そこから養分を得てきたフランス人を対象としている」<sup>331</sup>というもの、同じくデュトゥールによる、同様の趣旨の発言である。著名な音楽評論家ベルナール・ガヴォティも 1970 年代前半、学士院で同様の態度を表明しており<sup>332</sup>、音楽をめぐる 1970 年代フランスの言説をたどるうえでこの発言は興味深い<sup>333</sup>。

改革への以上の批判からは、フランス・ミュージックが普及すべきとされる教養の在り方がみえてきたといえる。改革をめぐる記述を締めくくる前に、改革の主導者であるダンドレルとその上司にあたるヴォズランスキーとのやり取りから、彼らのあいだの意見の一致あるいは齟齬の有無を確認しておきたい。ダンドレルが改革に着手した当初、ヴォズランスキーは、ダンドレルの理念に共鳴するとの旨をラジオ番組で語っている。1975 年 9 月 19 日に放送されたニュースで、ダンドレルとヴォズランスキーはともに改革の意義を説いている。すなわち、ダンドレルが改革の眼目を、「アンチ・ヒットパレード、アンチ商業製作、アンチ・ショービジネス」<sup>334</sup>と表明したあと、ヴォズランスキーは次のように続ける。

---

<sup>330</sup> “elle [la musique] nous remplit aussitôt de bonheur ou de paix.” Jean Dutourd, *op. cit.*

<sup>331</sup> “France-Musique, comme son nom l’indique, s’adresse à des Français qui baignent dans une certaine civilisation, une certaine sensibilité artistique, qui s’en nourrissent depuis des siècles.” Jean Dutourd, *op. cit.*

<sup>332</sup> Bernard Gavoty, *Allons-nous vers un déclin du prestige français ? : Communication faite à la séance du 10 mai 1972*, Paris: Institut de France Académie des Beaux-Arts, 1972.

<sup>333</sup> デュトゥールとガヴォティは、それぞれ 1978 年と 1975 年にフランス学士院会員に選ばれている。

<sup>334</sup> “anti hit-parade, anti production commerciale, anti-show business.” “La nouvelle grille de France-Musique,” extrait des *Inter-Actualités de 13 heures*, diffusées le 19 septembre 1975 sur France Inter.

「ある種の音楽にショックを受ける聴き手が、ちょっとした記憶の欠陥に直面し、生きてきたなかで進歩したということ、かつては必ずしも好きではなかった音楽を今では好んでい  
る、ということをお思いだすことが望ましい [...] したがって、物事は動くのであり、ラ  
ジオは生き生きとして動いていなければならないのです。」<sup>335</sup>

このヴォズランスキーの発言には、趣味は変化して然るべきものである、とする発想を読み  
取ることができる。ここで、「音楽は複数形のさまざまな音楽からなり、そこには趣味がきわ  
めて多様なかたちで存在する。そしてこれらの趣味は変化する。絶対的な美学など存在しな  
い」という、先に挙げた発言を思いだしてもよいだろう。しかしながらヴォズランスキーは、  
音楽の諸ジャンルや傾向に優位性を与えず、あらゆる音楽を並列して扱うダンドレルとは、方  
針を異にしていた。ヴォズランスキーが放送において重視したのは、第2節でも引用した「永  
続的な性質」をもつ音楽、と彼がインタビューで語るものである。これは決して明快な表現で  
はないが、そこで排除されるべき音楽として、具体的にシャンソンやディスコを挙げていたこ  
とが思いだされよう。またヴォズランスキーは、ラジオの対談番組で、「悪い音楽 *mauvaise  
musique*」は存在するかというインタビューアーの問いに対して、一瞬沈黙したあと「凡庸な音  
楽 *musique médiocre* は存在します。それはたとえばショパンの初期の作品であり、それらは  
まったく面白くない *absolument pourvues d'intérêt*」と語っている<sup>336</sup>。

このような好悪の表明は、ヴォズランスキーにあってはきわめて異例であるが、これらの発  
言からは、ヴォズランスキーがダンドレルほどラディカルでなかったことが窺える。それに関  
連して、ヴォズランスキーは国立管弦楽団に、バーンスタインやチェリビダッケといった世界  
的に評価の高い指揮者を招いている。ヴォズランスキーはそれまでの音楽監督とは異なり、テ  
レビの音楽番組の製作から出発した人物であり、オペラ座と放送局との提携を結ぼうと努力す  
るなど、視聴者の関心を惹くことにたえず関心を払っていた。彼は「スタジオ、公開の演奏  
会、外部 [の演奏会] で、手段を理性的に用いることにより、音楽が聴き手にとって魅力的で

---

<sup>335</sup> “Il serait souhaitable que les auditeurs qui peuvent être choqués par certaines musiques facent à un petit défaut de la mémoire et se rappellent et se souviennent qu’ils ont eux-mêmes évolué au cours de leurs vies et qui n’ont pas toujours aimé la musique qu’ils aiment maintenant et inversement, quand j’avait vingt ans, il y a de la musique contemporaine [que] je détestais et que j’aimais beaucoup et maintenant j’ai parfois, j’ai complètement changé mon opinion sur ces musiques. Donc, les choses bougent et la radio doit être vivante et bouger.” *Ibid.*

<sup>336</sup> *Parti pris*, émission diffusée le 20 février 1976 sur France Culture.



温かみのあるものになることが私の理想です」<sup>337</sup>と述べている。当初は改革に理解を示していたヴォズランスキーであったが、改革から2年後の1977年、ヴォズランスキーとダンドレルが交わしたやり取りを見ると、両者の関係が悪化したことがわかる。

1977年秋、ダンドレルはついに辞任するが、その直前の夏、ヴォズランスキーは毎日のように、フランス・ミュージックの番組に注文を付ける通達を送り、「今後二度とこのようなことがないようにしてほしい」と何度も伝えている。たとえば8月18日に送られた通達では、深夜に放送された内容が問題となった。ヴォズランスキーは、この時間帯には週に3回、管弦楽演奏会の番組を入れてほしいと頼んでおり、ヴォズランスキーによれば、ダンドレルもそれに同意していた。しかし、8月6日から19日のあいだのプログラムを見ると、オーケストラの演奏会を扱った番組は、6日、13日、16日にしか放送されず、これでは2週間に3回しか入っていない、とヴォズランスキーは抗議している<sup>338</sup>。また同じ日には、番組の内容を明示しない、謎めいた番組タイトル（「トラヴェルソ Traverso」、「アンヌの鏡 Les miroirs d'Anne」、

「チチェレネッラ Cicerenella」など）は付けないでほしいと注文を付けている<sup>339</sup>。9月1日には、スペイン音楽を扱ったシリーズを例に出しながら、フランス・ミュージックでは、司会者が「可能な限り遠く主題から脱線する」傾向があり、これは現在の製作者の大半に見いだされる、嘆かわしく、苛立たしい傾向であると指摘している<sup>340</sup>。このような、ヴォズランスキーからの度重なる注文のためか、ダンドレルと製作者たちは、その後まもなく辞任した。

ダンドレルの改革が目ざしたのは、西洋芸術音楽の優位性を筆頭として、放送内容において前提とされる、種々の音楽のあいだのヒエラルキーを攪乱することであった。そして、そうしたヒエラルキーのひとつの現れである、西洋芸術音楽の古典的なレパートリーすなわち「カノン」は、1950年代から1970年代にかけてのFM放送すなわちフランス・ミュージックを通して人口に膾炙した。しかしながら、FM放送の登場以前、アンリ・バローは網羅的・百科事典的な教養を広めることを重視しており、その理念はダンドレルのそれと通底するものであった。ダンドレルの教養観を示す文章として、彼が1968年5月の出来事と文化＝教養との関係を綴っ

---

<sup>337</sup> “Je rêve que la musique devienne séduisante et chaleureuse pour l’auditeur par une utilisation rationnelle de nos moyens, tant en studio qu’en concert public et à l’extérieur.” Jacques Longchamp, “« Je veux donner à tous la rage de s’élever » nous déclare M. Pierre Vozlinsky, délégué général pour la musique de l’O. R. T. F.,” *Le Monde* le 11-12 février 1973.

<sup>338</sup> Pierre Vozlinsky, *Note pour Monsieur Louis Dandrel (c.c. Madame Baudrier et Monsieur Landrac)*, le 18 août 1977. (AN19890128/62)

<sup>339</sup> Pierre Vozlinsky, *Note pour Monsieur Louis Dandrel (c.c. M. Yves Landrac et Mme Nicole Girard)*, le 18 août 1977. (AN19890128/62)

<sup>340</sup> Pierre Vozlinsky, *Note à Monsieur Louis Dandrel*, le 1 septembre 1977. (AN19890128/62)

た『ル・モンド』の記事が挙げられるが、彼はそこで教養を一種の抗議の道具としてみなしている。「68年5月から5年：文化＝教養という語が意味しえたもの」と題されたこの記事は、68年5月の暴動で大きな役割を演じたグループ「3月22日運動」の報告書の抜粋であり、ダンドレルはここにみられる文化＝教養観に強く共感している。すなわち、「文化＝教養の抗議 contestation は、文化＝教養が抗議を丸め込むことなく、抗議を新しいかたちの嘘として利用することのないよう、行われなければならない<sup>341</sup>」「あらゆる芸術の創造は暴力であり、あらゆる政治的行動は暴力である。つまり暴力は、表現を妨害しようと企む権力に対して主体が有する唯一の手段なのである<sup>342</sup>」というものである。ヴォズランスキーが、聴衆には驚きを与えなければならないというときも<sup>343</sup>、こうした一種のショックを通じた教養の享受が念頭におかれていたと考えることが可能かもしれない。

---

<sup>341</sup> “La contestation de la culture doit se faire de telle façon que la culture ne puisse récupérer la contestation et l'utiliser comme une nouvelle forme de mensonge.” Louis Dandrel, “Mai 68, il y a cinq ans: Ce qu'a pu signifier le mot culture,” *Le Monde* le 25 mai 1973.

<sup>342</sup> “Toute création artistique est violence, toute action politique est violence, c'est que la violence est le seul moyen qu'a la subjectivité de s'exprimer contre un pouvoir qui vise à l'en empêcher.” *Ibid.*

<sup>343</sup> 第2章、註270参照。

## 第4章 フランスの公的音楽普及装置として

### 4-1. 文化省の音楽政策

本章では、本研究が対象とする期間中、フランス国営放送の音楽活動にとってもっとも大きな影響力をもつ出来事であった文化省の設置と、それに伴う国家的音楽行政の始動という文脈のなかで、国営放送がその音楽活動を通して文化行政とどのように関係したのか、また文化行政の枠組みのなかで国営放送の音楽活動がどのような役割を果たすことを求められたのかといった問題を扱う。そのためにまずは、文化省音楽局の音楽行政についての概要を示したあと、音楽局が設置されるまでに活動した2つの委員会に着目し、これらの委員会がどのような利害関心のもとに動いていたのか、またそれが国営放送の音楽政策とどのように関係しえたかを見ていく。

1959年、アンドレ・マルローを大臣に据えて発足した文化省は、文化アクションないし社会-文化アクション *action (socio-)culturelle* と文化アニマシオン *animation culturelle* という概念を導入し、芸術の民主化を軸とするフランス文化行政の指導理念を定着させた<sup>344</sup>。以後、フランスにおいて文化政策 *politique culturelle* という概念は、文化省に代表される国家組織の介入を含意するようになった。こうして1966年5月、マルセル・ランドウスキを課長 *directeur* として音楽課 *Service de la Musique* が発足する。それまで、音楽を含む芸術の行政は国民教育省 *ministère de l'Éducation nationale* の芸術人文科学総局 *Direction Générale des Arts et des Lettres* が管轄していた<sup>345</sup>。またそれまでは、音楽家のさまざまな問題を解決する音楽係 *bureau de la musique* のみが存在し、音楽の重要な活動である教育と歌劇場に関しては、前者が芸術教育課 *service des enseignements artistiques*、後者が劇場監督部 *Direction du théâtre* の管轄となっていた。

1966年5月、マルセル・ランドウスキを課長 *directeur* として発足した音楽局は、1970年末に改称され「音楽局 *Direction de la Musique*」となった。1966～69年、音楽課はまだ芸術人文科

---

<sup>344</sup> Moulinier, Pierre. “Action culturelle,” *Dictionnaire des politiques culturelles de la France depuis 1959*, Emmanuel de Waresquiel ed.: 10-12 (Paris: Larousse/CNRS Éditions), 2001. Moulinier, Pierre. “Animation culturelle,” *op. cit.*: 20-21 (Paris: Larousse/CNRS Éditions), 2001. Xavier Greffe et Sylvie Pflieger. *La politique culturelle en France* (1<sup>er</sup> éd., Paris, 2009. 2<sup>ème</sup> éd.). Paris: La Documentation française, 2015: 17.

<sup>345</sup> Noémi Lefebvre. *Enseigner la musique n° 12 Marcel Landowski: Une politique fondatrice de l'enseignement musical*. Lyon: Cefedem Rhône-Alpes Editeur, 2014: 35-37.

学総局、次いで「劇場、音楽、文学監督部 Direction des spectacles, de la musique et des lettres」に組み込まれた。音楽局という名称は、1998 年に「音楽・舞踊・演劇・見世物局 Direction de la Musique, de la Danse, du Théâtre et des Spectacles」に取って代わられるまで存続した。このように「音楽局」の呼称期間が長いことを考慮して、以下では本部署の名称を「音楽局」に統一する。

1966 年当時、ヨーロッパの大部分の国は 550,000 人の住人につき 1 つの常設オーケストラをもっていたが、フランスには 300 万の住民につき 1 つのオーケストラしかなかった。ランドウスキの音楽行政の目玉は、1967 年のパリ管弦楽団の設立であったが、それをモデルとして 3 つのオーケストラのカテゴリーが設けられた。すなわち「オーケストラ A」は 65 以上の音楽家（約 100 人が通常）を擁し、大都市に設けられる。「オーケストラ B」は約 40 の音楽家を擁し、中都市に設けられる。そして「オーケストラ C」は小都市に設けられる。こうして、1967～78 年のあいだに、14 の地域オーケストラを含む 18 の常設オーケストラが設置された。1969 年に策定された 10 年計画の実施のために、音楽局は「音楽地域 régions musicales」を設定し、各地域には音楽院、オーケストラ、歌劇場と音楽アクションを誘発、管理、協調させる行政組織をそれぞれひとつずつおくことが定められた。

1970 年代の 10 年間は、教育と普及という 2 つの領域が音楽政策の主要な対象であった。創作に対する援助は散発的なものにとどまり、アニメーションは実験的で限定された領域にとどまった。また、歌劇場に関しては、オペラ座のみに音楽局の予算の大半が充てられた。

いわゆる「研究」の分野に関していえば、音楽局は 1960 年代末から、クセナキスが率いる EMAMu (Equipe de Mathematique et d'Automatique Musicales) とジャン＝エティエンヌ・マリエが創設した「音楽創作国際センター Centre National de Création Musicale (CIRM)」に、わずかながらではあるが助成を行っていた。1969 年から 1974 年にかけて音楽局では、現代音楽と「研究」が小規模な助成の対象となっていたのである。しかしながらこの時期、音楽行政の施策の対象となる主要な分野は普及と教育という 2 つにもっぱら集中していた。

ところが、1968 年ころを境に、委嘱作品の数および電子音響創作に対する助成は急増し、委嘱作品数は 1973 年、それまでの 40 台を超えて 60 台に達した。また、1974 年まで、電子音響の作曲家に対する委嘱の要請に対しては、大半の場合却下が言い渡されていたが、その状況は 1974 年以降一変した。1967 年からフランソワ・ベイルらが申請していたパリ音楽院電子音響創作クラスの設置に関しては、1968 年、メシアンの働きかけにより開設の準備が整った。

この後に設置された公的音楽組織として筆頭に挙げられるのは IRCAM (Institut de Recherche

et Coordination Acoustique/Musique) であるが<sup>346</sup>、これ以後、いわゆる「研究」に関連する音楽創作は全面的な助成の対象となる。1974 年の 7 月、文化省事務次官 *secrétaire d'Etat à la Culture* に任命されたばかりのミシェル・ギー Michel Guy (1927-1990) が指名した、高級官僚出身の音楽局長ジャン・マウ Jean Maheu (1931-) が、アンジェで開かれた開設前の IRCAM の会合において、「研究」を国家規模で支援するとの方針を表明したのである。12 月にギーとともに開いた記者会見で、マウはこの計画の詳細を発表した。また 1976 年には、やはりギーの主導により、「現代音楽の普及のための連絡委員会 *Comité de liaison pour la diffusion de la musique contemporaine*」が設置された。

1976 年初頭から始まったマウの音楽政策の具体化は、1979 年初め、大臣官房と対立したマウが辞任し、局長がジャック・シャルパンティエ Jacques Charpentier (1933-2017) に代わった段階で、一区切りを迎えることになる。シャルパンティエは、初代音楽局長ランドウスキの脱中心化政策を基本的に引き継いだが、このことは、ランドウスキの構想にそもそも批判的であった『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール *Le Nouvel Observateur*』の評論家モーリス・フルーレには格好の攻撃対象となった。

シャルパンティエが 2 年の任期を経てこのポストから退き、1981 年に社会党政権の成立と軌を一にしてフルーレが音楽局長となると<sup>347</sup>、彼はそれまでのフランス文化政策のスローガンであった「文化発展 *développement culturel*」や文化アクションといった構想にとらわれることなく、広い意味での左派的な政策を展開していくことになる。

---

<sup>346</sup> 1974 年 3 月 7 日に行われた IRCAM に関する記者会見は、記者や音楽家のみならず文化組織の代表者らも招かれた一大イベントとなった。Veitl, Anne. *Politiques de la musique contemporaine: Le compositeur, la recherche musicale et l'État en France de 1958 à 1991*. Paris: L'Harmattan, 1997: 90. ただしランドウスキはこの組織の開設に対して難色を示していた。*Ibid.*: 92.

<sup>347</sup> 音楽局長就任以前のフルーレの経歴については Anne Veitl et Noémi Duchemin, *Maurice Fleuret: Une politique démocratique de la musique 1981-1986*, Paris: Comité d'histoire du ministère de la culture et de la communication, 2000: 41-42 などを参照。

#### 4-2. 文化省の2つの委員会

本節では、音楽を専門とする2つの政府系委員会、国家音楽委員会 *Comité national de la musique* と音楽問題の検討のための国家特命委員会 *Commission nationale pour l'étude des problèmes de la musique*（以下、特命委員会）それぞれのスタンスを比較する。両委員会は、文化省の音楽政策の形成過程に関係する史料の調査において、史料の量また内容からいって2つの重要な委員会であることが判明した。一見同様の趣旨のもと発足したかに思われる両委員会であるが、その設立経緯および目的の相違についてはこれまでの研究で十分に言及されてきたとはいいがたい。この違いを明らかにすることにより、文化省の音楽政策における眼目および策定の際の文化省関係者の関心の所在を明確にできると考えられる。

前者は、音楽行政の準備に直接関与したわけではないものの、その準備段階の末期で生じた特命委員会との対立関係は、音楽政策の策定に影響をおよぼした<sup>348</sup>。両委員会のスタンスの対照性については、綿密な資料調査によって音楽行政の準備過程を跡づけたノエミ・ルフェーヴル Noémi Lefebvre (1964-) の研究ですでに指摘されている。ルフェーヴルは、1964年に国家音楽委員会の委員長に就任したジャック・シャイエ Jacques Chailley (1910-1999) が、特命委員会の提言に対して批判的であったことなどを根拠として<sup>349</sup>、国家音楽委員会が旧来の制度の維持を目指したのに対して、特命委員会が文化アクションの理念に基づく制度の革新を構想したと示唆している。しかしながらルフェーヴルは、国家音楽委員会の設立時の目的や理念を一言で紹介するにとどめ<sup>350</sup>、「1959年から1965年にかけての、国家音楽委員会それ自体の影響を認めることは難しい」として、その活動の意義を明らかにするには至っていない。本節は、音楽政策の構想ではなく、1960年代半ばのフランスにおける音楽をめぐる議論の枠組みという観点から、両委員会の関心の所在を比較する。

国家音楽委員会は1956年、国民教育省の芸術人文科学総局の下で、国連教育科学文化機関（UNESCO）の国際音楽評議会 *Conseil international de la musique* にフランス代表として参加することを目的として設立された<sup>351</sup>。設立時の名誉委員 *membres d'honneur* のリストには、マルセル・デュプレやイベールといったフランス音楽界の大御所と並んで、1938年から1968年まで芸術アクションのフランス同盟（AFAA）の監督 *directeur* を務めたフィリップ・エルランジェ Philippe Erlanger (1903-1987) が名を連ねている。このように本委員会の使命は、フランス音

<sup>348</sup> Noémi Lefebvre, *op. cit.*: 61-99.

<sup>349</sup> *Ibid.*: 61-68.

<sup>350</sup> *Ibid.*: 41.

<sup>351</sup> AN19860732 - article 23.

楽界のプレゼンスを対外的にアピールすることにあつた<sup>352</sup>。上のリストを含む委員会設立時の文書には、こうした委員会の関心がいくつかの側面で表れている。たとえば、委員会の活動の実質を担う複数の作業部会 *Commissions de Travail* の一つである広報部会 *Commission de la Presse* は、印刷物の刊行を通して委員会の活動を対外的に知らしめることを任務とした。また、応接部会 *Commission d'Accueil* は、外国の諸委員会および音楽関係者との接触を行うものとされた<sup>353</sup>。

委員を務めた音楽家もこうした関心を共有している。1957 年 1 月 14 日の運営会議 *Conseil d'administration* では、「フランス音楽の擁護と拡大」を委員会の大義として掲げることが全会一致で採択された<sup>354</sup>。これらの交流は、音楽家である委員のみならず、委員会を管轄する芸術人文科学総局によっても重視されていた。国際音楽評議会の執行書記 *secrétaire exécutif* ジャック・ボルノフ *Jack Bornoff* が芸術人文科学総局の局長 *directeur* ジャック・ジョジャール *Jacques Jaujard* (1895-1967) に宛てた手紙 (1956 年 12 月 19 日) によれば、彼らの会談において、「パリに一時滞在する外国人音楽家がフランスの音楽家と出会い、同時代フランス音楽の録音を聴いたりスコアを読んだりすることができる拠点」を国家音楽委員会に併設するという案が提起されたという<sup>355</sup>。この「拠点」とは、その前日の 1956 年 12 月 18 日、国家音楽委員会事務局長 *secrétaire général* のレーモン・リヨン *Raymond Lyon* がジョジャールへ送った手紙で言及されている、「国際音楽ドキュメンテーション・センター *Centre de Documentation Musicale Internationale*」のことであると推察される。この手紙によれば、芸術人文科学総局が同センターの運営に必要な資材を提供するという旨が、RTF の音楽監督と国際音楽評議会の副会長 *vice-président* を兼務していたアンリ・バローからリヨンに伝えられた。以上のことから、本委員会はフランスの活発な音楽状況を諸外国の音楽関係者に認知させる役割を担っていたと言える。

一方特命委員会の関心は、フランス国外よりもむしろ国内に向けられていた。1962 年、初代文化相マルローの監督下で発足したこの委員会は、マルローが文化省設立時に表明した同省の使命（デクレ 59 - 889 号、1959 年 7 月 24 日）を基本理念とした。その文言は、1964 年に委員会がその活動全体の総括として提出した報告書の冒頭で引用されている。「文化省は人類の、まずはフランスの重要な作品を、最大数のフランス人に接近可能なものとし、私たちの文化遺産に対する最大の関心をかき立て、芸術とそれを豊かにする精神の作品の創造を奨励する […]」

---

<sup>352</sup> *Ibid.*

<sup>353</sup> *Ibid.*

<sup>354</sup> *Ibid.*

<sup>355</sup> *Ibid.*

<sup>356</sup>。この最終的な目標の達成を目指す文化省の下部組織として、委員会は「わが国において多様な形態の音楽活動が調和的に開花することを妨げているさまざまな欠陥、不備、障壁を明らかにし、「これらの問題に対する可能な解決策を文化相に提案」した<sup>357</sup>。国家音楽委員会との相違という点で注目されるのは、特命委員会が、国家音楽委員会が推進しようとした芸術外交にほとんど関心を示していないことである。上記の報告書で、特命委員会は「フランスが自国の音楽に、過去のものはもちろん今日のものも含めて、優位な立場を与えることは理に適っているように思われる」として、こうした態度の妥当性を認めつつも、「音楽を通したナショナリズムという教義を推し進めることは、どのような方法であれ問題にならない」と比較的強い表現で述べている<sup>358</sup>。以上の比較から明らかとなるのは、国家音楽委員会がフランスの音楽状況を対外的に示そうとしたのに対し、特命委員会が国内の既存の音楽組織の構造を刷新しようとしたことである。この2つの方向性は、その後まもなく展開されるジャーナリズム上の議論にも受け継がれる。

---

<sup>356</sup> “[...] rendre accessibles les oeuvres capitales de l'humanité, et d'abord de la France, au plus grand nombre possible de Français ; d'assurer la plus vaste audience à notre patrimoine culturel, et de favoriser la création des oeuvres d'art et de l'esprit qui l'enrichissent.” *ibid.* Xavier Greffe et Pflieger, *op. cit.*: 16.

<sup>357</sup> “[...]décèler les vices, les lacunes, les obstacles qui entravent en notre pays l'épanouissement harmonieux des différentes formes d'activité musicale”, “Proposer au ministre les solutions possibles de ces problèmes.” AN19860732/23.

<sup>358</sup> *Ibid.*



#### 4-3. 「国際化」をめぐる議論

本節では、1966年初頭から活発化した、ブーレーズの文化省音楽行政への関与とそれに対する新聞・雑誌上での批判を通して、ほぼ同時期に活動した上の2つの委員会の議論と、ブーレーズに対する批判とのあいだに共通の関心が見いだされること、そしてそれが国営放送の音楽活動における方向性とも連関していることを見ていく。

ブーレーズをめぐる批判の発端は、彼が特命委員会の副委員長ビアジニと連携しながらフランス音楽行政についての提言を行ったことだった。ブーレーズは、みずからが主催する現代音楽団体ドメヌ・ミュージカル *Domaine musical* の演奏会で、マルローおよびビアジニと初めて顔を合わせた<sup>359</sup>。ブーレーズとビアジニは、遅くとも1965年2月から書簡でやり取りを行っており、1966年2月11日の手紙でブーレーズは、フランスの現在の音楽状況に対する批判と、ドメヌ・ミュージカルに対する助成の要請を行っている<sup>360</sup>。彼はまた、パリ音楽院演奏会協会 *Société des Concerts du Conservatoire* の事務局長 *secrétaire* であるマニュエル・ルカサンス *Manuel Recasens* やオペラ座管弦楽団 *Orchestre de l'Opéra de Paris* のトランペット奏者アルテュール・アヌーズ *Arthur Haneuse* (1922-2010) と手紙をやり取りしており、4月にはパリ職業音楽家組合 *Syndicat des Artistes Musiciens de Paris* の名誉総裁 *président d'honneur* に就任する。そして1965年12月、『ル・モンド』にブーレーズとビアジニへのインタビューが掲載され、翌年1月にはパリ職業音楽家組合の機関誌に、アヌーズの後援により実現したブーレーズとビアジニの対談が掲載される<sup>361</sup>。この時点でブーレーズは、1964年末以来問題視されてきたフランスの音楽状況の衰退に終止符を打つことのできる人物とみなされていたのである。

ブーレーズがこうした期待を背負ったのは、彼の創作とその思考がドイツやアメリカで注目されており<sup>362</sup>、また1959年末から本格的に開始した指揮がフランスで高く評価されていたからであった<sup>363</sup>。彼自身、みずからのキャリアの特殊性はドイツやアメリカでの「国際的」活動にあるとみなしていた。彼は、パリ職業音楽家組合名誉総裁に就任した際の挨拶で次のように

---

<sup>359</sup> Jésus Aguila, *op. cit.*: 106. および Noémi Lefebvre, *op. cit.*: 76.

<sup>360</sup> Collection Pierre Boulez: Dossier sur la polémique avec André Malraux. ブーレーズの指揮とパトリック・シェロー Patrice Chéreau (1944-2013) の演出による記念碑的な《指環》の上演がバイロイトで行われたのは1966年である。

<sup>361</sup> Noémi Lefebvre, *op. cit.*: 76, 79.

<sup>362</sup> Arthur Haneuse, “Penser et agir: notre couverture Pierre Boulez,” *L’Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n°11 64<sup>e</sup> année: 3-4.

<sup>363</sup> Jésus Aguila, *op. cit.*: 25, 106.

語る。

私は Do it yourself というアメリカ的な方法を全面的に支持しています。それを実践するのはあなた方です！ みずからの手で状況を精力的に引き受けるのです、おべっかや甘い幻想に頼ってはなりません。そのとき初めて、政府の部署を無気力から目覚めさせ、あなた方の意志を考慮させることができます。すなわち国際的芸術家になるという目標をです<sup>364</sup>。(Boulez 1965: 34)

1966年初頭、ブーレーズのフランス音楽行政への関与が明らかになると、それまでフランスの音楽状況の衰退を嘆いていた批評家の一部がブーレーズの関与に注目し始める。彼の見解を中立的に報じる記事も見受けられるが<sup>365</sup>、中立的とはほど遠い批判を鋭い筆鋒で繰り広げたのがベルナール・ガヴォティである。クラランドン Clarendon という筆名の下でガヴォティが『ル・フィガロ』に執筆した記事には、皮肉交じりにブーレーズの指揮を称賛するものもあるが<sup>366</sup>、直接的に彼を非難する記述のほうが多く見受けられる。そこでは、ブーレーズの音楽行政に関する見解が検討されることなく、音楽行政に対して提言を行うブーレーズの行為そのものが批判されており、誹謗中傷ととれるような文言さえ現れる。たとえばガヴォティは次のように書いている。

彼ら〔ブーレーズと彼を支持する音楽家〕はまるで気が狂ったかのように振る舞い、文化省に対して烈しく陳情を行い、偉大な音楽家に宛てて怒りに燃えた手紙を書き、新聞雑誌を脅迫的な誹謗中傷で満たし、口を開けばかならず侮辱する。これはヒトラー的やり方である。われわれが操縦桿を引くか、さもなければ宇宙が減びるかだ<sup>367</sup>。

上の記事からおよそ3か月後に発表された記事でも、ガヴォティはブーレーズを「フランス音楽の総統 führer [ママ] を演じたがっている人物」と評し<sup>368</sup>、ブーレーズ自身、こうしたヒ

---

<sup>364</sup> Pierre Boulez, "Allocution de Maître Pierre Boulez," *L'Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n° 11, 64<sup>e</sup> année: 34.

<sup>365</sup> Martine Cadieu, "La musique et les musiciens: Le point de vue de Pierre Boulez," *Les Lettres françaises* le 12 mai: 25-26, 1966.

<sup>366</sup> Clarendon, "La musique se meurt," *Le Figaro* le 28 mars 1966.

<sup>367</sup> Clarendon, "Les grenouilles qui demandent un roi," *Le Figaro* le 28 avril 1966: 30.

<sup>368</sup> Clarendon, "Pour une direction de la musique...: dissonances bien orchestrées," *Le Figaro* le 29 avril 1966.

トラーとの比喻について言及している<sup>369</sup>。こうした結びつけは、ブーレーズの国際的キャリア、とりわけ 1959 年に彼がバーデン＝バーデンに居を定めたことと無関係ではない。ガヴォティは、ブーレーズがドイツを拠点としながら、フランスの官僚を「遠隔操作する *téléguider*」ことで音楽行政を方向づけようとすることを非難している<sup>370</sup>。一方、ガヴォティが自身の味方と名指したのはランドウスキとシャイエであり、ランドウスキの音楽局長就任が発表される直前、彼はランドウスキを音楽行政のトップに推薦したいと書いている<sup>371</sup>。こうした状況下でブーレーズの側を支持したのが『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』である。同誌の演劇評論家ギー・デュミュール Guy Dumur (1921～1991) は、マルローを批判するブーレーズの記事<sup>372</sup>を掲載し、ブーレーズはその英断に対して感謝を表明している<sup>373</sup>。またその半年ほど前には、作曲家のジャン＝クロード・エロワ Jean-Claude Éloy (1938～) が、フランス政府の委嘱制度に不満を表してアメリカへ活動の拠点を移すにあたって、フランス音楽状況の衰退を告発する文章を同誌に発表した<sup>374</sup>。

ガヴォティが、特命委員会副委員長のピアジニとブーレーズとの連携を批判し、国家音楽委員長のシャイエを支持しているという事実は、ルフェーヴルが示唆する両委員会の対立という構図の妥当性を証している。陣営がこのように明確に分離していたことは、ランドウスキが 1964 年に音楽教育視学官長に任命されたのは、シャイエや次期国家音楽委員長のダリウス・ミヨーがマルローに彼を推薦したからである、というランドウスキ自身の回想からも裏付けられる<sup>375</sup>。

ランドウスキが国家音楽委員会寄りであったことは、彼が音楽局で推進した音楽政策にも影響をおよぼしたと考えられる。その目玉として設立されたパリ管弦楽団 *Orchestre de Paris* の使命は、フランスの音楽家の水準の高さを外国へ向けてアピールすることにあった。また、ランドウスキが音楽局長に就任した数か月後に作成された「音楽政策 *Politique de la musique*」と題された文化省の文書には、ランドウスキと彼を取り巻く音楽家が、フランス音楽の価値の称揚

<sup>369</sup> Pierre Boulez, “Pourquoi je dis non à Malraux,” *Le Nouvel Observateur* le 25 mai 1966 n° 80: 37.

<sup>370</sup> Bernard Gavoty, “Marcel Landowski Inspecteur général de la musique,” *Aux Ecoutes du monde* le 5 mai 1966 n°2181: 35. および Bernard Gavoty, “Boulez a dit « Non » !,” *Aux Ecoutes du monde* le 2 juin 1966 n°2185: 33.

<sup>371</sup> Bernard Gavoty, “Marcel Landowski Inspecteur général de la musique,” *Aux Ecoutes du monde* le 5 mai 1966 n°2181: 35.

<sup>372</sup> Pierre Boulez, “Pourquoi je dis non à Malraux,” *Le Nouvel Observateur* le 25 mai 1966 n° 80: 36-37.

<sup>373</sup> *Lettre de Pierre Boulez à Guy [Dumur]*, le 24 mai 1966.

<sup>374</sup> Jean-Claude Eloy, “J’accuse,” *Le Nouvel Observateur* le 15 décembre 1965 n° 57: 40-41.

<sup>375</sup> Antoine Livio et Marcel Landowski, *Conversations avec Marcel Landowski*, Paris: Denoël, 1998: 98.

を重視していたことが記されている<sup>376</sup>。

---

<sup>376</sup> AN19950514/23.

#### 4-4. 国営放送の音楽活動に対する評価

第1節で確認したように、RTF 音楽委員会のメンバーは1960年代前半以降、文化省の音楽行政に関連する委員会にも出席するようになる。RTF の役割はこうして文化省音楽局のそれへと受け継がれたといっていよいだろう。RTF の音楽委員会が音楽局へいわば発展的に解消したことに伴って、ORTF には音楽委員会あるいはそれに類する音楽関係の諮問機関は設けられなかった。その他の文学、演劇などに関する専門委員会も廃止され、放送に関する討議は分野を問わずラジオ番組委員会およびテレビ番組委員会に委ねられるようになったのである。かつてRTF で文芸放送の監督を務めた詩人・劇作家のジャン・タルデュールにとって、「絵画、音楽、詩といった伝統的芸術ジャンルと、ラジオのような現代の芸術、および技術との関係の考察はもっとも心躍らせるもの」<sup>377</sup>だったが、一方でORTF ラジオ番組委員会第1回で開会の辞を述べた議長ピエール・デカーヴ Pierre Descaves (1896～1966) によれば、「芸術、音楽、知性、社会、経済、財政の進展におけるラジオの影響」こそ顧慮すべきものであった。芸術と技術が交錯する場としてのラジオから、芸術を包含する社会の総体を映し出す媒体としてのラジオへという視点の移行は、のちに挙げる音楽監督フィリップの発言にも通底している。

1964年にバローを継いで音楽監督に着任したフィリップにとって、国営放送は「フランスの文化活動を無力な状態から解放し、外国に向けてそのもっとも輝かしい威光を保証する」ものであり、「われわれの使命と義務は、未来のラヴェルやドビュッシーとなる人物の活躍を奨励すること」にあった。国営放送がフランス文化の威信を体現する使命を負っている点で、フィリップとバロー双方の理念はこのように共通していた。ただし、バローが「美学 *esthétique*」ではなく倫理 *éthique*」(Barraud 1978: 76)に基づき、フランス音楽全般をできる限り公平な立場から普及しようとしたのに対して、フィリップはそうした公平さをことさらに強調しなかった。

他方で、音楽を「自動車やアルミニウムと同等の資格をもった「産業」の1つ」(Philippot 1965: 5)とみなすフィリップが、音楽放送をレコードと同様の資格をもつ普及媒体とみなし、音楽産業におけるその役割に関心を払っていたことは明らかである。第1節で確認した通り、RTF の運営末期にあたる1960年代前半、FM チャンネルでは聴取者に馴染みの深い音楽作品が頻繁に扱われていた。その傾向を受けてフィリップは、1965年のラジオ番組委員会で、「教養と高品質のジューク・ボックス」<sup>378</sup>としてのラジオ放送のあり方を批判し、ラジオはレコードとは異

<sup>377</sup> Jean Tardieu. *Grandeurs et faiblesses de la radio*, Paris: Presses de l'Unesco, 1969: 72.

<sup>378</sup> AN19900214 article 43.

なる仕方でも音楽産業に貢献しなければならないと説く。同時代フランスの音楽が問題となるのはこの点においてである。すなわち、レコード産業が愛好家の嗜好に沿った作品群を積極的に提供するのに対して、ORTF ではフランスの現代音楽をより重点的に扱うことができるというのである。1967 年のラジオ番組委員会で、フィリップは「フランス・ミュージックにおける現代音楽の割合は 10 パーセント、フランス・キュルチュールにおける現代音楽の割合は 30 パーセント」<sup>379</sup>であるのが望ましい、つまりフランス・ミュージックではレコード産業の傾向と連動して、聴取者の好む古典的なレパートリーに重点をおきつつ、バローがかつて監督を務めた教養番組中心のチャンネル、フランス・キュルチュールでは、現代音楽により多くの放送時間を充てることができる、と述べている。実際、1967 年にモーリス・フルーレの主導で創設された現代音楽フェスティヴァル、パリ国際音楽週間 *Semaines musicales internationales de Paris* では、その演奏会の大半が ORTF によって放送された。1970 年には、同イベントの際に 1 日あたり少なくとも 7 時間の放送が行われている。フィリップがこうした現代音楽の普及を多面的な仕方でも展開したことも注目に値する。レコード会社エラートとの提携により発売された「ORTF 秘蔵音源 *Inédits de l'ORTF*」というシリーズでは、同時代フランスの音楽作品が重点的に扱われている。

このようにフィリップは、前任者バローの理念を共有しつつ、フランス音楽界の国際化と産業化の進行をともに考慮し、数年前から浮上しつつあったこの新たな動向に対応しようと努めた。その点で ORTF と文化省音楽局の活動は共通の方向性をもっていたといえるが、両者の関係はしばしば緊張状態に陥ることもあった。RTF の音楽委員会が文化省音楽局へ発展的に解消した 1966 年以降、音楽局はフランスの音楽活動全体を統括する最高行政機関として機能するようになる。一方 ORTF は、放送局自体は未だに情報省の管轄下にあったものの、その音楽活動については音楽監督の裁量に委ねられていた。言い換えれば、ORTF はいわば文化省の管轄外にある独立した巨大な音楽組織だったのであり、このことが放送局と文化省との間の連携を時おり困難にしたのである。

両者の提携がつねに首尾よく進んだわけではなかったことは、パリ管弦楽団と ORTF 所属の国立管弦楽団との関係に典型的な形で現れている。1934 年に国営放送パリ PTT で発足した国立管弦楽団は、大戦後とりわけ 1950 年代に、バローの監督のもとフランスを代表する管弦楽団としての地位を築いた。一方のパリ管弦楽団も、フランスの音楽界の水準の高さを国外にアピ

---

<sup>379</sup> AN 19900214 article 43.

ールするという趣旨のもと設立された管弦楽団であり、したがってパリ管弦楽団が、すでに名声を確立した国立管弦楽団との競合関係に陥ることは明白だった。フィリップは 1969 年にスイス・ロマンド・ラジオの音楽放送主任ジュリアン＝フランソワ・ズビンデン Julien-François Zbinden (1917-) に宛てた手紙で、ORTF と文化省の関係を説明しているが、そこでは給与やレコード録音の際の条件などの点で両管弦楽団の間に存在する差、また両楽団がともにシャンゼリゼ劇場で演奏会を開くという状況の不便さについて言及されている<sup>380</sup>。文化省と ORTF との間で交わされた書簡のやり取り全体から判断する限り、双方の担当者が各イベントに際して緊密に連絡を取り合うという段階にまでは至っていなかったようである。

フィリップの後任ヴォズランスキーは、ORTF 音楽監督としての任期は短いながらも、バローおよびフィリップの方針をおそらくは念頭におきながら、「危機」に対してどのような態度を表明するかを模索していた。前任の 2 者の場合と比べてヴォズランスキーの方針に一貫性を見だし難いのは、発言において彼が慎重に、こう言ってよければ戦略的に言葉を選んでいたらでもある。バローとフィリップはともに、フランス音楽の擁護や音楽産業への顧慮といった自身の方針を音楽監督就任時に明言していたが、ヴォズランスキーはこうした指導的方針が ORTF の音楽活動の諸側面を統御するという状況自体を避けようとしていたかのようである。それでも敢えてヴォズランスキーの政策を要約するならば、それは音楽番組が高尚さと大衆性の両方を同等の配分で兼ね具えることに重点をおいたものであった。これは彼がバローおよびフィリップと異なり、作曲家ではなくピアニストとして出発したこと、また ORTF においてラジオではなくテレビの番組製作に携わっていたことと関係している。テレビの音楽番組とラジオのそれとの相違は、容易に想像されうるように、テレビというメディアそのものがラジオと比べて大衆的であるという点にある。ヴォズランスキーは音楽監督就任以前、テレビの音楽番組の主任であったことから、大衆性を芸術音楽の番組にどのようにして導入するかという問いに、きわめて敏感に反応したにちがいない。

この問いに対するヴォズランスキーの姿勢は、具体的には音楽産業の進展に対する警戒感として表れている。1973 年に刊行された ORTF の広報用資料に彼が寄せた「音楽政策 La politique de la musique」という文章で、彼は次のように述べている。

「音楽放送は」非常に民主主義的であり、しかるべき方法で利用されるならば、この先何

---

<sup>380</sup> AN 20090288-5149.

十年もの間、わが国の同胞の音楽文化を広範に発展させることができるだろう——こうして二流の音楽商品を供給する産業が対立的に発展するのを阻止することができる。音楽産業の破壊的影響力はつとに知られるところである<sup>381</sup>。

ヴォズランスキーはテレビ音楽部門主任として、他ならぬテレビの「破壊的影響力」に警戒していた。しかし同時に、テレビを通してこそ「民主主義的」な音楽の普及が可能となることもヴォズランスキーは把握している。したがってここで彼の言う「しかるべき方法で利用されるならば」という留保は、別の言葉を使えば、ともすればあまりに大衆迎合的で、俗悪な性格をすら帯びかねないテレビの芸術音楽番組において、かつてバローがラジオの音楽番組に与えることを望んだような教養主義的、あるいはエリート主義的な高尚さを担保するという微妙な均衡をいかにして保つかという問題が解決できるのであれば、と言い換えられるだろう。ヴォズランスキー自身このディレンマが容易に解決されえないと考えていたことは、娯楽的要素とシリアスな要素を音楽番組においてどのように配分するかについて、ヴォズランスキーが新聞のインタビューで語った言葉からも明らかである。「ORTF がそうしたジャンル [娯楽的音楽番組] の製作を免れえないことは理解しています。しかし、国家のラジオ・テレビが商業主義の制約と官僚主義の不利益を共存させなければならないとするなら、行動することが必要であるように思います」<sup>382</sup>。

上の発言が示唆するように、大衆性と高尚さを兼ね具えた音楽番組の製作を最大の目標とするヴォズランスキーにとって、商業主義と同様、政府や省庁から国営放送に課せられうる制約もまた、彼の使命の遂行にとって不要なものでしかなかった。ヴォズランスキーは、先の発言で ORTF が「国家のラジオ・テレビ」であることを認めてはいるものの、同じインタビューで「私は国家を代弁しているのではありません」<sup>383</sup>と留保を付けている。すなわち彼は、ORTF がフランス国民の趣味や要望に応えるという点で公共的性格をもつ放送局、つまり「公共放送」であることについては同意するが、ORTF が政府の介入によって放送内容が制限されるような放送局、つまり狭い意味での「国営放送」であることは容認できないと言っているのだ。別の

---

<sup>381</sup> [ouvrage collectif] *O.R.T.F. 73*, Paris, Presses de la Cité, 1973: 129.

<sup>382</sup> Dandrel, Louis. “Entretien avec Pierre Vozlinsky: la musique à l’O.R.T.F. (propos recueilli par Louis Dandrel).” In *Le Monde* le 30 juin-1er juillet 1974.

<sup>383</sup> *Ibid.*



インタビューで彼が語った「私が好むのは威光よりも質です」<sup>384</sup>という言葉も、やはり同様の仕方で解釈できるだろう。

ヴォズランスキーが文化省による介入に懐疑的な姿勢を貫いたことは、彼が音楽局長ランドウスキの提案について述べた言葉に表れている。ヴォズランスキーは、放送局外部のメンバーからなる諮問機関として ORTF 音楽委員会 *Conseil de la Musique O.R.T.F.* を設立するというランドウスキの計画を「ORTF の音楽行政に対する不当な干渉という、無視することのできない危険」と評している<sup>385</sup>。また文化省の協定団体の候補として、ランドウスキが ORTF の室内管弦楽団を挙げたことに対して、ヴォズランスキーは「このような状況で ORTF の名がむやみやたらに持ち出されているようです。この種のことは今回限りであるということにあなたは同意してくださる、と私は確信しております」<sup>386</sup>とランドウスキに書き送っている。フィリップは先に挙げたズビンデンへの報告で、ORTF と文化省との関係はかならずしも良好なものではないと示唆している。ヴォズランスキーもまた文化省に対抗する姿勢を示すことによって、フランスを代表する音楽普及組織としての ORTF の矜持を維持しようと努めたのだといえる。

本章では、フィリップとヴォズランスキーがどのような方針に沿って芸術音楽の普及活動を組織しようと試みたのかを、同時代の芸術音楽をめぐる論争とそれへの応答である文化省の音楽政策との関連において、また ORTF の前身に相当する RTF の音楽政策との連続性ないし不連続性という観点から確認してきた。ラジオ放送が始まった 1930 年代以降、音楽放送の方向性の決定に高名な音楽家が関与してきたフランスにおいて、第 2 次世界大戦直後から 1980 年代末に至るまでの国営放送の音楽政策を論じることで、20 世紀後半のフランスの芸術音楽を取り巻く情勢がどのように変化したのかが浮き彫りとなった。

その推移の実態は複数の位相で確認されたが、ここで敢えてその要約を試みるならば、それはフランスの音楽家が他国に活動の場を求め始めたこと、またステレオ放送やテレビといった新しいメディアの普及に起因する、旧来是認されてきた音楽家の水準や普及の手段に対する抜本的な問い直しであったと総括することができる。本稿で「危機」と訳したフランス語 *crise* は、ソーゲの「音楽が殺されてしまう」<sup>387</sup>という言葉が示唆するように、現状の瓦解という切迫した状況を含意するものだったのである。本論争を主導した批評家が読者を煽動し、彼らがブレーズ対文化省という図式的なイデオロギー対立に論争の核心を持ち込んだことは否定できな

---

<sup>384</sup> G. G., *op. cit.*

<sup>385</sup> AN 19890536 article 13.

<sup>386</sup> *Ibid.*

<sup>387</sup> Henri Sauguet, “On tue la musique !,” *Arts* le 13 janvier 1965 n° 988: 1-2.

い。だが、バローからフィリップそしてヴォズランスキーへ至る音楽監督の交替に伴う国営放送の音楽政策の変遷を、本稿で概観したコンテクストを考慮せずに分析することはほとんど不可能だろう。

ORTF の音楽監督フィリップは危機に対処するため、音楽局の方針に大局的な形で従い、出版事業やレコード販売を通して現代音楽の普及に傾注した。一方ヴォズランスキーのねらいは、文化省はじめ政府機関の介入を排除しながら、視聴者の嗜好を反映すると同時に専門性の高い音楽番組を製作することにあった。ORTF の音楽監督の交代に伴う方針の転換は、1964 年からの 10 年間で上記の危機が乗り越えられつつあったことを示唆している。

## 結び

本研究は、フランス国営放送 ORTF およびラジオ・フランスの芸術音楽放送について、1964～1987 年を対象とすることで、その音楽政策を明らかにするとともに、それが同時代のフランスで持ちえた意義およびインパクトを考察するものである。ここで対象とした音楽監督は、ミシェル・フィリップとピエール・ヴォズランスキーの 2 人であった。対象期間は、ORTF が運営を開始した年から、モーリス・フルーレが文化省音楽局長に就任し、政策が安定期に入ったと思われる年までとした。

本研究が上記の音楽監督の政策を検討する際に着目したのは、「教養」と「国際化」という概念である。「教養」は、国営放送の初代音楽監督であるアンリ・バローが国営放送の音楽活動において重視した概念であり、この概念をどのように扱うかによって音楽監督の思想の特性が明らかになるといっても過言ではないからである。「国際化」は、ヴォズランスキーがその発言においてたびたび参照した概念であるが、1960 年代半ばのフランスの音楽評論においてこの概念は広く用いられるようになり、ヴォズランスキーの打ちだした政策は「国際化」への懸念から案出されたものと考えることができる。

第 1 章では、第 2 次世界大戦前後のフランス国営放送の状況から、RdF そして RTF の運営末期に至るまでの国営放送の音楽放送について、主要な出来事を整理するとともに、この時期に初代音楽監督を務めたバローの思想と功績を検証した。

第 2 章では、対象期間中に国営放送の音楽監督を務めたフィリップとヴォズランスキーそれぞれについて、経歴に関する情報を可能な限り詳細に提示するとともに、放送局の内部文書、新聞・雑誌等の多様な媒体に現れた彼らの発言を読み解いた。その結果、フィリップはバローと同様、フランスの音楽界のprestige を対外的にアピールすることを重視した一方で、バローが顧慮しなかったレコード等の音楽産業の重要性を認識していたことが明らかになった。またヴォズランスキーは、世界的に著名な指揮者を招聘することで、「質」を重視するとともに、シャンソンなど「質の低い」音楽を排除することによって、音楽放送における水準の確保に努めた。

第 3 章では、芸術音楽を放送した主要なチャンネルであるフランス・ミュージックとフランス・キュルチュールを採りあげ、それぞれの監督であったシャルル・シェーヌとギー・エリスマン（フランス・キュルチュールの音楽放送監督）の方針を考察した。シェーヌは、バローの

掲げた「放送内容の拡大」という目標を実行に移す一方で、聴取者にとって親しみやすいチャンネルとするよう、時間帯や内容における調整に工夫を行った。エリスマンは、国営放送でかつて活動したジャン・タルデュール率いる実験クラブが理想とした、「ラジオ芸術」すなわち音楽、演劇、文学といった芸術の諸ジャンルの融和を理想とし、フェスティヴァル・ダヴィニョンにおけるテアトル・ミュージカルの主要な推進者となった。

第4章では、20世紀半ばのフランスの音楽界において決定的な役割を果たした文化省音楽局を採りあげ、まずこの組織の成立の経緯を整理した。次いで、この経緯において、国営放送の音楽放送関係者が音楽局の設立準備に携わったことを明らかにし、音楽局の設立の背景にある関心や問題意識を国営放送の音楽放送関係者も共有していたと指摘した。そして、1960年代半ば、主要な一般新聞・雑誌で繰り広げられたピエール・ブーレーズに対する毀誉褒貶に着目し、ブーレーズのフランス音楽行政への参画に対する評論家の姿勢に、フランスの音楽界の「国際化」に対する彼らの懸念が現われていると論じた。

本研究の意義は第一に、先行研究では扱われてこなかった ORTF およびラジオ・フランスの音楽活動に着目し、その音楽政策を論じたことにある。これによって、これまでたびたび論じられてきた RTF の音楽政策との連続性・非連続性が浮かび上がった。

第二の意義は、国営放送の外部の重要なアクターとして、文化省および評論家の役割に着目し、これらのエージェントが芸術音楽の現況に対して抱いた関心が、国営放送の音楽放送関係者にも共有されていたことを明らかにした点にある。これによって、1960年代から1980年代半ばのフランスにおいて、音楽関係者が共有した関心の重要な一断面を明らかにすることができた。

本研究が、今後国営放送のその他の側面（附属団体の活動等）についての研究にとって基礎的な位置づけを獲得し、文化省やパリ音楽院など、フランスを代表する公的音楽組織同士の連携あるいは連関についての考察を促すことが期待される。

## 参考文献表

### [一次文献]

Adorno, Theodor W. “Analytical Study of the NBC Music Appreciation Hour.” In *Musical Quarterly* 78/2 (1994): 325-377.

Alain, Olivier. “Courrier musical: Brillants débuts de P. Vozlinsky boursier de la Vocation.” In [sans indication du nom de périodique] le 21 novembre 1961.

Amy, Gilbert. “La musique n’est pas seulement un objet de consommation et de digestion.” In *Le Monde* le 10-11 juin 1973.

[Ancelin, Pierre] “Entretiens sur l’art actuel : Pierre Ancelin avec Jacques Bondon. ” In *Les Lettres françaises* le 15 octobre 1964 n° 1044 n° 1050: 7.

Arnaud, Pierre. “La vie de la radio: travaillez en musique.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 4 (1949. 4): 5, 7. <sup>388</sup>

Aubin, Tony. “Propos impromptu: Tony Aubin.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1968: 154-163.

Barraud, Henri. “Le disque et la musique populaire : une mission d’enregistrement en Tchéco-Slovaque.” In *La Revue musicale* n°106 (juillet 1930): 39-44.

[Barraud, Henry.] 1947. “Trois grands services producteurs: Service de la Musique,” *Cahiers français d’information*. 81: 7.

---

<sup>388</sup> RTF 社内報。本誌は刊行年が改まるごとに1から号数が振られる。

Barraud, Henri, Arthur Honegger and René Leibowitz. "La radio et ses prétendants: enquête." In *La chambre d'écho: Cahiers du Club d'Essai de la Radiodiffusion Française* (1947): 27-29.

Barraud, Henry. "Grâce à la radio, la musique est un art vivant." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 3 (1951. 3): 16.

Barraud, Henry. "Centre d'Études Radiophoniques : Musique..." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1954. 11): 14-17.

Barraud, Henry. "Centre d'Études Radiophoniques : Musique... (suite)" In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1954. 12): 11-12.

Barraud, Henri. "Musique et radiodiffusion" In *Cahier d'étude de radio-télévision* 2 (1954): 145-157.

Barraud, Henry. *La France et la musique occidentale*. Paris: Gallimard, 1956.

Barraud, Henry. *Pour comprendre les musiques d'aujourd'hui*. Paris: Seuil, 1968.

Barraud, Henry. "Musique moderne et radiodiffusion." In *La Revue musicale* 316-317 (1978): 71-76.

Barraud, Henry. *Un compositeur aux commandes de la Radio : Essai autobiographique*. (Édité sous la direction de Myriam Chimènes et Karine Le Bail) Paris: Fayard / Bibliothèque nationale de France, 2010.

[Barrault, Jean-Louis.] "Jean-Louis Barrault." In *L'Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n° 11, 64<sup>e</sup> année: 5-6.

Baudrier, Jacqueline. "Lettre ouverte à Jean Dutourd: Pitié pour les vivants." In *France-Soir* 29 novembre 1975.

Baudrier, Jacqueline. "Du concert égoïste au musée imaginaire." In *Le Figaro* le 2 décembre 1975: 29.

Bayle, François (ed.). *Répertoire acousmatique: 1948-1980*. Paris: INA, 1980.

Berstein, Serge et Pierre Milza. *Histoire de la France au XXe siècle*. Bruxelles; [Paris]: Editions Complexe, 2003.

Bordaz, Robert. "La vie de la R. T. F. : conférence de presse du directeur général de la R. T. F." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1962. 5): 3-4.

Boulez, Pierre. "Allocution de Maître Pierre Boulez." In *L'Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n° 11, 64<sup>e</sup> année: 33-35.

Boulez, Pierre. "Une déclaration de M. Pierre Boulez sur la réforme des structures de la musique." In *Le Monde* le 26 avril 1966.

Boulez, Pierre. "Pourquoi je dis non à Malraux." In *Le Nouvel Observateur* le 25 mai 1966 n° 80: 36-37.

Bourgeois, Jacques. "Les inédits o. r. t. f.: De Couperin à Gilbert Amy." In *Micro et Caméra* 1973 8e année n°49: 31.

Bourgeot, Robert. "La diffusion d'une émission: Du micro à l'antenne." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1948. 1-2): 14-15.

Brelet, Gisèle. "La radio purifie et confirme la musique." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n° 3-4 (1955): 367-378.

Bril, France-Yvonne. "Portaits musicaux de l'O. R. T. F. 1 – La musique de chambre." In *Musica* n°153 janvier 1967: 43.

Bril, France-Yvonne. "Portaits musicaux de l'O. R. T. F. 2 – Un opéra par semaine." In *Musica* n°155 mars 1967: 36.

Bril, France-Yvonne. "Portaits musicaux de l'O. R. T. F. 3 – Le service des créations musicales." In *Musica* n°157 mai 1967: 34.

Bril, France-Yvonne. "Portaits musicaux de l'O. R. T. F. IV – Suzanne Le Conte Chef des émissions internationales." In *Musica* n°161/162 septembre-octobre 1967: 32.

Bril, France-Yvonne. "Portaits musicaux de l'O. R. T. F. V – Agathe Mella." In *Musica* n°159/160 juillet-août 1967: 56.

Brincourt, André. "L'O. R. T. F. et les Affaires culturelles: Malraux après Malraux ?." In *Le Figaro*, le 27 juin 1969.

Brun, Arno-Charles. "La vie de la radio : 1944-1954 une étape décisive de la R. T. F." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 4 (1955. 4): 9, 17.

Brun, Arno-Charles. "La radio au service des arts et de la culture." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1958): 6-7.

Brun, Arno-Charles. "Hommage à Paul Gilson." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1963. 5-6): 10-11.

Buffard, Roger et al. "La vie de la radio : la mise en œuvre du nouveau plan des programmes." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1951. 10): 11-13.

Cadieu, Martine. "La musique et les musiciens: Le point de vue de Pierre Boulez." In *Les Lettres françaises* le 12 mai: 25-26, 1966.



Caldaguès, Lise. "Notre métier : archives et documentation sonores." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1952. 11): 16-17.

Calvel, Jean. "Le style «radio»." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1948. 1-2): 12-13.

de Carlini, Marcel. "Notre métier : métiers radiophoniques." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 4 (1956. 4): 13-17.

Castel, N. "Resons français." In *France Réelle* le 18 janvier 1952.

C., B. "Concerto pour la main droite: Orchestre rouge à France-Musique." In *Le Canard enchaîné*, le 10 décembre 1975: 7.

Chacaton, Louis. "Notre métier : la vie d'une émission avant sa diffusion." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1948. 1-2): 11, 13.

Chacaton, Louis. "De l'orientation des programmes des émissions musicales." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 2 (1948. 3): 12.

Chacaton, Louis. "La radiodiffusion au service de la musique." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 6 (1952. 6): 9-10.

Chacaton, Louis. "La radiodiffusion au service de la musique. (suite)" In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1952. 7): 9-10.

Chailley, Jacques. "La radio et le développement de l'instinct harmonique chez les auditeurs." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n° 3-4 (1955): 401-412.

Chailley, Jacques. "Une lettre de M. Jacques Chailley." In *Le Monde* 3 mai 1966.

Chailley, Marie-Noël. "La Bibliothèque musicale de Radio-France." In *Revue internationale de musique française*, n° 3, novembre 1980: 424-429.

Chaynes, Charles. "Le point de vue de Charles Chaynes, conseiller délégué pour France-Musique." In *Micro et Caméra* 1974 93 année n°52: 20.

Chuteau, Claude. "Anticonservatisme au Conservatoire." In *Musica* n°170 / 171 juillet / août 1968: 19.

Couvreur, Jean. "Les musiciens, « parents pauvres » de l'art français: I. Un intrus qui veut absolument s'asseoir à une table où il n'est pas invité." In *Le Monde* le 7 août 1962.

Couvreur, Jean. "Les musiciens, « parents pauvres » de l'art français: II. Pour vivre le compositeur est-il condamné à gaspiller son génie ?." In *Le Monde* le 8 août 1962.

Couvreur, Jean. "Les musiciens, « parents pauvres » de l'art français : III. La nouvelle lutte du pot de terre contre le pot de fer." In *Le Monde* le 9 août 1962.

Clarendon [Bernard Gavoty]. "La musique aux abois." In *Le Figaro* le 29 novembre 1965: 24.

Clarendon, . "La musique se meurt." In *Le Figaro* le 28 mars 1966.

Clarendon. "Les grenouilles qui demandent un roi." In *Le Figaro* le 28 avril 1966: 30.

Clarendon. "Pour une direction de la musique...: dissonances bien orchestrées." In *Le Figaro* le 29 avril 1966.

Clarendon. "La musique bouge." In *Le Figaro* le 4 octobre 1966: 28.

Claverie, Marcel. "Faut-il fermer l'opéra?." In *Combat* le 22 décembre 1966.

Cocteau, Jean. “Le Club d’Essai.” In *La chambre d’écho: Cahiers du Club d’Essai de la Radiodiffusion Française* (1947): 13-16.<sup>389</sup>

Cœuroy, André. “Les premiers essais de musique radiogénique.” In *La Revue musicale* n° 106 (juillet 1930): 11-22.

Cœuroy, André. *Panorama de la radio*. Paris: Editions Kra, 1930.

Combescot, Pierre. “Radio-France: La boîte à musique: Un entretien avec Pierre Vozlinsky.” In *Les Nouvelles littéraires*, le 7 juillet 1976.

Costère, Edmond. “Audience de la musique d’aujourd’hui.” In *Cahiers d’Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 521-525.

Cordier, Stéphane. *La radio, reflet de notre temps*. Paris: Éditions-internationales, 1950.

Couvreur, J. “Vème plan: s secteurs particulièrement en péril: la sculpture et la musique.” In *Le Monde* le 30 décembre 1965.

D., L. “Les ondes Martenot.” In *Paroles françaises*, 29 décembre 1945.

Dandrel, Louis. “Les fonctionnaires de la musique.” In *Le Monde* le 2 juin 1971.

Dandrel, Louis. “La musique au petit écran: M. Vozlinsky veut franchir le stade de la consommation.” In *Le Monde* le 13-14 juin 1971.

Dandrel, Louis. “Mai 68, il y a cinq ans: Ce qu’a pu signifier le mot culture.” In *Le Monde* le 25 mai 1973: 21.

---

<sup>389</sup> 本誌は雑誌と銘打ってはいるものの、内容は記念論文集に近く、1号しか刊行されなかったため、号数は記載されていない。

Dandrel, Louis. “Entretien de Monsieur Michel Guy, Secrétaire d’État de la culture. (propos recueilli par Louis Dandrel).” In *Le Monde* le 28 juin 1974.

Dandrel, Louis. “Entretien avec Pierre Vozlinsky: La musique à l’O.R.T.F. (propos recueilli par Louis Dandrel).” In *Le Monde* le 30 juin-1er juillet 1974.

Dandrel, Louis. “Un entretien avec M. Michel Guy. [propos recueillis par Louis Dandrel]  
” In *Le Monde* le 28 juin 1974.

D. C., “France IV doit demeurer une chaîne musicale.” In *Le Monde* le 1 mars 1963.

Delauney, Gabriel. “La Radio-Télévision, puissance politique.” In *Cahiers d’Études de Radio-Télévision* n°18 (1958): 115-128.<sup>390</sup>

Dellard, Pierre. “L’Orchestre national de la Radiodiffusion danoise à Paris.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1955. 5): 15.

Dellard, Pierre. “La tournée de l’Orchestre National aux États-Unis et au Canada.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1962. 12): 3-7.

Dellard, Pierre et Louis Courtinat eds., “Henry Barraud : Une longue carrière radiophonique au cœur de la vie musicale et au service de la culture (1938-1965).” In *Cahier d’Histoire de la Radiodiffusion* 11-12 (1986): 137-217.

Dn., J. “Mort de Pierre Vozlinsky: Un musicien devenu manager.” In *Le Figaro* le 29 mars 1994.

Doucelin, Jacques. “Barricades mystérieuses : musique: les pièges de la radio.” In *Le Figaro* le 10 février

---

<sup>390</sup> 第17号から第19号まで合本。

1976.

Duhamel, Georges. “Notre métier: Centre d’Études Radiophoniques: la querelle de la radio: griefs, observations et vœux.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1950. 5): 12-18.

Dumesnil, René. “La place prépondérante de l’ORTF dans la vie musicale française.” In *Le Monde* le 19 novembre 1964.

Dupont, Pierre. “Résurrection du théâtre lyrique par des opéras de Chambre: Tel est le vœu du compositeur Henry Barraud.” In *Le Figaro* le 5 octobre 1964.

Durieux, Claude. “L’O. R. T. F. passe un contrat avec le gouvernement.” In *Le Monde* le 7-8 novembre 1971.

Durieux, Claude. “L’auditeur français boude toujours la « modulation du fréquence ».” In *Le Monde* le 21-22 novembre 1971.

Durieux, Claude. “Le volume des émissions musicales au « petit écran ».” In *Le Monde* le 28-29 novembre 1971.

Dutilleux, Henri. “Opinion d’un musicien sur le théâtre musical radiophonique.” In *Polyphonie* 1<sup>er</sup> cahier (1947-1948): 121-134.<sup>391</sup>

Dutilleux, Henri. “Au service de tous.” In *Roger Désormière et son temps*. Monaco: Éditions du Rocher, 1966: 115-126.

Dutourd, Jean. “La grande pitié de France-Musique.” In *France-Soir* le 23-24 novembre 1975.

---

<sup>391</sup> デュティユー所蔵史料に基づく音楽作品のリスト Productions originales du Service des illustrations musicales de la Radiodiffusion française (october 1944-juillet 1947) を含む。

Dutourd, Jean. “Pitié pour France-Musique.” In *France-Soir* le 30 novembre-1<sup>er</sup> décembre 1975.

Dutourd, Jean. “La grande pitié de France-Musique.” In *France-Soir* dimanche 23 lundi – 24 novembre 1975.

Duval, René. *Histoire de la radio en France*. Paris: Alain Moreau, c1979.

Elgey, Georgette et Michel Vincent. “A l’écoute des auditeurs (Enquête par Georgette ELGEY et Michel VINCENT).” In *La Nef* n°73-74 (février-mars 1951): 135-166.

Eloy, Jean-Claude. “J’accuse.” In *Le Nouvel Observateur* le 15 décembre 1965 n° 57: 40-41.

Erismann, Guy. “La grande semaine musicale de l’O. R. T. F. à Bourges: Une expérience nationale.” In *Musica* n°156 avril 1967 :25-26.

Even, Martin. “Dans le courrier de « Micro-Facteur »: La portée de France-Musique.” In *Le Monde*, le 2-3 novembre 1975: 11.

Feschotte, Jacques. “Maux et remèdes.” In *Réforme* le 19 février 1966 n° 1092: 7, 12<sup>392</sup>.

Fléchet, Anaïs. “Le Conseil international de la musique et la politique musicale de l’Unesco (1945-1975).” In *Relations internationales* 156 (2014): 53-71.

Fleuret, Maurice. “La chute de Paris.” In *Le Nouvel Observateur* le 29 décembre 1965 n°59: 28.

Fleuret, Maurice. “La guerre des musiciens.” In *Le Nouvel Observateur* le 4 mai 1966 n°77: 37-38.

Fleuret, Maurice. “Un grand chahut jubilant: C’est ce que Pierre Vozlinsky veut provoquer à l’O. R. T. F.

---

<sup>392</sup> 12 頁に記された本記事のタイトルは « Des maux aux remèdes » となっている。

Le pourra-t-il ?.” In *Le Nouvel Observateur* le 14/20 mai 1973: 75.

M. F. [Fleuret, Maurice]. “La musique qui dérange.” In *Le Nouvel Observateur* le 29 décembre 1975 n° 581: 60.

Froment-Coste, Y[ves]. “Dans les coulisses de la radio 2 France III: une grande dame qui ne veut pas mourir.” In *Télérama* n° 684, semaine du 24 février au 2 mars 1963: 3-5, 35.

Froment-Coste, Yves. “France-Musique: mutations en douceur.” In [*Télérama*] le 7 janvier 1978: 8-9.

Fulcher, Jane F. “Debussy as National Icon: From Vehicle of Vichy's Compromise to French Resistance Classic.” In *The Musical Quarterly* 94 (4) (2011): 454-79.

G. G. “Pierre Vozlinsky, Délégué Général pour la musique à l'O.R.T.F.: “J’ai même rencontré des administrateurs que je dérange, mais qui m’acceptent... .” In *Le Figaro* le 4 janvier 1974.

Gad, Georges. “Orchestre de Paris: inquiétude autour d’une disparition !.” In *Le Monde de la Musique*, n° 177 mai 1994: 7

Gaubert, Henry. “Rencontre avec Maurice Le Roux.” In *Musica* n°60 mars 1959: 35-38.

Gaussen, Frédéric. “3 projets de réforme de l’enseignement musical.” In *Le Monde* le 25 mars 1966.

Gavoty, Bernard. “Musique et mystique: le “Cas” Messiaen’.” In *Les Etudes*, 10 (October 1945): 21-37.

Gavoty, Bernard et Daniel Lesur. *Pour ou contre la musique moderne?*. Paris: Flammarion, 1957.

Gavoty, Bernard. “Mon ami Daniel-Lesur.” In *Musica* n°59, février 1959: 44.

Gavoty, Bernard. “L’Etat se désintéresse de la musique.” In *Aux Ecoutes du monde* le 11 novembre 1965

n°2156: 35.

Gavoty, Bernard. "Marcel Landowski Inspecteur général de la musique." In *Aux Ecoutes du monde* le 5 mai 1966 n°2181: 35.

Gavoty, Bernard. "Boulez a dit « Non » !." In *Aux Ecoutes du monde* le 2 juin 1966 n°2185: 33.

Gavoty, Bernard. "Remue-ménage." In *Aux Ecoutes du monde* le 22 septembre 1966 n°2201: 30.

Gavoty, Bernard. *Allons-nous vers un déclin du prestige français ? : Communication faite à la séance du 10 mai 1972*. Paris: Institut de France Académie des Beaux-Arts, 1972.

Gladyman, Claude et Henri Dutilleul, *Mystère et mémoire des sons: Entretiens avec Claude Gladyman* (première édition, Paris: Belfond, 1993), Arles: Actes Sud, 1997.

Golée, Antoine. "La musique contemporaine et le public." In *Musica* n° 11, février 1955: 2-5.

Golée, Antoine. "Ce qui est à vomir et ce qui ne l'est pas." In *Musica* n°33, décembre 1956: 9-13.

Golée, Antoine. "La vie profonde et multiple de la musique contemporaine." In *Musica* n°56, novembre 1958: 42-44.

Golée, Antoine. "Tendances de la musique concrète," *La Revue musicale* n° 236 1957: 36-44.

Golée, Antoine. "Entretien avec René Nicolé délégué général de coordination et de diffusion de la musique en France." In *Musica* n°165 janvier 1968: 14-15.

Golée, Antoine. "Paris – Journées internationales de musique contemporaine." In *Le Courrier musical de France*, 4e 1969: 222-224.



Goléa, Antoine. "Evolution de la musique française vivante." In *Le Courrier musical de France*, 2e 1970: 61-63.

Gousseau, François. "A la gloire de la musique française." In *Paroles françaises* le 17 novembre 1945: 3.

Gousseau, François. "Claude Arrieu et les gueux au pards." In *Paroles françaises* le 15 décembre 1945: 3.

Gousseau, François. "Musique ." In *Paroles françaises*, 27 avril 1946: 5.

Griffin R. J. T. "Le troisième programme de la B. B. C." In *La chambre d'écho: Cahiers du Club d'Essai de la Radiodiffusion Française* (1947): 24-26.

Guinard, Philippe. "La vie de la radio : après le Premier Congrès International consacré aux aspects sociologiques de la musique à la radio." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1955. 1): 7-9.

Guinard, Philippe. "La vie de la radio : après le Premier Congrès International consacré aux aspects sociologiques de la musique à la radio (suite)." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 2 (1955. 2): 5-7, 23.

Guinard, Philippe. "La vie de la radio : après le Premier Congrès International consacré aux aspects sociologiques de la musique à la radio (suite)." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 3 (1955. 3): 6-8.

Guithon, Thérèse. "Pauvres parmi les pauvres de notre enseignement." In *Le Figaro* le 30 novembre, 1965.

Guitton, Pierre. "Le service de la coordination des programmes." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 4 (1948. 5): 12.

Guitton, Pierre. "Le nouveau plan des programmes." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9

(1949. 10): 6-7

Haby, René. "Point de vue: la rénovation de l'éducation artistique." In *Le Figaro* le 3 février 1976.

Hamon, Jean. "Soyons sérieux." In *Combat* le 23 avril 1965.

Hamon, Jean. "La petite musique des copains." In *Combat* le 23 juillet 1965.

Hamon, Jean. "Maisons de la Culture: Musique et public." In *Combat* le 6 août 1965.

Hamon, Jean. "Maisons de la Culture: Musique et public (II)." In *Combat* le 13 août 1965.

Hamon, Jean. "Décentraliser la vie musicale." In *Combat* le 27 août 1965.

Hamon, Jean. "La vie musicale en province (II)." In *Combat* le 3 septembre 1965.

Hamon, Jean. "La vie musicale en province (III)." In *Combat* le 10 septembre 1965.

Hamon, Jean. "Mort...sans transfiguration." In *Combat* le 1 octobre 1965.

Hamon, Jean. "Pour une nouvelle politique des concerts à l'ORTF." In *Combat* le 22 janvier 1966.

Hamon, Jean. "Adieu donc, herr Boulez." In *Combat* le 31 mai 1966.

Hamon, Jean. "L'affaire Eloy et les commandes de l'Etat." In *Combat* le 31 décembre 1965.

Hamon, Jean. "Problèmes de la musique." In *Combat* 15 juillet 1966.

Hamon, Jean. "Il est temps d'agir." In *Combat* 6 janvier 1967.

Haneuse, Arthur. "La Présidence d'honneur de notre Syndicat." In *L'Artiste musicien de Paris* novembre-décembre 1952-janvier 1963 n°3 62<sup>e</sup> année: 36-37.

Haneuse, Arthur. "Penser et agir: notre couverture Pierre Boulez." In *L'Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n°11 64<sup>e</sup> année: 2-4.

Haneuse, Arthur. "A votre intention...." In *L'Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n°11 64<sup>e</sup> année: 13-14.

Hauter, François. "Pierre Vozlinski: « Un orchestre est un commando d'élite »." In *Le Figaro* le 3 août 1993.

Hilleret, Georges. "220 heures de grande musique l'année prochaine annonce Pierre Vozlinsky." In *Télé 7 jours* n° 604, semaine du 20 au 26 novembre 1971: 111.

Hilleret, Georges. "Louis Dandrel répond aux mélomanes en colère : Tempête sur « France Musique » ." In *Télé 7 jours*, du 13 au 19 décembre 1975: 104.

Hodeir, André. "L'activité du Groupe Marigny." In *Musica* n°7 octobre 1954: 30-32.

Humble, Keith. "Un lieu de conflit." In *Le Nouvel Observateur* le 2 février 1966 n° 64: 35.

Jameux, Dominique. *Pierre Boulez*. Paris: Fayard: Fondation SACEM, 1984.

Labrande, C[hristian]. "Entretien avec Pierre Vozlinsky." *Sonovision* n° 236 mars 1981: 72.

Labroca, Mario. "Le rôle de la radio dans la culture musicale d'aujourd'hui." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1956. 12): 21-24.

Lafosse, Roger. "Remuer la cuillère." In *Le Nouvel Observateur* le 9 novembre 1966 n°104: 47-48.

Lambert, Gilles. "Marseille capitale du "Nouvel Opéra"." In *Le Figaro littéraire* 31 mars 1966 n°1041: 3.

Landowski, Marcel. "Entretien avec Marcel Landowski." In *Musica* septembre 1965 n°138: 16-18.

Landowski, Marcel. "La guerre des musiciens (II): Marcel Landowski: Un programme de grande envergure." In *Le Nouvel Observateur* le 29 juin 1966 n°85: 36-37.

Landowski, Marcel. "L'organisation de la musique en France." In *Le Courrier musical de France*, 1e 1967 [sans numéro de page].

Landowski, Marcel. *Batailles pour la musique*. Paris: Seuil, 1979.

Landowski, Marcel. "Un entretien avec Marcel Landowski: l'Institut de France prépare son bicentenaire (propos recueillis par Yves Kornicker)." In *Le Figaro*, le 16 mai 1994.

Landowski, W. L. "Le rôle actuel du disque radiodiffusé dans l'enseignement de la musique." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 458-461.

Lannes, Sophie. "Ecoutez la musique: *L'Express* va plus loin avec Pierre Vozlinsky." In *L'Express* n° 1493 du 16 au 22 février 1980: 114-131.

Lefebvre, Noémi. *Enseigner la musique n° 12 Marcel Landowski: Une politique fondatrice de l'enseignement musical*. Lyon: Cefedem Rhône-Alpes Editeur, 2014.

Le Flem, Paul. "Henry Barraud." In *Musica* n°67 octobre 1959: 42-43.

Léon, Georges. "Les musiciens en alerte (L'O.R.T.F. dissout trois de ses orchestres de province)." In *L'Humanité* le 10 novembre 1964.

Léon, Georges. "La musique en France serait dirigée, mais par qui ?." In *L'Humanité* le 29 avril 1966.

Léon, Georges. "La musique en France serait dirigée, mais par qui ? (II) ." In *L'Humanité* le 3 mai 1966.

[Le Roux, Maurice]. "Maurice Le Roux." In *L'Artiste musicien de Paris* 2<sup>e</sup> trimestre 1965 n°11 64<sup>e</sup> année: 9-10.

Lescaut, Sonia. "Assisterons-nous à l'agonie de la musique ?." In *Arts* le 13 janvier 1965.

Lescaut, Sonia. "On tue la musique 2: Une enquête de Sonia Lescaut: Cessons d'être la dernière nation amusicale du monde." In *Arts* 27 janvier 1965.

Leschi, Général. "L'équipement culturel de la R. T. F." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1962. 11): 20-22.

Liebermann, Rolf. "Radio und Neue Musik." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 518-520.

Livio, Antoine et Marcel Landowski. *Conversations avec Marcel Landowski*. Paris: Denoël, 1998..

Loiseau, Jean-Claude et Guillemette de Vericourt, "France-Musique six mois après." In *L'Express* n° 1275, le 15-21 décembre 1975: 116-117.

Longchamp, Jacques. "Au Festival de Hollande: Pierre Boulez dirige «Pli selon pli»." In *Le Monde* le 10 juillet 1962.

J. L. [Jacques Longchamp] "Les projets de l'opéra de Marseille." In *Le Monde* 10-11 octobre 1965.

Longchamp, Jacques. "Les journées de Donaueschingen foire de la musique d'avant-garde." In *Le Monde* 28 octobre 1965.

J. L. [Longchamp<sup>393</sup>, Jacques] “La Société des concerts menace de fermer ses portes aux compositeurs et solistes français.” In *Le Monde* le 28-29 novembre 1965.

[Longchamp, Jacques.] “La crise de la société des concerts.” In *Le Monde* le 1 décembre 1965.

J. L. [Longchamp, Jacques] “Les concerts Lamoureux protestent à leur tour.” In *Le Monde* le 7 décembre 1965.

Longchamp, Jacques. “L’histoire d’une crise.” In *Le Monde* 3 mai 1966.

Longchamp, Jacques. “Bhahmanes et Parias.” In *Le Monde* 6 mai 1966.

Longchamp, Jacques. “Tito Gobbi refuse de chanter à l’Opéra.” In *Le Monde* le 19 mai 1966.

Longchamp, Jacques. “P. Boulez dit non à Malraux.” In *Le Monde* 26 mai 1966.

Longchamp, Jacques. “« Je veux donner à tous la rage de s’élever » nous déclare M. Pierre Vozlinsky, délégué général pour la musique de l’O. R. T. F.” In *Le Monde* le 11-12 février 1973.

J. L. [Longchamp, Jacques] “La crise des orchestres symphoniques.” In *Le Monde* le 15 décembre 1965.

J. L. [Longchamp, Jacques] “Le compositeur J. C. Eloy quitte la France.” In *Le Monde* le 17 décembre 1965.

Longchamp, Jacques. “J. C. Eloy s’explique.” In *Le Monde* le 29 janvier 1966.

Longchamp, Jacques. “La musique contemporaine à portée d’oreille.” In *Le Monde* le 10 juin 1971.

---

<sup>393</sup> 原資料では Longchamp となっているが、g を抜いて Lonchapmt と綴られる場合もある。

J. L. [Jacques Longchamp]. “Musique à Radio-France: les obstacles et les moyens de Pierre Vozlinsky.” In *Le Monde* le 10 octobre 1980.

Louvet, Michel. “A propos de S. M. I. P.: Reflexions sur un festival.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1967: 23-26.

Lutigneaux, Roger. “Y a-t-il une « culture populaire ? » .” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 2 (1953. 2): 11.

Lutigneaux, Roger. “La vie de la radio : les émissions culturelles de la R. T. F.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 4 (1954. 4): 6-7.

Lutigneaux, Roger. “La vie de la radio : les émissions culturelles de la R. T. F. (suite)” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1954. 5): 4-5.

Lutigneaux, Roger. “Notre métier : vocations nouvelles : les métiers de la radio.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1955. 1): 12-14.

Lutigneaux, Roger. “Problèmes de culture et solutions radiophoniques.” In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°12 (1956): 259-275.<sup>394</sup>

Lyon, Raymond. “Entretien avec Michel Philippot.” In *Le Courrier musical de France* n°69 1er trimestre 1980: 2-4.

Magne, Jacques. “Aperçu sur les nouveaux programmes de la saison radiophonique 1953-1954.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1953. 8-9-10): 11.

---

<sup>394</sup> 第9号から第12号まで合本。

Maquet, Jean. 1965. "Haute Fidélité: un bien ou un mal pour la musique ?." In *Paris Match* 23 mars: 3-5, 7, 9.

Mandrou, Robert et al. "Les intellectuels et la culture de masse." In *Communications* n°5 (1965): 13-44.

Marie, Jean-Etienne. "La radiodiffusion devant le problème de l'initiation à la musique contemporaine." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 534-537.

Marie, Jean-Etienne. "Pour ou contre la musique pure à la télévision." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°24 (1959): 355-376.<sup>395</sup>

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: II. La musique se consomme désormais comme un produit fabriqué." In *Combat* le 11 mai 1966.

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: III. Situation du compositeur." In *Combat* du 12 mai 1966.

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: IV. La tentation de la < table rase >." In *Combat* le 13 mai 1966.

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: V. Pour favoriser la décentralisation." In *Combat* du 16 mai 1966.

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: VI. L'art lyrique ne pourra survivre qu'en devenant un < théâtre essentiel >." In *Combat* du 19 mai 1966.

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: VII. Pour de nouvelles structures." In *Combat* du 23 mai 1966.

---

<sup>395</sup> 第22号から第24号まで合本。



Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France: IX. La réforme de l'enseignement." In *Combat* le 28. 29 mai 1966.

Marie, Jean-Etienne. "Les problèmes de la musique en France : X. La formation du musicien." In *Combat* le 30 mai 1966.

Martinoty, Jean-Louis. "Un chœur louche contre « France-Musique » ." In *L'Humanité*, lundi 8 décembre 1975, p. 10.

Matras, Jean. "Centre d'Études Radiophoniques : Radio et vulgarisation scientifique : « L'image sonore a-t-elle une valeur pédagogique ?»." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1952. 8-9-10): 16-17.

Matras, Jean. "Centre d'Études Radiophoniques : Radio et vulgarisation scientifique : « L'image sonore a-t-elle une valeur pédagogique ?» (suite)." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1952. 11): 17-19.

Matras, J. J. "Essai sur l'efficacité des moyens utilisés pour atteindre le public par la Radiodiffusion." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1963. 10): 18-22.

Mayor, Francis, Eustache et Christiane Prakash, "Desaccords sur France-Musique." In *Télérama*, n° 1348, du 15 au 21 novembre 1975: 80-82.

Meunier, Paul. "France Musique n'est pas une chasse gardée." In *Télérama* n° 891, semaine du 2 au 8 octobre 1966: 52-53.

Meunier, Paul. "Henry Barraud: Savez-vous « regarder » la musique ?." In *Télérama* n° 891, semaine du 12 au 18 février 1967: 64-65.

Meunier, Paul. "Michel Philippot (responsable de la musique à la Radio française): "Nous irons chercher les auditeurs dans les banlieues et les usines..."." In *Télérama* n° 982, semaine du 10 au 16 novembre 1968: 67-69.

Meunier, Paul. "France-Musique : une île déserte ?." In *Télérama*, n° 1351, 6 au 12 décembre 1975: 82-83.

Michel, Gérard. "Les concerts." In *Paroles françaises* le 2 mai 1947.

Michel, Gérard. "Paris... Vienne... Budapest." In *Paroles françaises* le 23 avril 1949.

Michel, Gérard. " "Première mondiale" du Concerto pour ondes Martenot et orchestre, d'André Jolivet." In *Paroles françaises* le 7 janvier 1949.

Michel, Gérard. "Des concours internationaux." In *Paroles françaises* le 7 janvier 1949.

Michel, Gérard. "Le plus grand événement musical de l'année." In *Paroles françaises* le 2 mars 1949.

Michel, Gérard. "Réflexions sur la musique et les musiciens en France : Un massacre en musique I. Les interprètes." In *Paroles françaises* le 6 août 1948.

Michel, Gérard. "Un massacre en musique II. Les compositeurs." In *Paroles françaises* le 6 août 1948.

Michel, Gérard. "Un massacre en musique III. Musique et musiciens interdits." In *Paroles françaises* le 20 août 1948.

Michel, Gérard. "Un massacre en musique IV. Le public." In *Paroles française* le 27 août 1948.

Michel, Gérard. "Un massacre en musique V. De l'éducation musicale." In *Paroles françaises* le 3 septembre 1948.

Michel, Gérard. "De l'utilité d'un art annexe." In *Paroles françaises* le 8 octobre 1948.

Michel, Gérard. "Les trois sommets de la musique de chambre français." In *Paroles françaises* le 15 octobre 1948.

Michel, Gérard. "Un grand chef d'orchestre: Jean Fournet Un grand pianiste: Jean Doyen." In *Paroles françaises* le 22 octobre 1948.

Michel, Gérard. "Classique... quand même !." In *Paroles françaises* le 1 avril 1949.

Michel, Gérard. "Prélude pour une grande saison musicale." In *Paroles françaises* le 7 octobre 1951.

Michel, Gérard. "Une « Année d'Indy », bien sûr, mais qu'elle soit intelligemment conçu." In *Paroles françaises* le 27 janvier au 9 février 1951.

Michel, Gérard. "Beethoven ? Pourquoi pas... ." In *Paroles françaises* le 27 janvier au 10 février 1951.

Michel, Gérard. "Avant-propos musical." In *France Réelle* le 15 novembre 1951.

Michel, Gérard. "Charles Kœchlin était-il un musicien populaire ?." In *France Réelle* le 7 décembre 1951.

Ministère d'État Affaires Culturelles. *Commission nationale pour l'étude des problèmes de la musique: Rapport 1963-1964*. Paris: Ministère d'État Affaires Culturelles, 1964.

M. M., "Pour le Groupe « Contact »: Conférence de Pierre Boulez sur les problèmes contemporains de la composition musicale." In *Les Dernières Nouvelles d'Alsace* le 15 novembre.

Morin, Edgar. "L'industrie culturelle." *Communications* n° 1, 1961: 38-59.

Oberlin, Jean-Marie. "La vie de la Radio : le programme Haute-Fidélité France IV au Service de la

Musique.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1960. 5): 10-12.

Olivier, Eric. “L’O. R. T. F., service public de la culture.” In *Le Monde* le 30 juin 1971.

Oulif, Jean. “Publics et programmes radiophoniques.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1952. 8-9-10): 14-15.

Philippot, Michel. “Pour une musique vivante.” In *Micro et Caméra* n°3 (novembre 1965), p. 5, 15-16.

Philippot, Michel P. “Carte blanche à Michel Philippot: Compositeur et directeur de la musique à l’O. R. T. F. « Inquiétudes » .” In *Musica* n°186 novembre 1969: 23-24.

Philippot, Michel. *Écrits (en 2 volumes)*. Sampzon: Éditions Delatour France, 2010.

Pierre-Petit, “Davantage d’auditeurs pour France-Musique “nouvelle manière”.” In *Le Figaro* le 17 décembre 1975: 23.

Pierre-Petit. “France-Musique: Dissonances et bavardages.” In *Le Figaro* le 27 novembre 1975: 1, 29.

Pinchard, Max. “Pour ou contre la stéréophonie ?.” In *Musica* n°102 septembre 1962: 32-35.

Pinchard, Max. “Reflexions sur l’animation musicale.” In *Musica* n°187 décembre 1969: 48-50.

Porché, Wladimir. “La situation de la Radiodiffusion Française et ses perspectives d’avenir.” In *Cahiers français d’information* 81 (1947. 4): 3-6.

Porché, Wladimir. “Missions de la Radiodiffusion.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1949. 1): 16-18.

Porché, Wladimir et Henri Barraud. “Quelques questions posées.” In *La Nef* numéro special (1951. 2-3):

168-173.

Porché, Wladimir. “Le rôle de la Radio-Télévision dans l’évolution de la connaissance.” In *Cahiers d’Études de Radio-Télévision* n°7 (1956): 255-269.<sup>396</sup>

Rackam, “« Qu’on cesse de nous casser les oreilles » .” In *Libération*, mercredi 3 décembre 1975, p. 10.

Raugel, Félix. “Recherches et réalisations musicologiques.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1949. 7): 21.

Raven-Hart, R. “La musique et la T. S. F.” In *La Revue musicale* n°106 (juillet 1930): 1-10.

Recasens, Manuel. “Section de la Réunion des Théâtres Lyriques Nationaux (R.T.L.N.).” In *L’Artiste musicien de Paris* avril 1965 n°10 64<sup>e</sup> année: 7.

Renard, Dominique. “France Musique : une réforme qui déchaîne la tempête: Mais Jacqueline Baudrier est bien décidée à faire front.” In *Sud-Ouest*, mercredi 3 décembre 1975, p. 17.

Rey, Anne. “Sur France-Musique où tout change: Le génie se porte toujours bien.” In *Le Monde* le 23-24 novembre 1975: 15.

Richard, Roger. “Notre métier : à propos de la critique radiophonique : réflexions et propositions.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 11 (1949. 12): 14-15.

Rivet, Paul et al. “L’Université Radiophonique Internationale a tenu sa quatrième assemblée.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1955. 5): 7-11.

Rivier, Jean “Propos impromptu: Jean Rivier.” In *Le Courrier musical de France*, 4e 1967: 192-197.

---

<sup>396</sup> 第6号から第8号は合本。

Roland-Manuel (avec la collaboration de Nadia Tagrine). *Plaisir de la musique*, Paris: Seuil, 1947.

Roland-Manuel, Claude. “Les amateurs et la musique.” In *Cahiers d’Études de Radio-Télévision* n°6 (1956): 175-188.<sup>397</sup>

Rousseau, René. “La place de la musique dans la société actuelle.” In *Le Figaro* le 22 avril 1964.

Sabbagh, Pierre. “Pierre Sabbagh la « télé » et la France du tiercé.” In *Le Monde* le 24 novembre 1971.

Samuel, Claude. “La société des conservatoires risque de disparaître.” In *Le Nouveau Candide* le 25 octobre 1965, n°235: 12.

Samuel, Claude. “La vie musicale française vue par un critique américain.” In *Le Nouveau Candide* le 13 décembre 1965, n°242: 18.

Samuel, Claude. “Savez-vous que vous coutez 250 francs à l’Etat quand vous allez à l’Opéra ?.” In *Paris-Presse l’intransigeant* le 20-21 mars 1966: 5.

Samuel, Claude. “La grève de Boulez.” In *Le Nouveau Candide* le 13 juin 1966: 47.

Samuel, Claude. “Paris aura-t-il enfin un orchestre de classe internationale ?.” In *Paris-Presse l’intransigeant* le 11 novembre 1966.

Sauguet, Henri. “On tue la musique !.” *Arts* le 13 janvier 1965 n° 988: 1-2.

Schaeffer, Pierre. *A la recherche d’une musique concrète*. Paris: Seuil, 1952.

---

<sup>397</sup> 第6号から第8号は合本。

Schaeffer, Pierre. *Traité des objets musicaux: Essai interdisciplines*. Paris: Seuil, 1966.

Schic, Anna Stella. *Un piano, une vie: Chronique de mon temps*. Paris: Editions Rive droite, 2000.

Schloezer, Boris de. *Problèmes de la musique moderne*. Paris: Éditions de Minuit, 1959.

Sénard, Jean. "La S.A.C.E.M. connaît la musique." *Le Figaro Littéraire* le 1 juillet 1965.

Sichler, Liliane. "Pierre Vozlinski: Nouveau directeur de la Musique à la TV." In [Le Figaro ?, sans date].

Silbermann, Alphons. *La musique, la radio et l'auditeur : Etude sociologique*. Paris: Presses Universitaires de France, 1954.

Silbermann, Alphons. "Considérations sociologiques sur la musique au cinéma, à la radio et la télévision." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°25 (1960): 3-17.

Simon, Sammy. "La radio recrée le monde." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1951. 10): 20-23.

Simon, Sammy. "La radio recrée le monde. (suite)" In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1951. 11): 16-17.

Simon, Yannick. *Composer sous Vichy*. Lyon: Symétrie, 2009.

Siohan, Robert. "Entretien avec Pierre Boulez." In *Le Monde* le 15 août 1962.

Siohan, Robert. "Perspectives sur l'art lyrique en France." In *Le Monde* le 28 août 1965.

Siohan, Robert. "Une intéressante initiative d'éducation musicale populaire." In *Le Monde* le 10 novembre 1965.

Siohan, Robert. "Les problèmes de la musique: la commission d'étude créée en 1962 a fait connaître ses conclusions." In *Le Monde* le 19 décembre 1965.

Siohan, Robert. "La musique dans les maisons de la culture." In *Le Monde* le 25 février 1966.

Siohan, Robert. "La musique dans les maisons de la culture." In *Le Monde* le 26 février 1966.

Siohan, Robert. "Musique contemporaine à la Biennale de Paris." In *Le Courrier musical de France*, 4e 1969: 224.

Sirvin, René. "France-Musique: nos lecteurs s'en mêlent." In *L'Aurore* le 10 décembre 1975.

Sirvin, René. "France-Musique: Arrêtez le massacre !." In *L'Aurore* mardi 2 décembre 1975.

Sirvin, René. "Farce-Musique: ça continue." In *L'Aurore* mercredi 3 décembre 1975.

Sirvin, René. "France-Musique: nos lecteurs s'en mêlent." In *L'Aurore* mercredi 3 décembre 1975.

Sirvin, René. "France-Musique (suite): Du vent, rien que du vent !." In *L'Aurore* mardi 23 décembre 1975.

Stroumza, Arlette. "Un entretien avec l'ancien directeur musical de Radio-France: l'Etat Vozlinsky (propos recueillis par Arlette Stroumza)." In *Le Monde* le 6 novembre 1981.

Stuckenschmidt, H. H. "Limitation au sens auditif de l'événement musical." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 473-478.

Sudre, René. *Le huitième art : Mission de la radio*. Paris: Julliard, 1945.

Tardieu, Jean. "Club d'Essai et études radiophoniques." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion*



*française* 9 (1948. 11): 22.

Tardieu, Jean. "Sortilèges de la mise en ondes." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°1 (1954): 76-79.

Tardieu, Jean. "Allocution de M. Jean Tardieu : Directeur du Centre d'Études et du Club d'Essai de la RTF." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 275-278.

Tardieu, Jean. *Grandeurs et faiblesses de la radio*. Paris: Presses de l'Unesco, 1969.

Temprement, Jean. "La musique à la radio." In *Cahiers d'Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 441-445.

Thévenot, Jean. "Centre d'Etudes Radiophoniques : les paroles restent... soixante-dix ans de machine parlante." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 3 (1949. 3): 19-20.

Touchard, Pierre-Aimé. "Le théâtre et les arts nouveaux." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 6 (1962. 6): 13-18.

Troger, Claude. "L'enseignement artistique français: Des professeurs dans le ghetto; Une enquête de Claude Troger." In *Combat* le 5 janvier 1966.

Troger, Claude. "L'enseignement artistique français ou des professeurs dans le ghetto." In *Combat* le 12 janvier 1966.

Veillé, Roger. "Les relations avec les auditeurs." In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1948. 1-2): 9-10.

Vidal, Paul. "Qui êtes-vous Constantin Simonovitch ?." In *Musica* n°148-149, juillet / août 1966: 40-41.

Vozlinsky, Pierre. *La musique dans les sociétés nationales de radio et de télévision*. Paris: ORTF, 1974.

Vozlinsky, Pierre. “Le débat sur la future « chaîne éducative » : Pierre Vozlinsky : « Il faut un souffle puissant !».” In *Le Figaro* le 1 février 1994.

Vuillermoz, Emile. “Ce que la musique française doit aux musiciens étrangers.” In *Musica* n°16, juillet 1955: 2-5.

Wangermée, Robert. “Livres et revues : Une introduction à la musique contemporaine.” In *Polyphonie* 2<sup>ème</sup> cahier: 98-99.

Wangermée, Robert. “Livres et revues: La critique musicale.” In *Polyphonie* 2<sup>ème</sup> cahier: 99-100.

Wangermée, Robert. “La musique ancienne contre la musique aujourd’hui.” In *Polyphonie* 3<sup>ème</sup> cahier: 12-29.

Wangermée, Robert. “La vulgarisation de la musique par la radio.” In *Cahiers d’Études de Radio-Télévision* n°3-4 (1955): 538-549.

Zwang, Gérard. *A contre-bruit*. Paris: J. C. Simoën, 1977.

“Adieu à Pierre Vozlinsky.” In *La lettre du musicien*, n°146 avril 1994.

“A l’Académie des beaux-arts : un constat pessimiste sur l’enseignement musical.” *Le Monde* le 11 juin 1971.

“A la direction des programmes et services musicaux de Radio-France: M. Jouve succède à M. Vozlinsky.” In *Le Monde* le 4 novembre 1981.

“A la Réunion des théâtres lyriques nationaux: M. Daniel Lesur serait nommé administrateur par intérim.”

In *Le Monde* le 3 juin 1971.

[non signé] “Au sifflet à roulette.” In *Minute*, du 12 au 18 novembre 1975, p. 31.

“Aux 5% de Gulbenkian la musique reconnaissante.” In *Le Nouveau Candide* le 13 juin 1966 n°268: 47.

*Cahiers musicaux de l'ORTF*, Paris: le Service des Relations avec la Presse et le Public, 6<sup>e</sup> année n°1 (1964.9)-14<sup>e</sup> année n°12 (1973.2)

“Centre d'Etudes Radiphoniques: Première série de conférences.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1948. 12): 21.

“Cet orchestre rouge qui tient la baguette à France Musique.” In *Minute*, du 15 au 21 octobre 1975: 32-33.

“5 minutes avec Charles Chaynes.” In *Musica* mai 1969: 44-45.

“Comités spécialisés de programmes.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 6 (1960. 6): 13.

“Comités spécialisés de programmes.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1962. 7-8): 9.

“Conseil supérieur et comités spécialisés de programmes.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 6 (1962. 6-7): 7-8.

“Concours d'œuvres radiophoniques réservé aux auteurs de langue française et aux compositeurs d'œuvres dramatiques réservé à des auteurs résidents en province.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 10 (1962. 12): 15.

“Controverse autour de la réforme des structures de la musique.” In *Le Monde* le 28 avril 1966.

“Cri d'alarme pour la musique légère.” In *Le Figaro* le 16 mars 1966.

“Déclaration de Pierre Schaeffer à la Commission de la Musique.” In *L'Artiste musicien de Paris*, 3<sup>e</sup> et 4<sup>e</sup> trimestre 1965 n°12 64<sup>e</sup> année: 28-34.

[non signé] “Des fausses notes dans la convention.” In *Minute*, du 22 au 28 octobre 1975, p. 33.

“Des gammes pour rien... .” In *L'Est républicain* le 17 juin 1965: 10.

“Du nouveaux dans les nationaux ?.” In *Le Figaro* 18 juin 1966.

“Entretiens sur l'art actuel: Pierre Ancelin avec Henri Sauguet.” In *Les Lettres françaises* le 3 septembre 1964 n°1044: 1, 8.

“Entretiens sur l'art actuel: Pierre Ancelin avec Jacques Bondon.” In *Les Lettres françaises* le 15 octobre 1964 n°1050: 7.

“Fin de la grève des musiciens de l'O. R. T. F.” In *Le Figaro*, le 28-29 juin 1969, p. 29.

“Grève des musiciens de l'O. R. T. F.” In *Le Figaro*, le 11 juin 1969.

“Installation de la nouvelle commission des commandes musicales,” *Combat* le 8 octobre 1966.

“Quand la Presse parle de notre Président d'Honneur Pierre Boulez.” In *L'Artiste musicien de Paris* janvier-février 1966 n° 13, 64<sup>e</sup> année: 1-2.

“La Communauté Radiophonique des programmes de langue française.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 5 (1963. 5-6): 11.

“L'activité du service des recherches et réalisations musicologiques.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 3 (1949. 3): 16.

“L’actualité: 1960: programmes nouveaux.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 1 (1960. 1): 10, 24.

“La disparition de Pierre Vozlinsky.” In *La lettre du musicien*, n°147 le premier mai 1994.

“La gestion administrative de la Radiodiffusion Française.” In *Cahiers français d’information* 81 (1947. 4): 8-15.

“La musique est en péril.” *L’Humanité* le 22 mars 1966.

“La réforme des structures de la musique: Le Comité National souhaite la création d’une direction autonome.” In *Le Monde* le 30 avril 1966.

“La saison 1962-1963 à la R. T. F.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1962. 9-10): 3-6.

“La situation de la musique en France.” In *Musica* n°165 janvier 1968: 11-13.

“La vie de la Radio: Le nouveau plan des programmes (1952-1953).” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1952. 8-9-10): 6-8.

“La vie de la Radio: Les activités du Centre d’Études Radiophoniques.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 2 (1954. 2): 9-11.

“La vie de la Radio : la saison 1955-1956 à la R. T. F.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1955. 8-9-10): 7-9, 24.

“La vie de la Radio : l’année 1956-1967 à la R. T. F.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1956. 8-9-10): 12-13.

“La vie de la Radio : les programmes de radiodiffusion sonore à partir de l’automne 1960.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1960. 9-10): 6-8.

“La vie de la Radio : panorama sur les installations de la RTF en service à la fin de 1960.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 6 (1961. 5): 3-7.

“La vie de la Radio : physiologie des programmes pour la saison 1961-1962.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1962. 8-9): 3-11.

“La vie de la R. T. F.: quelques chiffres...” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1962. 11): 3-11.

[non signé] “Le courrier de France-Musique (suite): « Choisir ceux qui règnent sur les programmes ». ” In *Le Monde*, le 9-10 novembre 1975: 11.

“Le programme de prospection du service de la recherche.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1961. 10): 8.

“Le scandale du nouveau France-Musique: les sondages le condamnent; Jacqueline Baudrier explique.” In *Paris-Match* n° 1385 le 23 novembre 1975: 12-13.

“Les conférences du Centre d’Études Radiophoniques.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1962. 11): 13, 15.

“Les faits saillants de la vie musicale en France en 1966.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1967: 27-29.

“Les nouveaux comités de programmes de l’O. R. T. F.” In *Le Monde* le 6-7 juin 1971.

“Les programmes de la R. T. F.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1961. 11): 5-7.

“Les professeurs de musique réclament une réorganisation totale de l’enseignement artistique.” In *L’Est républicain* le 29 juin 1965.

“Les projets de M. Sallbert: convertir les jeunes à la modulation de fréquence.” In *Le Monde* le 25 novembre 1971.

“Mort du directeur général de l’Orchestre de Paris.” In *Quotidien de Paris*, 29 mars 1994.

“Musique et culture.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 4 (1957): 12-14.

“Nos échos.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 7 (1962. 7-8): 9.

“Nos échos.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 8 (1962. 9-10): 22.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1964: 189-191.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1964: 107-112.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1964: 177-180.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1965: 177-178.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1967: 50-56.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1967: 166-172.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 4e 1967: 230-235.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1968: 59-72.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1968: 130-135.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1969: 50-56.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1970: 40-48.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1970: 81-86.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1969: 126-132.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1969: 205-210.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 4e 1969: 262-266.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 1e 1970: 40-48.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1970: 81-86.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 3e 1970: 121-124.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 4e 1970: 158-162.

“Nouvelles de la musique et des musiciens français.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1971: 94-98.

“Organigramme de la R. T. F. (15 mai 1962)” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 6 (1962. 6): 22.

“Organisation de la Radiodiffusion Française.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1948. 11): 16-17.



“Organisation des structures musicales en France.” In *Musica* n°193/194 juin/juillet 1970: 12-13.

“Organisation interne de la Radiodiffusion Française.” In *Cahiers français d’information* 81 (1947. 4): 7.

“Pierre Boulez Président d’honneur du S.A.M.U.P.” In *L’Artiste musicien de Paris* avril 1965 n° 10, 64e année: 3.

“Pierre Vozlinsky meurt à 62 ans.” In *La Presse* le 29 mars 1994.

[non signé] “Pour un peu, ils mordraient !: Qui protège les roquets de “France-Musique” ?.” In *Minute*, du 17 au 23 décembre 1975: 30-31.

“Prochaine réforme de l’enseignement musical.” In *Le Figaro* 25 mars 1966.

“Quelques ensembles français de musique contemporaine.” In *Le Courrier musical de France*, 2e 1968: 94-97.

“Radiodiffusion et Télévision Française: organisation.” In *Bulletin intérieur de la Radiodiffusion française* 9 (1951. 10): 14-15

“SOS ! la musique se meurt en France !.” In *Paris Jour* le 9 mars 1965.

“Trois coordinateurs pour France-Musique.” In *Le Monde* le 15 décembre 1977.

“Une déclaration de P. Schaeffer.” In *Le Monde* le 31 octobre - 1 novembre 1965.

“Une enquête par sondage sur l’écoute radiophonique en France.” In *Études et conjoncture* n°10 (octobre 1963, 18e année): 923-1002.

“Virtuoses sans maîtres.” In *Le Nouvel Observateur* le 30 novembre 1966 n°107: 33.

*Informations radio*. Paris: Service des Relations avec la Presse [à l’ORTF].

*RTF-Concerts: Bulletin musical de la R.T.F.*, Paris: [édité par] le Service des Relations avec la Presse et le Public [rédigé par le Service de Documentation Musicale], n°1 (1959.10)-5<sup>e</sup> année n°19 (1964.7)

[ouvrage collectif] *O.R.T.F. 73*, Paris, Presses de la Cité, 1973.

[L’équipe démissionnaire de France-Musique.] *Interdit d’antenne*, Paris: Le dernier terrain vague, 1979.

#### ■ フランス国立公文書館所蔵

Versement n° 19860732

-article 23

Versement n°19870648

- article 1

Versement n°19870714

- article 17

Versement n°19890127

- article 19

Versement n°19890128

- article 61

- article 62

Versement n°19890536

- article 13

- article 22

- article 43

Versement n°19900214

- article 6:

dossier 1

- article 9

dossier 1

- article 20

dossier 2

dossier 3

- article 21

dossier 1

dossier 2

dossier 3

dossier 4

- article 22

- article 23

dossier 1

dossier 2

dossier 3

- article 24

- article 43

Versement n°19900290

- article 9

Versement n°19910241

- article 18

Versement n°19950218

- article 24
- article 26

Versement n°19950514

- article 23
- article 27

Versement n°19960387

- article 94

Versement n°19970068

- article 1

Versement n°20090288

- 5066, 5067, 5068, 5069, 5070, 5073, 5074, 5075, 5147, 5148, 5149, 5206, 5209, 5301, 5302, 5304, 5305, 5152, 5158, 5159, 5307, 5868

Versement n°20130017

- 9

Versement n°20130366

- 68

Versement n°20140048

- 82
- 86
- 88
- 96
- 97

AJ/37/489 à 518. Tableaux annuels des classes. 1925/26-1954/55.

## ■フランス国立図書館所蔵

- フランソワ・ミッテラン館

*Guide du concert & du disque*, Paris : Édition du "Guide du concert et du disque"

- オペラ座分館

Dossier Henry Barraud

- イナテーク

Michel Philippot. *Écrits*. 1998.<sup>398</sup>

Fonds INA: personnalités.<sup>399</sup>

« La nouvelle grille de France-Musique », extrait des *Inter-Actualités de 13 heures*, diffusées le 19 septembre 1975 sur France Inter.

Fonds INA : revue de presse RTF 1963 – 1964

Fonds INA : revue de presse ORTF 1964 - 1974

## ■ラジオ・フランス書誌アーカイヴ・博物館課所蔵史料

Carton 'Club d'Essai'

---

<sup>398</sup> フィリップの発表した記事を収めた約 500 ページからなる冊子。2010 年にドゥラトゥール社から刊行された 2 巻本とは異なり、収められている記事も同じではない。イナテークのカatalogに本資料に関する情報が掲載されている

([http://inatheque.ina.fr/index.php?urlaction=doc&id\\_doc=DE/4566&form=ecrit&rang=6](http://inatheque.ina.fr/index.php?urlaction=doc&id_doc=DE/4566&form=ecrit&rang=6)、最終閲覧日：2016 年 10 月 16 日)。

<sup>399</sup> RTF、ORTF (1975 以前に関して) および INA のドキュメンテーション・センター (1975 ~1998) が整理した、ラジオ・テレビ関係者の情報を整理したファイルで、監督的立場にあったさまざまな人物の経歴およびポストに関する情報が収められている。1949 年から 1974 年までの時期がカヴァーされている。イナテークのカatalogに本資料に関する情報が掲載されている ([http://inatheque.ina.fr/index.php?urlaction=doc&id\\_doc=DE/13796&form=ecrit&rang=1](http://inatheque.ina.fr/index.php?urlaction=doc&id_doc=DE/13796&form=ecrit&rang=1)、最終閲覧日：2016 年 10 月 16 日)。

Comité de Commandes DMUS 1516W 38-39

Comité de Lecture

Fonds documentaire sur l'histoire de la radio et de la télévision (Fonds Brochand)

- BD n° 65: « France Musique : réformes – critiques – polémiques – crises »

- 869 W: « Programmes France-Musique 1964-1998 »

*O.R.T.F. Informations Musique*. Paris: le Service des Relations avec la Presse et le Public, [sans numéro]  
(mars 1973)-[sans numéro](décembre 1974).

*Informations radio*, Paris: le Service des Relations avec la Presse [à l'ORTF].<sup>400</sup>

*La Radiale: Informations internes*

n°1 – 75 (lundi 22 septembre 1975) – n°582 – 84 (vendredi 28 décembre 1984)

*Radio 47* n° 114-118. Paris: Société financière de la Radiodiffusion.<sup>401</sup>

*Radio 48* n° 166-170. \_\_\_\_\_ .

*Radio 49* n° 218-223. \_\_\_\_\_ .

*Radio-Télévision 50* n° 271-275. \_\_\_\_\_ .

*Radio-Télévision 51* n° 323-327, 375. \_\_\_\_\_ .

*Radio-Télévision 52* n° 376-379. \_\_\_\_\_ .

---

<sup>400</sup> フランス国立図書館イナテークにも所蔵されている。

<sup>401</sup> *Radio 47* から *Télérama* までは、本研究において参照したラジオ・テレビ番組表。『ラジオ 47 *Radio 47*』から『テレ 59 *Télé 59*』までは国営のフランス・ラジオ財政協会 *Société financière de la Radiodiffusion* によって発行されたが、このシリーズは 1960 年テレビ情報専門誌『テレ・セット・ジュール *Télé 7 jours*』に取って代わられた。『ラ・スメーヌ・ラジオフォニック *La semaine radiophonique*』は第 2 次世界大戦前に刊行が開始された雑誌で、戦時中は一時発行を中断していた。1960 年には別の雑誌『モン・プログラム *Mon programme*』と合併し、まもなく『ラ・スメーヌ・ラジオ・テレ *La semaine radio télé*』となった。しかし、テレビの普及に伴い購読者は減少し、1973 年同誌は『テレラマ *Télérama*』と合併した。4 誌はいずれも、当時もっとも詳細なラジオの番組表を掲載した雑誌である。在野のフランス・ラジオ史研究家ジャン＝マルク・プリンツ Jean-Marc Printz は、これらの雑誌についての情報を以下のウェブサイトで公開している：<http://100ansderadio.free.fr/>（最終閲覧日：2016 年 10 月 16 日）

*Radio-Télévision 53* n° 427-431, 479. \_\_\_\_\_.

*Radio-Télévision 54* n° 480-484. \_\_\_\_\_.

*Radio-Télévision 55* n° 531-536. \_\_\_\_\_.

*Radio-Télévision 56* n° 584-588. \_\_\_\_\_.

*Radio-Télévision 57* n° 636-640. \_\_\_\_\_.

*Télé-Radio 57* n° 688. \_\_\_\_\_.

*Télé-Radio 58* n° 689-692, 740. \_\_\_\_\_.

*Télé 59* n° 741-744. \_\_\_\_\_.

*La semaine radiophonique, la semaine télévisée* 28 année n° 1-5, Paris, La semaine radiophonique.

*La semaine mon programme radio télé* 29 année n° 1-5, \_\_\_\_\_.

*La semaine radio télé* [sans numéro] semaine du 31 décembre 1961 au 6 janvier 1962 – semaine du 28 janvier au 3 février 1963, [sans numéro] semaine du 30 décembre 1962 au 5 janvier 1963 – semaine du 27 janvier au 2 février 1963, [sans numéro] semaine du 28 décembre 1963 au 3 janvier 1964 – semaine du 25 au 31 janvier 1964, [sans numéro] semaine du 26 décembre 1964 au 1 janvier 1965 – semaine du 30 janvier au 5 février 1965, [sans numéro] semaine du 1 au 7 janvier 1966 – semaine du 29 janvier au 4 février 1966, n° 1 semaine du 31 décembre 1966 au 6 janvier 1967 – [sans numéro] semaine du 28 janvier au 3 février 1968, [sans numéro] semaine du 30 décembre 1967 au 5 janvier 1968 – semaine du 27 janvier au 2 février 1968, n° 49 semaine du 28 décembre 1968 au 3 janvier 1969 – n° 4 semaine du 25 au 31 janvier 1969, n° 57 semaine du 27 décembre 1969 au 2 janvier 1970 – n° 5 semaine du 31 janvier au 6 février 1970, n° 32 semaine du 8 au 14 août 1970, n° 52 semaine du 26 décembre 1970 au 1 janvier 1971 – n° 5 semaine du 30 janvier au 5 février 1971, n° 53 semaine du 30 décembre 1972 au 5 janvier 1973 – n° 4 semaine du 27 janvier au 2 février 1973, Paris, La semaine radiophonique.

*Télérama la semaine radio télé* n° 1250-1254

*Télérama la semaine* n° 1302-1306, 1354-1359.

*Télérama* n° 1407-1411.

## ■ マーラー音楽資料館所蔵史料

Pierre Vozlinsky: Dossier documentaire.<sup>402</sup>

<sup>402</sup> ヴォズランスキーの発言を収録した新聞・雑誌記事の切り抜き。モーリス・フルーレが、ヴォズランスキーへのインタビューの際に使用したと思われるメモが収められている。マーラー音楽資

Fonds Gérard Michel

Fonds Lefébure-Goldbeck

Fonds Maurice Fleuret

Barraud, Henry, Daniel-Lesur et Manuel Rosenthal. *L'Orchestre national de la radiodiffusion télévision française* (préface de Wladimir Porché). [s. l.]: [s. n.], [1957].

“Hommage à Henry Barraud.” In *La Table ronde*, n°163 juillet-août 1961 (Paris, S. E. P. A. L.): 10-24.

## ■パリ音楽院メディアテーク所蔵史料

*Distribution des prix. Palmarès*. Conservatoire national de musique et d'art dramatique de Paris, 1834-2008.

## 【二次文献】

アドルノ、テオドール・W『アドルノ 音楽・メディア論集』渡辺裕編、村田公一、吉田寛、船木篤也訳、東京：平凡社、2002年。

オーグ、エマニュエル『世界最大デジタル映像アーカイブ INA』(Emmanuel Hoog. *L'INA*. Paris: Presses Universitaires de France, 2004) 西兼志訳、東京：白水社、2007年。(文庫クセジュ)

ブルデュー、ピエール『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕I』(Pierre Bourdieu. *La distinction : critique sociale du jugement*. Paris: Éditions de Minuit, 1979) 石井洋二郎訳、東京：藤原書店、1990年。

ブルデュー、ピエール『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕II』(Pierre Bourdieu. *La distinction : critique sociale du jugement*. Paris: Éditions de Minuit, 1979) 石井洋二郎訳、東京：藤原書店、1990年。

---

料館はフルーレの個人アーカイブを所蔵していることから、本切り抜きはフルーレが作成したものと推測される。ここに収められた新聞・雑誌記事のうち、発表者がその必要があると判断したものについては、国立図書館で閲覧し、記事が実際に掲載されたことを確認した。



ブルデュー、ピエール『芸術の規則 I』(Pierre Bourdieu. *Les règles de l'art : genèse et structure du champ littéraire*. Paris: Éditions du Seuil, 1992) 石井洋二郎訳、東京：藤原書店、1996 年。

ブルデュー、ピエール『芸術の規則 II』(Pierre Bourdieu. *Les règles de l'art : genèse et structure du champ littéraire*. Paris: Éditions du Seuil, 1992) 石井洋二郎訳、東京：藤原書店、1996 年。

小林直毅「メディア／アーカイブ研究の展開へ向けて」、『マス・コミュニケーション研究〈75〉特集 放送アーカイブをめぐるメディア研究の可能性』、2009 年、3～14 頁。

田崎直美「フランスの戦後復興期における芸術音楽の役割：フランス・ラジオ局 (Radiodiffusion Française (1945-49 年)) の音楽政策の検証より」『お茶の水女子大学人文科学研究』第 7 号、2011 年、99～111 頁。

田崎直美「フランス・ラジオ放送児童合唱団「メトリーズ」la Maîtrise de la Radiodiffusion française——設立初期 (1945～49) の活動内容とその意義について」『お茶の水女子大学人文科学研究』第 8 号、2012 年、69～80 頁。

長木誠司「"運動 (ムーヴマン)"としての戦後音楽史 1945～ (55) 放送と戦後音楽 (1)」、『レコード芸術』第 57 巻 7 号、2008 年 7 月、74～78 頁。

長木誠司「"運動 (ムーヴマン)"としての戦後音楽史 1945～ (56) 放送と戦後音楽 (2)」、『レコード芸術』第 57 巻 8 号、2008 年 8 月、70～74 頁。

西兼志「INA とアーカイブの思想：鏡の裏箔としてのアーカイブ」、『マス・コミュニケーション研究〈75〉特集 放送アーカイブをめぐるメディア研究の可能性』、2009 年、35～50 頁。

平野貴俊「戦後フランスの公共ラジオ放送による現代音楽の普及——アンリ・バローの方針とその意図」、東京藝術大学音楽学部楽理科卒業論文、2009 年。

平野貴俊「フランス国営放送 RTF による芸術音楽の普及 (1948-1964)——その実践と理念の対

照研究」東京芸術大学大学院音楽研究科修士論文、2011 年。

平野貴俊「フランス国営放送 ORTF による芸術音楽普及活動 (1964-1974)——現代音楽関連活動を中心に——」、『音楽文化学論集』第3号、2013 年、19～29 頁。

船山信子編『ある「完全な音楽家」の肖像——マダム・ピュイグ＝ロジェが日本に遺したもの』東京：音楽之友社、2003 年。

細川周平・片山杜秀監修、日外アソシエーツ編『日本の作曲家——近現代音楽人名事典』東京：日外アソシエーツ（販売：紀伊國屋書店）、2008 年。

水島久光「放送アーカイブと新しい公共圏論の可能性」、『マス・コミュニケーション研究〈75〉特集 放送アーカイブをめぐるメディア研究の可能性』、2009 年、15～34 頁。

矢代秋雄『オルフェオの死——矢代秋雄音楽論集』東京：音楽之友社、1996 年。

NHK 放送文化研究所「テレビ番組研究は新たな時代へ——シンポジウム「映像アーカイブはテレビを拡張する」より」、『放送研究と調査』2009 年7月号、24～43 頁。

Aguila, Jesus. *Le Domaine musical: Pierre Boulez et vingt ans de création contemporaine*. Paris: Fayard, 1992.

Alibert, Jean-Louis, “La ligne de partage des ondes.” In *Réseaux* 10/52. (1992): 25-40.

Alten, Michèle. *Musiciens français dans la guerre froide (1945-1956): l'indépendance artistique face au politique*. Paris: L'Harmattan, 2000. (Série Musiques et Champ Social dans la Collection Logiques Sociales)

Anakesa Kululuka, Apollinaire. *Chaynes: stéréotomie d'une passion musicale*. [Norte-Dame-de-Bliquetuit:] Millénaire III, 2007.

Anselmini François. “Incarnier le génie français: Alfred Cortot et Claude Debussy.” In *Regards sur Debussy* (Chimènes, Myriam and Alexandra Laederich, eds.). Paris: Fayard, 2013: 439-448.

Association Michel Philippot, Michel Philippot (14-19 novembre 1994). Paris:

Bail, Louise. *Maryvonne Kendergi: La musique en partage*. Montreal: Editions Hurtubise, 2002.

Balmer, Yves. “Portrait de Daniel-Lesur en critique musical : *Pour ou contre la musique moderne ?*.” In *Regards sur Daniel-Lesur: compositeur et humaniste (1908-2002)*, Cécile Auzolle dir., Paris, Presses de l’Université Paris-Sorbonne, 2009, p. 251-272.

Beaucage, Réjean. *Société de musique contemporaine du Québec*. Quebec: Septentrion, 2011.

Bellanger, Claude et al. *Histoire générale de la presse française tome III: de 1871 à 1940*. Paris: Presses Universitaires de France, 1972..

Bennet, Christophe. “France-Musique en 1975: une réforme qui décoiffe.” In *Cahiers d’Histoire de la Radiodiffusion* n° 86, octobre-décembre 2005: 120-149.

Bennet, Christophe. “La musique à la RTF: Henri Dutilleux et le service des illustrations musicales.” In *Les Cahiers d’Histoire de la Radiodiffusion* n°89 (juillet-septembre 2006): 157-161.

Bennet, Christophe. “France-Musique : la fin de l’épisode Dandrel.” In *Cahiers d’Histoire de la Radiodiffusion* n° 94, octobre-décembre 2007: 147-168.

Bennet, Christophe. *La musique à la radio dans les années trente : La création d’un genre radiophonique*. Paris: L’Harmattan, 2010.

Bennet, Christophe. *Henri Tomasi and Radio: a protean Musician on the Waves*. 2015. <halshs-01146551>

Bergeot, Odile et Isabelle Canno. *Orchestre Philharmonique de Radio France 1930-2007*. Paris: Les Cahiers de la Doc Radio France, 2007.

Boivin, Jean. *La classe de Messiaen*. Paris: Christian Bourgois Éditeur, 1995.

Bosseur, Jean-Yves. "Frankreich (VII. Das Musikschaffen nach 1945)." In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, 2<sup>nd</sup> ed., Sachteil, vol. 3, pp. 775-783 (Traduction allemande par Susanne Walther).

Bourdon, Jérôme. *Histoire de la télévision sous de Gaulle (Nouvelle éd., corrigée et augmentée d'un avant-propos)*. [Bry-sur-Marne]: INA éditions ; Paris: Mines ParisTech, 2014.

Bousser-Eck, Edith-Hélène. "La Radiodiffusion française sous la IV<sup>e</sup> République. Monopole et service public (août 1944-décembre 1953)." Thèse de doctorat d'histoire (dir.: Jean-Jacques Becker), Université de Paris X-Nanterre, 1997.

Brochand, Christian. *Histoire générale de la radio et de la télévision en France Tome II 1944-1974*. (édité à l'initiative et sous l'égide du Comité d'Histoire de la Radiodiffusion) Paris: La documentation française, 1994.

Callu, Agnès. *Gaëtan Picon, 1915-1976: Esthétique et culture*. Paris: Honoré Champion, 2011.

Cantagrel, Gilles. *L'Orchestre National de France, l'album anniversaire 1934-1994*. Paris: Radio France-Van de Velde, 1994.

Chauveau, Agnès et Yannick Dehée (ed.). *Dictionnaire de la télévision française*. Paris: Nouveau monde éditions, 2007.

Chimènes, Myriam (ed). *La vie musicale sous Vichy*. Bruxelles: Editions Complexes, 2001.

Chimènes, Myriam and Yannick Simon (eds). *La musique à Paris sous l'Occupation*. Paris: Fayard / Cité de la musique, 2013.

Chollet, Fabrice. *Manuel Rosenthal*. Paris: Radio France, Cahiers de la Doc n°132, 2002.

Clancier, Eliane. "Le Club d'Essai de la Radiodiffusion française (1946-1960)." Mémoire de maîtrise d'histoire, Université Paris I Panthéon-Sorbonne Département d'histoire, septembre 2002.

Deliège, Célestin. *Cinquante ans de modernité musicale: De Darmstadt à l'IRCAM: contribution historiographique à une musicologie critique (nouvelle édition; première édition en 2003)*. Sprimont: Mardaga, 2012.

Drott, Eric. *Music and the Elusive Revolution: Cultural Politics and Political Culture in France, 1968-1981*. Oakland: University of California Press, 2011.

Durney, Daniel. "Musique," In *Dictionnaire des politiques culturelles de la France depuis 1959*, Emmanuel de Waresquiel ed.: 453-458 (Paris: Larousse/CNRS Éditions), 2001.

Escal, Françoise. *Espaces sociaux espaces musicaux*. Paris: Payot, 1979.

Eveno, Patrick and Denis Maréchal (eds). *La culture audiovisuelle des années 1960-1970*. Paris: L'Harmattan, 2009.

Filiu, Jean-Pierre. *Mai 68 à l'ORTF: Une radio-télévision en résistance*. Paris: Nouveau Monde Editions, 2008.

Fléchet, Anaïs. "Le Conseil international de la musique et la politique musicale de l'Unesco (1945-1975)." In *Relations internationales* 156 (2014): 53-71.

Gandin-Morlet, Dominique. *Orchestre National de France 1934-2004*. (2 tomes) Paris: Radio France,

2004. (Cahiers de la Doc n°154)

Garnham, Alison K. *Hans Keller and the BBC: The musical conscience of British broadcasting, 1959-79*. Aldershot: Ashgate, 2003.

Gayou, Evelyne. *GRM Le Groupe de Recherches Musicales: Cinquante ans d'histoire*. Paris: Fayard, 2007.

Gervasoni, Pierre. *Henri Dutilleux*. Arles: Actes Sud ; Paris: Philharmonie de Paris, 2016.

Glock, Sir William. "Une politique musicale à la radio. " In *InHarmoniques*, n°2, mai 1989: 231-238.  
(Traduction française par Arlette Stroumza)

Grefre, Xavier et Sylvie Pflieger. *La politique culturelle en France* (1<sup>er</sup> éd., Paris, 2009. 2<sup>ème</sup> éd). Paris: La Documentation française, 2015.

Hill, Peter et Nigel Simeone. *Messiaen*. New Haven ; London: Yale University Press, 2005.

Jeanneney, Jean-Noël ed. *L'Écho du siècle : Dictionnaire historique de la radio et de la télévision en France*. (1<sup>er</sup> éd., Paris: 1999) 2<sup>ème</sup> éd. Paris: Hachette Littératures, 2001.

Kaltenecker, Martin et Karine Le Bail (eds.). *Pierre Schaeffer: Les constructions impatientes....* Paris: CNRS, 2012.

Le Bail, Karine. "Musique en ondes : la musique classique à la Radiodiffusion française, de l'après-guerre aux années 1980." In *Dossiers de l'audiovisuel*, n° 97 mai-juin 2001: 6-9.

Le Bail, Karine. "Musique, pouvoir, responsabilité : La politique musicale de la Radiodiffusion française, 1939-1953." Thèse de doctorat d'histoire, Institut d'études politiques de Paris, septembre 2005.

Le Bail, Karine. *La musique au pas: Etre musicien sous l'Occupation*. Paris: CNRS editions, 2016.

Le Roux, Patrice. *Maurice Le Roux: Polyphonie d'un enfant du siècle*. Nantes: Editions Joca seria, 2015.

Kayas, Lucie and Christopher Brent Murray. "Olivier Messiaen and *Portique pour une fille de France*." In *Messiaen Perspectives 1: Sources and Influences*, Christopher Dingle et Robert Fallon eds., Aldershot: Ashgate, 2013: 45-68.

Khoudja-Coyez, Sandrine. "La diffusion de musique contemporaine en France à la radio d'Etat [1944-1963]: histoire, esthétique et politique." Mémoire de master II, Université de Lille-III, UFR Arts et culture, Département d'Etudes Musicales, septembre 2007.

Levin, Thomas Y. and Michael von der Linn. "Elements of a Radio Theory: Adorno and the Princeton Radio Research Project." In *Musical Quarterly* 78/2 (1994): 316-324.

Madurell, François. *L'Ensemble Ars nova: Une contribution au pluralisme esthétique dans la musique contemporaine: 1963-1987*. Paris: L'Harmattan, 2003.

Mangin, Sophie. *Analyse du programme de France-Musique 1986*. Mémoire de maîtrise, Université Paris Sorbonne IV Paris, juin 1989.

Marchetti, Julie. "L'histoire de France Musique : l'évolution du traitement de la musique classique à la radio, du monopole à la concurrence de Radio Classique." Mémoire de maîtrise, Université Paris Sorbonne IV, 2005.

Méadel, Cécile. *Histoire de la radio des années trente : du sans-filiste à l'auditeur*. Paris: Anthropos/INA, 1994.

Menger, Pierre-Michel. *Le marché de la musique contemporaine sérieuse, la condition des compositeurs et les aides à la création en Europe*. Paris: Conseil de l'Europe, Fondation SACEM pour la communication musicale, Ministère de la Culture et de la Communication, 1980.

Menger, Pierre-Michel. *Le paradoxe du musicien : Le compositeur, le mélomane et l'Etat dans la société contemporaine*. Paris: L'Harmattan, 2002.

Michel, Pierre (ed.) *Gilbert Amy: Le temps de souffle*. Lyon: Symétrie, 2015.

Murray, Christopher Brent, "Nouveaux regards sur le soldat Messiaen." In *Textuel* n° 63: 243-265, 2010.

Neulander, Joelle. *Programming National Identity: The Culture of Radio in 1930s France*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2009.

Pasler, Jann. "Paris, §VII, 3: 1918-44, 4: after 1956." In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2<sup>nd</sup> ed., vol. 19, pp. 118-121.

Pasler, Jann. "Writing for Radio Listeners in the 1930s: National Identity, Canonization, and Transnational Consensus from New York to Paris." In *Musical Quarterly* (Fall 2015) 98 (3): 212-262.

Pistone, Danièle. "La musique française contemporaine (1945-1989): Etat des lieux et chronologie." In *Revue internationale de musique française*, n°30, novembre 1989: 7-28.

Poirrier, Philippe (ed.). *Les politiques de la culture en France*. Paris: La Documentation française, 2016.

Porcile, François. *Les conflits de la musique française, 1940-1965*. Paris: Fayard, 2001.

Prot, Robert. *Dictionnaire de la radio*. Grenoble: Presses Universitaires de Grenoble (coédition avec l'INA), 1998.

Prot, Robert. *Précis d'histoire de la radio & de la télévision*. Paris: L'Harmattan, 2007.

Rioux, Jean-Pierre et Jean-François Sirinelli. *Histoire culturelle de la France : 4. Le temps des masses* Le



*vingtième siècle*. Paris: Seuil, 2005 (1<sup>ère</sup> édition: 1998).

Robert, Martial. *Pierre Schaeffer: des Transmissions à Orphée*. Paris ; Montreal, L'Harmattan, 1999.

Sprout, Leslie. *The Musical Legacy of Wartime France*. Berkeley; Los Angeles; London: University of California press, 2013.

Tisserand, Frédérique. “La politique de commande à la radiodiffusion française de 1945 à 1965.” Mémoire de maîtrise, Paris IV, 1984.

Tomaszewski, Rémi. *Les politiques audiovisuelles en France*. Paris: La documentation française, 2001.  
(collection retour aux textes)

Veitl, Anne. *Politiques de la musique contemporaine: Le compositeur, la recherche musicale et l'État en France de 1958 à 1991*. Paris: L'Harmattan, 1997.

Veitl, Anne et Noémi Duchemin, *Maurice Fleuret: Une politique démocratique de la musique 1981-1986*. Paris: Comité d'histoire du ministère de la culture et de la communication, 2000.

Veitl, Anne. “Des mélomanes ou des musiciens ? : Les enjeux d'une politique de la musique (1965-1998).” In *Le Débat* 2001/4 – n°116: 81-93.

de Waresquiel, Emmanuel (ed.). *Dictionnaire des politiques culturelles de la France depuis 1959*. Paris: Larousse; CNRS éd., 2001.

Winock, Michel. “Nationalisme ouvert et nationalisme fermé.” In *Nationalisme, antisémitisme et fascisme en France* (1<sup>er</sup> éd., Paris: Seuil, 1990. Nouvelle édition augmentée): 11-39. [川上勉・中谷猛訳 1995 『ナショナリズム・反ユダヤ主義・ファシズム』 東京：藤原書店]

“Henry Barraud et les directeurs de la Musique.” In *Cahier d'Histoire de la Radiodiffusion* n°95 (janvier-mars 2008): 203-215<sup>403</sup>.

“Vozlinsky, Pierre,” *Dictionnaire Larousse de la Musique* (éd. 2005), p. 1121.

[ウェブサイト]

Gérard Condé. “Philippot, Michel Paul.” *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press. Web. 26 Oct. 2016. <<http://www.oxfordmusiconline.com.rproxy.univ-psl.fr/subscriber/article/grove/music/21567>>.

Christine Leteinturier, “Moles Abraham - (1920-1992),” *Encyclopædia Universalis* [en ligne], consulté le 26 octobre 2016. URL : <http://www.universalis.fr/encyclopedie/abraham-moles/>

Alain Pâris, « Pierre-Petit (1922-2000) », *Encyclopædia Universalis* [en ligne], consulté le 10 novembre 2015. <http://www.universalis.fr/encyclopedie/pierre-petit/>

Centre de documentation de la musique contemporaine, *En bref : éléments biographiques*, consulté le 9 novembre 2015.

<http://www.cdmc.asso.fr/fr/ressources/compositeurs/biographies/conde-gerard-1947>.

David Sanson, *Denis Levaillant* [en ligne], consulté le 9 novembre 2015. [http://www.denislevaillant.net/french/BIO\\_FRE.pdf](http://www.denislevaillant.net/french/BIO_FRE.pdf)

Universalis, « Dutourd Jean - (1920-2011) », *Encyclopædia Universalis* [en ligne], consulté le 10 novembre 2015. URL : <http://www.universalis.fr/encyclopedie/jean-dutourd/>

---

<sup>403</sup> 無署名の記事。ラジオ放送史委員会の季刊誌の当 95 号は「1925～1975 年——ラジオのクラシック音楽の 50 年 1925-1975 : CINQUANTE ANS DE MUSIQUE CLASSIQUE A LA RADIO」というタイトルの特集で、クリストフ・ベネが編纂している。

<http://catalogue.bnf.fr/servlet/autorite?ID=13333055&idNoeud=1.1&host=catalogue>

[notice

biographique de René Sirvin], consulté le 10 novembre 2015.

L'Orchestre national (1966 年 2 月 26 日に公開された、国営放送製作の短編ドキュメンタリー)

<http://www.ina.fr/video/CPF86625866>, consulté le 26 octobre 2016.

Festival Estival de Paris et le l'Ile de France [sic]

[http://www.festival-paris.sitew.com/#Page\\_1.A](http://www.festival-paris.sitew.com/#Page_1.A), consulté le 27 octobre 2016.

<http://www.orchestredeparis.com/> (同ホームページ中のパリ管弦楽団の過去のプログラム一覧。

2012 年 8 月 11 日閲覧。2016 年現在閲覧不可)

【資料 1】 FM チャンネルで 1960 年 1 月 3 日に放送された番組および曲目	1
【資料 2】 委嘱された曲目一覧	3
【資料 3】 作品審査委員会に作品を送付した作曲家一覧	115

# 【資料1】1960年1月1日～7日にFMチャンネルで放送された芸術音楽番組

放送日時	番組名	放送された音楽作品	演奏者	備考
3/1/1960 9:30-11:00	MATINEE SYMPHONIQUE	L'offrande Musicale (J.S. Bach)	Elizabeth Schwarzkopf	
		Airs d'opéras: «Les Noces de Figaro» et «Don Juan», «Coriolan», ouverture (Beethoven)		
3/1/1960 11:00-12:00	PLAISIR DE LA MUSIQUE	[sans mention]	[sans mention]	émission simultanée avec la chaîne Nationale dir. Roland-Manuel
3/1/1960 12:00-13:25	CONNAISSANCE DE LA HAUTE FIDELITE	Ouverture de «Fidelio»(Beethoven)	[sans mention]	Une émission de Jean-Marie Grenier
		Sonate n° 9 en la majeur (Beethoven)		
		Symphonie n° 7 en la majeur, op. 92 (Beethoven)		
3/1/1960 13:25-14:00	DEJEUNER EN MUSIQUE	[sans mention]	[sans mention]	
3/1/1960 14:00-15:00	GRAVURES PRECIEUSES	[sans mention]	[sans mention]	par Claude Lehmann, François Pouget
3/1/1960 15:00-16:00	LA TRIBUNE DES CRITIQUES DE DISQUES	«Carmen» (Bizet)	[sans mention]	par Armand Panigel
3/1/1960 17:45-19:30	Orchestre de l'Association des concerts Colonne	Festival Richard Wagner	dir. Pierre Dervaux	émission simultanée avec la chaîne Nationale
3/1/1960 20:30-21:00	SOIREE LYRIQUE (1 <sup>re</sup> partie)	des airs de «Pelléas et Mélisande»	Martial Singher	préparé et présenté par Jean de Solliers sous-titre: Le Récital imaginaire
		«Samson et Dalila»		
3/1/1960 21:00-23:00	SOIREE LYRIQUE (2 <sup>e</sup> partie)	«Les Maîtres Chanteurs de Nuremberg» (Acte I) Opéra en trois actes. Musique de Richard Wagner.	[sans mention]	
3/1/1960 23:00-23:45	CONCERT DE NUIT	«Soirée Tchaïkowsky»	[sans mention]	par Janine Boyer
4/1/1960 17:15-17:30	L'ANNIVERSAIRE MUSICAL DE LA SEMAINE	[sans mention]	[sans mention]	
4/1/1960 17:30-18:30	LES GRANDS MUSICIENS	[sans mention]	[sans mention]	par Jean Witold
4/1/1960 20:00-21:30	Orchestre de Nice	[sans mention]	dir.: Serge Baudo, avec Annick Simon	émission simultanée avec la chaîne Nationale et Paris-Inter
4/1/1960 22:00-23:00	TROIS JOURS AVEC RIMSKY-KORSAKOV	«Ouverture des Maîtres Chanteurs» (Wagner)	[sans mention]	Une émission de Micheline Banzet
		«Harold en Italie» (Berlioz)		
		«Tamar» (Poème symphonique) (Balakirev)		
		«Boris Godounov» (Moussorsky) [sic]		
5/1/1960 17:30-18:30	LES GRANDS MUSICIENS	[sans mention]	[sans mention]	par Jean Witold
5/1/1960 20:30-22:00	SOIREE SYMPHONIQUE	«Macbeth», ouverture (Verdi)	Yehudi Menuhin et Roger Delmotte	
		«Concerto pour violon et orchestre» (Bartok)		
		«Concerto n° 2 pour trompette et orchestre» (Jolivet)		
		«Symphonie n° 2 en si mineur» (Borodine)		
5/1/1960 22:00-23:00	TROIS JOURS AVEC RIMSKY-KORSAKOV	«Le Prince Igor» (Borodine)	Maria Meneghini-Callas, soprano	
		«Symphonie n° 6 en si mineur, op. 74» (Pathétique) (Tchaïkovsky)		
		«La Vie pour le Tsar» (Glinka)		
		«Lucie de Lammermoor» (Donizetti)		
6/1/1960	LES GRANDS MUSICIENS	[sans mention]	[sans mention]	par Jean Witold

# 【資料1】1960年1月1日～7日にFMチャンネルで放送された芸術音楽番組

17:30-18:30	LES GRANDS MUSICIENS	[sans mention]	[sans mention]	par Jean Witold
6/1/1960	ACCORD PARFAIT	[sans mention]	[sans mention]	de Claude Roland-Manuel
21:15-22:00				Collaboration artistique de Charles Chaynes
6/1/1960	TROIS JOURS AVEC RIMSKY-KORSAKOV	«Le Tsar Saltan»	[sans mention]	
22:00-23:00		«La Grande Pâque Russe»		
		«La Fille des Neiges»		
		«La Nuit de Mai»		
		«Le Coq d'Or»		
7/1/1960	COMMANDES ET DEDICACES	[œuvres de] Couperin, Ravel, Prokofiev	[sans mention]	par Myriam Soumagnac
17:30-18:30				
7/1/1960	Orchestre National	[œuvres de] Ravel, Hindemith, Turina, Falla	dir.: Eleazar de Carvalho	émission simultanée avec la chaîne Nationale et Paris-Inter
20:00-21:45				
7/1/1960	DISCOGRAPHIE DE L'ŒUVRE DE CLAUDE DEBUSSY	«Le Martyre de saint Sébastien» (Adaptation de Véra Korène). Suite et fin de la diffusion intégral (Actes 3, 4 et 5)	[sans mention]	司会: Florian Hollard
22:00-23:00				

参考: *Radio télévision*, n°793 3 janvier-9 janvier 1960, Paris: Sofirad, p. 48.

1952年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1951年11月1日	Alexandre Tansman	Lucrèce ou la Mandragore	70000	Chaîne nationale、台本Armand Lanoux
M/2	1951年11月1日	Jean Wiéner	Le jeu de Faust	100000	Chaîne nationale、原作Marthe Robert
M/3	1951年11月1日	Arthur Honegger	La Rédemption	60000	台本José Bruyr、委嘱ポール・ジルソン
M/4, M/5	1951年12月1日	Henri Martelli	Méphiboseth[sic]	80000	原作Raoul Auclair
			Scènes de Don Juan (pour compléter l'émission)	5000	
M/6	1951年12月1日	Louis Beydts	L'enfant substitué	60000	原作ピランデッロ、翻案Marie-Anne Commenne、委嘱ポール・ジルソン
M/7	1951年12月1日	Louis Aubert	Histoire de Lau	50000	委嘱ポール・ジルソン
M/8	1952年1月1日	Henri Tomasi	Théâtre de Minuit : Les Palpitants	30000	委嘱ポール・ジルソン
M/9	1952年1月1日	Marcel Mihalovici	Meurtre dans la cathédrale	110000	Chaîne nationale
M/10	1952年1月1日	Serge Nigg	Le Théâtre du crime	40000	台本Georges Neveux
M/11	1952年1月1日	Manuel Rosenthal	Défense d'entrer		委嘱ポール・ジルソン、台本Kovraliczko
M/12	1952年1月1日	Alexandre de Spitzmuller	Un précurseur du théâtre moderne : Büchner	25000	台本アダモフ
M/13	1951年	Gérard Calvi	Rien de nouveau sans la lune (opérette)	120000	委嘱ポール・ジルソン
M/14	1952年1月1日	Ivan Devriès	Soirée avec Michel de Ghelderode	130000	Chaîne nationale、原作Roger Iglésis
M/15	1952年2月1日	Marc Vaubourgoin	Voltaire	50000	台本Denise Centore
M/16	1952年2月1日	Henriette Roget	Viviane	40000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jacques Baron
M/17	1952年3月1日	Jean-Louis Martinet	Barrabas	30000	Chaîne nationale
M/18	1952年3月1日	Tybor[sic] Harsanyi	Echec au génie	100000	Chaîne nationale、台本Pierre Brive
M/19	1952年3月1日	Jean Wiéner	Huit quartiers de roture (série de 8 émissions)	96000	委嘱ポール・ジルソン、台本Henri Calet
M/20	1952年3月1日	Claude Arrieu	Le Monstre Turquin	1266000	Chaîne nationale、台本ゴッツィ。Report (延期)
				60000	
M/21	1952年3月1日	Pierre Petit	Le livre de Pas	90000	Chaîne nationale、原作Marthe Lacloche
M/22	1952年3月1日	Arthur Hoérée	La Conjuration de Fiesque à Gênes	90000	Chaîne nationale
M/23	1952年3月1日	Philippe-Gérard	Le petit monde de Don Camille	30000	委嘱ポール・ジルソン
M/24	1952年4月1日	Manuel Rosenthal	Petite cantate de la Pentecôte (1ère partie)	100000	Chaîne nationale、台本Loys Masson
M/25	1952年4月1日	Marc Vaubourgoin	Athalie	100000	Chaîne nationale
M/26	1952年4月1日	Marius Constant	Petite cantate de la Pentecôte (2ème partie)	100000	Chaîne nationale、台本Loys Masson
M/27	1952年4月1日	Yves Baudrier	Petite cantate de la Pentecôte (3ème partie)	100000	Chaîne nationale、台本Loys Masson
M/28	1952年4月1日	Jean Wiéner	Agamenon	100000	委嘱ポール・ジルソン、台本Daquin
M/29	1952年4月1日	Manuel Rosenthal	Les bourdons tout en fleur	80000	Chaîne nationale、台本Suarez[sic]、翻案Ciprio

1952年

M/30	1952年6月1日	Tony Aubin	Tout va recommencer sans nous	45000	Chaîne nationale、台本Etienne [?] et Emile Henriot
M/31	1952年6月1日	André Popp	O'Agnès (second prix d'œuvre radiophonique gaie)	70000	委嘱ポール・ジルソン
M/32	1952年7月1日	Henriette Roget	L'éléphant dans la maison (premier prix d'œuvre radiophonique gaie)	50000	委嘱ポール・ジルソン、台本Alex Rivemale et Henri Colpi
M/33	1952年7月1日	Jean Wiéner	Evocation de Gaston Leroux	50000	委嘱ポール・ジルソン、台本Henri Raugel
			La Double Vie de Théophraste Longuet		
M/34	1952年8月1日	André Popp	Suite pour un 14 juillet	35000	委嘱ポール・ジルソン
M/35	1952年10月1日	Alexandre Tansman	Christophe Colomb	90000	Chaîne nationale、台本Salvador de Madariaga
M/36	1952年10月1日	Marius Constant	L'Ecole des Bouffons	45000	委嘱ポール・ジルソン、台本Michel de Ghelderode
M/37	1952年11月1日	Jean Wiéner	L'Alcade de Zalaméa	30000	Chaîne nationale
M/38	1952年11月1日	Marcel Bitsch	Armes et bagages	60000	Chaîne parisienne、Budget Lille
			繰り越し	2591000	
M/39	1952年12月1日	Henri Tomasi	Point de chute	65000	Chaîne parisienne、Budget Lille
M/40	1952年12月1日	Robert Lannoy	Danielle fille de Dieu	40000	Chaîne parisienne、Budget Lille、台本Jean de Beer
M/41	1952年12月1日	Pierre Philippe	Le grand brouillard	60000	委嘱ポール・ジルソン、台本Michelle Lavoine
M/42	1952年12月1日	Alloo (dit Darrell)	Autant l'école	300000	Chaîne Paris Inter、Budget Paris Inter
M/43	[記載なし]	Pierre Delvincourt	Vers du Sud	40000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jean Verter
M/44	1952年12月1日	Marc Vaubourgoin	Promenades théâtrales	50000	Chaîne nationale、台本André Boll et Pierre Brive
M/45	1952年12月1日	Henri Tomasi	Halydou ou l'amitié du lion	60000	Chaîne nationale、台本Jean-Ange Rémy
M/46	1952年12月1日	Claude Pascal	Bolone	50000	Chaîne nationale、台本Yves Brainville
M/47	1952年12月1日	Tony Aubin	Sept. en chemin	50000	Budget Lyon
M/48	1952年12月1日	Maurice Le Roux	Le Désert du Tartare	35000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jean Rousselot
M/49	1952年12月1日	Henri Tomasi	Koenigsmark	70000 3451000	Chaîne nationale、台本Pierre Benoit



1953年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/50	1953年1月	Emile Damais	Cantate pour le jour de Pâques	125000	Chaîne nationale、台本Jean Cayrol
M/51	1953年1月	Jean-Michel Damase	Bachelor's Delight	60000	Chaîne nationale
M/52	1953年1月	Jean-Louis Martinet	Le Vent ou les Maléfiques	80000	Chaîne nationale、台本Raoul Auclair
M/53	1953年1月	Pierre Revel	Psyché	50000	Chaîne nationale、台本モリエール
M/54	1953年1月	Marc Vaubourgoin	Le Hussard sur le toit	80000	Chaîne nationale、原作ジャン・ジオノ
M/55	1953年2月	Vincent Gambau	Où sont nos amoureuses ?	70000	委嘱ポール・ジルソン、原作René Jeanne
M/56	1953年3月	Jean Wiéner	Fortune de mer	50000	Chaîne nationale、台本Alexandre Arnoux
M/57	1953年3月	Pierre Henry	Les sept chevaux blancs musique concrète	50000	Chaîne nationale、原作Marthe Robert
M/58	1953年3月	Marcel Stern	Omni[?] de Perrault : Le cauchemar du petit enfant	70000	Chaîne nationale
M/59	1953年3月	Jean-Jacques Grünenwald	Pâques victorieuses	70000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jean Rousselot
M/60	1953年4月	André Popp	Bêtes de turc	45000	委嘱ポール・ジルソン
M/61	1953年4月	André Popp	Refrains des ténèbres Chansons des b[?] et f[?]	75000	Chaîne nationale、台本Albert Vidalie
M/62	1953年4月	Maurice Jarre	Bain	40000	Chaîne nationale、台本Michel Arnaud
M/63	1953年4月	Arthur Hoérée	Fous et bouffons (parties 1 et 2)	65000	Chaîne nationale、台本René Alleau
				35000	
M/64					
M/65	1953年5月	Marc Vaubourgoin	Les Contes de Canterbury	120000	Chaîne nationale、3分間番組12回のシリーズ、台本Henri de Portelaine
M/66	1953年5月	Darius Milhaud	Samaël	80000	Chaîne nationale、台本André Spire
M/67	1953年6月	André Popp	Téléphonomanie	50000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jean Conrad
			繰り越し	1300000	
M/68	1953年6月	Amable Massis	La Tragédie du roi Lear	25000	Chaîne nationale、台本Amable Massis
M/69	1953年6月	Henriette Roget	Le soir d'Emmaüs	50000	Chaîne nationale、台本André Suarez[sic]
M/70	1953年6月	Nicolas Nabokoff	Lady Macbeth	70000	Chaîne nationale、台本アダモフ
M/71	1953年6月	Arthur Hoérée	Fous et bouffons (parties 3 et 4)	110000	Chaîne nationale、台本René Alleau
M/72	1953年6月	Jean Wiéner	La roue qui fait tourner la terre	90000	委嘱ポール・ジルソン、台本Roger Chaneel
M/73	1953年6月	Claude Arrieu	Charade flamande	70000	Chaîne nationale、原作Albert Vidalie
M/74	1953年6月	Gérard Calvi	Les chevaux noirs	80000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jacques Floran
M/75	1953年7月	Arthur Hoérée	Fous et bouffons (parties 4 et 5 dernières)	35000	Chaîne nationale、台本Jean Cosmos (série : La bride sur le soir)

1953年

M/76	1953年7月	André Popp	Journal du soir	100000	Chaîne Paris-Inter、台本Pierre Brive
M/77	1953年7月	Jean-Armand Petit	Air de la lutte	14000	Chaîne nationale
M/78	1953年8月	Jean Wiéner	Juliette ou la clé des songes	100000	Chaîne nationale、台本Georges Neveux
M/79	1953年8月	Jean Wiéner	Complaintes parties 1-2-3 et 4	80000	委嘱ポール・ジルソン、台本René Berger、8回からなるシリーズ
M/80	1953年9月	Germaine Taillefaire	L'Eternelle bohème	80000	Chaîne parisienne、台本André-Paul Antoine
M/81	1953年9月	Jean Wiéner	Complaintes (parties 5-6-7 et 8 dernières)	80000	委嘱ポール・ジルソン、台本Pierre Berger
M/82	1953年9月	André Popp	La petite cerise	35000	Chaîne Paris-Inter、台本Pierre Ricollet et Hubert Dethamps、シリーズLa bride sur le cou
M/83	1953年9月	Pierre Arvay	Agamemnon et Clytemnestre	35000	Chaîne Paris-Inter、台本René Bernard、シリーズLa bride sur le cou
M/84	1953年9月	Jean Wiéner	4 Fonds sonores pour piano	20000	委嘱ポール・ジルソン
M/85	1953年9月	Claude Arrieu	4 Fonds sonores pour piano	20000	委嘱ポール・ジルソン
M/86	1953年9月	René Challan	4 Fonds sonores pour piano	20000	委嘱ポール・ジルソン
			繰り越し	2386000	
M/87	1953年9月	Théodore Mathieu	4 Fonds sonores pour piano	20000	委嘱ポール・ジルソン
M/88	1953年9月	Lucien Riondy	4 Fonds sonores pour piano	20000	委嘱ポール・ジルソン
M/89	1953年10月	Henri Martelli	Les cahiers de Sainte Hélène	90000	Chaîne Paris-Inter、台本Henriot de [?], 翻案Simone Dubreuilh
M/90	1953年10月	André Jolivet	L'Empereur Jones	100000	Chaîne nationale、台本O'Neill
M/91	1953年10月	Jean Constantin	Lettre à Virginie	35000	Chaîne Paris-Inter、台本Jean Constantin、シリーズLa bride dans le cou
M/92	1953年10月	Ginette Martenot	Les aventures de Tim et Toum	22000	Chaîne parisienne、11回のシリーズ
M/93	1953年10月	André Popp	Indicatif série d'émissions "Fait-Divers"	10000	Chaîne parisienne
M/94	1953年10月	Darius Milhaud	Le Dibbouk	60000	Chaîne nationale、台本An-Ski
M/95	1953年10月	Maurice Paggia	La vie profonde d'Abdel Rahman ben Khadoum (Théâtre Franco-Musulman)	35000	委嘱ポール・ジルソン
M/96	1953年11月	Edmond Casti (Castinel)	Eh bien ! dansez maintenant		
M/97	1953年11月	Louis Sager	Un certain escariote		
M/98	1953年11月	Henri Poussigue	Dan Yack		
M/99	1953年11月	Claude Pascal	Composition de 2 quatuors vocaux et 2 lectures à		

1953年

			vue avec accompagnement du piano pour concours	
M/100	1953年11月	Ginette Martenot	Où es-tu ma jeunesse ?	
M/101	1953年11月	Jean-Jacques Grünenwald	Mystère de Noël : Le dit des bergers	

1954年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/102	1954年1月	Henri Sauguet	L'Auberge de la belle étoile	120000	Chaîne nationale、台本Armand Lanoux
M/103	1954年1月	Pierre Barbaud	Symphonie domestique	50000	Chaîne Paris-Inter、台本André Frédérique
M/104	1954年1月	Gilly Chenouard	Fresque de la Nativité	25000	Chaîne parisienne、台本René Soria
M/105	1954年1月	Ginette Martenot	Les aventures de Tim et Toum	16000	Chaîne parisienne、12回からなる番組の第2シリーズ
M/106	1954年1月	Yves Baudrier	Don Juan et Faust	90000	Chaîne nationale、原作Christian Dietrich Grabbe、翻案 Michel Arnaud
M/107	1954年1月	Pierre Arvay	Jardin d'enfants	35000	Chaîne Paris-Inter、台本Jean Cosmos、シリーズLa bride sur le cou
M/108	1954年1月	Tiarko Richepin	Le Noël de Perrault	40000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jules Lemaître
M/109	1954年1月	Claude Arrieu	Tous les bruits sont dans la nature	50000	委嘱ポール・ジルソン、台本Armand Lanoux
M/110	1954年1月	Jean Wiéner	〃	50000	〃
M/111	1954年1月	Yvan Devriès	〃	50000	〃
M/112	1954年1月	Tybor[sic] Harsanyi	〃	50000	〃
M/113	1954年1月	Marius Constant	〃	50000	〃
M/114	1954年1月	Henriette Roget	La Sonate des Spectres	30000	Chaîne nationale、台本ストリンドベリ
M/115	1954年1月	Claude Arrieu	Leur cœur	50000	委嘱ポール・ジルソン、台本André Salmon
M/116	1954年1月	Anton Szalowski	L'Autre	100000	Chaîne nationale、台本Jeanne Marouska
M/117	1954年1月	André Popp	Le Petit Chaperon rouge	35000	Chaîne Paris-Inter、台本André Frédérique、シリーズLa bride sur le cou
M/118	1954年1月	André Popp	Le meunier Son fils et l'âne	12000	Chaîne Paris-Inter、原作ラ・フォンテーヌ、翻案R. Laudenbach、シリーズLa bride sur le cou
M/119	1954年1月	Maurice Paggjar	Théâtre France Musulman	35000	委嘱ポール・ジルソン、副題Imr 'Aul' Kaïs、L'homme qui brave son destin no2
M/120	1954年1月	André Popp	Indicatif série de 8 émissions	6000	Chaîne Paris-Inter、8つの回からなるシリーズA dormir debout
			繰り越し	894000	
M/121	1954年1月	Edmond Casti (Castinel)	Les deux cigales	16000	Chaîne Paris-Inter、台本Paul Castel
M/122	1954年2月	Léon Algazi	Le glaive de Mattathias	70000	Chaîne nationale、台本Edmond Fleg
M/123	1954年2月	Henriette Roget	La Foire Clandeleur	12000	委嘱ポール・ジルソン、台本Pierre Rocher
M/124	1954年2月	Antoine Mills (dit Charles	Camille Flammarion, citoyen du ciel	65000	Chaîne parisienne、台本Adrienne Blanc-Péridier

1954年

		Carlill)			
M/125	1954年2月	Marcel Mihalovici	Orphée	50000	Chaîne nationale、台本ジャン・コクトー
M/126	1954年2月	Edmond Casti (Castinel)	Lorsque je serai vieux	17000	Chaîne Paris-Inter、台本Paul Castel、シリーズLa bride sur le cou
M/127	1954年2月	Tybor[sic] Harsanyi	Les fourmis rouges	70000	Chaîne nationale、原作Domenico Rea
M/128	1954年2月	Mohamed Iguerbouchen	Théâtre Franco-Musulman	80000	委嘱ポール・ジルソン、台本Jacques Floran、副題Alou-Rouas no3
M/129	1954年2月	Louis Louigy	Les amoureux de Peynet	150000	Chaîne nationale、台本Henri Külnick
M/130	1954年3月	Henri Sauguet	Les aventures d'Ulysse	200000	Chaîne Paris-Inter、9回からなるシリーズ
M/131	1954年3月	André Popp	Indicatif série de 8 émissions	8000	Chaîne nationale、副題Les nuits décousues
M/132	1954年3月	Yvan Devriès	Un nommé jeudi	60000	Chaîne nationale
M/133	1954年3月	Jean-Michel Defaye	Saint-Alias	50000	Chaîne nationale
M/134	1954年3月	Alexandre Tansman	Quelques bateaux de légende et d'histoire	80000	委嘱ポール・ジルソン
M/135	1954年3月	André Popp	Les nuits décousues	44000	Chaîne nationale
M/136	1954年3月	Elsa Barraine	Valsovie	100000	Chaîne nationale
M/137	1954年4月	Maurice Ohana	Soléa	40000	Chaîne nationale
M/138	1954年4月	Dino Castro	La Jaquerie	30000	Chaîne nationale
M/139	1954年4月	Maurice Le Roux	Simplicius, Simplicissimus	40000	委嘱ポール・ジルソン
M/140	1954年4月	Jean Lemaire	Les poissons d'or	40000	Chaîne nationale
			繰り越し	2076000	
M/141	1954年4月	Maurice Jarre	La Résurrection d'entre les morts	75000	Chaîne nationale
M/142	1954年5月	Henri Martelli	10 Séquences Musicales pour Emissions Culturelles (M. Roger Lutigneaux)	10000	Chaîne nationale
M/143	1954年5月	Tybor[sic] Harsanyi	”	10000	”
M/144	1954年5月	Jean Rivier	”	10000	”
M/145	1954年5月	Jean Bizet	”	10000	”
M/146	1954年5月	Jean Wiéner	”	10000	”
M/147	1954年5月	Henri Tomasi	La Majesté Théodore ler roi des Corses	70000	”
M/148	1954年5月	Gabriel-Pierre Berlioz	C'est Dupont mon empereur	20000	Chaîne Paris-Inter
M/149	1954年5月	Serge Lancen	Le hollandais volant	35000	委嘱ポール・ジルソン
M/150	1954年5月	Maurice Paggiar	Théâtre Franco-Musulman (no4)	35000	委嘱ポール・ジルソン、副題La vie orgueilleuse de El

1954年

					Motanali
M/151	1954年6月	Philippe Aghazarian	Le Paradis des assassins	40000	Chaîne nationale
M/152	1954年6月	Maurice Perez	Théâtre Franco-Musulman (no6)	75000	委嘱ポール・ジルソン、副題Fridouçi
M/153	1954年6月	Maurice Ohana	Tableaux de l'héroïne fidèle	200000	Concours Prix Italia、室内オペラ（指導部 direction の予算から支払われる）
M/154	1954年6月	Georges Delerue	Ariane	200000	Concours Prix Italia、室内オペラ（指導部 direction の予算から支払われる）
M/155	1954年6月	Germaine Tailleferre	Ici, la voix	90000	Paris-Inter
M/156	1954年6月	Georges Derveaux	La chasse aux hommes	50000	Chaîne parisienne
M/157	1954年6月	Marcel Mihalovici	Parallèlement	50000	Chaîne nationale
M/158	1954年7月	Serge Lancen	Le chant du navire	40000	Chaîne nationale
M/159	1954年7月	Henriette Roget	L'Education sentimentale	120000	委嘱ポール・ジルソン
M/160	1954年7月	Gilly Chenouard	Campaniles et clochers	50000	Chaîne parisienne
M/161	1954年7月	Mohamed Iguebouchen	Théâtre Franco-Musulman (no5)	80000	委嘱ポール・ジルソン、副題Son Zeidoun
M/161bis	1954年7月	Serge Baudo	Mon Paris et ses parisiens	60000	委嘱ポール・ジルソン
M/162	1954年10月	Michel Ciry	Centenaire de la naissance d'Arthur Rimbaud (no1 et 2)	100000	Chaîne nationale
M/163	1954年12月	Arthur Hoérée	La flamme et la cendre	110000	Chaîne nationale

1955年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/164	1955年1月	Michel Ciry	Centenaire de la naissance d'Arthur Rimbaud (no3 dernière)	50000	Chaîne nationale
M/165	1955年1月	Jacques Bondon	Six Semaines dans la planète Mars (no1 et 2)	70000	Chaîne nationale、8回の番組から成るシリーズ、formule 2 de Loys Masson
M/166	1955年1月	Marcel Mihalovici	Savonarole	150000	Chaîne nationale、台本Marcel Beaufrils (formule 2)
M/167	1955年1月	Ivan Semenov	Les âmes mortes	100000	Chaîne nationale、台本ゴーゴリ (formule 2)
M/168	1955年1月	Henri Sauguet	Les aventures de Lancelot du lac (nos 1, 2 et 3)	60000	委嘱ポール・ジルソン、10回の番組からなるシリーズ、
M/169				30000	台本André Kousneau
M/170	1955年1月	Jacques Bondon	Six Semaines dans la planète Mars (no3)	30000	Chaîne nationale
M/171	1955年2月	Jacques Bondon	Six Semaines dans la planète Mars (nos 4, 5, 6, 7 et 8 fin)	150000	Chaîne nationale
M/172	1955年2月	Maurice Jarre	Noël du diable	70000	Chaîne parisienne、台本Jean Grimod (formule 2)
M/173	1955年2月	Henri Sauguet	Les aventures de Lancelot du lac (nos 4, 5, 6, 7 et 8)	70000	委嘱ポール・ジルソン
M/174	1955年2月	Raymond Gallois-Montbrun	La dame de Coventry	40000	委嘱ポール・ジルソン、台本Claude des Presles (formule 2)
M/175	1955年3月	Maurice Perez	Théâtre Franco-Musulman (série 3 no1)	35000	委嘱ポール・ジルソン、副題Poètes du désert de Jacques Daporgny (formule 1)
M/176	1955年3月	Raymond Gallois-Montbrun	La légende de Saint-Cyula	140000	委嘱ポール・ジルソン、台本Raymond Bardamar et Guy Gentilhomme
M/177	1955年3月	Maurice Jarre	Ruisselle	100000	Chaîne nationale、台本Roger Pilloudin (formule 2)、作曲者名にlauréat du Prix Italia 1955 との注記あり
M/178	1955年3月	Guy Bernard	Alcyone et Balthazar	120000	Chaîne Paris-Inter、台本Simone Dubreuilh (formule 2)
M/179	1955年4月	Léo Preger	Cantate du Vendredi Saint (no1)	150000	Chaîne nationale、台本Pierre Emmanuel (formule 2)
M/180	1955年4月	Elsa Barraine	〃 (no2)	150000	〃
M/181	1955年4月	Jean-Jacques Grunenwald	〃 (no3)	150000	〃
M/182	1955年4月	Alexandre Tansman	Le tréteau international : Herbert Engelmann	30000	Chaîne nationale、台本Henry Horge
M/183	1955年4月	Georges Migot	Cantate pascalle	150000	Chaîne nationale、台本Luc Estang (formule 2)
M/184	1955年4月	Jean Wiener	Le chasseur de rêves	75000	委嘱ポール・ジルソン、台本 Roger Chancel (formule 1)
M/185	1955年4月	Maurice Jarre	Le songe de la mort	90000	Chaîne nationale、原作Roulmann、翻案Claude Roland-Manuel

M/186	1955年4月	Pierrick Houdy	Claire	60000	Chaîne nationale、原作ルネ・シャール
M/187	1955年4月	Germaine Tailleferre	Cinq opéras-bouffe :	300000	委嘱ポール・ジルソン、1時間30分、Concours Prix Italia
			1) La fille d'opéra		
			2) Le bel ambitieux		
			3) Mr Petitpois achète un château		
			4) La Pauvre Eugénie		
			5) Une rouille à l'arsenic		
M/188	1955年4月	Stephane Pahmann	Le monde du silence	50000	委嘱ポール・ジルソン、台本Ribemont-Dessaignes
M/189	1955年4月	Victor Clovrez	Morts au Soleil	50000	Chaîne nationale、台本Louis Foucher
			繰り越し	2520000	
M/190	1955年4月	Henri Sauguet	Monsieur Cendrillon	210000	委嘱ポール・ジルソン、台本Pierre Rocher
M/191	1955年5月	Pierre Petit	La vie de Socrate	80000	Chaîne nationale
M/192	1955年5月	Pierre Petit	Tous-ensemble au bout du monde	150000	委嘱ポール・ジルソン、Concours Prix Italia
M/193	1955年5月	Jean-Louis Martinet	Vathek	80000	Chaîne nationale
M/194	1955年5月	Nelly Caron	Les Fioretti du frère de Truelle	15000	Chaîne nationale (formule 1)
M/195	1955年5月	Vincent Gambau	Adagio pour un meurtre	45000	Chaîne nationale (formule 1)
M/196	1955年5月	Jean-Michel Defaye	Marche d'hiver	250000	委嘱アンリ・バロー、Concours Prix Italia
M/197	1955年5月	Serge Nigg	Bière pour le premier jour de l'été	250000	〃
M/198	1955年5月	Jacques Castérède	La grande peur	250000	〃
M/199	1955年5月	Maurice Ohana	Les hommes et les autres	90000	Chaîne nationale (formule 2)
M/200	1955年6月	Maurice Perez	Théâtre Franco Musulman	35000	委嘱ポール・ジルソン、副題Zyrial l'enchanteur (formule 2)
M/201	1955年6月	Maurice Guimard	Portraits de famille	60000	Chaîne nationale、4回の番組からなるシリーズ (formule 1)
M/202	1955年7月	Pierre Devevey	Indicatif début et fin d'émission	15000	委嘱ポール・ジルソン、Chaîne Paris-Inter (formule 2)
M/203	1955年7月	Gérard Calvi	Les étrangers du 20ème siècle	300000	委嘱ポール・ジルソン、Concours Prix Italia (formule 1)
M/204	1955年7月	Gérard Calvi	Le capitaine Fanfaron	40000	Chaîne nationale (formule 1)
M/205	1955年10月	Léo-Louis Barbès	Théâtre Franco-Musulman	40000	委嘱ポール・ジルソン、副題 Les voyages d'Ibn Batouta (formule 2)
M/206	1955年11月	Maurice Jarre	Faites vous-même votre anthologie	80000	委嘱ポール・ジルソン、週に1度放送される番組、第1シリーズ6回 (formule 2)



1955年

M/207	1955年11月	José Berghmans	Pini, peau d'rêve	120000	委嘱ポール・ジルソン (formule 2)
M/208	1955年12月	Gilbert Roussel	Moby-Dick	10000	Chaîne nationale (5 chansons pour accordéon, formule 1)
M/209	1955年12月	Jean-Michel Defaye	Une visite au diable	40000	委嘱ポール・ジルソン (formule 2)
M/210	1955年12月	Maurice Paggiar	Théâtre Franco-Musulman	45000	委嘱ポール・ジルソン、副題Les rois de Tlemcen (formule 1)
M/211	1955年12月	Mohamed Iguebouchen	Théâtre Franco-Musulman	40000	委嘱ポール・ジルソン、副題Un Don Juan d'Arabie (formule 1)
M/212	1955年12月	Louis Saguer	Les images du Saint-Graal	250000	Chaîne nationale、1番組からなるシリーズ (formule 2)
M/213	1955年12月	Maurice Jarre	Faites vous-même votre anthologie	70000	Chaîne parisienne、第2シリーズ5回 (formule 2)
M/214	1955年12月	Jean Wiéner	La cage vide	70000	Chaîne Paris-Inter (formule 1)
M/215	1955年12月	Jean Wiéner	Choisissez celle que vous animez ou celui que vous préférez	30000	Chaîne parisienne、副題Contes de Noël
			合計	5185000	

1956年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/216	1956年1月	Maurice Paggiar	Théâtre Franco-Musulman	60000	委嘱ポール・ジルソン、副題La tragédie de Grenade (formule 1)
M/217	1956年1月	Henri Poussigue	Dan-Yack (no2)	30000	委嘱ポール・ジルソン (formule 1)
M/218	1956年2月	Maurice Jarre	2ème diffusion : Ruisselle	50000	Chaîne Paris-Inter、2月3日21時30分 5090
M/219	1956年2月	Ivo Malec	Le Rois Gordagane	75000	Chaîne nationale (formule 2)
M/220	1956年2月	Pierre Monier	Juliane la mystérieuse	75000	Marseille-Provence (formule 2)
M/221	1956年2月	Maurice Jarre	Faites vous-même votre anthologie	80000	委嘱ポール・ジルソン、第3シリーズ6回 (formule 2)
M/222	1956年3月	Maurice Jarre	〃	70000	第4シリーズ4回 (formule 2)
M/223	1956年3月	Henri Sauguet	Le grand écart	30000	委嘱ポール・ジルソン (formule 1)
M/224	1956年3月	Georges Auric	Barbazouk	60000	Chaîne Paris-Inter (formule 1)
M/225	1956年3月	Michel Ciry	Alors, ils le brisèrent à Ponce-Pilote	75000	Chaîne nationale (formule 2)
M/226	1956年3月	Maurice Ohana	Médée, l'enchanteresse	50000	Chaîne nationale (formule 2)
M/227	1956年4月	Marius Constant	Le souvenir vivant	55000	Chaîne nationale (formule 2)
M/228	1956年4月	Maurice Jarre	Faites vous-même votre anthologie	35000	Chaîne parisienne、第5シリーズ3回 (formule 2)
M/229	1956年4月	Frédéric O'Brady	Fait-divers : Editions spéciale	120000	Chaîne parisienne (formule 2)
M/230	1956年5月	Pierick Houdy	L'Impromptu du Palais Royal	50000	指導部委嘱 (formule 2)
M/231	1956年6月	Maurice Jarre	Faites vous-même votre anthologie	40000	Chaîne parisienne、第6シリーズ3回 (formule 2)
M/232	1956年7月	Henri Martelli	Le Cid	45000	Chaîne nationale、原作Guillon de Castro、翻案Paul Achard
M/233	1956年7月	Jean-Wilfrid Garrett	Petite Suite de l'attente no1	30000	指導部委嘱 (formule 1)
M/234	1956年7月	Serge Baudo	〃 (no2)	15000	〃 (formule 1)
M/235	1956年7月	Marcel Mihalovici	La nuit	100000	Chaîne nationale (formule 2)
M/236	1956年7月	Michel Philippot	Les papiers	50000	指導部委嘱 (formule 2)
M/237	1956年7月	Maurice Jarre	Faites vous-même votre anthologie	170000	Chaîne parisienne、第7、8シリーズ15回 (formule 2)
M/238	1956年11月	Serge Lancen	Le temps des voix basses : Béranger	100000	Chaîne Paris-Inter
M/239	1956年11月	Henri Sauguet	Les mille et une nuits	140000	Chaîne Paris-Inter、13回の番組からなるシリーズ
M/240	1956年11月	Elsa Barraine	Il y a 30 ans, mourais Reine-Maria	50000	指導部委嘱 (formule 1)
M/241	1956年11月	Manuel Rosenthal	Le Christ recrucifié	75000	Chaîne Paris-Inter (formule 2)
M/242	1956年11月	Edgar Bischoff	La grande ribaude	50000	Chaîne Paris-Inter、10回の番組からなるシリーズ (formule 2)
M/243	1956年12月	Guy Bernard	Le radeau de la méduse	70000	Chaîne Paris-Inter (formule 2)

			繰り越し	1800000	
M/244	1956年12月	Jean-Michel Defaye	Poètes à vos [?]ths	55000	Chaîne parisienne、第1シリーズ10回 (formule 1)
M/245	1956年12月	Maurice Ohana	Le guignol au gourdin	75000	総合指導部委嘱 (formule 1)
M/246	1956年12月	Claude Arrieu	5 chansons “Folklore de France”	50000	総合指導部委嘱、第2シリーズ (formule 2)
M/247	1956年12月	Germaine Tailleferre	〃	50000	〃
M/248	1956年12月	Jacques Chailley	〃	50000	〃
M/249	1956年12月	Serge Nigg	〃	50000	〃
M/250	1956年12月	Jean Wiéner	〃	50000	〃
[記載なし]	[記載なし]	Ivan Semenoff	Les âmes mortes	50000	Chaîne nationale (seconde diffusion)
M/251	1956年12月	Henriette Roget	Baba-Diene et morceau de sucre	10000	総合指導部委嘱 (formule 1)
M/252	1956年12月	Alexandre de Spitzmüller	Malheur à qui ment	90000	Chaîne nationale (formule 2)
M/253	1956年12月	Alain Bernat	Echo, où es-tu ?	55000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/254	1956年12月	Raymond Gallois-Montbrun	5 pièces pour piano (fonds sonores)	30000	総合指導部委嘱 (formule 1)
M/255	〃	Marc Vaubourgoin	〃	30000	〃
M/256	〃	Jean Bizet	〃	30000	〃
M/257	〃	Michel-Maurice Lévy	〃	30000	〃
M/258	〃	Jean Wiéner	〃	30000	〃
M/259	〃	Lucien Riondy	〃	30000	〃
M/260	〃	Claude Arrieu	〃	30000	〃
M/261	〃	Ida Gotkovsky	〃	30000	〃
M/262	〃	Maguy Lovano	〃	30000	〃
M/263	〃	Odette Gartenlaub	〃	30000	〃
M/264	〃	Ivan Kogan Semenoff	Marie la misérable	175000	Chaîne nationale (formule 2)
[記載なし]	〃	Guy Bernard	Le radeau de la méduse	35000	(seconde diffusion)
M/265	〃	Georges Auric	Les trois Contes de Perrault	80000	Chaîne Paris-Inter (formule 1)
M/266	〃	Léon Algazi	Echos de la Bible	110000	総合指導部委嘱、6回の番組からなるシリーズ、第1シリーズ4回 (formule 2)
M/267	〃	Claude Arrieu	La Perruche	10000	総合指導部委嘱、2e prix œuvres comiques (formule 1)
				3095000	
[記載なし]	1956年12月	Ivan Semenoff	Les âmes mortes	15000	総合指導部委嘱 (2ème diffusion)
[記載なし]	1956年12月	Guy Bernard	Le radeau de la méduse	300000	Envoi destiné à la Réplique par la Direction générale (2ème diffusion)

1956年

				3180000	
--	--	--	--	---------	--

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/268	1957年1月	Léon Algazi	Echos de la bible (formule 2)	40000	Chaîne nationale、第2シリーズ2回（最終シリーズ） (formule 2)
M/269	1957年1月	Jean Wiéner	Les vacances de Brutus	55000	総合指導部委嘱 (formule 1)
M/270	1957年2月	Jean Gergely	Histoire du prince Csongor et de la fée Tunde	100000	Chaîne nationale (formule 2)
M/271	1957年2月	André Ameller	Monsieur Personne	100000	Chaîne nationale、台本Pierre Rolland (formule 2)
M/272	1957年2月	Edward Michaël	Les récits de Belzébuth à son petit-fils	90000	総合指導部委嘱
M/273	1957年3月	Manuel Rosenthal	Pen-Chicago	150000	Chaîne nationale (formule 2)
M/274	1957年3月	Alexandre Tansman	Ella de Berlin	70000	Paris-Inter (formule 2)
M/275	1957年3月	Maurice Thiriet	Le roi d'un jour	120000	Chaîne nationale (formule 2)
[記載なし]	1957年3月	Marius Constant	Le souvenir vivant	27500	Chaîne nationale (2e diffusion)
M/276	1957年3月	Elsa Barraine	La tragédie des bonnes intentions	75000	Chaîne nationale (formule 1)
M/277	1957年4月	Pierre Petit	Théâtre de Musset no1	65000	Chaîne nationale、副題Fantasie, Nuit vénitienne, A quoi rêvent les jeunes filles (formule 2)
M/278	1957年4月	Jean-Wilfrid Garrett	Notre-Dame-de-Paris	60000	Chaîne parisienne、65話からなるドラマ (formule 2)
M/279	1957年4月	Jacque Simonot	Pièces oubliées : Les amants ignorants	25000	Chaîne nationale (formule 1)
M/280	1957年4月	Pierre Petit	Théâtre de Musset (no2)	85000	Chaîne nationale (formule 2)
M/281	1957年4月	Jean-Michel Damase	La nuit de Bagatelle	120000	Paris-Inter (formule 2)
M/282	1957年5月	Raymond Gallois-Montbrun	Le rossignol de l'empereur	150000	総合指導部委嘱、Concours Prix Italia、第1、2場 (formule 2)
M/283	1957年5月	Guy Bernard	Cartouche	65000	Paris-Inter (formule 2)
M/284	1957年6月	Gérard Calvi	Périclès	100000	Paris-Inter
[記載なし]	1957年6月	J. W. Garret et Serge Baudo	Petite suite de l'attente	15900	総合指導部委嘱、2e diffusion (formule 1)
M/285	1957年6月	Raymond Gallois-Montbrun	Le rossignol de l'empereur	150000	総合指導部委嘱、第3、4場 (formule 2)
M/286	1957年6月	Pierre Boulez	Le crépuscule de Yang Koueï-Fei	70000	Chaîne nationale (formule 1)
M/287	1957年6月	Jean Wiéner	Le centaure pie et la jeune fille	80000	総合指導部委嘱、Concours Prix Italia (formule 2)
M/288	1957年6月	Maurice Ohana	Le ruffian bienheureux	80000	Chaîne nationale (formule 2)
M/289	1957年7月	Jean-Michel Defaye	Poètes à vos luths	150000	Chaîne parisienne、24回番組の第2また最終シリーズ (formule 1)
M/290	1957年9月	Maurice[sic] Tansman	Petit drame pour 6 instruments	130000	Chaîne nationale (formule 2)
M/291	1957年10月	Edgar Bischof	Théâtre Méditerranéen : Le bon numéro	20000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/292	1957年10月	Jacques Jouineau	Comptines	125000	〃
[記載なし]	1957年10月	Jean Wiéner	Les vacances de Brutus	27500	3ème diffusion
			繰り越し	2352500	

1957年

[記載なし]	[1957年11月]	Serge Lancen	Le temps des voix basses	50000	2ème diffusion
M/293	1957年11月	Jean Gergely	Un amant de la liberté	65000	Chaîne nationale (formule 2)
[記載なし]	1957年11月	Ivo Malec	Le Roi Gordogane	37500	Chaîne nationale、2ème diffusion (formule 2)
M/294	1957年11月	Paul Arma	Cantata da Camera	100000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/295	1957年11月	Marcel Delannoy	Idées de Paris	100000	〃
M/296	1957年12月	Virginie Bianchini	Anicet et le petit Jésus	50000	〃
M/297	1957年12月	Claude Prior	La reine des neiges	160000	Club d'Essai (formule 1)
M/298	1957年12月	Jean-Armand Petit	La guérison de Donati	10000	Chaîne parisienne、chansons (formule 1)
M/299	1957年12月	Jean-Armand Petit	Clouns	15000	〃
M/300	1957年12月	Marc Vaubourgoin	Le Mystère de Christ (1ère partie)	100000	Chaîne nationale (formule 2)
M/301	1957年12月	Jean Langlais	〃 (2ème partie)	100000	〃
M/302	1957年12月	Michel Ciry	〃 (3ème partie)	100000	〃
M/303	1957年12月	Jacques Jouineau	Comptines	125000	Chaîne parisienne、20回番組の第2また最終シリーズ
M/304	1957年12月	Arthur Hoérée	La divine comédie	240000	Chaîne nationale、10回番組 + additif avril 58 (formule 2)
M/305	〃	Marcel Mihalovici	Mélusine	200000	Chaîne nationale (formule 2)
M/306	〃	Louis Saguer	Les Tortues	130000	〃
M/307	〃	Serge Lancen	La demoiselle et l'anneau de sagesse	100000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/308	〃	Henri Martelli	Le radeau de la méduse	50000	Chaîne nationale (formule 1)
M/309	〃	Serge Nigg	Combat des amazones	45000	〃
M/310	〃	Raymond Gallois-Montbrun	Le port de Delft	45000	〃
M/311	〃	Marcel Mihalovici	Les massacres de Scio	50000	〃
M/312	〃	Jean Rivier	Le déjeuner sur l'herbe	50000	〃
M/313	〃	Maurice Jarre	La ronde de nuit	40000	〃 (formule 2)
M/314	〃	Georges Dandelot	La pieta d'Avignon	50000	〃
M/315	〃	Jean-Michel Damase	L'enseigne de gersaint	40000	〃
M/316	〃	Jacques Castérède	La descente de croix	40000	〃
M/317	〃	Elsa Barraine	La muse au tombeau du Titien	45000	〃
M/318	〃	Pierick Houdy	La parabole des aveugles	40000	〃
M/319	〃	Jean-Louis Martinet	La leçon d'anatomie	50000	〃 ※307～319まで「パロー氏による委嘱と評価、シェーヌ・ナショナルの予算から支払われる」と注記がある
M/320	〃	Marius Constant	Le voyage de Cordobal	120000	総合指導部委嘱、台本 Roland Cherry (formule 2)
M/321	〃	José Berghmans	Les messieurs de l'ariboisière	85000	総合指導部委嘱、台本 Claude Demys (formule 1)
				4785000	

1958年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/322	1958年2月	Maurice Jarre	Isabelle et le général	35000	総合指導部委嘱、concours d'œuvres comiques、台本 Marcel Mithois (formule 2)
M/323	1958年2月	Yves Baudrier	Le Mensonge	40000	France III、翻案 Michel de Boulelia
M/324	1958年3月	Marcel Delannoy	Le moulin de la galette	50000	France III (formule 1)
M/325	1958年3月	Serge Lancen	Parcisse	250000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/326	1958年3月	Pierre Petit	Analyse Spectrale de l'Occident	35000	France III、副題L'hellénisme (formule 2)
M/327	1958年3月	Robert Caby	La comédie des ombres : Mérimée et Pouchkine	25000	France III (formule 1)
M/328	1958年3月	Luc-André Marcel	Cérulée	130000	France III (formule 2)
M/329	1958年4月	Michel-Maurice Lévy	Places-si-ou-plaît	150000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/330	1958年4月	Maurice Ohana	Le romances du Cid	125000	〃
M/331	1958年4月	Jean-Michel Damase	La tendre Eléonore	350000	France III (formule 2)
M/332	1958年4月	Antoni Szalowski	La femme têtue	110000	総合指導部委嘱 (formule 2)
M/333	1958年4月	Arthur Hoérée	additif “La divine comédie”	40000	France III (formule 2)
M/334	1958年5月	Serge Nigg	Gulliver	175000	総合指導部委嘱、concours Prix Italia、原作スウィフト、台本フィリップ・スーポー (formule 1)
M/335	1958年5月	Pierre Petit	Furia Italiana	300000	総合指導部委嘱、concours Prix Italia、台本Michel Dean (formule 2)
M/336	1958年5月	Léo Preger	Le guilledou (opéra-bouffe)	250000	France III (formule 2)
M/337	1958年7月	Elsa Barraine	Les paysans	200000	総合指導部委嘱、台本André Frénaud (formule 2)
M/338	1958年7月	Lucien Duchemin	L'Inconnue de la Seine opéra radiophonique	300000	France III (formule 2)
M/339	1958年7月	Salvador Bacarisse	Profils de médailles : Romulus Augustulus	19000	〃 (formule 1)
M/340	1958年7月	Georges Migot	Polyphonie : La chute d'Icare	50000	〃 (formule 2)
M/341	1958年10月	Claude Arrieu	La cabine téléphonique	230000	総合指導部委嘱、台本Michel Vaucaire (formule 1)
M/342	1958年10月	Maurice Ohana	Don Juan de Carcame	25000	France III (formule 1)
M/343	1958年11月	Henri Martelli	Le Major Cravachon	280000	総合指導部委嘱 (formule 1)
M/344	1958年11月	Jean Wiéner	Jacques le Fataliste	50000	総合指導部委嘱、翻案Claude Régy (formule 1)
M/345	1958年11月	Marc Vaubourgoin	Les Saints Simoniens	50000	France III、台本Jean Valaud (formule 2)
M/346	1958年11月	Marcel Despard	Empereur et jubilee : Julien l'Apastat	50000	France III (formule 2)
M/347	1958年11月	Maurice Jarre	Le caporal épinglé	40000	France II、台本Jacques Perret (formule 2)
M/348	1958年12月	Jacques Chailley	Le drame de Ronceveaux : La Chanson de Roland	120000	France III、翻案René Louis (formule 2)
			繰り越し	3472000	

1958年

M/349	1958年12月	Yvan Devriès	Un chant de tout amour	220000	総合指導部委嘱、台本Rouben Mélik (formule 2)
M/350	1958年12月	Raymond Gallois-Montbrun	Les gisants	120000	France I、台本Michel Suffran (formule 2)
M/351	1958年12月	Yves Baudrier	L'enfant de la nuit	45000	France III、台本Pierre Barbier (formule 2)
M/352	1958年12月	Henri Tomasi	Le petit garçon de l'ascenseur	70000	総合指導部委嘱、原作Paul Vialar、翻案Francis Didelot (formule 2)
				3927000	



1959年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/353	1959年1月	Jean-Michel Damase	Barbara et le sorcier	80000	総合指導部委嘱、翻訳René Roussel、翻案J. J. Kim (formule 2)※本ページ（「繰り越し」まで）左上に pour Panay とある
M/354	1959年1月	Georges-Léonce Guinot	Carte blanche à Roger Vigny : Barlegal	140000	France III (formule 1)
M/355	1959年1月	Pierre Petit	Concerto pour tête à tête	90000	France I (formule 2)
M/356	1959年2月	Jacques Chailley	Analyse Spectrale de l'Occident : l'époque carolingienne	50000	France III (formule 2)
M/357	1959年2月	André Popp	Suite en nez a) Nez en trompette b) nez bouché c) pieds de nez	50000	芸術指導部委嘱
				50000	〃
M/358	1959年2月	Jean-Michel Damase	Trois pièces pour ensemble instrumental	50000	〃
			a) Ouverture		
			b) Confiture		
			c) Fermeture		
M/359	1959年2月	Claude Arrieu	Suite funambulesque	50000	〃 (formule 2)
M/360	1959年2月	Pierre Devevey	Trois croquis	50000	〃 (formule 2)
			a) En visite chez la baronne		
			b) Valse et clair de lune		
			c) Retraite aux flambeaux		
M/361	1959年2月	Odette Gartenlaub	Espace sonore	50000	〃 (formule 2)
M/362	1959年2月	Germaine Tailleferre	Pictirns et Fox	50000	〃 (formule 2)
M/363	1959年2月	Jean-Philippe Koehl	Tous les plaisirs	200000	France II、シリーズ番組（1～6）(formule 1)
			繰り越し	860000	
M/364	〃	Georges Van Parys	Cinquante ans d'humour et de burlesque : Cami	50000	France I (formule 1)
M/365	〃	Louis Saguer	L'express liberté	120000	France III、翻訳Michel Pavela (formule 2)
M/366	〃	Jacques Chailley	Tristan et Yseult	25000	France III (formule 2)
M/367	〃	Pierre Petit	Introduction et choral pour deux postes	50000	芸術指導部委嘱 (formule 2)
M/368	〃	Pierre Gabaye	Suite gauloise	50000	〃 (formule 2)
M/369	1959年3月	Marcel Bitsch	Trois images	50000	〃 (formule 2)
M/370	〃	Maurice Ohana	Récit de l'an zéro	160000	〃 台本Georges Schéhadié (formule 1)
M/371	〃	〃	Homère et Orchidée	30000	France III、台本Thadée Palcy[?], 翻案Horowicz (formule 1)
M/372	〃	André Jolivet	Le guerrier de Rabinal	140000	〃 台本Paoline Lefébure (formule 1)
M/373	〃	Henri Sauguet	Les mules du vice-roi	70000	〃 台本Stéphane Audel (formule 2)
M/374	1959年4月	Jacques Bondon	Elsa ou le trouble des eaux	110000	〃 台本Michel Souffran (formule 1)

M/375	〃	Serge Baudo	Essai en mi 6 pour orch. de jazz et Contresens	50000	〃 pièce stéréophonique (formule 2)
M/376	〃	Elsa Barraine	Christine opéra de chambre	200000	〃 (formule 2)
M/377	〃	Jean-Philippe Koehl	Tous les plaisirs	200000	〃 シリーズ7～12、no20 (formule 2)
M/378	〃	Jean Wiéner	Les compagnons du clair de lune	150000	France II、台本Claude Denys (formule 2)
M/379	1959年5月	Michel-Maurice Lévy	Largo pièce musique stéréophonique	50000	芸術指導部 (formule 2)
M/380	〃	Pierre Hasquenoph	Concertino pour cordes (stéréo)	50000	〃 (formule 2)
M/381	〃	Georges Frischknecht	Suite sans fin (stéréo)	50000	〃 (formule 2)
M/382	〃	Michel Philippot	Composition pour cordes stéréo	50000	〃 (formule 2)
M/383	〃	Marcel Landowski	Mouvement (stéréo)	50000	〃 (formule 1)
M/384	〃	Ivo Malec	Mouvement en couleur (stéréo)	50000	〃 (formule 2)
M/385	1959年6月	Maurice[sic] Tansman	Pippa	70000	〃 (formule 2) 11 chansons pour chant et harpe、詞 Robert Victor
M/386	〃	Louis Bessièrès	L'homme à l'ombrelle blanche	160000	France III、台本Charles Charras (formule 1)
M/387	〃	Serge Nigg	La croisade des enfants	175000	芸術指導部、原作Schwob、台本Michel Suffran (formule 2)
M/388	〃	Paul Arma	Variations pour cordes (stéréo)	50000	〃 (formule 2)
M/389	1959年7月	Maurice Ohana	La mascarade de la mort et Don Juan	70000	〃 台本Abbé André Arnoux (formule 1)
M/390	〃	Henri Sauguet	A Saint-Lazare	70000	〃 台本Pierre Dervaux (formule 2)
			繰り越し	3210000	〃
M/391	1959年8月	Guy Bernard	Les trois amours de Theresia	100000	France II、30回、台本Raymond Thévenin (formule 2)
M/392	1959年10月	Claude Arrieu	Cornélius	20000	芸術指導部、台本Bernard Hecht (formule 2)
M/393	〃	Maurice Jarre	Le Violoncelle	25000	France I、台本Jacques Peret et Jean Frass (formule 1)
M/394	〃	Henri Sauguet	Le zébu du zox opérette radiophonique	250000	芸術指導部 (formule 1)
M/395	1959年11月	Pierre Petit	La nuit des temps	50000	France I、台本André D. Fernez (formule 2)
M/396	〃	Manfred Kelkel	Astinats pour orchestre à vent pièce de musique stéréophonique	50000	芸術指導部 (formule 1)
M/397	〃	Dom Clément Jacob	Sous le soleil de Satan	65000	pour Montpellier (formule 2)
				3770000	

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/398	1960年1月	Henri Martelli	Variations pour orchestre à cordes pièce de musique stéréophonique opus 98	500	芸術指導部 (formule 1)
M/399	〃	Germaine Tailleferre	Les mémoires d'une bergère	400	〃 (formule 1)
M/400	〃	Pierre Petit	Madame de Jarjaval	750	France III、原作Jedes Legrange、翻案Madeleine Pay (formule 2)
M/401	〃	Germaine Tailleferre	Le Maître opéra de chambre	2250	芸術指導部、台本イヨネスコ (formule 2)
M/402	1960年2月	Darius Milhaud	Cantate de la croix de charité	3000	〃 台本Loys Masson (formule 1)
M/403	〃	Gilbert Amy	Thomas de Quincey	600	France III、台本Alain Trutat (formule 2)
M/404	〃	Jean-Michel Defay[sic]	Echo et Narcisse opéra de chambre	2250	芸術指導部、台本Claude de Be[?] (formule 2)
M/405	〃	Jacques Castérède	L'autre bout du monde pièce radiophonique	1750	〃 台本[?] (formule 2)
M/406	〃	Henri Tomasi	Le Silence de la mer opéra de chambre	3000	〃 台本ヴェルコール (formule 1)
M/407	〃	Pierre-Max Dubois	Midas le roi Midas	1250	〃 台本Jean Chastenet (formule 2)
M/408	1960年3月	Jacques Bondon	Saint-Matorel ou Le Siège de Jerusalem	400	France III (formule 1)
M/409	1960年4月	Jacque-Simonot	Stella de Port-Vendres	600	〃 台本André Prugneau (formule 1)
			繰り越し	16750	
M/410	1960年4月	Joseph Kosma	La ville interdite	700	France I、台本Mme Perry Besson (formule 2)
M/411	〃	Pierre Gabaye	L'Innocent fils du diable	650	France III、台本Ribemont Dessaignes (formule 2)
M/412	1960年5月	Jean Wiéner	Le petit cheval rouge	900	芸術指導部、台本Claire Vervin (formule 2)
M/413	〃	Alexandre Tansman	La lutte de Jacot avec l'ange (comment regarder la peinture)	600	France III、パローの予算
M/414	〃	Jean Françaix	La naissance de Vénus (comment regarder la peinture)	600	〃 パローの予算
M/415	1960年6月	Max Pinchard	Esquisse d'un tombeau pour Federico Garcia Lorca	1200	芸術指導部 (formule 2)
M/416	1960年7月	Antoni Szalowski	La résurrection de Lazare (comment regarder la peinture)	600	France III (formule 2)
M/417	〃	Serge Nigg	La brune et la blonde	750	〃 台本Nino Franck (formule 2)
M/418	〃	Jacques Lasry	gengis Khan	500	芸術指導部 (formule 1)
M/419	〃	Michel Ciry	La crucifixion (comment regarder la peinture)	600	France III (formule 2)
M/420	1960年10月	Darius Milhaud	Les funérailles de Phocion	600	〃 (formule 1)
M/421	〃	Yves Baudrier	Treize histoires liées par un fil de flute	1800	芸術指導部 (formule 1)
M/422	〃	Gérard Calvi	Le passage de Vénus	3000	芸術指導部、comédie bouffe d'Armand Lanoux (formule 1)
M/423	〃	Maurice Ohana	La route qui poudoie	900	France III、原作Anne Bauer、翻案René Barbier (formule 2)

1960年

M/424	〃	Edgar Cosma	Le temps de respies	700	芸術指導部 (formule 2)
M/425	〃	Jean-Louis Martinet	Le jeu d'Elsenberg	900	〃 台本Marion-Georges Valentini (formule 2)
M/426	〃	André Jolivet	L'enterrement du comte d'Orgaz (comment regarder la peinture)	600	France III、予算バロー
M/427	1960年11月	Marcel Mihalovici	Esercizio per archi opus 80	1000	芸術指導部、予算バロー
M/428	〃	Pierre Gabaye	La chasse au canard	700	〃 台本Maurice Cury et Pierre Pirollet (formule 2)
M/429	〃	Claude Prey	Lettres perdues opéra radiophonique	2500	〃 台本Claude Prey (formule 2)
M/430	1960年12月	Pierre Petit	Un enfant attend au salon	350	〃 台本Christine Armothy (formule 1)
M/431	〃	Raymond Gallois-Montbrun	Les Ménines (comment regarder la peinture)	600	France III、予算バロー (formule 1)
M/432	〃	Alexandre Tansman	Le Masque rouge	550	〃 原作エドガー・アラン・ポー、翻案Edith La Bruyère (formule 2)
M/433	〃	Georges Aubanel	La grenade entrouverte	200	France II、台本Jacques Doporgny et Claude Liprandi (formule 1)
M/434	〃	Jean Françaix	La demi-heure de Rabelais	1800	〃 台本Alex Madis、12回のシリーズ (formule 1)
M/435	〃	Jacques Chailley	Le jugement de Don Juan	500	〃 台本Marie Noël (formule 2)
M/436	〃	Ivo Malec	Les douze mois	2250	France III、原作Samuel Marchak、翻案Léon Chancerel (formule 2)
			繰り越し	2520000	芸術指導部

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/437	1961年3月	Neil Saunders	Les Intrigues d'Arlequin aux Champs-Élysées	750	芸術指導部、台本Miss Shilla Plichard (formule 1)
M/438	1961年4月	Georges Delerue	Le S. S. d'Assise	1000	〃 台本 Julien Daudat (formule 1)
M/439	〃	Charles Martin	Thomas l'Imposteur	1500	〃 台本Jean-Jacques Kihm (formule 2)
M/440	〃	Henri Sauguet	L'os de cœur	2500	〃 台本Claude Aveline (formule 2)
M/441	〃	Henri Tomasi	Le colibri	2750	〃 台本Francis Didelot (formule 2)
M/442	〃	Amédée Borsari	Martin Luther	250	France III、台本Bernard Zimmer (formule 1)
M/443	〃	Amédée Borsari	Abondance de biens	500	芸術指導部、台本Pierre Pirollet et Maurice Cury (formule 2)
M/444	1961年5月	Betsy Jolas	L'œil égaré dans les plis de l'obéissance au vent cantate radiophonique	4000	〃 詞ヴィクトル・ユゴー (formule 2)
M/445	〃	Henri Sauguet	Le chevalier de Bruleflamme	1750	〃 台本Hubert Dumas (formule 2)
M/446	〃	Jean-Philippe Koehl	Le cirque endormi	3000	〃 台本Olivier D'Horrer (formule 1)
M/447	1961年6月	Georges Delerue	Une regrettable histoire opéra radiophonique	4000	〃 台本ボリス・ヴィアン (formule 1)
M/448	〃	Amédée Borsari	Le Rhône (documentation)	700	Journal parlé、台本Balendi (formule 2)
M/449	〃	Maurice Ohana	L'histoire de Jacquotin Lestrove qui épousa une sirène (opéra radiophonique)	4000	芸術指導部 (formule 1)
M/450	1961年7月	Serge Lancen	La route persane	1750	〃 台本Claude Denys (formule 2)
M/451	〃	Pierre Gabaye	L'homme qui cherchait son cœur	500	France III、台本Yves Sandré (formule 1)
M/452	1961年9月	Antoni Szalowski	Le merveilleux voyage de Suzanne Michel	2500	France II、台本José Pivin、8回からなるシリーズ、第1シリーズ4回 (formule 2)
M/453	1961年10月	Patrice Sciortino	Le perroquet fabuleux	650	〃 台本Elia J. Finbert (formule 1)
M/454	〃	François-Marie Rauber	La dernière innocence (carte blanche)	500	France III (formule 1)
M/455	1961年11月	Henri Tomasi	L'homme qui était trop grand	500	France II、台本P. Benoit et Cl. Farrère、翻案Francis Didelot (formule 2)
M/456	1961年11月	Jacques Bugard	Le héraut	200	France III、Michel Coquille (formule 1)
M/457	〃	Ivan Semenov	Carte blanche à Reger Boussinot : Le Prisme	300	〃 (formule 1)
M/458	〃	Jean-Louis Martinet	Les douze	4000	芸術指導部、台本Alexandre Bloch、翻案Brice-Brain (formule 2)
M/459	1961年12月	Pierre Petit	Balcon sur le rêve	250	France II (formule 1)
M/460	〃	Pierre Petit	Histoire d'un français	1500	France III、6番組 (formule 2)
			繰り越し	39150	
M/461	〃	Claude Arrieu	La belle au bois	2000	France III、台本ジュール・シュベルヴィエル (formule 2)
M/462	〃	André Popp	Les aventures de Tintin en Amérique	1200	France II
M/463	〃	Georges Migot	De ciel et de mer (polyphonie pour chœurs et eixtuor	4000	芸術指導部、作曲家自身の詩による (formule 2)

			instrumental)		
M/464	//	Serge Nigg	Auf (conte musical)	4000	// (formule 1)
M/465	//	Jacques Boisgallais	L'homme et la sirène	1750	France III、台本Michel Dominik (formule 2)
M/466	//	Luc-André Marcel	Cantate de grégoire de Narek (1ère partie)	2000	芸術指導部
M/467	//	Ivan Semenoff	Vii rois des gnômes (1ère partie)	1750	// 原作ゴーゴリ (formule 2)
M/468	//	Jean-Etienne Marie	Images Thanaiques	1500	// (formule 2)
M/469	//	Serge Baudo	Les Fiançailles	1750	// 台本モーリス・メーテルランク (formule 1)
M/470	//	Claude Arrieu	L'Aura d'Olga (essai radiophonique)	2300	// 台本ピエール・シェフェール (formule 2)
M/471	//	Claude Prey	Le cœur révélateur (opéra radiophonique)	600	// 原作エドガー・アラン・ポー、翻案フィリップ・スーポー (formule 2)
M/472	//	Serge Lancen	La mauvaise conscience opéra de chambre	1500	// 台本Claude Denys (formule 2)
M/473	//	Betsy Jolas	Dans la chaleur vacants (1ère partie)	1500	// antiphonies de Betsy Jolas (formule 1)
M/474	//	Marcel Mihalovici	Cascando (1ère partie)	1500	// 台本サミュエル・ベケット (formule 1)
M/475	//	Ivo Malec	Opéra de [?] (1ère partie)	1500	// (formule 2)
M/476	//	Louis Saguer	Lili Merveille (Une aventure de Télèmaque) opéra radiophonique (1ère et 2ème partie)	3500	// 台本Jean-Louis Bory (formule 2)
M/477	//	Claude Ballif	Vitrine	350	// (formule 2)
				72750	

1962年

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/478	1962年1月	Ivan Devriès	Le capitaine Fracasse : chanson de Chiquita	250	France II、原作テオフィル・ゴーティエ、翻案Emile Bergeret (formule 2)
M/479	〃	Gilbert Amy	Cathy de Heilbronn	1000	France III、原作ハインリヒ・フォン・クライスト (formule 2)
M/480	1962年2月	André Jolivet	L'atrabilaire ou le misanthrope	1750	〃 原作Ménandre、翻案Jean de Beer (formule 1)
M/481	〃	André Popp	Les aventures de Tintin : Le crabe aux princes d'or	735	France II、24回 (formule 1)
M/482	〃	Denise Mégevand	La harpe et la légende	750	芸術指導部、原作Charles Le Quintrec et Jean Merbale[?] (formule 1)
M/483	〃	Germaine Tailleferre	Au Paradis avec les ânes	2000	〃 台本André Salmon (formule 2)
M/484	1962年3月	Antoine Tisné	Récits épiques du temps de la guerre	2000	〃 台本Salvator Catta (formule 2)
M/485	〃	André Popp	Les grandes aventures de France II : S. O. S. Météores	800	France II、26回 (formule 1)
M/486	1962年4月	Dom Clément Jacob	Deux préludes pour le chemin de croix	300	France III、台本ポール・クロードル (formule 2)
M/487	〃	Elsa Barraine	Pauvre Jérusalem	1500	芸術指導部、台本Roger Pillaudin (formule 1)
M/488	〃	Pierre Gabaye	Porfirio	600	〃 台本Robles (formule 2)
M/489	〃	Serge Lancen	La mauvaise conscience opéra de chambre (2 et dernière partie)	2500	〃 台本Claude Denys (formule 2)
M/490	〃	Claude Prey	Le cœur révélateur opéra radiophonique (2e et dernière partie)	3000	〃 (formule 2)
M/491	1962年5月	Henri Sauguet	Manelle de la nuit	3000	〃 台本Michel Suffran (formule 2)
M/492	〃	André Popp	Les grandes aventures de France II : Le piège diabolique		France II、27回 (formule 1)
M/493	〃	Serge Nigg	Peter Ibbetson	1000	芸術指導部、1949年に委嘱された作品への補遺、原作Georges du Maurier、翻案レーモン・クノー (formule 2)
M/494	〃	Antoni Szalowski	Le merveilleux voyage de Suzanne Michel	3500	France II、4番組のうち2番組そして最後のシリーズ、台本José Pivin (formule 2)
M/495	1962年6月	Ivo Malec	Julien l'Apostat	2750	France III、台本Nikos Kazantzaki (formule 2)
M/496	〃	André Popp	Les aventures de Tintin : Les cigares du Pharaon	900	France II、24回 (formule 1)
M/497	〃	Claude Prey	L'architecte et le géomancien	2000	France III、台本Pham Van Ky (formule 2)
M/498	〃	Michèle Auzépy	Ainsi font..font..font	1750	芸術指導部、台本Dorothy Parker (formule 2)
M/499	〃	Joseph Kosma	Jean de Tournemaure	2000	〃 台本Gaston Baissette (formule 1)
M/500	〃	Maurice Ohana	Le tombeau de Claude Debussy	4000	〃 (formule 1)
M/501	〃	Pierre Barbaud	Réseaux aérienne	800	France III、台本ミシェル・ビュートル、Janine Charbonnier との共作 (formule 1)
M/502	〃	Janine Charbonnier	〃	800	〃 Pierre Barbaud との共作 (formule 1)
M/503	1962年7月	Éveline Accart	La légende de Saint-Gens	2000	France III、台本Guy Vignes

M/504	〃	Edgar Cosma	L'Idiot	2000	France II、67回、原作ドストエフスキー、翻案Georges Govy (formule 2)
M/505	〃	Charles Martin	Entre parenthèses	1800	France I、台本Jacques Potentier (formule 2)
M/506	〃	Georges Van Parys	Voyages insolites aux pays saugrenus : aux îles sous la lune (no 1)	1700	France II (formule 1)
M/507	〃	Paul Misraki	Voyages insolites aux pays saugrenus : A Trebolec (no 2)	1700	〃
M/508	1962年9月	Max Boyazopoulos (Boyar)	Voyages insolites aux pays saugrenus : Toubibland	1250	〃
M/509	1962年10月	Michel Philippot	Hommages à Pascal “Transformations triangulaires”	2000	France III (formule 2)
M/510	〃	Janine Charbonnier	Hommages à Pascal “générateurs I et II”	1000	〃
M/511	〃	Iannis Xenakis	Hommages à Pascal “Atrées”	2000	〃
M/512	〃	Fernand Bonifay	Voyages insolites aux pays saugrenus : A Retrogras	1250	France II (formule 1)
M/513	〃	Guy Lafarge	Voyages insolites aux pays saugrenus : A Djebel Akhdar	1200	France II (formule 1)
M/514	〃	Jean-Philippe Koehl	“Suite rhosanienne” vendredis musicaux	2000	〃 (formule 2)
M/515	〃	Pierre Barbaud	Hommages à Pascal “Nonette in forma de triangolo”	1000	France III (formule 2)
M/516	〃	Christian Jollet	Voyages insolites aux pays saugrenus : Au pays du mariage	1000	France II (formule 1)
M/517	〃	Claude Arrieu	Nouvelle pastorale	2000	France I、台本Henri Héraut (formule 2)
M/518	〃	André Popp	Les aventures de Tintin : Le lotus bleu	1000	France II、28回 (formule 1)
M/519	〃	Luc-André Marcel	Cantate de grégoire de Narek (2e et dernière partie)	2500	芸術指導部 (formule 2)
M/520	1962年11月	Raphaël Fumet	Récits merveilleux, merveilleux récits	1500	France III、台本スタニスラス・フュメ (formule 2)
M/521	1962年12月	Henri Martelli	Le secret de la belle des belles	1500	芸術指導部、台本André Lang (formule 2)
M/522	〃	Paul Arma	Quand le mesure est pleine (Cantate pour bande magnétique)	1500	France III、Michel Seuphorの詩による (formule 2)
M/523	〃	Marcel Mihalovici	Cascando (S. Beckett) Invention radiophonique avec musique (2ème et dernière partie)	1500	芸術指導部 (formule 2) ※dernière partieが線で削除されている
M/524	〃	Jean-Louis Martinet	El pueblo	2800	France III、原作Lope de Vega、翻案Mme J. Bailec (formule 2)
M/525	〃	Ivan Semennoff	Histoire des 47 roninn	700	芸術指導部、台本Henri Horne (formule 2)
M/526	〃	Jacques Castérède	Sophie-Dorothee	1500	〃 台本Paul Morand (formule 2)
M/527	〃	Betsy Jolas	Dans la chaleur vacante Antiphonies (2ème et dernière partie)	3000	〃 台本André du Bouchet (formule 2)
M/528	〃	Jean Wiéner	Les amours de Palerme	1500	France III、台本Alexandre Arnoux (formule 2)
M/529	〃	André Ameller	Croix au cœur	1800	Nancy、台本Pierre Rolland
M/530	〃	Paul Arma	Polydiaphonie pour orchestre	2500	芸術指導部 (formule 2)
M/531	〃	Renée Viollier	Quinzaine Marivaux :	1750	France III



1962年

			Le préjugé vaincu Le Dénouement imprévu La joie imprévue L'Heureux stratagème Le Prince travesti L'école des mères Le Petit-Maitre corrigé		
			合計	89935	
			残り	25065	

整理番号	委嘱年月日	放送年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/532	1963年1月	1963年4月12日	Jacques Lasry	Maria Goretti	1500	France I、台本Michel Suffran (formule 1)
M/533	〃	1962年8月3日	Philippe Parès	Voyages insolites aux pays saugrenus : A l'île de Portland	500	France II (formule 1)
M/534	〃	1963年1月15日	Paul Durand	Voyages insolites aux pays saugrenus : Au pays où l'on vit sans argent	500	〃 (formule 1)
M/535	〃	1964年3月28日	Louis Saguer	Lili Merveille (3e et dernière partie)	2000	芸術指導部、台本Jean-Louis Bory
M/536	1963年2月	1963年1月29日	Norbert Glanzberg	Voyages insolites aux pays saugrenus : Voyage au pays de Semain	1300	France II (formule 1)
M/537	1963年3月	1963年2月12日	Michel Emer	Voyages insolites aux pays saugrenus : Aux îles sans femmes	800	〃 (formule 1)
M/538	〃	[記載なし]	Marie Vera Maixandeu	Le poète et le bouc	2000	芸術指導部、台本Joseph J. Jaubert (formule 2)
M/539	〃	〃	André Popp	Les aventures de Tintin (coke en stock)	900	France II (formule 1)
M/540	〃	1964年2月10日	Ida Gotkovsky	Le rêve de Makar (conte radiophonique musical)	4000	芸術指導部、コロレンコの作品による
M/541	〃	1963年4月10日	Claude Arrieu	L'ecureuil du bois-bourru	1600	France III、原作M. Genevoix、翻案Selva Gourey
M/542	〃	1963年3月12日	Louiguy	Voyages insolites aux pays saugrenus : Au pays de l'homme au foyer	1500	France II (formule 1)
M/543	〃	1963年3月26日	Marc Berthomieu	Voyages insolites aux pays saugrenus : Jocains, capitale du jeu	750	〃 (formule 1)
M/544	〃	1963年2月26日	Georges Van Parys	Voyages insolites aux pays saugrenus : Au pays de l'enfant roi	1500	〃 (formule 1)
M/545	〃	1963年4月14日	Julien Galinier	Eglantine cloche de Pâques	300	芸術指導部、台本Pierre Rocher (formule 2)
M/546	1963年4月	1963年4月13日、 1963年12月28日	Jacques Lasry	Le couteau	2400	France III、台本Jacques Perret (formule 1)
						〃 台本Richard Puidorat (formule 1)
M/547	〃	1963年9月30日	Roger Cotte	Le visionnaire de salon	1000	France III、台本Richard Puydorat (formule 1)
M/548	〃	1963年4月23日	Jean Wiéner	Voyages insolites aux pays saugrenus : L'île aux bigames	1500	France II (formule 2)
M/549	〃	1963年5月14日	Jack Ledru	〃 : Astres et déastres	1300	〃 (formule 1)
M/550	1963年5月	1964年3月17日	Henri Tomasi	La chèvre de M. Seguin	2500	芸術指導部 (formule 1)
M/551	〃	1963年5月25日	Arthur Hoérée	La guérite	2200	France III、台本Jacques Audiberti (formule 2)
M/552	〃	1963年	André Popp	Les aventures de Zo, Zette	650	France II (formule 1)
M/553	〃		Ivan Semenov	Vii, roi des gnômes (2ème et dernière partie)	3000	芸術指導部、原作ゴーゴリ、翻案Marc Semenov (formule 2)
M/554	〃		Jacques Lasry	La tour de Babel	2300	〃 台本Francis Claude (formule 1)
M/555	〃	1963年9月18日	Francis Miroglio	Pour un village	2500	France III、台本Jean Laude (formule 2)
M/556	1963年7月	1963年7月14日	Robert Caby	Le diable à quatre	400	芸術指導部、台本M. Weitzmann et Mme Guignebert (formule 1)
M/557	〃	1963年6月1日～	Raphaël Fumet	Le diable amoureux récits merveilleux (2e série)	500	France III、台本スタニスラス・フュメ (formule 1)
M/558	〃	1963年10月1日	Georges Van Parys	Les mystères de Londres	1000	France II、台本Marcel Julian et Nicole Straun (formule 1)
				繰り越し	39900	
M/559	1963年7月26日	1963年10月5日	Paul Le Flem	Morven le Gaélique	1000	芸術指導部、台本マックス・ジャコブ
M/560	1963年7月	1963年10月27日	Maurice Ohana	Hélène	3200	〃 台本エウリピデス、翻案Gabriel Audisio (formule 2)

M/561	1963年9月	1963年8月4日、1963年10月5日	André Jolivet	Madrigal	2500	〃 台本マックス・ジャコブ (formule 1)
M/562	〃	1963年8月4日	Darius Milhaud	Suite des sonnets	5000	〃 16世紀のテキストによる (formule 1)
M/563	〃	1963年10月19、26日	Claude Arrieu	Le Huron film radiophonique	4800	France III、原作ヴォルテール『ばか正直』、台本Jean Cosmos(formule 2)
M/564	〃	1963年8月25日	Roger Bourdin	Arlequin, serviteur de deux maîtres	250	〃 原作ゴルドーニ、翻案Xavier de Courville (formule 1)
M/565	1963年10月	1963年9月29日、1963年12月23日	Jean Wiéner	La bête qui mangeait les jouets	2500	〃 台本ポール・ジルソン (formule 2)
M/566	〃	1963年6月16日	Charles Ravier	Ludus Paschalis	3000	芸術指導部 (formule 1)
M/567	1963年11月		Germaine Tailleferre	Concerto pour 1 ou 2 guitares et orchestre	2000	〃 (formule 1)
M/568	〃	1963年12月20日	Darius Milhaud	Pacem in terris Oratorio	15000	総合指導部、教皇ヨハネ23世の回勅による (formule 1)
M/569	〃		Georges Migot	De l'Ecclésiaste	4000	France III (formule 2)
M/570	〃	1963年12月1日	Robert Caby	Musique précédant les saisons	250	芸術指導部、Henri Weitzmann の D'in vraisemblables bagues のための音楽 (formule 2)
M/571	〃	1965年3月27日	Jacques Charpentier	La croisade des pasteurs	4000	〃 台本Raphaël Cluzel (formule 1)
M/572	〃		Emile Decotty	1 morceau à vue – éliminatoirs publics Coupe de France de l'accordéon	20	〃 (formule 2)
M/573	1963年12月		Astier	4 morceaux de lecture à vue (finale coupe Accordéon 63)	100	〃 (formule 2)
M/574	〃		〃	〃 (pré-sélection coupe Accordéon)	100	〃
M/575	〃		〃	1 morceau à vue – éliminatoirs publics Coupe de France de l'accordéon	50	〃 (formule 2)
M/576	〃	1964年6月3日	Edward Michaël	L'Ecllosion	3000	France III、台本Georges Sala (formule 2)
M/577	〃	1966年12月18日	Jacques Boissagallais	Le gendre	350	〃 台本André de Richard (formule 2)
M/578	〃		Pierre Barbaud	Algom, Exploitations 6, 7, 8	600	芸術指導部 (formule 1)
M/579	〃	1966年1月14日	Manfred Kelkel	La mandragore (1ère partie) opéra radiophonique	2000	〃 台本Le Bourhis (formule 2)
M/580	〃		Devy Erlih	Arcogénèse	1500	〃 (formule 1)
M/581	〃	1963年12月25日	Joseph Kosma	La lune dans un halo	2000	France III、台本Jacques Fayet
M/582	〃	1964年1月18日	Yves Darriet	L'incendie de Rome	2000	〃 台本Jean Cau (formule 2)
M/583	1962年11月	1964年2月5日	Ivan Semenov	Bérénice d'Egypte	1500	〃 台本Andrée Chéhid (formule 2)
M/584	1962年12月	1964年4月18日	Georges-Léonce Guinot	La dame d'Onfrede	1250	〃 台本Roger Vigney (formule 2)
M/585	〃	1965年2月21日	Claude Ballif	La musique d'Erich Zahn (1ère partie)	1500	芸術指導部、原作ハワード・フィリップス・ラヴクラフト、翻案Cl. Mourthe (formule 2)
M/586	〃	1964年11月29日	Serge Nigg	Fils disparu (notes poétiques de Stéphane Mallarmé)	9000	〃 (formule 1)
M/587	〃	[記載なし]	Luc Harvet	1 morceau à vue – éliminatoirs publics Coupe de France de l'accordéon	20	〃 (formule 2)
M/588	〃	[記載なし]	Pierre Petit	Le coiffeur de Positano (1ère partie)	1000	France III、台本Félicien Marceau (formule 2)
M/589	〃	1963年12月22日	〃	Papa va sauver Venise	480	〃 台本Ch. Arnothy (formule 1)
				合計	98290	

## 1963年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/1	1963年5月3日	Georges Cour	Elle était si jolie (canson pour les Djinns – avec orchestre)	520
M.AR/2	1963年5月21日	Amédée Borsari	Le Mikado (opérette de Sullivan) 1er acte	1250
M.AR/3	1963年6月4日	Georges Cour	Garde-moi de Yohananzarai (chanson pour les Djinns)	520
M.AR/4		〃	Va mon cœur, va de Buch Ram (chanson pour les Djinns)	520
M.AR/5		〃	A Malypense de Leny Escudero (chanson pour les Djinns)	520
M.AR/6		〃	Je t'aime, je t'aime de Colette Mansard (chanson pour les Djinns)	520
M.AR/7	1963年11月12日	〃	Moulin Rouge de Larue et G. Auric (pour les Djinns)	320
M.AR/8	1963年11月12日	〃	Mademoiselle de Paris de Contet et Durand (pour les Djinns)	320
M.AR/9		〃	Une rose rouge de Lemarque et Glanzberg (pour les Djinns)	320
M.AR/10	1963年11月27日	Robert Caby	Les saisons (pour [?])	250
M.AR/11	1963年12月17日	Pierre Devevey	Jeanne d'Arc de Verdi (ouverture) pour Tour Eiffel [?]	250
M.AR/12		Amédée Borsari	Le Mikado (opérette de Sullivan) 2e acte	3750
M.AR/13	1963年12月27日	Claude Bolling	Musique de papa	3500
M.AR/14	1963年12月16日	Françoise Gervais	Zoroastre de Rameau	7000
			合計	19560

整理番号	委嘱年月日	放送年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/590	1964年2月20日	1964年2月20日	Janine Charbonnier	Métathèse (quinzaine galilée)	1200	France Culture (formule 2)
M/591		〃	Pierre Barbaud	Variations heuristiques (quinzaine galilée)	1300	〃 (formule 2)
M/592	1964年3月	1964年12月3日	Roger Calmel	Cette nuit-là	2000	〃 台本François Porché (formule 2)
M/593		1963年10月13日	Marcel Mihalovici	Cascando (3e et dernière partie)	800	指導部 (formule 1)
M/594			Paul Courbey	Le masochiste vertueux	250	France Culture、台本Michel Servin (formule 1)
M/595	1964年4月	1964年4月26日	Marc Boissière (Jérôme Petit)	Concerto de la mort lente	1500	〃 (formule 1)
M/596		1964年4月21日	Roger Cotte	Comédie de Marguerite de Navarre	450	〃 (formule 1)
M/597		1964年7月19日	Pierre Devevey	Polka	100	〃 番組Mais où ont-il adouci[?] (formule 1)
M/598			Jean Wiéner	Notre Paris d'avril	500	Ile de France (formule 1)
M/599			Philippe Carson	Mouvements pour 18 voix d'hommes (1ère partie)	1200	指導部 (formule 2)
M/600			André Hodeir	Fantaisie	2000	France Musique (formule 1)
			Transplantation 1			
			Triplicite			
			Mass-Medium			
M/601	1964年5月	1965年1月10日	Maurice Ohana	Les Héraclides	4500	France Culture、原作エウリピデス、台本G. Audisio (formule 2)
M/602		1965年2月21日	Claude Ballif	La musique d'Erich Zahn (2e partie)	2750	指導部 (formule 2)
M/603			Daniel Lesur [sic]	Chanson du mariage	3500	Concours Lille (formule 2)
			Les filles du Havre			
			Le retour du marin			
			Entendez-vous la mer			
			Nous faut du vin			
			繰り越し	21500		
M/604	1964年6月12日		Jacques Bondon	Les arbres	4500	指導部、台本Yvan Mauffret (formule 1)
M/605		1964年9月1日から	Patrice Sciortino	L'enchantement de la fontaine du pin	3250	F. I. Variétés、台本Loys Masson (formule 1)
M/606		1964年5月26日	André Grassi	La rue aux cinq cents mariées	2000	France Culture (formule 1) Hommage à Paul Gilson
			Dublin-blues			
			Chanson de Barbe-Bleue			
			Canous et vessau venirs			
			L'affaire du bateau mouche			
M/607			J. Philippe Koehl	La matin d'Icare	5000	指導部 (formule 2)
M/608		1966年1月14日	Manfred Kelkel	La mandragore (2ème partie)	4000	〃 台本Le Bourhis (formule 1)
M/609		1964年10月3日	Yvan Devriès	Les 63 jours de Varsovie	1750	France Culture (formule 2)
M/610			Georges Hugon	De lumière et d'ombre	3000	III[ustration]. Mus[icale]. (formule 1)
M/611		1964年10月10日	Marcel Lucandre	Les larmes de l'aveugle	2500	France Culture (formule 2)
M/612		1964年10月1日	Pierre Guillermin	Hugues le loup	1500	〃 (formule 2)
M/613			Jean Courtioux	La vie secrète des provinciaux	250	〃 (formule 4)
M/614		1964年12月26日	Pierre Barbaud	La boussole des précieux	1500	〃 (formule 2)
M/615		〃	Janine Charbonnier	Trajets	1300	〃 (formule 2)
				繰り越し	52050	

1964年

M/616		1965年1月1日	Narcis Bonnet	Pim pim carabim	1200	France Culture (formule 2)
M/617			Charles Brown	Ballade pour prier Notre-Dame	1200	I[llustration]. M[usicale]. (formule 2)
M/618			Lily Bienvenu	La vague et le goéland	1300	” 台本 (formule 2)
M/619			Francine Tremblot de la Croix	A dos d'oiseau	1500	” (formule 2)
M/620			Paul Arma	Présence des heurts	7000	” (formule 1)
M/621		1964年12月25日	Léo Chauliac	Beau jeudi de Noël	1400	Inter-Variétés (formule 2)
M/622			André Boucourechliev	Amers (1ère partie)	2500	I[llustration]. M[usicale].
M/623			André Hodeir	Anna Livia Plurabelle (1ère partie)	1000	” (formule 2)
M/624			Philippe Carson	Mouvement III et mouvement IV	1000	” (formule 2)
					70150	
					85000	
					14850	

## 1964年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/15	1964年3月23日	Jean Lutèce	Concerto de la mort lente (de Jérôme Petit)	520
M.AR/16	1964年7月7日	Georges Durban	Quand j'entends c't'air là	1250
			Le marin et la rose	
M.AR/17	1964年11月12日	Antoine Geoffroy-Dechaume	Hippolyte et Aricie de Jean-Philippe Rameau	520
M.AR/18		〃	Quam Dilecta de Jean-Philippe Rameau	520
M.AR/19	1964年11月25日	Pierre Devevey	Plus près de toi mon Dieu (pour orch. et chœurs le steamer Altaïr)	520
			合計	9150

整理番号	委嘱年月日	放送年月日	作曲家名	作品名	委嘱料	備考
M/625	1965年1月		André Casanova	La clé d'argent (1ère partie)	3000	I[llustration]. M[usicale]. 台本Jean Moal (formule 2)
M/626			Pierre Devevey	Télésiège	1150	〃 (formule 2)
				Encordée		
				Bonhomme de neige		
				Route		
				Fanfare		
				Techni[?]		
M/627		1965年3月22日から	Janos Komives	Odyssée 65	1000	France Inter、台本Pierre Chambon (formule 2)
M/628		1964年12月24日	Charles Ravier	Le jeu de Daniel	4500	France Culture (formule 2)
M/629	1965年2月	1965年3月22日から	Janos Komives	Odyssée 65 (2e partie)	1200	France Inter (formule 2)
M/630		1965年4月14日	Louis Saguer	Message personnel	1500	France Culture、台本Youri (formule 1)
M/631		1965年	Nino Nardini	Sancho Panca	500	France Inter、台本Jean Grimod (formule 1)
M/632		1965年1月2日	Georges Delerue	Deux personnes déplacées	1500	France Culture (formule 1)
M/633	1965年3月	1965年3月21日	Maurice Ohana	Iphigénie en Tauride	5000	〃 原作エウリピデス、翻案Gabriel Audisio (formule 1)
M/634		1965年4月3日	Patrice Sciortino	Le pendu du gouverneur	1200	〃 台本Jacques Fayet (formule 2)
M/635			Raymond Depraz	Le feu roi	2000	Créat[ion]. Mus[icale]. 台本Jean Cayrol
M/636	1965年4月	1965年4月25日、 1966年7月17日	Yves Prin	Ce que me raconta Jacob	1200	Inter、台本Claude Seignolle (formule 2)
M/637	1965年5月		Isabelle Aboulker	En scène pour l'été (1ère partie)	800	Fr. Inter、台本Jacques Ffran (formule 2)
M/638			Janos Komives	Odyssée 65 (3e partie et fin)	1400	〃 (formule 2)
				繰り越し	25900	
M/639			Luciano Berio	Laborintus	10000	France Culture "fonds auteurs" (formule 1)
M/640	1965年6月	1965年12月26日	Jean Wiéner	L'Araignée dans le chapiteau	3500	〃 台本Emile Noël (formule 2)
M/641		1965年4月8日	Odette Gartenlaub	De Coupil à Margot	2100	〃 台本A. Lanoux (formule 2)
M/642			André Popp	Les aventures de Spirou et Fantasio	1500	Inter-Variétés (formule 1)
M/643		1965年6月17日	Pierre Devevey	Les enfants de Tokyo : Matsuyama	300	France-Inter (formule 1)
M/644		1965年1月17日	Henri Betti	Les compagnons d'Ulysse	500	France Culture、台本Francis Didelot (formule 1)
M/645		1965年6月27日	Jean Bizet	Eratos	1000	France Inter、台本Pierre Fenga (formule 1)
M/646			Jean-Michel Defaye	L'Eternel Duo : Yves Darriet (Triumph Variétés)	4000	指導部 (formule 2)
M/647			Michel Colombier	Je vous aime à l'infini (Triumph Variétés)	3500	〃 台本Jean Changuet (formule 2)
M/648		1965年	Isabelle Aboulker	En scène pour l'été (2e et fin)	1500	France Inter (formule 2)
M/649		1965年12月31日	Robert Caby	Le procès pictompin	1500	France Culture (formule 2)
M/650		1965年4月12日	André Jolivet	Le cœur de la matière	10000	〃 台本Pierre Teilhard de Chardin (formule 1)
M/651	1965年10月		Michel Colombier	Noële aux quatre vents	1750	Emiss. parlées、台本D. St. Alban (formule 2)
M/652			Lily Bienvenu	La vague et le goéland (2e partie)	2500	Musique (formule 2)
				繰り越し	49050	
M/653		1965年3月14日	Raphaël Fumet	Cette heure qui est entre le printemps et l'été	1450	Emiss. parlées (formule 1)
M/654			André Casanova	La clé d'argent (2e partie)	2000	Musique、台本Jean Moal (formule 2)
M/655			Germaine Tailleferre	La rentrée des foin [sic]	850	Emiss. parlées、台本Gérard Jarlot (formule 2)



1965年

M/656		1966年12月25日	Claude Ballif	Alice au pays des merveilles et La Traversée du miroir	5000	// (formule 2)
M/657		1966年5月6日	Lucien Duchemin	Le quatrième échelon	4000	Musique (formule 1)
				合計	62250	

## 1965年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/20	1965年1月22日	Georges Durban	Encore une chanson	600
			Car je veux	
			Mon vieux bistrot	
			Tu ne reviendras plus	
M.AR/21	1965年5月21日	Daniel Janin	My fair lady	700
M.AR/22		Wal-Berg	27 janvier de Roger Bourdin	700
M.AR/23		Armand Migiani	Et la mer de Michel Legrand	780
M.AR/24		〃	Les parapluies de Cherbourg de Michel Legrand	700
M.AR/25	1965年6月15日	Bernard Kesslair	L'Amour de Joël Holmès	400
M.AR/26	1965年6月16日	André Livernaux	Atout choisir J. Holmès	800
			Jesienny Pan de Orloni	
M.AR/27	1965年6月29日	Pierre Devevey	93 de M. Sansanetti et Paul Aliprandi	200
M.AR/28	1965年10月5日	Michel Colombier	Michkajenkka	2500
			The Madison Time	
			What if I say	
			Bolero	
			In the mood	
			Viens danser la bostella	
			Manbojambo	
			Le cha-cha-cha Tam	
			Le petit vin blanc	
M.AR/29	1965年11月29日	André Paquinet	Chanson de Venise	150
M.AR/30		〃	J'aurais voulu danser	150
M.AR/31		〃	C'est ça l'amour	150
M.AR/32		〃	Valse des lilas	150

## 1965年 Arrangements

M.AR/33		//	Toi ma lumière	100
M.AR/34	1965年12月2日	Arthur Hoérée	La belle au rossignol	1200
		//	L'Amour de moi	
		//	Joli mois de mai	
		//	Margot, labourez les vignes	
		//	Nicolas va voir Jeanne	
		//	Belle aminte	
M.AR/35	1965年12月2日	Jean-Jacques Robert	Le temps	150
M.AR/36		//	Dans tes yeux	150
M.AR/37		//	On est les rois	150
M.AR/38		//	Sentimentale	100
M.AR/39		//	Je viens te retrouver	150
M.AR/40		//	Voyage de noces	100
M.AR/41		//	La fête chante	150
M.AR/42	1965年12月27日	//	Nantes	100
M.AR/43		//	Deshonorée	150
M.AR/44		//	J'ai un lion dans mon moteur	150
M.AR/45		//	Tu m'as voulu	150
M.AR/46		//	Syracuse	100
M.AR/47		André Paquinet	Si les oiseaux d'islande	150
M.AR/48		//	Y'avait Fanny	150
			合計	11000

整理番号	委嘱年月日	放送年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/658	1966年1月	1966年1月24日	Jean Bizet	Treize naïves broderies pour Mélusine	3000	Dramatiques
M/659	1966年2月		Karl Diessel	Kristin Lavransdatter	750	// (formule 1)
M/660		1966年3月6日、1966年6月24日	Patrice Sciortino	Des fleurs pour Algernon	800	// (formule 1)
M/661	1966年3月		Olivier Bertrand	Le soldat et la sorcière	180	// 台本アルマン・サラクルー (formule 1)
M/662			Robert Bernard	Symphonie pour orchestre de chambre (1ère partie)	1500	指導部 (formule 2)
M/663		1966年3月16日	Marc Vaubourgoin	Eden	400	Dramatiques (formule 1)
M/664		1966年4月2日	Jean-Pierre Guézec	Saul	1500	// (formule 2)
M/665	1966年4月	1965年9月29日	Georges Delerue	L'après-midi de monsieur Andesmas	500	// 台本マルグリット・デュラス (formule 1)
M/666			Jean Mercadier (Libre)	Chansons pour animaux	300	// 台本José Pivin (formule 2)
M/667			//	Caline	250	Musique (formule 2)
M/668		1966年3月30日	Louis Saguer	El Hadj	1000	Dramatique、台本アンドレ・ジッド (formule 2)
M/669		1966年5月1日	Yves Prin	Un brave homme	1500	// (formule 2)
M/670		1966年10月17日から	Ivan Semenov (libre)	Guerre et Paix	3000	// (formule 2)
M/671		1966年12月8日	André Jolivet (libre)	IpLa montée aux enfers	500	// (formule 1)
M/672	1966年5月		Raymond Depraz (L)	Diaphanies	3500	Musique (formule 2)
M/673		1966年10月5日	Patrice Sciortino (L)	Les visiteurs du lendemain	1600	Dramatique (formule 2)
M/674		1966年3月27日	Jacques Mallebay (L)	Le retour de l'enfant prodigue	800	// (formule 1)
M/675	1966年5月23日	1966年4月20日	Jean Wiéner (L)	La prison de Séville	3000	Dr. (formule 2)
M/676	1966年5月31日		Bernard Robert	Symphonie pour orchestre de chambre (2e partie)	3000	M. (formule 2)
M/677	//		Janos Komives (L)	Madame Judith	1150	Dr. (formule 2)
M/678	1966年6月9日		Jean Bizet (L)	Sonate à trois	3000	M. (formule 2)
M/679	1966年6月19日		Freddy Alberti (L)	Pour un sourire	300	M. (formule 2)
M/680	1966年6月16日	1966年5月23日から	Jean Wiéner (L)	Les fleurs bleues	1200	Dr. (formule 2)
M/681	//	1966年10月9、16日	//	Les phantasmes d'Otrante	200	Dr. (formule 1)
M/682	1966年6月24日		Gérard Calvi (L)	Les quatre roses	300	(formule 1)
M/683	//	1965年1月17日	//	Astérix (1ère partie)	2500	(formule 2)
M/684	1966年7月4日	1966年5月18～19、21日	Odette Gartenlaub	Semaine Henry James	4000	(formule 1) (formule 2)
M/685	1966年7月5日		Jacques Bondon	Ivanhoé	4900	原作ロベ・デ・ヴェガ (formule 1)
M/686	1966年7月8日		Jacques Castérède	La folle nuit de n'importe où	2080	(formule 1)
M/687	1966年8月22日	1965年	Alain Margoni	Le chien du jardinier	50	France Inter (formule 2)
M/688	1966年8月25日	1965年12月31日	Serge Nigg	Pouéatcheff	2500	France Culture (formule 2)
M/689	1966年9月5日	1965年4月12日	André Astier	Accordéon	100	(formule 2)
M/690	//		//	//	100	//
M/691	//		J. M. Defaye	Page nuit blanche	1500	//
M/692	1966年9月9日		André Jolivet	Douze inventions pour onze instruments	7000	(formule 1)
				繰り越し	57250	
M/693	1966年9月29日		Jacques Castérède (L)	Ouverture pour "Le Serviteur de deux maîtres"	1500	(formule 2)

M/694	〃		Claude Arrieu (L)	Introduction et danse	1000	〃
				Souvenir de la fête		
M/695	1966年10月5日		Paul Le Flem (L)	La maudite	3000	(formule 2)
M/696	1966年10月11日		André Hodeir (L)	Anna Livia Plurabelle (2e partie et fin)	4500	(formule 1)
M/697	1966年11月14日		Jean Mercadier (L)	Seul au monde	250	(formule 2)
M/698	〃		Freddy Alberti (L)	Hadsie	250	〃
M/699	〃		〃	Happy Street	300	〃
M/700	〃		〃	Take Six	340	〃
M/701	〃		P. Spiers (L)	Souvenir de Mesopotamie	255	〃
M/702	〃		〃	no 25	255	〃
M/703	〃		〃	Sangria Blues	425	〃
M/704	〃		〃	Boulevard des Bonnes Fortunes	510	〃
M/705	〃		Mario Bua (L)	Joyeusement vôtre	300	〃
M/706	〃		〃	Musique pour un film imaginaire	600	〃
M/707	〃		Bernard Parmegiani (L)	Jazzex III	1500	(formule 1)
M/708	〃		Pierre Barbaud (L)	Cogitationes Symbolicae	1000	(formule 2)
M/709	1966年11月22日		Louis Dillies (L)	La grande imprécation	100	(formule 1)
M/710	1966年11月23日		Freddy Alberti (L)	Très légèrement	300	(formule 2)
M/711	1966年11月25日		Louis Bessières (L)	Tom Jones	2000	〃
M/712	〃	1966年12月10日	Patrice Sciortino (L)	La permission du soldat Jokinen	100	(formule 1)
M/713	1966年12月5日	1967年1月1日	Claude Arrieu (L)	La pantoufle perdue	2300	(formule 2)
M/714	〃	1966年12月5日から	Yves Prin (L)	Jean-Christophe	500	(formule 1)
				繰り越し	78535	
M/715	1966年12月12日		Mario Bua (L)	A l'ombre du pain de sucre	300	(formule 2)
M/716	1966年12月15日	1967年1月30日	Henri Sauguet (L)	Luisa de San Felice	3000	〃
M/717	〃		Alain Margoni (L)	Le roi de cœur	100	(formule 1)
M/718	〃		Jean-Pierre Guézec (L)	Formes	4000	(formule 2)
M/719	〃	1966年12月21日	Odette Gartenlaub (L)	Berceuse	150	(formule 1)
M/720	〃		Michel Colombier (L)	Noëlle aux quatre vents	1120	〃
M/721	1966年12月18日	1967年2月8日	Maurice Ohana (L)	Hippolyte	4500	〃
M/722	〃		Luc Harvet (L)	Coupe accordéon	100	〃
M/723	〃		Alain Kremski-Petitgirard	Hommage à Kandinsky	3500	(formule 2)
M/724	〃		Janine Charbonnier	01-01	1250	(formule 2)
M/725	1966年12月26日	1967年1月4日	Odette Gartenlaub (L)	Point de lendemain		(formule 1)
M/726	〃		Charles Chaynes (L)	Concerto pour orgue, orchestre à cordes, timbales et percussions	3500	〃
				合計	100505	
				Conventions no3	17155	
				Convention Musique légère	1750	
					119410	

## 1966年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/49	1966年1月17日	Jean-Jacques Robert	Vingt ans	150
M.AR/50		André Paquinet	Tu es belle	150
M.AR/51		Jean-Jacques Robert	Dis-moi pourquoi	150
M.AR/52		André Paquinet	Il tient le monde	150
M.AR/53		Jean-Jacques Robert	Nous dormions ensemble	100
M.AR/54			La petite juive	150
M.AR/55		André Paquinet	Combien	150
M.AR/56	1966年3月21日	//	Avec ce soleil	100
M.AR/57		//	Choucrounten Tango	150
M.AR/58		//	Moi	150
M.AR/59		Jean-Jacques Robert	Potemrine	150
M.AR/60	1966年3月21日	//	Comme à Ostende	150
M.AR/61		//	Je t'aime	150
M.AR/62	1966年3月28日	Armand Migiani	France-Inter	350
M.AR/63		Jean Mercadier	Passacaille	280
M.AR/64		//	Tenderly	200
M.AR/65	1966年4月8日	André Kerr	Ma guêpière et mes longs jupons	200
M.AR/66	1966年4月21日	Jean Mercadier	Chansons pour animaux	300
M.AR/67		Henri Pelissier	Laura	200
M.AR/68	1966年4月25日	Jean Mercadier	Sonate no2 Nederman	200
M.AR/69	1966年5月4日	Jean-Jacques Robert	Fais-moi mal, Johny	150
M.AR/70		//	Six roses	150
M.AR/71	1966年5月31日	//	La montagne	100
M.AR/72		//	Ils s'aimaient	150
M.AR/73		//	Terre promise	100

## 1966年 Arrangements

M.AR/74		//	Le danseur de Charleston	350
M.AR/75		//	Le ciel, le soleil et la mer	150
M.AR/76		//	Alors	100
M.AR/77		//	Choucrouten Tango	50
		//	Deshonorée	
		//	Valse des lilas	
		//	Moi, je joue la comédie	150
		André Paquinet	Encore une histoire d'amour	150
M.AR/78		//	Eléonore	100
M.AR/79		Jean-Jacques Robert	Nicolas va voir Jeanne	
M.AR/80		//	Belle aminte	
M.AR/81	1966年5月31日	André Paquinet	Voyage de noces	150
			La petite juive	
			Je t'aime	
			Potemrine	
M.AR/82	1966年6月9日	Mario Bua	Love for sale	250
M.AR/83		//	Paris insolite	500
M.AR/84		//	Fantaisie brésilienne	500
M.AR/85	1966年6月13日	Freddy Alberti	Sonate (K533 L395) de Scarlatti	400
M.AR/86		//	Sonate de Cimarosa	200
M.AR/87		//	Chansons de Guillot Martin	200
M.AR/88		Mario Bua	Feux d'artifice	1500
M.AR/89	1966年6月16日	Jean Lemaire	Broderie au passé	200
M.AR/90		//	Broderie au point d'ombre	200
M.AR/91	1966年6月22日	Henri Péliissier	Fugue XVI Bach	200
M.AR/92		//	Fugue XVII Bach	200

## 1966年 Arrangements

M.AR/93	1966年7月27日	François Rauber	Clopin-Clopant	200
M.AR/94	1966年8月29日	Pierre Devevey	Plus jamais	250
M.AR/95	1966年9月5日	Georges Delerue	Indicatif P. I.	750
M.AR/96	1966年10月17日	Marcel Couraud	Miserere Josquin des Pré[sic]	1500
M.AR/97	1966年11月7日	Mario Bua	Long ago	200
M.AR/98	1966年11月7日	〃	Star dust	250
M.AR/99	1966年11月14日	Freddy Alberti	Night and day	250
M.AR/100		Pierre Spiers	Nuage	255
M.AR/101		Mario Bua	Jardins sous la pluie	1000
M.AR/102		〃	Syracuse	300
M.AR/103	1966年11月22日	Freddy Alberti	That old feeling	250
M.AR/104	1966年11月30日	Jean Clavoric	Quand on m'enterrera	250
M.AR/105		〃	La prison	250
M.AR/106		〃	Rien au monde	250
M.AR/107		〃	Tant pis pour les paroles	250
M.AR/108	1966年12月5日	Jean Mercadier	Le Coucou	250
M.AR/109		〃	Tambourin	250
M.AR/110		J. J. Robert	Litanies pour un retour	100
M.AR/111	1966年12月12日	Henri Péliissier	Yesterday	200
M.AR/112	1966年12月15日	〃	Nuages	200
M.AR/113	1966年12月12日	〃	Coches dans le foin	150
M.AR/114	1966年12月25日	Pierre Devevey	Trois images d'Europe	750
			合計	17155



整理番号	委嘱年月日	放送年月日	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/727	1967年1月19日	1967年12月6日	Michel Gateau	Copeaux de lune	1500	formule 2
M/728			Yves Prin	Don Quichotte contre les moulins à vent	400	〃
M/729			Pierre-Max Dubois	Gadget	400	〃
M/730			Serge Lancen	En route pour Monte-Carlo	400	〃
M/731	1967年1月29日		Mario Bua	Polychromie	400	〃
M/732			Guy Luypaerts	A demi-mot	400	〃
M/733			François-Marie Lauber	Menuet 1967	400	〃
M/734	1967年2月7日		Raymond Depraz	Entelechies	1200	〃
M/735		1967年12月4日	Antoine Tisné	Musique pour un devenir	1500	〃
M/736	1967年2月8日		Gérard Calvi	Astérix (2e acte)	1000	formule 1
M/737			Earle Brown	Modules	500	〃
M/738		1966年11月9日	Georges Delerue	Agamemnon	500	〃
M/739			Lucien Merer	Ma vie	240	formule 2
			Vieillesse			
			Emportez-moi			
M/740	1967年3月6日		Wal Berg	Rêve bleu	500	〃
M/741			Léo Clarens	Le trappeur et la puce	150	〃
M/742	1967年3月14日		Lily Bienvenu	La vague et le goéland (3e partie et fin)	1600	〃
M/743			Joseph Kosma	Les croix de Brême	1200	〃
M/744			Wal Berg	Helena	500	〃
M/745			〃	Arioso	500	〃
M/746		1967年3月8日	Claude Ballif	Les Troyennes	2000	〃
M/747	1967年3月20日		André Hodeir	L'Alphabet g. o	1250	〃
				繰り越し	17490	
M/748	1967年3月28日	1967年3月6日から	Ida Gotkowsky	L'ingénieur Bakhirev	4000	formule 2
M/749	1967年4月10日		Stéphane Varègues	6 chansons	150	formule 1
M/750			Ivo Malec	Oral	5500	〃
M/751	1967年4月24日		Mario Bua	Le valseur atomique	300	formule 2
M/752	1967年5月8日		Serge Kaufmann	Ramayana (1er partie)	5500	〃
M/753			Gérard Calvi	Astérix (3e partie)	1000	formule 1
M/754	1967年5月16日		Hubert Rostaing	Quintette	1250	formule 2
M/755	1967年5月23日		Pierre Devevey	Maximilien	400	〃
M/756	1967年5月26日		Claude Prey	La noirceur du lait	6000	formule 1
M/757	1967年5月29日		Alain Margoni	Les belles de dieu	100	formule 2
M/758	1967年6月7日		Thérèse Brenet	Hommage à Signorelli	1500	〃
M/759			Yves Prin	L'Auberge sans toit	1500	〃
M/760	1967年6月13日	1967年12月8日	Michel Merlet	Sonatine en trois mouvements pour flûte et piano	1500	formule 1
M/761		1967年9月25日	Adrienne Clostre	L'homme qui rit	2000	formule 2
M/762			Marc Carles	Métaphonies	2300	〃

M/763	1967年6月14日	1967年5月18日	Olivier Bernard	La voleuse de Londres	800	〃
M/764	1967年6月20日		Stéphane Varègues	5 chansons	130	formule 1
				繰り越し	51370	
M/765	1967年7月6日		Jean Lemaire	Madame Favart	500	〃
M/766			Luc Harvet	4 lectures à vue pré-sélection non publiques accordéon	100	〃
M/767			〃	〃 publiques	100	〃
M/768			Freddy Alberti	La mouche	300	formule 2
M/769			〃	La mare aux chimères	350	〃
M/770			〃	Impasse du souvenir	250	〃
M/771	1967年7月7日		Tremblot de la Croix [Francine]	Arcadius ou l'Ecole des fantomes	7000	〃
M/772	1967年7月13日	1967年10月15日	Marcel Mihalovici	Périples	3000	formule 1
M/773			Christian Chevalier	Sunny Field	250	formule 2
M/774	1967年7月31日		Gérard Calvi	Astérix	900	formule 1
M/775	〃	1967年12月8日	Jean Laisne	A l'Orient	1500	formule 2
M/776	1967年4月14日	1967年12月9日	Yves Prin	Quatre études pour piano	1500	〃
M/777	1967年9月20日		Stéphane Varègues	6 chansons	100	formule 1
M/778	1967年9月26日		Jean Bizet	Le prince et le baladin (1ère partie)	1500	formule 2
M/779	1967年9月28日	1967年12月16日	〃	Le mystère Bénédict	2000	〃
M/780	1967年10月23日		Marc Berthomieu	La Bohème de Montmartre	2000	formule 1
M/781			Serge Kaufmann	Ramayana (2e partie et fin)	1400	formule 2
M/782	1967年10月27日		Martial Solal	San antonio	1200	〃
				繰り越し	75320	
M/783	1967年11月6日		Jacques Boigallais	Musique pour neuf métamorphoses	2000	formule 2
M/784			Henry Barraud	La fée aux miettes	10000	〃
M/785	1967年11月29日		Jean Bizet	Le prince et le baladin (2ème partie et fin)	2500	〃
M/786	1967年12月12日		Wal Berg	Mirages	500	formule 1
M/787			〃	Sérénade	500	〃
M/788	1967年12月18日		Freddy Alberti	Manolita	300	formule 2
M/789		1967年12月5日	Michel Decoust	Interaction	1500	〃
M/790			Jean Wiéner	Le Snaque	1500	〃
M/791	1967年12月19日		Pierre Israël-Meyer	Jezabel	2580	〃
M/792	1967年12月26日		Alain Margoni	La chatte blanche	2580	〃
				合計	99620	
						〃
						(formule 2)
						(formule 2)
						(formule 1)
						〃

## 1967年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/115	1967年2月27日	Charles Ravier	Ludus Nativitatis	3000
M.AR/116	1967年3月6日	Wal-Berg	Moto perpetuo	500
M.AR/117		Léo Clarens	Chanson triste	150
M.AR/118	1967年4月24日	Mario Bua	Love	250
M.AR/119	1967年5月8日	〃	Etude no5 La négresse	300
M.AR/120		〃	Final 6ème Rhapsodie hongroise	300
M.AR/121	1967年7月6日	Freddy Alberti	Gavotte Lully	250
M.AR/122	1967年7月13日	〃	Gigue Bach	250
M.AR/123		Jean Bouchety	Les roses de mai	1250
			Venise	
			Ceux de Varsovie	
M.AR/124		Marcel Couraud	5 œuvres de Josquin des Pré[sic]	1500
M.AR/125	1967年9月4日	Christian Chevalier	Nearness of you	200
M.AR/126	1967年11月29日	Wal-Berg	Fandanguillo	600
M.AR/127	1967年12月12日	〃	Fantaisie impromptu	500
M.AR/128	1967年12月18日	Freddy Alberti	Siciliana	250
M.AR/129		〃	L'Amour de moi	250
M.AR/130		〃	Bourrée	250
M.AR/131		〃	Waltz	250
M.AR/132		〃	Prélude	300
			合計	10300

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/793	1968年1月12日		Claude Arrieu	Le pique-nique	2000	formule 2
M/794	1968年1月18日		Luc Harvet	Lecture à vue Accoréon	50	〃
M/795	1968年1月25日		Monic Cecconi	Mégarythmies	1300	〃
M/796	1968年1月29日		Jean Wiéner	Chanson de Polichinelle Mais si je dois être seule	400	formule 1
M/797	1968年2月13日		Yves Prin	La marche écœurante	1080	formule 2
M/798	1968年2月26日		François Rabbath	Appelez-moi Olympe	1500	〃
M/799	1968年3月4日		Claude Arrieu	L'Anniversaire	800	〃
M/800		I. M.	J. Pierre Guézec	Le versant du monde analogue	800	formule 1
M/801	1968年3月18日	M. L.	François Rauber	Chanson	400	formule 2
M/802		〃	Serge Lancen	Marche	400	〃
M/803		I. M.	Jean Lutèce	Le triomphe des cent orions	400	〃
M/804		M. L.	Pierre Devevey	Pour lire à deux	400	〃
M/805		〃	Paul Aliprandi	Le prince du parc	400	〃
M/806		〃	Serge Kaufmann	Chanson	400	〃
M/807		〃	Pierre Duclos	Do love me	400	〃
M/808		〃	Camille Sauvage	O. R. T. F. in F	400	〃
M/809		〃	Emile Decotty	Accordéon 1963	50	〃
M/810			Janos Komives	La vera istoria della cantoria di Luca della Robbia	4500	〃
	1968年4月2日		Ivan Semenoff	Le Rois des gnomes (pour une 2ème diffusion)	2375	〃
M/811	1968年4月2日	I. M.	Jean Wiéner	Lazare	400	〃
M/812	1968年4月9日	M. L.	Roger Bourdin	Triste valse	400	〃
				繰り越し	18770	〃
M/813	1968年4月9日		Hubert d'Oriol	Sonatine romantique	800	〃
M/814	1968年4月30日		Serge Kaufmann	Cendrée	800	〃
M/815	1968年5月3日	I. M.	Girolamo Arrigo	Les Sept contre Thèbes	3500	〃
M/816	1968年5月13日	M. L.	Jean Wiéner	Scherzo-Sport	800	〃
M/817		I. M.	André Popp	Des oreilles ennemies vous regardent	500	〃
M/818	1968年5月16日	〃	Jean Bizet	Hop ! Signor	1000	formule 1
M/819		M. L.	Yves Prin	Sprint	400	formule 2
M/820		〃	René Joly	Coupe Accordéon 68	75	〃
M/821	1968年6月25日	〃	François Carennes	Marche sportive	400	〃
M/822		S.	Paul Le Flem	3ème symphonie	4500	〃
M/823	1968年7月1日	M. L.	Yves Prin	Baikala	450	formule 2
M/824		〃	〃	Asturia	400	〃
M/825		〃	Gérard Calvi	Marche sérénade	800	formule 1
M/826		〃	Jean Médinger	Accordéon	25	formule 2
M/827		〃	Yves Prin	Ismailia	350	〃
M/828		I. M.	Serge Kaufmann	Le diable blanc	1000	〃

M/829	1968年2月7日	〃	Georges Durban	Le lion des Pyrénées	3000	formule 2
M/830	1968年8月19日	M. L.	Guy Luypaerts	Trésor	400	〃
M/831	1968年9月19日	〃	J. Michel Damase	Casino	900	〃
M/832	1968年9月10日		Gérard Calvi	La nuit de Noël	6000	formule 1
				繰り越し	44870	
M/833	1968年9月16日	I. M.	Pierre Israël-Meyer	Jezabel (2ère partie)	500	formule 2
M/834	1968年9月17日	M. L.	Antoine Duhamel	Entrez dans la danse ([?] Variétés)	450	〃
M/835	1968年10月4日		Paul Hovlez	Mouvement pour violoncelle et harpe	1500	〃
M/836	1968年10月7日	I. M.	Georges Aperghis	Hommage à Victor Puillat	600	formule 1
M/837		〃	〃	Voyage d'hiver	1000	formule 2
M/838	1968年10月14日	M. L.	Serge Kaufmann	Souvenance	900	〃
M/839	1968年10月16日	〃	Jean-Fabien Gérard	Honorine	50	formule 1
M/840	1968年10月21日	S.	Jacques Boigallais	Les ombres (1re et 2e partie)	3500	formule 2
M/841	1968年10月29日	M. L.	G. G. Haring	Rues de passe	80	formule 1
M/842		〃	Freddy Alberti	Y Ruski	200	formule 2
M/843	1968年11月7日	〃	Jean Clergue	Slalom-March	400	〃
M/844	1968年11月15日		Louis Marischal	Trois pièces pour harpe	1000	〃
M/845	1968年12月13日	I. M.	Marc Berthomieu	Ango le dieppoïse	1600	formule 1
M/846			Pierre-Max Dubois	Sinfonia militare	3000	〃
M/847			Jean-Jacques Werner	Cinq dédicaces	2500	formule 2
M/848		〃	Georges Aperghis	Le chemin du charbon bleu	1500	〃
M/849		〃	Girolamo Arrigo	Les falaises de marbre	500	
M/850	1968年12月18日		Roger Boutry	Intermezzi (1ère partie)	2000	formule 2
M/851		S.	Raymond Depraz	Symphonie 1	3500	〃
M/852			Tolia Nikiprowetsky	La fête et les masque (1er partie)	4000	〃
M/853	198年12月18日	〃	Pierre Wissmer	Vème symphonie (1e et 2e mouvements)	3000	formule 2
M/854			J. Michel Damase	Lutheries	900	〃
M/855			Paul Arma	Convergence de mondes arrachés (1ère partie)	1960	〃
M/856	1968年12月23日		Philippe Capdenat	Batteries	1500	formule 1
M/857		〃	Jean Guillou	Judith-Symphonie (1ère partie)	3000	〃
M/858			Louis Sagner	Sine nomine (1ère partie)	1500	formule 2
M/859	1968年12月26日	I. M.	Henri Sauguet	Le songe de Dona Clara	1200	〃
M/860		〃	Karl Diessel	La montagne est jeune	1250	formule 1
M/861		M. C.	Yves Claque	La chatte blanche Mouvement pour quatuor à cordes (1ère partie)	1000	formule 2
M/862		I. M.	〃	La Hobgreate	2000	〃
M/863			Jean Bizet	Terezine-Requiem	9500	〃
M/864			Gérard Massias	Tjurunga IV (1ère partie)	2500	formule 1
M/865	1968年12月27日	〃	Maurice Le Roux	Julia ou l'Amour du monde	1500	formule 2
M/866		S.	Maurice Ohana	Cris (1ère partie)	3000	formule 1

1968年

				合計	106910	
--	--	--	--	----	--------	--

## 1968年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/133	1968年7月1日	J. Claude Claudric	Pas de filles qui soient plus belles	300
M.AR/134		Freddy Alberti	Rondo Mozart	300
M.AR/135		〃	Menuet Beethoven	250
M.AR/136	1968年8月19日	François Rauber	Sur la route de Dijon	400
M.AR/137		〃	Le Ranz des vaches	400
M.AR/138		〃	Berceuse bretonne	400
M.AR/139		Désiré Dondeyne	Le petit quinquin	500
M.AR/140		〃	Donibane	500
M.AR/141	1968年9月17日	Antoine Duhamel	La Fiolaire	400
M.AR/142		〃	La Marche des rois	450
M.AR/143	1968年9月17日	〃	Trois jeunes tambours	450
M.AR/144	1968年9月26日	Léo Chauliac	Aux marches du palais	400
M.AR/145	1968年10月14日	Michel Sanvoisin	Dialogue entre Madeleine et Jesus	300
M.AR/146		〃	Dix Canticas	1500
M.AR/147		〃	In nativatem domini canticum	1600
M.AR/148		〃	Balet[sic] comique de la Royne	1500
M.AR/149		〃	Regina Coeli	900
			O Dulcissime domine	
			Osapientia	
M.AR/150	1968年10月29日	Freddy Alberti	Air gallois	400
M.AR/151	1968年10月30日	Paul Piot	Aux jeunes loups	290
M.AR/152		〃	Les monsieur de	350
M.AR/153		〃	Moze joz dyis	240
M.AR/154	1968年12月18日	Freddy Alberti	Chanson	300
M.AR/155		〃	Tango	300

1968年 Arrangements

M.AR/156		Roland Vincent	Dus pastous a l'unbretto	250
M.AR/157		Charles Ravier	Les maîtres de l'Ars Nova	2800
M.AR/158		„	Anthologie des troubadours du XIIème siècle	2800
M.AR/159		„	Pastorelle, musette et vaudeville	490
M.AR/160	1968年12月19日	Charles Ravier	Tourbion, bransle et gaillarde	1050
			Lasmis Penas	
			Danza	
			合計	19820



整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/867	1969年1月23日	M. L.	Jacques Dieval	Valse d'Organdi	500	formule 2
M/868		〃		Satinette	500	〃
M/869	1969年1月24日	S.	Pierre Wissmer	Vème symphonie (2ère partie)	1000	〃
M/870		I. M.	Goerges Durban	Le lion des Pyrénées	3500	〃
M/871		S.	Alain Abbott	Musique pour accordéon et orchestre à cordes	3000	〃
M/872	1969年2月18日	M. C.	Pierre Israël-Meyer	Duo pour flûte et alto	1500	〃
M/873		〃	Alain Moëne	Ludus 4	1500	formule 1
M/874		M. L.	Louis Marischal	Harpophonie en quatre	1500	formule 2
M/875		I. M.	Oswald Andrea	Chanson de la femme avec un seul bras	200	formule 1
M/876		〃	André Almuro	Energies	4000	〃
M/877		〃	Jean Wiéner	Solitude tambour	1000	formule 2
M/878		L.	Paul Le Flem	La maudite (2e partie)	3750	〃
M/879		M.	Serge Lancen	Obsession (pour [?] d'harmonie)	800	〃
M/880		S.	Maurice Ohana	Cris (2ème partie)	3000	formule 1
M/881	1969年3月6日	I. M.	Alain Margoni	Pièce pour piano Kyrie	80	〃
M/882	1969年3月10日	〃	Serge Kaufmann	Les Bacchantes	2500	formule 2
M/883	1969年3月13日	〃	Marc Berthomieu	La conciergerie de Grignan	500	formule 1
M/884	1969年3月20日	〃	Luc-André Marcel	Alceste	3500	formule 2
M/885	1969年6月18日	〃	Alain Margoni	Le prix d'une apparence	700	〃
M/886	1969年4月21日	M. L.	Serge Lancen	Concerto champêtre	1500	〃
				繰り越し	34030	
M/887	1969年4月21日	S.	Pierre Barbaud	French Gagaku	2000	〃
M/888		〃	Louis Marischal	Quatre caprices pour grand orchestre	2500	〃
M/889		〃	Yves Prin	Au souffle d'une voix	5000	formule 1
M/890	1969年4月25日	M. C.	Georges Aperghis	Contrepoint	1200	formule 2
M/891	1969年4月28日	M. L.	Jean Médinger	Lecture à vue Accordéon 68	100	〃
M/892	1969年5月13日	I. M.	Louis Sàguer	L'ombre d'un froid	900	〃
M/893		M. C.	Claude Pichaureau	Marine	1500	formule 1
M/894	1969年5月22日	I. M.	Edgar Bischof	Robert Macaire	300	〃
M/895	1969年5月23日	〃	Alain Margoni	Chansons pour le 5ème centenaire de Machiavel	500	〃
M/896	1969年5月27日	M. C.	René Joly	Coupe Accordéon 68	30	formule 2
M/897	1969年6月2日	S.	Marc Vaubourgoin	Concerto pour clavecin	75	〃
M/898	1969年6月16日	〃	Serge Lancen	Sinfonietta pour orchestre	400	〃
M/899	1969年6月24日	〃	Patrice Mestral	Eléments	4500	formule 2
M/900		M. C.	Philippe Drogoz	Antinomies	450	〃
M/901		S.	Louis Marischal	Concerto pour flûte, harpe, orchestre	400	formule 1
M/902	1969年6月25日	〃	Bozidar Kantuser	Concerto pour violoncelle et orchestre	800	formule 2
M/903	1969年6月27日	〃	Roger Albin	L'Apprentissage de la joie	25	〃

M/904	1969年6月30日	M. L.	Désiré Dondeyne	Litanies pour le samedi saint	350	//
				繰り越し	73360	
M/905	1969年7月2日	M. C.	Claude Ballif	Trio à cordes no3	3500	formule 2
M/906	1969年8月4日	I. M.	Jean Wiéner	Il est né le divin enfant	1500	//
M/907		M. C.	Pierre Grouvel	Oniophonie 2	2000	//
M/908	1969年8月5日	I. M.	Jean Wiéner	L'inconnu	700	//
M/909		S.	Alain Kremski	Le Labyrinthe	4500	formule 1
M/910		M. C.	Yves Claoué	Quatuor à cordes (2e p.)	3000	formule 2
M/911		L.	Girolamo Arrigo	Orden	10000	formule 1
M/912		S.	Alain Louvier	Chant des limbes	4000	//
M/913	1969年8月25日	M. C.	Edison Denisov	Trio à cordes	2000	//
M/914	1969年9月4日	S.	François Vercken	Petite Cantate pour un vendredi saint	3000	formule 2
M/915		M. C.	Georges Dandelot	Quintette pour flûte, violon, alto, violoncelle et harpe	2000	//
M/916	1969年9月5日	//	Hugh Robertson	Sonate pour violon et piano	2000	//
M/917		//	Serge Lancen	4 pièces pour 5 harpes	1200	//
			Espace			
			Ibérique			
			Goëlette			
			Saltoirelle			
M/918		S.	Maguy Lovano	Sourdre	4000	//
M/919	1969年9月9日	I. M.	Marc Berthomieu	Le casino de Barbizan	800	formule 1
M/920	1969年9月11日	M. C.	A. Sjukur Slamet	Point-Contre	2000	formule 2
M/921	1969年9月26日	M. L.	Roger Boutry	2 pièces pour 5 harpes Contours Pastels	1000	//
M/922		I. M.	Olivier Bernard	Monsieur de Coyllin	600	formule 1
				繰り越し	121260	
M/923	1969年9月26日	S.	Edith Lejet	Le journal d'Anne Franck	5500	//
M/924	1969年10月6日	M. L.	Jean Bizet	Vega Amphion	1000	formule 2
M/925	1969年10月8日	I. M.	Patrice Sciortino	L'Anneau de Gygès	500	formule 1
M/926		S.	Pierre Jouvin	2ème symphonie (1e et 2e mouvement)	2000	formule 2
M/927	1969年10月14日	I. M.	Dom Clément Jacob	Le prophète Osée	400	formule 1
M/928	1969年10月15日	M. L.	Freddy Alberti	Patrouille	250	formule 2
M/929	1969年10月16日	S.	Louis Marischal	Douze émotions sonores pour orchestre	2500	//
M/930	1969年10月21日	M. L.	Roger Boutry	Deux pièces en sextuor	1000	formule 1
M/931	1969年10月29日	I. M.	Gilbert Amy	Le jardin	1000	formule 2
M/932	1969年11月6日	S.	Jean Guillou	Judith-Symphonie	4200	formule 1
M/933		M. L.	P. Max Dubois	Virelai	400	formule 2
M/934		//	//	Pour danser	400	//

1969年

M/935		„	„	Cour d'amour	450	„
M/936		„	„	Valse pour un manège	450	„
M/937			Roger Boutry	Intermezzi (2e partie)	2500	„
M/938	1969年12月3日	I. M.	Georges Aperghis	Un été catalan (1ère partie)	1500	„
M/939		„	Karl Diessel	Les portes de sable	500	formule 1
				合計	146310	
M/940	1969年12月10日		Tolia Nikiprowetsky	La fête et les masques (2e partie)	4000	formule 2
M/941		M. L.	Gérard Calvi	4 chansons de la Paul Gilson	2000	formule 1

## 1969年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	作曲者名	作品名	委嘱料
M.AR/161	1969年1月31日	François Guin	Pas de filles qui soient plus belles	800
M.AR/162		Freddy Alberti	Printemps	400
M.AR/163	1969年2月18日	François Lauber	Indicatif Inter	600
M.AR/164	1969年4月23日	Freddy Alberti	Malaguena	300
M.AR/165	1969年4月23日	Ivan Semenoff	Cabaret 1850	2500
M.AR/166	1969年6月2日	Yvonne Schmitt	Cabaret de la mer	1000
M.AR/167	1969年6月13日	Freddy Alberti	Air Cimarosa	300
M.AR/168	1969年10月1日	Jean Bizet	Concerto à cinq	1000
M.AR/169	1969年10月8日	Roger Calmel	Voici le mois de mai	1000
			Les mariniers	
			[?]	
			La lauzeta	
			Danse languedocienne	
			Napoli[?]	
M.AR/170	1969年10月15日	Freddy Alberti	Tambourin	250
M.AR/171		〃	Maia	200
M.AR/172		〃	La Reine de Saba	250
M.AR/173	1969年11月13日	Gérard Massias	Tsurunga	5000
			合計	13600

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1970年1月9日	Ly.	André Almuro	Visite à Godenholm	4000	formule 1
M/2		M. Ch.	Arkady Trebinsky	Fata Morgana	2000	formule 2
M/3		I. M.	Alexandre Tansman	Huon de Bordeaux	1500	〃
M/4		〃	Georges Delerue	Bulletins	300	formule 1
M/5		〃		Radio-Terre	150	〃
M/6		M. Ch.	Ed. Hagerup Bull	Sinfonia Humana	3000	formule 2
M/7	1970年1月15日	〃	Perig Herbert	Uryen	1200	〃
M/8	1970年1月22日	〃	Harry Cox	Sinfonietta pour orchestre	2500	〃
M/9	1970年1月26日	〃	Pierre Revel	Thème et variations pour 5 harpes	700	〃
M/10	1970年1月30日	I. M.	Janos Komives	Othello	1500	formule 1
M/11	1970年2月3日	M. Ch.	Darius Milhaud	Musique pour Ars Nova	10000	〃
M/12		〃	Louis Marischal	4 esquisses pour 5 harpes	900	formule 2
M/13	1970年2月9日	I. M.	Henri Sauguet	Le Ballade de Coverdale	1800	formule 1
M/14	1970年2月25日	M. Ch.	Alexandre Tansman	Trois pièces pour harpe, clarinette en si et quatuor à cordes	1000	〃
M/15		I. M.	Betsy Jolas	Le chant de l'amour triomphant	1250	〃
M/16	1970年3月4日	〃	Alain Margoni	Christobal de Lugo	150	〃
M/17	1970年3月18日	Var.	Jean Médinger	4 lectures à vue Coupe Accordéon 1970 (pré-sélection)	120	〃
M/18		I. M.	Claude Arrieu	L'Aventure de Walter Schnaffs	1600	formule 2
				繰り越し	33620	
M/19	1970年3月31日	M. Ch.	René Koering	Memento pour 5 harpes	3000	formule 1
M/20		〃	Jacques Dumont	Cinqphonies	3000	formule 2
M/21		S.	Pierre Jouvin	2ème symphonie (3e mouvement)	2000	〃
M/22		I. M.	Georges Aperghis	Un été catalan (fin)	3000	〃
M/23	1970年4月2日	〃	Georges Delerue	L'Education sentimentale	4000	formule 1
M/24		〃	Michel Colombier	L'Etrange voyage de M. Brentwood	400	〃
M/25		S.	Janine Charbonnier	Automatisme 1	1600	formule 2
M/26	1970年4月6日	〃	Jacques Boisgallais	Les ombres (fin)	1575	〃
M/27		〃	Manuel Rosenthal	Deux études en camaïeu	5000	formule 1
M/28	1970年4月9日	I. M.	Jean-Claude Casadesus	Stalingrad	3000	formule 2
M/29	1970年4月21日	〃	Bronislav Horowicz	Les Cordonniers	700	〃
M/30	1970年4月23日	〃	Georges Aperghis	Michu	400	formule 1
M/31	1970年4月27日	Var.	Jean Médinger	4 lectures Coupe Accordéon 70 (élimination publique)	120	〃
M/32		I. M.	Georges Delerue	Prince de la jeunesse	2300	〃
M/33	1970年5月4日	S.	Paul Méfano	La cérémonie	6000	〃
M/34	1970年5月11日	I. M.	Michel Emer	Les aventures d'un jeune homme trop sensible	1450	〃
M/35	1970年5月22日	〃	Yves Prin	Urfaust	1500	〃
M/36		Chœurs	Jean-François Zbinden	Monophrases	3000	formule 2
				繰り越し	76165	

M/37	1970年5月28日	M. Ch.	René Koering	Parallèles	5000	formule 1
M/38	1970年6月2日	〃	Yvonne Desportes	L'exploit de la coulisse	2000	formule 2
M/39	1970年6月3日	〃	Akira Tamba	Tathata	2500	〃
M/40	1970年6月6日	I. M.	Didier Denis	Puzzle pour abdication	1800	〃
M/41	1970年6月8日	〃	Georges Aperghis	La personne est morte	850	formule 1
M/42	1970年6月11日	〃	Alain Caillaud	La complainte du vieux marin	2000	formule 2
M/43		〃	Luc-André Marcel	Macbeth	3500	formule 1
M/44	1970年6月18日	M. Ch.	Maurice Ohana	Sibylle	3000	〃
M/45	1970年6月25日	S.	André Jolivet	Songe à nouveau rêve	10000	〃
M/46		M. Ch.	Didier Denis	C'est pas une raison	3400	〃
M/47	1970年7月27日	〃	Jean Wiéner	Concert pour orchestre et piano principal	4000	formule 2
M/48		I. M.	Olivier Bernard	La chasse aux corbeaux	400	formule 1
M/49	1970年7月28日	M. Ch.	Philippe Cannon	Oraison funèbre de l'âme humaine	3500	formule 2
M/50		I. M.	Serge Kaufmann	L'Oisellerie	1200	〃
M/51		M. L.	Pierre Revel	Toccatà pour 5 harpes	500	〃
M/52		I. M.	André Almuro	Les irradiants	3800	formule 1
M/53	1970年8月20日	Chœurs	Ivo Malec	Dodecameron	4000	〃
M/54	1970年8月31日	M. L.	Pierick Houdy	Le printemps déguisé	2200	formule 2
			Père Paul			
			L'étang			
			La case au renard			
			Diogène, chien chaud			
			Belle île			
				繰り越し	127015	
M/55	1970年10月5日	I. M.	Yves Darriet	Un Ballon en or (1ère partie)	3750	formule 2
M/56	1970年10月6日	M. Ch.	Charles Ravier	Corps sans raison	3600	formule 1
M/57	1970年10月8日	S.	Janos Komives	Concerto pour quatuor à cordes et orchestre	4000	〃
M/58	1970年11月9日	Chœurs	Betsy Jolas	Sonate à 12	4000	〃
M/59		M. Ch.	Emile Damais	Citharodie	1300	formule 2
				Suite concertante pour 5 harpes		
M/60		S.	Alain Bancquart	Iles pour violon et orchestre	4050	formule 1
M/61	1970年11月13日	〃	Claude Ballif	Lovecraft	4000	formule 2
M/62	1970年11月25日	I. M.	Alain Margoni	Faust	400	formule 1
M/63	1970年11月30日	M. Ch.	Michel Zbar	Swingle Novae	4200	〃
M/64		〃	Monic Cecconi	Instants	3200	〃
M/65	1970年12月1日	V.	Jean Médinger	Lecture à vue Accordéon 70 (juniors classique)	35	formule 1
M/66		V.		〃 (juniors musette)	35	〃
M/67	1970年12月3日	L.	Tolia Nikiprowetsky	La fête et les masques (3e partie et fin)	4000	formule 2
M/68		M. Ch.	Pierre Capdevielle	Histoires obscures	4000	〃
M/69		I. M.	Alain Margoni	Chanson de Néron	50	formule 1

M/70	1970年12月4日	〃	Philippe Drogoz	Au château d'Argol	3500	formule 2
M/71	1970年12月10日	S.	Gérard Gallo	Concerto de piano	2500	〃
M/72	1970年12月15日	I. M.	Raoul Coquillat	Electre (2e partie)	600	formule 1
M/73		〃	Gaston Sylvestre	Electre (1e partie)	600	〃
M/74	1970年12月17日	M. Ch.	Antoine Duhamel	Hommage à Mingus	1500	〃
				繰り越し	178335	
M/75	1970年12月17日	L.	Pierre Devevey	Il n'y a plus de pélicans	4500	formule 2
M/76	1970年12月22日	Chœurs	Gilbert Amy	Récitatif, air et variation	4000	formule 1
M/77		V.	Wladimir Cosma	Fantomas	2800	〃
M/78		S.	Henri Martelli	3e suite symphonique	2500	formule 2
M/79		〃	Marc Carles	Arbitraires	3000	formule 1
M/80	1970年12月24日	M. Ch.	Philippe Carson	Pièce pour 11 instruments et percussion	1800	formule 2
M/81	1970年12月27日	S.	Lucien Duchemin	Symphonie	3500	〃
M/82		M. Ch.	Henri Tomasi	Concerto pour contrebasse et O. C	2500	formule 1
M/83	1970年12月24日	S.	Alain Moëne	Chroniques	2000	formule 2
M/84		V.	Michel Roques	Le Souvenir	1000	
				Les Sources de la vie		
				De bon cœur la bonne aventure		
				La Rivière		
				La Sieste		
				Total Inédits	203835	
				Total Arrangements	17400	
					221235	

## 1970年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料
MAR. 1	1970年1月9日	M. L.	Georges Delerue	Point d'interrogation	750
MAR. 2		〃	〃	Résonances	300
MAR. 3		〃	Freddy Alberti	Plaine ma plaine	300
MAR. 4	1970年4月16日	L.	Pierick Houdy	Il faut dire adieu	1000
				Rage, enragé	
				Pauvre marin	2500
				En revenant de Nantes	1000
				J'ai vu le loup, le renard	300
MAR. 5	1970年6月17日	M. L.	Mario Bua	Ronde des lutins	5000
				Chasse sauvage	
				Mephisto-valse	
				Feux follets	
				Les jeux d'eau à la Villa d'Este	
MAR. 6	1970年8月31日	Maîtrise	Pierick Houdy	Vive la rose	150
				Sur la lune	
				Aux marches du palais	
MAR. 7	1970年10月6日	I. M.	Charles Ravier	Le jeu de Robin et Marion	3950
MAR. 8	1970年11月9日	M. L.	Gérard Calvi	12 chansons de Mikis Theodorakis	6000
				合計	17400



1971年

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1971年1月21日	I. M.	André Popp	La Saison nouvelle	1500	formule 1
M/2		M. Ch.	André Boucourechliev	Anarchipel	5000	〃
M/3		Georges Cour	Georges Aperghis	La guimbarde	1700	〃
M/4	1971年2月3日	M. Ch.	Roger Calmel	Suite occitane	1500	formule 2
M/5	1971年3月9日	I. M.	Alain Romans	Les Enchantements de Brocéliande	300	formule 1
M/6		〃	Henri Horne	Chanson des pirates	50	〃
M/7	1971年3月10日	〃	Patrick Siniavine (Allain)	La Maîtresse	400	〃
M/8		M. Ch.	Paul Aliprandi	Triptyque futilis	1000	〃
M/9	1971年3月15日	I. M.	Yves Darriet	Un Ballon en or (2e p.)	5400	formule 2
M/10	1971年3月16日	〃	Claude Arrieu	Les amours des grandes égéries	5000	formule 1
M/11	1971年3月29日	M. Ch.	Pierre Jansen	Sphène	1500	formule 2
M/12		〃	Louis Saguer	Oreste	2500	formule 2
M/13	1971年4月2日	I. M.	Guy Reibel	Jeu d'échanges	4800	〃
M/14		M. Ch.	Pierre Mariétan	Interfaces	4000	〃
M/15	1971年4月7日	I. M.	Paul Arma	Convergence de mondes arrachés	3700	〃
M/16		〃	Charles Ravier	Graine de Satrape	1200	〃
M/17	1971年4月19日	Var.	Costin Miereanu	Alba	1500	〃
M/18	1971年5月5日	I. M.	Karel Trow	La Métamorphose	750	formule 1
M/19		M. Ch.	Karel Trow	Les Portes	550	〃
M/20	1971年5月7日	〃	Louis Bessièrès	Johann Schlups	850	〃
M/21		S.	Louis Bessièrès	Azouk	1250	〃
M/22	1971年5月7日	M. Ch.	Pierre Ancelin	Concerto gioioso	3000	〃
M/23	1971年5月14日	〃	Pierrette Mari	Concerto pour guitare, cordes et percussion	4000	formule 1
M/24	1971年5月24日	I. M.	Patrice Mestral	Cérémonial pour un combat	400	〃
M/25	1971年5月26日	〃	Alain Margoni	Colomba	1600	formule 2
M/26	1971年6月7日	L.	Georges Aperghis	La Tragique Histoire du nécromancien Hiéronimo et de son miroir	1575	〃
M/27	1971年6月10日	Chœurs	Claude Prey	Theatrophonie	5000	formule 1
M/28	1971年6月17日	I. M.	Alain Margoni	La Descente sur Recife	3000	formule 2
M/29	1971年6月29日	M. Ch.	Ivan Semenov	Mouvement pour cordes	700	〃
M/30	1971年6月30日	L.	Jean Wiéner	Chant pour les morts en montagne	400	formule 1
M/31	1971年7月7日	M. Ch.	Francis Miroglio	Masques	120	〃
M/32	1971年7月7日	〃	Raymond Depraz	Conductus pour alto et 9 instruments	2300	〃
M/33	1971年8月5日	〃	André Jolivet	Heptade pour trompette et percussion	6000	〃
M/34		L.	André Casanova	La coupe d'or	1450	〃
M/35	1971年9月8日	Chœurs	Patrice Sciortino	Prisons	1500	〃
M/36		M. Ch.	Horatiu Radulescu	Everlasting Longins	3000	formule 2
M/37	1971年9月14日	S.	Antoine Tisné	Impact I	76165	
M/38	1971年9月24日	M. Ch.	Jean-Paul Holstein	Les chants idolâtres	5000	formule 1

M/39	1971年9月29日	I. M.	Claude Arrieu	Thyl l'espiègle	2000	formule 2
M/40	1971年9月30日	L.	Claude Prior	Le Revolver indécis	2500	〃
M/41	1971年10月8日	M. Ch.	Aubert Lemeland	Improvisations concertantes (clarinette et orch. à cordes)	2500	formule 1
M/42	1971年10月21日	L.	Marcel Goldmann	Opéra pour un Graphe	6000	formule 2
M/43	1971年10月25日	M. Ch.	Marc Carles	Stellaires pour violon, alto, violoncelle, trombone et guitare	3000	〃
M/44	1971年10月27日	〃	Claude Bouvrain	Pour un infini	3000	formule 1
M/45	1971年11月5日	L.	Ivo Malec	Victor Hugo, un contretous (1e p.)	5000	formule 1
M/46	1971年11月15日	M. Ch.	Kyriacos Sfetsas	Docimologie	2500	〃
M/47	1971年11月15日	L.	Jean-Yves Bosseur	Completely Sweet	5000	formule 2
M/48	1971年11月23日	〃	Bruno Gillet	Diminuendo	3500	formule 1
M/49		M. L.	François Carennes	Solitudes	750	formule 2
M/50	1971年12月3日	I. M.	Georges Aperghis	Le mangeur de temps	1000	formule 1
M/51		L.	〃	Oraison funèbre	4000	〃
M/52	1971年12月6日	S.	Jean-Guy Bailly	Zénith	2500	formule 2
M/53	1971年12月13日	L.	Ivo Malec	Victor Hugo, un contretous	5000	formule 1
M/54		I. M.	Jean Wiéner	Bouvard et Pecuchet	1500	formule 2
M/55	1971年12月27日	Chœurs	Guy Reibel	Cantate extraordinaire	10000	formule 1
M/56		I. M.	Vincent Vial	In florae memoriam	1000	formule 2
				合計	174100	
				Arrangt.	36485	
					210584	
					127015	

## 1971年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料
MAR. 1	1971年3月14日	V.	Roger Pouly	48 arrangements concours Ch. Trenet	5664
MAR. 2		〃	〃	45 〃	5310
MAR. 3	1971年5月17日	〃	〃	7 〃	126
MAR. 4	1971年5月19日	〃	〃	50 〃	5900
MAR. 5	1971年5月24日	〃	〃	11 〃	1248
MAR. 6		M. Ch.	Charles Ravier	Ballet per cantare sonare e ballare	3500
MAR. 7	1971年6月7日	V.	Roger Pouly	18 arrangements concours Ch. Trenet	2124
MAR. 8	1971年6月28日	〃	〃	15 〃	1770
MAR. 9	1971年7月1日	〃	〃	14 〃	1652
MAR. 10	1971年7月5日	〃	〃	15 〃	1770
MAR. 11		〃	〃	5 〃	590
MAR. 12	1971年8月5日	〃	〃	12 〃	1416
MAR. 13	1971年9月14日	〃	〃	16 〃	1888
MAR. 14		〃	〃	20 〃	2360
MAR. 15	1971年10月12日	〃	〃	12 〃	1416
				合計	36484

1972年

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1972年1月14日	I. M.	EFM	Jean Wiéner	Le Golem	2200	
M/2		S.	〃	Michel Decoust	Si et si seulement	4000	
M/3	1972年2月25日	M. Ch.	〃	Pierre Israël-Meyer	La dame d'Egushi	4000	
M/4	1972年2月29日	I. M.	〃	Jean Wiéner	Hirgence ou les sortilèges	2500	
M/5		M. Ch.	1	Girolamo Arrigo	Organum seronimus	3500	Ens. Ravier
M/6	1972年3月1日	I. M.	EFM	Georges Durban	Les Pardailhan	6000	
M/7	1972年3月2日	M. Ch.	〃	Antoni Szalowski	6 essais pour orchestre de chambre	4000	Nice
M/8		I. M.	1	Janos Komives	La fève noire	1000	
M/9		L.	EFM	Raymond Depraz	Voix	6000	
M/10	1972年3月3日	M. Ch.	〃	Monic Cecconi	Nova	3000	Ars Nova
M/11	1972年3月8日	〃	〃	Jean-Pierre Beveniot	Concerto pour trompette, piano et cordes	4000	
M/12	1972年3月10日	S.	〃	Suzanne Joly	Rupestre	1000	Nice
M/13	1972年3月17日	〃	〃	René Koering	Vocero	4000	O. Ph.
M/14	1972年3月21日	〃	〃	Louis Saguer	Sine Nomine (2e p.)	2000	ONF
M/15	1972年4月21日	S.	〃	E. Hagerup Bull	Air solennel	1500	D. Milhaud
M/16		I. M.	1	Claude Arrieu	Les amours des grandes égéries	6000	
M/17	1972年5月12日	〃	〃	Olivier Bernard	Célimare le bien-aimé	1000	
M/18	1972年8月25日	S.	〃	Jacques Bondon	Ouverture latine	1500	D. Milhaud
M/19		〃	EFM	Pierre Hasquenoph	La nuit	1500	
M/20	1972年5月29日	〃	1	Francis Miroglio	Extensions	7000	
M/21	1972年6月13日	I. M.	〃	Jacques Datin	Le Marathon (1ère partie)	1500	
M/22	1972年6月15日	S.	EFM	Antonio Braga	Le carnaval de Naples (1ère partie)	900	D. Milhaud
M/23		〃	〃	〃	〃 (2e partie)	600	
M/24		I. M.	1	Jacques Charpentier	Saul de Tarse	2800	
M/25		S.	〃	Manfred Kelkel	Mazel Tov	1500	D. Milhaud
M/26	1972年6月19日	〃	〃	Antoine Tisé	Arches de lumière	1500	
M/27		I. M.	EFM	Georges Aperghis	La mort facile	1000	
M/28	1972年6月22日	S.	〃	Roger Calmel	Alba occitana	1500	D. Milhaud
M/29	1972年6月29日	I. M.	1	Janos Komives	Le microbe de la passion	2000	
M/30	1972年6月30日	〃	EFM	Alain Moëne	Les maléfiques	2500	
M/31		S.	〃	Mario Vittoria	Syllepses	2500	

1972年

M/32	1972年7月5日	L.	〃	Marion Kouzan	Métal	5000	
M/33	1972年7月10日	〃	1	André Almuro	Vie, vent, vide	3000	
M/34	1972年8月17日	S.	〃	F. Bernard Mâche	Rambaramb	6000	
M/35	1972年8月22日	〃	〃	Akira Tamba	Sunyata	4500	
M/36		L.	EFM	René Koering	Centre d'écoute	6000	
M/37		I. M.	1	Bronislaw Horowicz	Les curieuses aventures de Lazarille	500	
M/38	1972年10月4日	S.	EFM	Alain Abbott	Préludes pour orchestre	3000	
M/39		V.	〃	Jacques Deneuille	Diptyque 272	800	
M/40	1972年10月6日	〃	〃	J. Jacques Werner	Concerto grosso	1200	
M/41		S.	〃		Trois gatmas	2000	
M/42		〃	〃	Michel Rateau	Trois musiques pour orchestre	4000	
M/43		L.	〃	Henry Barraud	La divine comédie	7500	
M/44	1972年10月10日	M. Ch.	1	André Hodeir	Bitter Ending	5000	
M/45	1972年10月17日	V.	EFM	Serge Lancen	Joyeuse ouverture	2000	
M/46	1972年10月20日	M. Ch.	〃	Jacques Vallier	Fantaisie pour alto seul	400	
M/47	1972年10月24日	L.	1	Claude Prey	Donna mobile	12500	
M/48	1972年11月9日	S.	EFM	Patrice Mestral	Dissensions insertions	4000	
M/49	1972年11月14日	I. M.	1	Francis Miroglio	Lieux communs	3500	
M/50	1972年12月1日	M. Ch.	〃	Jean Bizet	Les chants de la nuit	3000	
M/51	1972年12月4日	I. M.	〃	Daniel Laloux	La Tétine de Jade	600	
M/52	1972年12月6日	〃	EFM	Georges Aperghis	Le chat botté	1600	
M/53	1972年12月13日	〃	1	Paul Durand	Un de Baumugnes	1500	
M/54		M. Ch.	EFM	Aubert Lemeland	Partita	3000	
M/55		〃	1	Alain Louvier	7 caractères	4000	
M/56	1972年12月18日	I. M.	〃	Joanna Bruzdowicz	Le cyclope	900	
M/57		Jazz	〃	André Hodeir	Slow black wood	900	
M/58		〃	2	〃	Cagoules et Anatoles	2800	
M/59	1972年12月26日	I. M.	EFM	Patrice Mestral	Sarcelles s/ Mer	1700	
					合計	174900	
						127015	

1972年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料
MAR. 1	1972年1月28日	V.	Roger Pouly	Le temps de chanter (concours Ch. Trenet)	1200
MAR. 2	1972年7月10日	〃	Georges Lartigau	Najino Poletse	500
MAR. 3		〃	Gilbert Cascales	Quelque chose de plus beau que l'amour	600
MAR. 4		〃	〃	Arrête-toi, mon temps	600
MAR. 5	1972年10月12日	〃	Pierre Porte	Zacrekajniyz ta mitosciz	500
				合計	2320

1973年

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料
M/1	1973年1月10日	I. M.	EFM	1046	Patrice Sciortino	J. L. Barrault et Mad. Renaud reçoivent	1200
M/2		I. M. C.	〃	16	Maguy Lovano	Diamorphose I	3500
M/3	1973年1月18日	M. Ch.	1	15	Philippe Capdenat	Croce e Delizia	2500
M/4		I. M.	〃	15	Claude Arrieu	Les amours des grandes égéries	1700
M/5	1973年1月19日	〃	〃	8	Olivier Bernard	Le point de mire	900
M/6	1973年1月23日	S.	EFM	15	Daniel Meier	Semen	2500
M/7		Jazz	1	20	Martial Solal	Fluctuat nec mergitur	4000
M/8	1973年2月2日	M. Ch.	EFM	5	Philippe Sagnier	Pastorale pour flûte seule	800
M/9	1973年2月5日	M. L.	1	1015	Alain Savouret	Valse molle	1500
M/10	1973年3月13日	S.	〃	20	Alain Bancquart	Simple	4000
M/11		M. L.	〃	11'30	Bernard Parmegiani	Et après...	2500
M/12	1973年3月28日	S.	〃	18	Manfred Kelkel	Le Tombeau de Scriabine	4000
M/13	1973年3月29日	I. M.	EFM	50	René Koering	Avesha	4000
M/14		M. Ch.	〃	15	Daniel Ouzounoff	Figures auditives	2500
M/15	1973年5月2日	M. Ch.	1	12	Yoshihisa Taïra	Dioptase pour 3 cordes	2500
M/16		Jazz	EFM	14	Ivan Julien	Tout ça à propos de 3 tambours	2500
M/17	1973年5月2日	S.	1	22	Janos Komives	Pop-Symphonie	5000
M/18	1973年5月11日	〃	〃	15	Mihai Mitrea-Celerianu	Ain m1 pour orchestre	3000
M/19		M. Ch.	〃	15	Costin Mioreanu	Anfang	3500
M/20	1973年5月15日	〃	EFM	19'30	Fernand Vandenbogaerde	Prolifération	3000
M/21	1973年5月17日	I. M.	〃	24	Pierre-Max Dubois	Les amours du chevalier de Faublas	2500
M/22	1973年6月6日	M. Ch.	1	18	Akira Tamba	Chant du monde	3500
M/23	1973年6月7日	S.	EFM	9	Philippe Drogoz	Eclatement 2	2500
M/24	1973年6月12日	I. M.	1	1h10	Jacques Fassolm	Quatre grands cris humains	2600
M/25	1973年6月15日	S.	〃	19	Ton That Tiet	Ngu Hang II	4000
M/26		〃	EFM	17'20	Pierre Israël-Meyer	Kitsch-Eurydice	3500
M/27		〃	〃	1h	Gérard Masson	Ici c'est la tyrannie	15000
M/28	1973年6月26日	I. M.	〃	14	Bronislaw Horowicz	Palamede ou l'amour chat	1000
M/29	1973年8月6日	M. Ch.	〃	30	René Koering	Mahler - Lointain soleil des morts	6000
M/30		〃	〃	18	Janine Charbonnier	Filtres	3000
M/31		I. M.	〃	35	Charles Ravier	Les chemins de l'imaginaire (1ère partie)	6000
M/32	1973年8月6日	M. Ch.	〃	17	Antoine Tisé	Arkham	3000

1973年

M/33	1973年10月2日	S.	〃	16	Patrice Mestral	Surfaces granulées	4000
M/34		〃	〃	15'45	Paul Arma	Cinq résonances pour orchestre	3500
M/35		M. Ch.	〃	20	Edith Lejet	Jaspure	4500
M/36		〃	〃	9'30	Odette Gartenlaub	Environnement pour 5 harpes	8000
M/37	1973年10月8日	〃	1	20	Yves Prin	Action-rélexe	4500
M/38		I. M.	1	14	Janos Komives	Buddenbrook	1500
M/39	1973年10月17日	〃	〃	15	Alain Abbott	La tondue	1000
M/40	1973年11月9日	〃	EFM	22'10	Alain Margoni	Nightingale ou la bell dame sans merci	2000
M/41	1973年11月15日	〃	〃	40	Janine Charbonnier	Circus	5000
M/42	1973年11月22日	〃	1	55	Jean-Yves Bosseur	Le prophète voilé	4000
M/43	1973年11月27日	Chœurs	〃	18	Milko Kelemen	Monogatari	2500
M/44	1973年11月28日	I. M.	〃	10	Georges Aperghis	L'homme qui attrape les rats	1000
M/45	1973年11月28日	〃	〃	13	〃	Hamlet	1300
M/46	1973年12月10日	〃	〃	33	François Le Roubaix	Un roi prisonnier de fantomas	3500
						合計	147000



1973年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料
MAR. 1	1973年3月28日	L.	Charles Ravier	Ballet comique de la Reyne	5000
MAR. 2	1973年6月6日	S.	Louis Saguer	Concerto grosso (anonyme)	1000
MAR. 3		〃	〃	Cinque Ricercari (Anonyme)	1600
MAR. 4	1973年6月21日	〃	〃	Balli da lo scolaro Zanetti	2000
MAR. 5	1973年10月3日	L.	〃	Horatius Cocles Méhul	8000
MAR. 6	1973年10月17日	M. Ch.	Antoine Geoffroy-Dechaume	17 Sinfonie Scarlatti	6500
MAR. 7	1973年11月13日	L.	Roger Blanchard	Daphnis et Alcimadure	8000
				合計	32150

1974年

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料
M/1	1974年1月8日	I. M.	EFM	11	Ida Gotkovsky	Trois personnages dans l'infini	1200
M/2		M. Ch.	1	15	Roger Albin	Sonate à trois	3500
M/3		〃	EFM	24	Guy Morançon	Musique pour orgue et cordes	2500
M/4	1974年1月14日	L.	〃	28	Antoine Duhamel	Le Défunt (2e partie)	1700
M/5		M. Ch.	〃	10	Janos Komives	Rallye	900
M/6		〃	1	44	Alain Abbott	Et vous, mers...	2500
M/7		〃	EFM	10	Perig Herbert	Skilfou Skorn	4000
M/8	1974年2月5日	S.	1	23	Cristóbal Halffter	Procesional	800
M/9	1974年2月25日	M. Ch.	〃	28	Francis Miroglio	Strates éclatées	1500
M/10	1974年9月2日	Chœurs	〃	31	André Boucourechliev	Thrène	4000
M/11			EFM	35	Marcel Goldmann	Hervé	2500
M/12	1974年3月6日	S.	〃	30	Michel Zbar	Le Voyage	4000
M/13	1974年3月19日	M. L.	〃	15	Hubert d'Auriol	Phrénologie	4000
M/14		I. M.	〃	12	Patrice Mestral	Le Valeureux Petit Tailleur	2500
M/15	1974年4月5日	L.	〃	10	Ivan Semenoff	Le Défunt (1e partie)	2500
M/16	1974年4月9日	O. C.	EFM	15	Jorge Antunes	Poetica II pour orchestre à cordes	2500
M/17	1974年4月16日		1	30	Gérard Massias	Caliban-Cannibale	5000
M/18	1974年5月7日		〃	30	Betsy Jolas	Voix premières	3000
M/19	1974年5月28日	S.	EFM	11'30	François-Bernard Mâche	Le jong à trois glumes	3500
M/20	1974年6月4日	S.	1	15	Ianis[sic] Xenakis	Erikhton pr. piano et orchestre	3000
M/21		I. M.	〃	6	Georges Durban	La dernière parade	2500
M/22	1974年7月1日	M. Ch.	EFM	19	Eric Brabant	1974 pour quatuor percussions	3500
M/23		〃	〃	9	Nicolas Zourabichvili de Pelken	Anonyme I pour 5 harpes	2500
M/24	1974年7月22日	〃	1	18'10	Peter Maxwell Davies	Fiddlers at the Wedding	2600
M/25	1974年9月4日	〃	EFM	9	Bruno Gillet	Scène pour 24 instr. à cordes	4000
M/26		〃	1	18	Ton That Tiet	Vo. Vi	3500
M/27	1974年9月12日	I. M.	〃	45	François Le Roubaix	Fantomas	15000
M/28	1974年9月13日		〃	65	Marius Constant	Le jeu de St Agnès	1000
M/29	1974年9月19日	M. Ch.	EFM	15'30	Hubert d'Auriol	Quatuor pour hautbois, clarinette, saxo. ténor et basson	6000
M/30	1974年10月7日	I. M.	〃	17	Jean-Rémy Julien	Aladin	1500
M/31	1974年10月10日	S.	〃	18	Maguy Lovano	Spirale	5000
M/32	1974年11月7日	I. M.	1	12	Janos Komives	Andromaque	1200

1974年

M/33	1974年11月12日	〃	〃	14	Max Pelta	Mardi	1500
M/34	1974年11月26日	〃	EFM	21'30	Patrice Mestral	Tant qu'aura des chevaux blancs	3000
M/35		M. Ch.	〃	22	Louis Saguer	Une flûte fuyant le sol à perdre haleine	5500
M/36	1974年12月2日	S.	2	22	Maurice Ohana	T'Haran-Ngo	6500
M/37	1974年12月3日	M. Ch.	EFM	11	Roger Tessier	Osma pour trio à cordes	2200
						合計	157075

1974年 Arrangements

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	作曲者名	作品名	委嘱料
MAR. 1	1974年1月21日	M. Ch.	Charles Ravier	Musique pour la veillée de Noël à Honfleur	5000
MAR. 2	1974年9月9日	L.	Roger Delage	Fisch-Ton-Kan Chabrier	1500
MAR. 3		〃	〃	Vaucochard et Fils	500
MAR. 4	1974年11月22日	Jazz	J. Claude Naude	Flying Home L. Hampton	725
				合計	7725

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1975年2月17日	S.	EFM	10	Bruno Gillet	Treize petits airs	3000	
M/2	1975年2月17日	M. Ch.	2	16	Jean Guillou	Quatuor pour hautbois et trio à cordes	2000	
M/3	1975年2月20日	//	EFM	15	Pierre Mariétan	Images du temps 64/74	4000	1975年11月6日 O. C. A Bancquart
M/4	1975年4月15日	O. C.	ERT	20	Marc Carles	Cosmofonia	5000	
M/5	1975年4月18日	Chœurs	2	20	Claude Ballif	Fragment d'une ode à la faim	5000	
M/6	1975年5月21日	L.		25	Girolamo Arrigo	Nel fuggir del tempo	8000	
M/7	1975年5月20日	S.	1	21	Tona Scherchen	Vague t'ao	6000	1976年4月30日 O. N.
M/8	1975年6月25日	O. C.		15	Ivo Malec	Arco-11 pour cordes	6000	
M/9	1975年9月4日	//	1	7'15	Edison Denisov	Aquarelle pour 24 cordes	4000	1975年6月12日 O. du C. D. Chabrun
M/10	1975年9月2日	O. P.	//	30	René Koering	Konzert	9000	1977年1月1日 N.O.P.
M/11	1975年10月2日	M. Ch.	2	23	Gérard Masson	Sextuor	5500	1976年5月3日
M/12	1975年10月7日	O. C.	//	20	Serge Nigg	Scènes concertantes pour piano et orchestre à cordes	7000	1976年3月26日 N.O.P.
M/13	1975年10月27日	M. Ch.	1	17	Akira Tamba	Quinque	4000	1976年3月24日 Aud. 105
M/14	1975年10月29日	S.	//	15	Claude Pichaureau	Du rêve à l'irréel	6500	1977年2月18、19日
M/15	1975年11月19日	O. C.	//	12	Raymond Depraz	Transparence I (lisière)	4500	1977年1月3日
M/16	1975年12月3日	M. Ch.	ERT	15	Katori Makino	Portraits	3000	OP
M/17	1975年12月1日	M. Clt.	1	16	Jean Koerner	Lamartins	4500	
M/18	1975年12月1日	O. V.	EFM	10	Hinoharu Matsumoto	Tô-ï-Koé	3500	D. Milhaud
M/19	1975年12月5日	S.	2	15	Eugène Kurtz	Mécanique	7000	
M/20	1975年12月8日	orgue	1	20	Antoine Tisné	Altamira	4500	
M/21	1975年12月12日		2	22	Roger Albin	Inchoatif, incidente et confluence	5500	
M/22	1975年12月16日	S.	1	20	Philippe Capdenat	…le Silence de l'oiseau de la paix	7500	D. Milhaud
M/23	1975年12月17日	O. S.	//	18	Joanna Bruzdowicz	Concerto pour violon et orchestre	7000	
M/24	1975年12月19日	O. C.	//	15	Alain Weber	Lied	5000	
M/25	1975年12月19日	M. L.	2	15	Claude Bolling	Feed the Cats Stay Cool Participation	2000	D. Milhaud
M/26	1975年12月22日	O. V.	2	15	Maurice Ohana	Livre de madrigaux	5000	
M/27	1975年12月19日	Perc	1	6	Renaud Gagneux	In Memory of Charles Ives	1500	
M/28	1975年12月22日	//	//	8	Philippe Drogoz	Jeu thème et variations	2000	D. Milhaud
M/29	1975年12月22日	S.	//	25	Michel Zbar	Hommage à Durer	8000	
M/30	1975年12月23日	O. C.	Auteur	25	Maurice Benhamou	Cordes Plus	6000	
M/31	1975年12月23日	M. Ch.	1	26	Adrienne Clostre	Concert pour le souper d'Elrond	6000	
M/32	1975年12月25日	M. L.	2	12	Jean-Claude Pelletier	Black Sky, King Fischer Ayrport Woon Louisiane	2500	
M/33	1975年12月26日	//	1	15	François Rauber	Le mal des mots	3000	

1975年

M/34	1975年12月26日	〃	〃	14	Jacques Denjean	Relax 3H du matin Las Vegas	3000	
M/35	1975年12月26日	O. C.	〃	22	Guy Reibel	X+	6500	
M/36	1975年12月26日	M. L.	〃	15	Bernard Gérard	Léthargiquement vôtre	3000	
M/37	1975年12月26日	Poc	〃	9	Janos Komives	Arc-en-ciel	2000	
M/38	1975年12月26日	S.	〃	18	Nicolas Zourabichvili de Pelken	Mtskheta	6500	
M/39	1975年12月26日	M. L.	2	13	Michel Colombier	Ballade en 3 mouvements	2500	
M/40	1975年12月26日	O. P.	〃	25	Nguyen Thien Dao	Giai-Phono	8000	
M/41	1975年12月26日	〃	〃	35 ou 25	Costin Mioreanu	Rosario	8000	
M/42	1975年12月26日			20	Victor Knud	Image IV (1e partie)	3000	
M/43	1975年12月26日	M. L.	1	12	J. Michel Defaye	Quartomanie	2000	
M/44	1975年12月26日	O. S.	〃	20	Détlef Kieffer	Island	7000	
M/45	1975年12月26日	M. L.	ER	12	Paul Durand	Entrelacs		
						205M	325	

1976年

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1976年2月13日		1	14	Renaud Gagneux	Berechit II		
M/2	1976年2月24日	M. L.	〃	16'30	Bernard Gérard	Amazonie		
M/3	1976年6月7日	M. Ch.	〃	42	Roger Blanchard	Zéphire		
M/4	1976年7月27日	M. L.	〃	18'15	François Rauber	Les Bals d'avant hier		
M/5	1976年4月2日		〃	30	Renaud Gagneux	Messe (Avignon)	6000	
M/6	1976年4月16日	M. Ch.	2	16	Noël Lee	Chants de Calamus	5000	
M/7	1976年4月27日	M. Ch.	1	13'15	Roger Roger	Suite ancienne		
M/8	1976年5月15日	B. Mug.		35	Knud Viktor	Images 6	6000	
M/9	1976年5月31日	M. L.	1	3'20	Mario Bua	Eole, Alizee, Mistral, Tarmontane, Simoun, Sirocco		
M/10	1976年6月11日		〃	30	Nicolas Zourabichvili de Pelken	Messe	6500	
M/11	1976年6月17日	M. Ch.	2	20	Claude Ballif	Quatuor p. violon, alto, violoncelle et percussion	6000	
M/12	1976年6月23日	M. L.	1	2'36	Armand Migiani	Elodie-Joëlle-Tryptique-Bossa	3000	
M/13	1976年6月24日	Orgue	〃	15	Jean-Paul Leguay	Job	5000	録音 1980年10月21日
M/14	1976年6月24日	Och. Chœurs	2	25	Jacques Bondon	Concerto d'octobre pour clarinette et orchestre à cordes	6500	
M/15	1976年7月16日		〃	1h15	Philippe Drogoz	Lady Piccolo et le violon fantôme	5000	Avignon 1976
M/16	1976年7月16日		〃	1h15	Eugénie Kuffler	〃	5000	Avignon 1976
M/17	1976年8月30日	M. L.	1		Roger Pouly	Paris, la butte Volutes	3000	1976年11月9日（録音）
M/18	1975年9月29日	〃	〃	2'3	Raymond Bernard	Vakos Sax-Relax, Du bout des doigts, Tav, Untel, Vendredi Treize	3000	1976年11月18日（録音）
M/19	1975年10月6日	〃	2	3	Jean Claudric	Freakish, Charking, Roguish, Wheedling	3000	1976年12月17日（録音）
M/20	1976年10月8日		1	22	Henry Barraud	Enfance à Combourg d'après Chateaubriand	8000	1977年3月26日、児童合唱団創立30周年記念
M/21	1976年10月18日	M. L.	〃	3	Paul Piot	Lupin, Dalmatie, Doggu, Noise and sound	3000	1976年11月9日（録音）
M/22	1976年11月2日	O.	〃	34	Philippe Beaussant	Réalisation de l'Armide de Lulli	11000	1976年11月18日放送
M/23	1976年11月9日	O.	〃	17	Raymond Depraz	Transparence - Alpha Oméga	8000	1978年3月13～15日（録音、ONP）
M/24	1976年11月15日		〃	16	Edith Lejet	Espaces nocturnes	5500	1976年6月17日
M/25	1976年11月19日		2	28	Janos Komives	A cœur ouvert	8000	Prix Italia
M/26	1976年11月26日	M. C.	1	14	Pierre Israël-Meyer	Onirique	4500	1977年3月29日録音
M/27	1976年12月1日	M. L.	〃	3	Michel Legrand	Pulsation - Calme - Danse des morts rejouis - En attendant Anatole - Dialogue	8000	1976年12月1日（録音）
M/28	1976年12月1日	M. L.	2	3	Jacques Loussier	Carreras - Romain - Miraval - Liesse	5000	1976年12月15日（録音）
M/29	1976年12月8日	M.	1	3	Daniel Janin	Music is My Soul - Nectar's Dream - Right in - Sum The Cat	3000	1976年12月8日（録音）
M/30	1976年12月9日	M. Ch.	〃	16	Raymond Loucheur	Reflets	6000	1977年5月9日
M/31	1976年11月12日	Opéra	〃	60	René Koering	President F (1ère partie)	10000	1980年F. W.
M/32	1976年12月13日	M. L.	2	13	Bernard Gérard	Sabines 2000	3000	
M/33	1976年12月13日	〃	〃	3	Michel Magne	Carolle - Jeannette - Sydonie - Sylvie	4000	1976年12月13日（録音）

1976年

M/34	1976年12月14日		//	23	François-Bernard Mâche	Kassandra	10000	Prix Italia 1977年10月16日 OP
M/35	1976年12月15日	O. S.	//	18	Tomás Marco	Symphonie no1	8500	1977年4月12～16日 NOP
M/36	1976年12月21日	//	//	18	Carlos Roque-Alsina	Cantate	13000	1977/4/22 NOP
M/37	1976年12月21日		1	32	Charles Ravier	Réalisation Ballades de Guillaume de Machaut	15000	
M/38	1976年12月21日	O. M.		10	Serge Lancen	Rapsodie symphonique	4000	1977年3月14、15日 2e prix UER
M/39	1976年12月21日	O. S.	1	12	Alain Moëne	Sitis		1977年1月 NOP
M/40	1976年12月21日	//	//	8	Pierre-Max Dubois	Passe-temps pour un été	4000	1977年3月14、15日 (録音)
M/41	1976年12月27日		2	30	Bruno Gillet	Les villes invisibles	9000	
M/42	1976年12月28日	O. M.	1	10	Bernard Gérard	Bric à brac	4000	1977年3月14日、15日 (録音) 3e prix UER
M/43	1976年12月30日	//	2	22	Jean-Etienne Marie	Quand elle l'entendit	6000	
M/44	1976年12月31日	M. Ch.	//	20	Milko Kelemen	Splintery	6000	1977年12月5日
M/45	1976年12月31日	O.	//	20	Franco Donatoni	Portrait pour clavecin et orchestre	9000	Partition remise à A. Moëne
M/46	1976年12月31日	M. Ch.	//	13	Jacques Charpentier	Et le jour vint	7000	
M/47	1976年12月31日	M. L.	1	3	Pierre Dutour	Shopping La vie se danse Forquerolles Mare Nostrum	3000	
M/48	1976年12月31日	O. C.	2	22	Betsy Jolas	Stances pour l'arbre	9000	
M/49	1976年12月31日		1	20	Knud Viktor	Image IV (2ème partie)	5000	
M/50	1976年12月31日	O.	2	26	Marcel Mihalovici	Follia (Paraphrase pour orchestre)	10000	
M/51	1976年12月31日	O. C.	//	18	Hugues Dufourt	La Tempesta (d'après Giorgione)	5500	
M/52	1976年12月31日	I.	1	24	Jean Prodromidès	Le Livre des Katuns	9000	Prix Italia
M/53	1976年12月31日	O.	2	20	Claude Lefebvre	Ivresse - Absence	8500	1977年3月26日 Perpectives du XXème siècle
M/54	1976年12月31日	//	//	25	Yoshihisa Taïra	Méditations pour orchestre	8500	1978年12月13日 ON
M/55	1976年12月31日	//	1	20	Manfred Kelkel	SOS	8000	
M/56	1976年12月31日	O. C.	//	20	Solange Ancona	Cerchio	6000	
M/57	1976年12月31日	O.	2	19	Donald Harris	Charmes	8000	
M/58	1976年12月31日		//	23	Michel Fano	La chambre secrète	10000	Prix Italia
M/59	1976年12月31日		1	18	Yves Prin	Mobile 2	5000	1978年2月13日初演
M/60	1976年12月31日		//	20	Antoine Geoffroy-Dechaume	Le reniement du St Pierre (Réalisation)	2500	1977年4月8日



1977年

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
M/1	1977年2月4日	M. Ch.	2	20	Patrice Mestral	Rapports 3	8000	1977年2月12日 演奏会
M/2	1977年3月9日		1	21	François Bayle	Cristal, [?] pour 36 musiciens et haut-parleur	8000	1977年3月5日 演奏会
M/3	1977年4月1日	O.	//	20	Antoine Tisné	Célébration pour chœurs et orchestre	10000	1981年4月24日 NOP
M/4	1977年6月7日	//	//	30	Tolia Nikiprowetzky	Concerto pour piano	10000	
M/5	1977年5月22日	M. Ch.	2	21	Alexandre Tansman	Musique à six	7000	1977年10月24日
M/6	1977年5月23日		1	1h10	Ahmed Essyad	Le collier des ruses (1e partie)	6000	1977年7月23日 Avignon
M/7	1977年6月9日	Perc	2	18	Ton That Tiet	Chu Ky IV	5000	1979年6月 NOP
M/8	1977年6月13日	M. L.	1	14	François Rauber	Le petit village (la petite école, la petite femme, la petite chapelle, la grande fête)	4000	1977年6月29日（録音）
M/9	1977年6月16日		//	30	Félix Ibarrondo	Musique pour la messe	5000	1977年7月24日 Avignon
M/10	1977年6月21日		//	24'30	Patrice Sciortino	L'Hystoyre yncroyable	8000	
M/11	1977年6月22日	M. L.	2	5	Roger Roger	Polaris - Marina Beach - Maravilla - Celeridad	3500	1977年6月20日（録音）
M/12	1977年6月23日	//	//	3, 2'45, 2'45, 3	Jean-Michel Defaye	Reminiscence - Hippie New Year - Ballade - Mistoufle	3000	1977年6月17日（録音）
M/13	1977年6月27日	//	//	3	Gérard Calvi	La Maison d'Albert - La chanson de l'Arbre - Midi Champs-Elysées, C'est pas parce qu'on a du soleil	4000	1977年6月20日（録音）
M/14	1977年7月4日	//	//	4'30, 5'40, 2'35, 4'30	Jacques Denjean	Ilad Rodarlas, Stone, En haut vous le Lord. Chrystal Glasses	4000	1977年6月21日（録音）
M/15	1977年7月12日		//	35	Maurice Ohana	Messe	10000	1977年7月31日 Avignon
M/16	1977年7月27日	M. Ch.	1	23	Robert Siohan	Quatuor en forme de suite pour cordes et piano	7000	1978年3月31日
M/17	1977年7月28日	Perc	//	9'20	Philippe Hersant	Drums	2500	1976年11月9日（録音）
M/18	1977年9月29日	M. L.	//	12	André Popp	Eden Tango, Javavica, La vallée du silence, A Romantic Man	4000	1977年10月17日（録音）
M/19	1977年9月29日	L.	//	15	Pierre Barbaud	Affelsextett	6000	1978/3/21 F. Cult.
M/20	1977年10月5日	M. C.	2	15	Michaël Levinas	Voix dans un vaisseau d'airain	6000	1977年11月21日 初演
M/21	1977年10月10日	Perc	1	14	François Segrette	In Memoriam	4000	1978年7月21日 F. Clidat
M/22	1977年10月11日	M.	//	15	Janine Charbonnier	Raison inverse	7000	1978年3月14日 F. Cult
M/23	1977年10月26日	M. L.	//	12'45	François Betti	Sileen, Bossa Novilita, Coquetterie, Nostalgie	3000	1977年11月23日
M/24	1977年11月16日	M. E.	//	12	Jean-Claude Risset	Trois moments newtonniens	6000	1977年12月26日、1978年3月21日放送
M/25	1977年11月17日	M. L.	//	21	Akira Tamba	Chreode	8000	1979年1月20日、Perspect. XXe siècle、NOP
M/26	1977年11月23日	M. Ch.	2	19	Jacques Castérède	Pianologie	7000	1977年12月16日
M/27	1977年11月28日	//	1	17	Roger Calmel	Gerbes de lumière	7000	1978年6月16日
M/28	1977年11月30日		//	31'30	Jean-Claude Malgoire	Neuf leçons de ténèbre	12000	1978年3月22～24日
M/29	1977年12月2日	M. L.	1	18	Jean-Jacques Werner	Duo concertant	5500	1978年2月10日

M/30	1977年12月8日	M. Ch.	2	17	Michel Philippot	Septuor (Mm 1 et 2) in memoriam Isaac Newton	7000	1978年3月14日 F. Cult
M/31	1977年12月9日	Perc	//	11	Nguyen Thien Dao	Bay	3000	1978年3月14日 F. Cult
M/32	1977年12月13日	M. L.	//	12	Michel Legrand	Walking on your hands	8000	1977年12月22日
						One chord blues		
						Riff Hifi		
						Let me be mirror		
M/33	1977年12月16日	O.	//	43	Gérard Masson	Concerto pour piano	17000	1978年9月17日
M/34	1977年12月16日	//	//	12	Xavier Darrasse	L'Instant d'après	8000	1978年2月11日
M/35	1977年12月21日		1	1h10	Ahmed Essyad	Le collier des ruses (2e partie)	9000	
M/36	1977年12月21日		//	30	Serge Nigg	Mirrors for William Blake	13000	1979年10月25日
M/37	1977年12月22日	M. Ch.	//	16	Graciane Finzi	Concerto pour violoncelle et orchestre	7000	1979年4月6日
M/38	1977年12月23日	O.	2	16	Iannis Xenakis	Jonchaies	15000	1977年12月23日 ONF
M/39	1977年12月29日	//	//	50	Cristóbal Halffter	Officium defunctorum	20000	1979年1月31日 ONF
M/40	1977年12月23日	M. L.	//		Pierre Porte	Ballet des marionettes	3500	1978年3月21日
						Fugatissimo		
						Fantaisie baroque		
						Prélude et fugue en ré		
M/41	1977年12月29日	O.	//	15	Michel Decoust	L'Application des lectices aux champs	9000	1979年3月31日 NOP
M/42	1977年12月29日	Orgue	//	20	Alain Louvier	Mane-Thecel-Phares	6000	1978年3月28日
M/43	1977年12月29日	O.	//	16	Marius Constant	Symphonie pour instruments à vent	10000	5月2日
M/44	1977年12月29日	Sext.	//	20	Tristan Murail	Ethers pour flûte et 5 instruments	7000	1978年6月11日
M/45	1977年12月29日	M. L.	//	12	André Lutereau	Le source et l'oiseau	3500	1978年3月30日
						Mariage à la mexicaine		
						Soirée ambiguë		
						Des yeux dans la nuit		
M/46	1977年12月29日	O.	//	14	Gilles Tremblay	Vers le soleil	10000	1978年3月11日
M/47	1977年12月29日	//	//	35	Girolamo Arrigo	Solarium	11000	1982年2月23日 ONP
M/48	1977年12月29日	Op.	//	12'45	André Boucourechliev	Le nom d'Œdipe	30000	1978年3月27日
M/49	1977年12月29日		//	25	Philippe Drogoz	Scrabble Music	5000	
M/50	1977年12月29日	A alt.	//	14	Guy Reibel	Alliages	4000	1987年11月21日
M/51	1977年12月29日	Mus. Ch.	//	16	Isang Yun	Octuor clarinette, basson, cor et quintette à vent	9000	1978年4月10日
M/52	1977年12月29日	O.	//	27'15	Jacques Charpentier	Symphonie n°6 pour orchestre et orgue Et déjà le soleil touchait à l'horizon	12000	1979年1月12日

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間 (分)	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
401	1978年1月20日	M. Ch.	1	16	Tolia Nikiprowetzky	Voix nocturnes	7000	1978年5月2日
402	1978年3月13日	//	//	15	Gisèle Barreau	Submarines	5000	1978年1月21日
403	1978年3月7日	O.	//	13	Raymond Depraz	Un simple écho	8000	1983年3月20日
404	1978年3月10日	M. Ch.	2	10	Henri Pousseur	Humeur en futur quotidien	2500	1978年3月12日 初演
405	1978年3月16日	O.	1	12	Ton That Tiet	Neim-Ai (1re partie)	7000	1982年1月9日 Perspect. XXème NOP Chœurs
684	1978年3月28日	//	4 et 5		François Rauber	La marche du petit brigand	4500	1978年3月28日 録音
						Ballade pour harmonie et fanfares		
406	1978年3月29日		2	18	Xavier Darrasse	A propos d'Orphée	6500	1978年3月13日
682	1978年3月26日	M. L.	1	3'10, 5'30	Gérard Calvi	Marche burlesque	4500	1978年3月28日 (録音)
						Can-Can		
407	1978年3月31日	Op.	2	3h.	Claude Prey	Les trois langages ou autre jeu de l'oie	28000	
408	1978年3月30日	M. Ch.	//	8	Jean Prodromidès	Instantanés	2500	Hommage à Picasso F. Cult.
								1978年4月10～13日
								1978年4月11～14日
409	1978年4月4日			11	Bernard Parmegiani	Musico Picasso Kaleidoscope	4400	Hommage à Picasso F. Cult.
								1978年4月10～13日
								1978年4月11～14日
410	1978年4月26日	M. Ch.	2	6	Yoshihisa Taïra	Prélude bleu	2500	Hommage à Picasso F. Cult.
								1978年4月10～13日
								1978年4月11～14日
411	1978年4月28日	M. Ch.	1	22	Marcel Mihalovici	Delie (Cantate)	8500	1978年12月8日
8	1977年5月8日	M. L.	//	3'25, 3'35	Roger Pouly	Récréation	3000	1978年3月29日 (録音)
						Le petit square		
						Rêve		
						Incertain		
						Il vie et soleil		1977年6月21日 (録音)
412	1978年6月7日	M. Int	//	13	Jean-Claude Eloy	Poème - Picasso	3000	Hommage à Picasso F. Cult.
								1978年4月10～13日
								1978年4月11～14日
413	1978年6月7日	O.	2	10	Philippe Manoury	Puzzle	1500	
414	1978年6月7日	M. Ch.	//	50	Maurice Ohana	Trois contes de l'honorable fleur	17000	
415	1978年6月12日	O.	//	30	Pierre Wissmer	6ème symphonie	12000	1980年12月12～13日 (録音)
416	1978年6月26日	Messe	//	50	Alain Louvier	Messe des apôtres	8000	1978年7月16日 FC. Avignon
417	1978年6月30日	M. L.	1	11'30	Raymond Bernard	La rue Saint Benoît	3000	1978年6月23日 (録音)
684	1978年6月30日	//			Claude Bolling	Gentle Girl	4000	1978年6月20日 (録音)
						Big Boss Birthday		
						Big Golden Pie		
						Lazy Girl		
418	1978年10月16日	O.	2	35	Girolamo Arrigo	Solarium pour orchestre 2e partie	4500	1982年2月23日 ONF
419	1978年9月22日	//	1	30	Jean-Louis Martinet	Le triomphe de la mort	13500	1980年3月19日

685	1978年9月28日	M. H.	//	2'50	Désiré Dondeyne	Marche de fête		1978年10月20日（録音）
686	1978年9月28日	//	//	3'40	//	Variations pour ensemble saxophones		1978年10月20日（録音）
687	1978年10月2日	M. L.	//	3'3	André Popp	Quatrième gymnopédie	4000	1978年10月18日（録音）
						Air de la rose		
						Ring the strings		
						Le chant de la baleine		
420	1978年10月3日	Octuor	//	23	Edvard Hagerup Bull	Posthumes "In memoriam"	8000	1979年2月12日 F. Culture
421	1978年9月10日	M. Ch.	2	17	Joan Guinjoan-Gispert	Phobos	8000	1979年4月9日
422	1978年11月3日	M. E.	//	21	Jean Schwarz	Surrounding	14000	1980年1月20日 F. Culture
423	1978年11月2日	M. Ch.	//	15	Antonio Ruiz-Pipo	Tres en raya (Concertino pour guitare)	8000	1979年4月20日
688	1978年11月10日	M. L.	1	3	Jean Claudric	Demain c'est trop tard	3000	1978年11月17日（録音）
						Hier c'est déjà loin		
						Dans un mois - Dans un an		
						Socoa		
424	1978年11月17日	M. Ch.	//	14'30	André Bon	Fancy	8000	
689	1978年11月17日	M. L.	//	14	Bernard Gérard	Suite agronomique	4000	1978年11月23日（録音）
						1. Fête de la terre		
						2. Ode paysanne		
						3. Les agrophobiens		
690	1978年11月27日	//	//	4 3'05 2'50 2'30	Jean-Claude Naude	Etretat	4000	1978年11月28日（録音）
						Tangering Ragtime		
						Basson mais sérieux		
						De pierre et de lune		
425	1978年12月8日	O. J.	//	12	Renaud Gagneux	Trois études pour sextuor vocal	6000	
426	1978年12月8日	O.	2	45	Ton That Tiet	Kiem-Ai (2e partie)	12000	1982年1月9日 NOP - Chœur
427	1978年12月14日		//	1h15	Marc Monnet	A trappe (Cantare - Trois pièce de sème - Fiction)	10000	
691	1978年12月18日	M. L.	1	3'35 3'15 3'15 3'20	Wal-Berg	Danse brésilienne	4000	1979年2月7日録音
						Habanera		
						Guaracha		
						Tango		
428	1978年12月18日	O.	//	23	René Koering	Concerto pour piano	14000	
429	1978年12月19日	M. L.	2	25	Janos Komives	Interview	10000	1979年6月29日
430	1978年12月21日	M. Ch.	//	21	Gérard Grisey	Jour, contrejour	12000	1979年3月9日 Persp. XXe
431	1978年12月21日	O.	1	40	François-Bernard Mâche	Andromède pour piano, chœur et orchestre	20000	1980年6月4日 NOP
432	1978年12月21日	O. V.	//	20	Michel Zbar	Retour	6000	1980年6月10日
433	1978年12月21日	M. Ch.	2	30	Georges Aperghis	Quai no1 (pour Prix Gilson)	10000	1979年1月22、23～24日
434	1978年12月21日	//	1	10	Tolia Nikiprowetzky	Fleuves impassibles	5000	1979年2月24日 Persp. du XXe
435	1978年12月31日	//	2	18	Goffredo Petrassi	Grand Septuor	10000	1979年10月16日
436	1978年12月31日	Perc.	//	20	Louis Saguer	Krembalon	8000	1979年6月11日
437	1978年12月31日	O.	1	19	Philippe Hersant	Stances	10000	1979年2月17日
438	1978年12月31日	O. Jazz	2	21	André Almuro	Saga	8000	1979年7月1日 F. Culture で放送

1978年

439	1978年12月31日	O.	1	41	Renaud Gagneux	Indeed 4444	9000	1979年3月14日
440	1978年12月31日	M. Ch.	2	17	Tadeusz Baird	Variations en forme de rondo	10000	3月22日
441	1978年12月31日	Orgue	1	18'15	Edith Lejet	Triptyque pour orgue	8000	1980年9月21日 F. Culture で放送
442	1978年12月29日	M. Ch.	2	18	Henri Martelli	Sonate pour clarinette et piano	8000	1980年5月27日 Conc M. de Cl.
443	1978年12月29日	O.	//	27	Francis Miroglio	Magnetiques C pour viola et orchestre	15000	1984年2月17日 NOP

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間 (分)	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
401	1979年3月6日	M. Ch.	2	26	Gérard Masson	Quintette	9000	1979年5月5日
402	1979年3月15日	//	1	18	Paul Arma	Quatre convergences pour quintette de cuivres	8000	1980年1月4日
403	1979年3月27日	M. L.	2	3'30 3'20 3'40 3'20	Jack Dieval	Le piano mène la danse Promenade en vocalise Around l'Avant-Seine Mais oui, c'est à nous	4000	1979年3月28日 (録音)
404	1979年5月7日	//	1 et 2	8 8'45	Paul Bonneau	2 caprices en forme de valse Suite pour orchestre à cordes	4000	1979年5月16日 (録音)
405	1979年5月15日	//	1	5'30 8	Désiré Dondeyne	Jubile marche Ouverture Ballet	4000	1979年3月30日 (録音)
406	1979年5月15日	Théâtre musical	//	1h	Antoine Duhamel	Le cirque impérial (1ère partie)	10000	1979年8月29日 Avignon
407	1979年6月11日	M. L.	2	15	Roger Roger	Les belles promenades - En traîneau - Avec mon ours - Le Joyeux cycliste - Le vieux tacot	4000	1979年3月14日 (録音)
408	1979年6月12日	//	//	2'45 3'43 3'46 4'12	André Lutereau	Un reste de rétro Un soleil corsaire Le Marchand d'un jour La Vallée sans retour	4000	1979年5月31日 (録音)
409	1979年6月13日	//	//	3'10, 5'30	André Hossein	Mélodie, Romance, Blues in Blues	4000	1979年5月31日 (録音)
410	1979年6月14日	//	1		Jean-Michel Damase	Suite en plumes	4000	
411	1979年6月16日	//	2	22	Camille Sauvage	Actéon	4000	1979年7月10日 (録音)
8	1977年5月8日	M. L.	//	3'25, 3'35	Roger Pouly	Récréation	3000	1979年5月30日 (録音)
412	1979年6月28日	Orgue	1	25	André Boucourechliev	Orion	10000	1980年3月12日
413	1979年6月28日	Messe	//	1 heure	Akira Tamba	Messe pour les dimanches ordinaires	15000	1979年7月29日
414	1979年9月13日		//	23'25	Antoine Duhamel	Le cirque impérial (2e partie)	15000	1979年8月29日 Avignon
415	1979年9月17日	O.	//	35	Alain Bancquart	Symphonie (Amphion)	16000	1981年1月19日 O. N.
416	1979年9月17日	M. Ch.	//	20	Alain Abbott	Inventions	8000	1980年3月27日
417	1979年9月21日	CRPLF	//	45	Edward Lemaître	Le judgment de Pâris réalisation d'après d'Orneval	6000	Budget CRPFL
418	1979年9月21日	M. Ch.	2	13	Eugène Kurtz	Logo (introduction and [?])	9000	
419	1979年10月1日	//	1	15	Alexandre Tansman	Huit Stèles de Victor Segalen	9000	1980年6月9日 Conc. de M de C
420	1979年10月5日		//	16	Renaud Gagneux	Derrière les rideaux aux souvenirs insaisissables	9000	1980年3月24日
421	1979年10月5日	L.	//	1h	René Koering	Elseneur (2e partie)	15000	1980年2月29日
422	1979年10月11日		2	1h	J. Bernard Dartigolles	Mario et le magicien	15000	1979年7月 Avignon F. Culture
423	1979年10月31日	M. Ch.	//	10	Adrienne Clostre	El tigre de oro y sombra lecture musicale de neuf poèmes de J. L. Borges	9000	1981年2月13日 Mus à Déc.
424	1979年11月12日	//	1	15	Edith Lejet	Concerto pour flûte	10000	1980年3月24日
425	1979年11月16日	CRPLF	//	45	Edward Lemaître	Arlequin hulla ou la femme répudiée	6000	
426	1979年12月6日	M. Ch.	2	18	Georges Gravarentz	Suite arménienne	6000	1979年12月7日、1980年1月9日

427	1979年12月6日	//	//	//	Tona Scherchen	Tzing	9000	1980年1月10日
428	1979年12月11日	M. L.	1	4'15	Roger Boutry	Marche de printemps	4000	1979年3月28日、1979年3月29日
						Rythmes pour orchestre		
429	1979年12月18日	M. Ch.	2	18	Vassil Kazandjiev	Quintette pour piano et cordes	9000	1979年10月18日
430	1979年12月19日	O. N.	//	//	Ivo Malec	Ottava Bassa (1re partie)	10000	1984年4月10日 O. N. F.
431	1979年12月19日	L.	1	26'30	Jérôme de la Gorce	Alcyone (Marin Marais) Réalisation	15000	
432	1979年12月19日	P. I.	//	37'25	Marcel Goldmann	L'Opéra des yeux	10000	
433	1979年12月19日	M. Ch.	//	25	J. Jacques Werner	Quatuor à cordes (pour le temps de la passion)	10000	1980年4月14日
434	1979年12月21日	O. N.	2	//	Carlos Roque-Alsina	Harmonies	19000	1979年12月22日 O. N. F.
435	1979年12月26日	O. V.	//	18	Girolamo Arrigo	Allusioni alla morie di cecchino bracci	9000	1979年6月9日
436	1979年12月31日				Michel Butor	Elseneur, texte destiné à l'Opéra de Koering René	5000	1980年2月29日
437	1979年12月31日	M. L.	2	5'27	André Lutereau	Le l'étoile au carrousel	3500	1980年2月22日
438	1979年12月27日	M. S.	//	10	Henri Dutilleux	Concerto pour violon et orchestre (1ère partie)	10000	1985年11月5日 ONF
439	1979年12月28日	M. L.	//	4	Désiré Dondeyne	Marche pour orchestre d'harmonie	2000	1980年3月27日
440	1979年12月28日	M. S.	1	16	Francis Miroglio	Ping-Squash	6000	1980年7月21日
441	1979年12月28日	M. Ch.	//	18	Roger Tessier	Isomerie	11000	1980年11月24日
442	1979年12月28日	//	2	15	François Bousch	Arcanes	8000	
443	1979年12月28日	M. S.	1	25	Philippe Capdenat	Simple, double, triple (Concerto pour ondes, piano, percussion et 3 orchestre)	14000	1980年12月1日 N.O.P.
444	1979年12月28日	P.	//	25	Alain Savouret	L'Ouïe-Spartacos	14000	Pour P. Italia
445	1979年12月28日	M. L.	2	4	Michel Legrand	Marche pour orchestre d'harmonie	4000	1980年3月27日
446	1979年12月28日	Perc.	//	16	Tomás Marco	Tartessos	9000	1980年4月10日 Mus à découvrir
447	1979年12月28日		1	1h30 (1re partie)	Antoine Duhamel	Penthée (réalisation de l'opéra en 3 actes de Philippe d'Orléans)	10000	1980年12月23日
448	1979年12月14日	M. Sq.	//	20	Bruce Mather	Musigny	16000	Metz Nov
449	1978年12月29日		2	8	Philippe Hersant	Litanie X	5000	
450	1979年12月29日	M. Ch.	1	17	Edgar Cosma	Parcours	9000	1981年2月9日
451	1979年12月29日	O. V.	2	24	Guy Reibel	4 études vocales	10000	
452	1979年12月29日	P. I.	1	25'30	Yoshihisa Taïra	Computation	15000	Pour P. Italia 1983年アヴィニョンで放送

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
401	1980年2月12日	O.	2	16	Marcel Mihalovici	Malinconia	13000	1980年5月17日 CORPLF
402	1980年3月17日	M. L.	1	12'30	Jean-Michel Defaye	Suite pour Nadel	4000	1980年6月16日（録音）
						Koala		
						Dumbo		
						Poiluchon		
						Lapines		
403	1980年3月21日	〃	〃	18'35	André Popp	Caméra-Bouffe	4000	1980年11月17日（録音）
						Danses de Trouvers		
						La rose tragique		
						[?]		
404	1980年4月18日		〃	24	Jean-Paul Holstein	Cinq énigmes, d'après Lao Tseu	10000	1981/6/1 MdC
405	1980年4月22日		2	35	Renaud Gagneux	Pour un 14 juillet	12000	1980年7月14日
406	1980年4月28日	Réal.	1	30	Roger Blanchard	Quam Dilecta (Rameau)	6000	1980年9月5日
407	1980年5月12日	O.	2	20	Luis de Pablo	Latidos	15000	1981年1月24日
408	1980年5月14日		〃	3'30 2'35 1'10 2'05 3'20	Jacques Devogel	Suite humoristique	4000	1980年6月19日（録音）
						Ouverture [?]		
						Rêverie		
						Danse russe		
						Valse		
						Facetie		
409	1980年5月16日		〃	40	Daniel Meier	Missa "Doce nos orare"	9000	1980年7月 Avignon
410	1980年5月22日	Op.	〃	4h	Antoine Duhamel	Penthée, Philippe d'Orléans	5000	1980年12月23日
411	1980年5月23日	Op.	〃	4h	Elisabeth Saglier	Penthée, réduction piano	7000	1980年12月23日
412	1980年5月29日		2	25	Martial Solal	Suite pour deux pianos	10000	Concert F. Musique
413	1960年6月3日	O. S.	1	30	Roger Blanchard	In Conuertendo (Rameau)	6000	
414	1980年6月13日	O.	〃	18	Graciane Finzi	Trames	12000	1981年4月12日 NOP
415	1980年6月18日		〃	1h20	Laurent Cuniot	Metamorphosalides	15000	1980年14～16 Op. F. Culture
416	1980年6月23日	M. L.	2	28	François Rauber	La Comedia dell'arte	4000	1980年6月23日録音
						Pole chemille - Arlequin - Colombine - Pierrot - Scapin		
417	1980年6月27日	〃	〃	15	Claude Bolling	Suite pour orchestre de chambre et piano jazz trio	4000	1980年6月27日録音
418	1980年7月3日	〃	1	16'20	Wal-Berg	Divertimento, Suite d'orchestre	4000	1980年11月6日録音
419	1980年8月12日	O.	〃	25	Philippe Manoury	Numéro Huit	16000	1980年12月 NOP
420	1980年9月3日	M. L.	〃	15	Jean Claudric	New-York	4000	1981年2月16日
421	1980年9月3日	O.	2	22	Nguyen Thien Dao	Concerto pour percussion et orchestre "Ten Do Gu"	14000	1980年10月 Concours percussion
422	1980年9月16日		2	2	Jean-Claude Pennetier	Messe	10000	1980年7月 Avignon
423	1980年9月25日	M. L.	1	1	Bernard Gérard	Un portrait de famille	4000	1981年3月23日（録音）
						(Le jeune fils - l'adolescent - l'adulte - la vieillard)		
424	1980年9月29日	M. Ch.	〃	25	Antoine Tisé	Quatuor no2	12000	1981年1月26日（初演）
425	1980年10月1日	〃	〃	11	Dimitri Vicheney	Trio opus 53	25800	1981年3月16日（初演）



					héritier de Jean Wyschnegradsky		
426	1980年10月10日	O.	〃	15	Alain Savouret	Il était une fable	12000 Concert lecture Fas. 81
427	1980年10月27日	M. Ch.	2	35	Manfred Trojahn	2ème Quatuor à cordes	12000
428	1980年11月12日	〃	〃	14	Antonio Braga	Troubadouria	9000
429	1980年11月13日	〃	1	18	Michèle Reverdy	Quintette	10000 1983年3月24日
430	1980年11月18日	O. N.	〃	30	Luc Ferrari	Histoire du plaisir et de la désolation	17000 Perspectives 1982年6月9日
						Harmonie du diable	
						Plaisir-désir	
						Ronde de la désolation	
431	1980年11月18日	NOP	〃	27	Gérard Masson	Pas seulement des moments des moyens d'amour	17000 1981年10月6日 NOP
432	1980年11月20日	M. Ch.	2	17	Bernard Andres	Emeth	9000
433	1980年11月20日	O,	1	45	Claude Ballif	Un coup de dès	21000 Perspectives 1981年12月5日
434	1980年11月21日	M. L.	2	13	Franck Bacri	Promenade en ballon	4000 1981年2月23日録音
						L'envol	
						L'ivresse	
						Le calme	
						L'atterrissage	
435	1980年12月3日	Orgue	〃	16	Adrienne Clostre	Premier livre des rois Chapitre 19 Verts 11-13	9000 juin avril
436	1980年12月4日		〃	35	Pierre Tardy	Le jeu des énigmes	5000 Atelier G. Reibel
437	1980年12月4日		〃	10	Christian Zanési	Trois devinettes à écouter pendant l'orage	2500 At. G. Reibel
438	1980年12月11日	NOP	〃	20	Sandro Gorli	Il bambino perduto	16000 NOP 1981年10月14日
439	1980年12月11日	M. L.	〃	17	Roger Roger	La fête imaginaire	4000 1981年2月4日
440	1980年12月15日	M. Ch.	〃	15	Xavier Darrasse	Trio à cordes	10000 1982年2月25日
441	1980年12月17日	〃	1	10	Leni Alexander	Los disparates	10000 1981年6月1日
442	1980年12月17日	O.	〃	18	Philippe Hersant	Spirales	15000 1982年1月6日
443	1980年12月18日	O.	2	38	Eugénie Küffler	J/E	3500 Atelier (Trutat)
444	1980年12月19日		〃	60	Denis Levaillant	Piano-Check-Up	6500 Atelier (Trutat)
445	1980年12月22日	M. Ch.	〃	20	Franco Donatoni	L'ultima sera	12000 1981年6月18日
446	1980年12月23日		1	133	Jean-Loup Graton	Voyage en piano et quelques notes	3000 Contes musicaux
447	1980年12月31日	M. Ch.	2	25	Eugeniusz Knapik	Partita pour violon et piano	10000 1981年3月9日
448	1980年12月29日	〃	〃	10	Joanna Bruzdowicz	Trio dei due mondi	10000 1981年1月24日
449	1980年12月31日	〃	〃	20	Allain Gaussin	Arcane	9000 1981年6月18日
450	1980年12月31日	O.	〃	22	Ivo Malec	Ottava Alta (Concerto p. accordéon) 2e partie	16000 1984年4月10日 ONF
451	1980年12月31日	〃	〃	30	Tristan Murail	Les sept paroles du Christ en croix	19000
452	1980年12月31日	〃	〃	12	Wolfgang Rihm	Tutuguri I	14000 NOP 1981年3月
453	1980年12月31日		〃	21	André Almuro	Artefact	10000 1983年3月28日
454	1980年12月31日		1	25	Jean Guillou	4ème concerto pour orgue et orchestre	19000 Vienne - Autriche
455	1980年12月31日		〃	55	Marc-Olivier Dupin	Transcription pour 4 pianos de la 1ère symphonie de G. Mahler	12000 Journée du post-romantisme allemand (FM、1981年2月14日)

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1981年2月16日	M. Ch.	1	18'20	Maguy Schlegel dit Lovano	Et par-delà	10000	1982年1月14日
2	1981年2月16日		//	39	Renaud Gagneux	Requiem	22000	1982年11月10日
3	1981年2月17日		//	20	Horatiu Radulescu	Lucero non terminée	10000	NOP
4	1981年2月26日		//	12	Christian Gouinguené	Parcours	2000	1982年1月28日 O. N.
5	1981年2月26日	Oct.	//	20	Alain Weber	Octuor "Dans ce parages du vague en quoi toute réalité se dénoue"	10000	1982年5月27日
6	1981年3月6日		2	30	Louis Bourgeois	Récréations et Ainsi sont les sons	6600	pour dif. émissions pédagogiques FM.
7	1981年3月6日		//	30	//	Récréations	3000	
8	1981年3月10日		1	50	Gérard Garcin	Pour un XVIIIème Dimanche du temps ordinaire	10000	1981年7月 Avignon
9	1981年3月12日		2	6	Charles Clapaud	Picasson	3600	pour dif. au cours ém. péd. F Musique
10	1981年3月20日	O.	//	10	Germaine Tailleferre	Concerto pour voix élevées (1e partie)	8000	1982年11月5日 (Opéra)
11	1981年4月8日	M. Ch.	1	4	Désiré Dondeyne	Suite parodique (Ouverture, Miniature, Badinerie, Charleston, Marche, Fanfares, Friola)	4000	1981年6月12日
12	1981年5月6日	//	2	14	Michel Magne	Suite promenade	4000	1981年6月16日 録音
13	1981年4月8日	P. Vos.	//	18	Ton de Leeuw	Car nos vignes sont en fleur	10000	At. vocal G. Reibel
14	1981年4月9日	M. Ch.	//	10'30	Patrice Fouillard	Pierres - Vent - Sable	8000	1982年3月18日
15	1981年4月24日	M. L.	1	4	André Popp	French Pompons	3000	1981年11月12日
16	1981年5月5日	O.	//	35	Martial Solal	Concerto pour piano et orchestre	22000	1981年11月24日
17	1981年5月16日	Orgue	//	20	Jean-Pierre Leguay	Etoile	10000	Festival d'Avignon 1982
18	1981年5月15日		2	25	Jacques Bondon	Concerto con fuoco	10000	1981年10月21日
19	1981年5月15日	P. I.	1	88	Michel Zbar	La nuit d'Hermès	13000	P. Italia Dif. création 1981年8月22日 F. Culture
20	1981年6月10日		2	19'18	Jean-Claude Poirier	La grotte des enfants perdus	4000	1981年12月9日 F. Musique
21	1981年6月12日	O.	1	12	Patrice Mestral	Rassemblements	10000	1980年7月 Avignon
22	1981年6月12日		2	16'15	Carlos Roque-Alsina	La muraille	25000	1981 Avignon
23	1981年6月16日	M. L.	1	3'40	Bernard Gérard	Reuze Papa et Reuze Maman	3000	1981年11月12日 録音
24	1981年6月30日	M. E.	2	30	Jean Schwarz	And Around	6000	1981年6月15日
25	1981年7月1日	M. L.	1	13'15	Jacques Metehen	Cartes postales	4000	1981年11月4日
26	1981年7月1日	O.	//	30	Ahmed Essyad	L'Eau (1er acte)	15000	1985年3月21日
27	1981年7月6日	Messe	//	30	Raymond Vaillant	Splendore mane illuminas	10000	1981 Avignon
28	1981年7月7日	Cont.	2	14	Germaine Tailleferre	Concerto pour voix élevées (2e partie)	8000	1982年3月8日
29	1981年8月11日		1	28	Alain Louvier	Et Dieu créa l'enfant	16000	P. Gilson
30	1981年8月26日	O	//	35	Emmanuel Nunes	Stretti (pour 2 orchestres)	22000	1984年5月4日
31	1981年9月17日	M. L.	2	15	Edouard Scotto	La fête de mort et d'amour	4000	1981年10月27日
32	1981年9月18日	M. O.	1	30 6	Roger Blanchard	Deus noster refugium Laboravi 2 motets de Rameau	10000	
33	1981年9月29日	M. L.	2	13'30	Pierre-Max Dubois	Analogie (un, deux, trois, quatre)	4000	1981年11月17日
34	1981年10月9日	M. Ch.	//	16	François-Bernard Mâche	Anaphores	12000	1982年3月1日
35	1981年10月9日	//	//	12'45	Jean Denjean	Goodbye au revoir, Nim, Via, [?] l'hurluberlue	4000	1981年10月15日
36	1981年10月12日	//	//	16	Yoshihisa Taïra	Penombres I	10000	1981年10月12日
37	1981年10月16日	//	//	9	Marius Constant	D'une élégie slave	10000	1981年10月26日
38	1981年10月21日	//	//	11	Ladislav Kubik	Quartetto d'archi	9000	1982年4月21日
39	1981年11月6日	//	1	21	Marcel Mihalovici	4ème quatuor à cordes	13000	Saisons 82, 83 1983年2月7日
40	1981年11月17日	O.	//	25	Patrice Mestral	Rassemblements (2e partie)	9000	1983年4月19日

41	1981年11月20日		2	12'30	Christian Zanési	La grosse patate (Conte p. enfants)	3000	Dif. F. M. 1981年10月8日
42	1981年11月20日	M. Ch.	1	10	Jean-Louis Petit	Loude Viche Vanne dit Bros Loulou	9000	
43	1981年11月20日	//	//	10	Thérèse Brenet	Accordance	8000	1982年5月
44	1981年11月23日	O.	//	15	André Bon	Pour le retour de soleil honorer	15000	1983年3月30日 ONF
45	1981年11月23日	M. Ch.	//	27'30	Raymond Depraz	Prométhée délivré	12000	1983年3月24日 Mus. à Déc.
46	1981年11月27日	El. Ac.	2	30	Pierre Henry	Pierres réfléchies	15000	1983年3月23日 Hommage à P. Schaeffer
47	1981年11月30日	M.	1	16	Karel Goeyvaerts	Litanie IV	10000	1983年3月24日 Mus. à Déc.
48	1981年12月2日	M. L.	//	15'30	Roger Pouly	Destination ---Néant---	4000	1982年2月15日 (録音)
49	1981年12月10日	O.	//	30	Ahmed Essyad	L'Eau (2e acte)	15000	1985年3月21日
50	1981年12月10日	M. L.	//	13	Roger Boutry	Intermède	4000	1982年2月15日
51	1981年12月15日	O.	//	20	André Casanova	Métaphonie	20000	1985年2月2日 N. O. P.
52	1981年12月17日		2	30	Claude Prey	Scenarri	20000	1982年2月 録音
53	1981年12月17日	M. L.	//	12	André Hossein	Nocturne - Le Bouffon - Mélancolie	4000	1982年6月25日 録音
						L'ivresse		
						Le calme		
						L'atterrissage		
54	1981年12月21日		1	60	François-Bernard Mâche	La passion des sables	15000	1982年 Avignon
55	1981年12月22日	O.	2	18	Marcel Landowski	L'Horloge, le temps s'enfuit il faut tenter d'aimer	24000	1982年5月6、7日 O. N. F.
56	1981年12月23日	M. Ch.	1	//	Ton That Tiet	VO	9000	
57	1981年12月23日	//	2	20	Philippe Capdenat	Palindrome	7000	1982年2月20日 libre Parcours
58	1981年12月31日	//	1	11	Janos Komives	Tâche sur tâche	10000	1982年4月1日 Mus à découvrir
59	1981年12月31日	//	2	12	Maguy Lovano	Celtique 82	7000	
60	1981年12月31日	O. cl.	//	15'30	Alain Bancquart	Lento	7000	
61	1981年12月31日	M. Ch.	//	10	Gillet Racot	Récréassons	3000	
62	1981年12月31日	O.	1	11	Ahmed Essyad	L'Eau (3e acte)	8000	1985年3月21日 Chœurs N. O. P.

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間 (分)	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1982年1月28日	M. Ch.	1	10	Germaine Tailleferre	Cycle de Mélodies (1er partie)	8000	Opéra de Paris
2	1982年2月2日	T. L.	2	14'45	Georges Aperghis	Liebestod	40000	
3	1982年2月18日		//	12'30	Christian Zanési	Commandant Martin	3000	
4	1982年3月4日	M. Ch.	1	9	Germaine Tailleferre	Cycle de Mélodies (2e partie)	8000	Opéra de Paris
5	1982年3月5日	//	2	6	Claude Barthélemy	M'Tuba	3000	
6	1982年3月12日	//	1	14	Laurent Cuniot	Meteora	11000	Concert lecture 1982年2月
7	1982年3月12日	O.	2	18	Pascal Dusapin	Tre Scalini	18000	Création 1983年4月27日
8	1982年3月29日	M. Ch.	1	20	Denis Dufour	Lèvres serviles	12000	1982年5月23日
9	1982年6月2日	M. E.	2	10	Gilles Racot	Canari Vendredi, Dimanche Volera	6000	
				10		Histoire d'Ascenseur		
10	1982年4月2日	O.	1	1h20	Michel Mathias	Le grand mamonese Cantate	8000	1982年 Festival Avignon
11	1982年6月2日	//	//	1h20	Sergio Ortega	//	8000	
12	1982年6月15日	M. Ch.	2	26	Bernard Parmegiani	Tuba-ci Tuba-là	12000	1982年3月31日
13	1982年4月15日	O.	1	1h15	François-Bernard Mâche	Temboucrou (2e partie)	25000	1982年 Avignon
14	1982年4月20日	M. H.	//	5 et 4	Roger Roger	Ronde et danse	5000	Concours
						Sarcastic March		1981年11月12日
15	1982年4月20日	M. H.	//	5'24	François Rauber	"Paradise", "Music Hall"	5000	Concours UER
16	1982年4月21日	O.	//	24	Akira Tamba	Mandala (Concerto pour piano et orchestre)	18000	1983/2/12 Mus. du Présent
17	1982年4月23日	M. Ch.	2	2h15	Francis Wargnier	Musiques des basses terres	7500	1982/8/1 Fest. Bretagne
18	1982年4月26日	//	//	2h45	Iannis Xenakis	Pour la paix	30000	1982/4/23 INAGRM
19	1982年4月26日	Ind.	1	3	Iannis Xenakis	Rafram I (Indicatif F. Musique)	10000	1981年8月7日から
20	1982年5月26日	M.	//	12	André Popp	Les trompettes du soleil	5000	1983年3月24日録音
						Migration		
						Et Dieu créa l'amour		
						Rotations		
21	1982年6月21日	M. Ch.	2	55	Hervé Bourde	L'Ogre de Barabarie (Conte musical en 5 )	7000	dif FM 1982年5月
22	1982年7月7日	M. L.	1	15	Bernard Gérard	5 fois 4	5000	1983年11月3日 録音
23	1982年7月23日	M. Ch.	//	17	Katori Makino	Dix-Stances	10000	1984/5/17 Mus. à découvrir
24	1982年6月30日	M. L.	//	15	Jean Claudric	Suite pour clarinette en si bémol et cordes	5000	
25	1982年7月7日		2	13'20	Anne Lacassagne	Togracse	3000	Fest. du Bretagne 1982年8月
26	1982年7月23日		//	45'20	Heller Cohn	La pierre noire	6000	Fest. du Bretagne 1982年8月27日
27	1982年7月20日		//	1h40	Bernard Cavanna	Ion	12000	1982年 Festival Avignon
28	1982年7月20日	Messe	//	60	Gabriel Charpentier	Messe	12000	1982年 Fest. Avignon
29	1982年9月7日	M. L.	//	19	Félix Ibarrondo	Abyssal	15000	1983年3月3日 NOP
30	1982年9月8日	M. Ch.	//	43'25	Jean Schwarz	Bran	5000, 2000	Dif. F. Bretagne 1982年8月
31	1982年3月10日	//	1	30	Jean-Louis Graton	Maredoror	5000	Dif. F. Bretagne 1982年8月25日
32	1982年3月16日	//	2	47'30	Pierre Tardy	Liberté des Mers	6000	//
33	1982年3月22日	//	//	11	Pascal Gobin	Suite des gris et bleu	3000	
34	1982年3月27日		1	20	Perig Herbert	Salm 2	10000	1985年11月14日 Mus. à découvrir
35	1982年3月28日		2	25	Serge Nigg	Quatuor à cordes	16000	1983年4月11日
36	1982年3月30日	Mus cl.	//	36'20	Christian Zanési	Les terres d'en dessous	6000	1982年8月 Bretagne
37	1982年10月1日	M. Ch.	//	16	Claude Lefebvre	Oregon	14000	1984年10月6日 Metz
38	1982年10月4日	//	//	18	Kimi Sato	Bleu et Bleu pour 2 pianos	10000	1984年3月20日

39	1982年10月12日	O.	1	18	Jean-Claude Wolff	Symphonie no. 3	18000	1983年11月 Création Metz
40	1982年10月28日	M. Ch.	2	18	Pascal Ducourtioux	La petite chenille du tilleul	1800	1983年4月19日
41	1982年10月23日	//	//	10	Henri Kergomard	Le grenier à son	1200	Dif. F. M. 1981年10月8日
42	1982年11月4日	//	2	12	Maguy Lovano	Celtique 82 (2e partie)	7000	
43	1982年11月9日	//	1	30	Elzbieta Sikora	Derrière son double	10000	p. P. Italia
44	1982年11月22日	//	2	15	Jean Rivier	Stèle	11000	Concert H. P. Hasquenoph 1983年4月23日
45	1982年11月26日	//	//	25	André Almuro	Ile des lents, îles des vifs	7000	p. P. Italia
46	1982年11月26日	M. L.	1	15	André Carradot	"Victoria", "Semiramis", "Pobre Sardana", "Souvenirs"	5000	1983年1月26日
47	1982年11月26日	M. Ch.	//	16'15	Jean-Etienne Marie	De l'ambiguïté	10000	1983年3月15日
48	1982年11月26日	//	//	47	Tona Scherchen	Eclats obscurs	10000	1983/1/13 sur F. Musique
49	1982年12月3日	//	2	32	Ton That Tiet	Jeu des cinq éléments	12000	Persp. Nich 1983年2月
					"Métal, tam tam" 11' viola			
					"Bois, [?]" 9 violoncelle			
					"Jeu des cinq éléments" 12 violon, violoncelle			
50	1982年12月3日	//	1	22	Jean-Guy Bailly	Sixième quatuor	12000	1984年3月8日 Mus. à découvrir
51	1982年12月9日	//	//	8	Patrice Mestral	Moning Caloni and Courchelle Song	5500	Ind. F. Inter 1982年12月6日
52	1982年12月14日	M. O.	//	20	Ahmed Essyad	L'Eau (dernière partie)	10000	1985年3月21日
53	1982年12月16日	//	//	15	Gisèle Barreau	Sterne (1ère partie)	15000	1983年12月3日 NOP
54	1982年12月17日	//	2	11	Jean-Louis Florentz	Les marches du soleil		1984年2月4日 Radio Bavaroise G. Amy
55	1982年12月17日	M. Ch.	//	18	Gérard Masson	Renseignements sur Apollon	12000	1983年2月15日
56	1982年12月20日	//	//	22	Jean-Jacques Lemaître	La meurtrière (dramatique musicale)	12000	
57	1982年12月21日	O.	//	14'45	Michel Philippot	Carres magiques (Hommage à E. Galois)	15000	E. Galois 1983/3/15
58	1982年12月21日	M. L.	1	5'50	Pierre-Max Dubois	Valse populaire (concours compositeur - UER)	4000	Concours UER
59	1982年12月21日	//	2	14	Pierre Porte	"Sortilège", "Arlequin", "Tender troubled thoughts", "Melody Love"	5000	1983年11月8日 録音
60	1982年12月21日	//	1	15'40	Claude Bolling	"Broadway Ballad", "Hollywood Dream", "Love remembered", "Rio Fantasy"	5000	1983年12月21日 録音
61	1982年12月23日	//	//	12	Alain Goraguer	"Promenade en ré majeur", "Rêverie inachevée", "Marche", "Nostalgie d'un amour imaginaire"	5000	
62	1982年12月30日	Ind.	2	3	Renaud Gagneux	Europa I	3000	p. indicatif UER
63	1982年12月30日	M. L.	1	3'30	Roger Roger	Fantasia	4000	Concours UER
64	1982年12月30日	O.	//	17'45	Janine Charbonnier	Galiens	15000	E. Galois 1983年3月
65	1982年12月30日	M. Ch.	2	18	Michel Decoust	Onde	15000	1983年1月17日
66	1982年12月30日	//	1	19'10	Fernand Vandenbogaerde	Quadrigue	15000	E. Galois 1983年3月15日
67	1982年12月30日	O.	2	22	Henri Dutilleux	Concerto pour violon et orchestre 2e partie	15000 [13000?]	1985年11月5日 ONF Stern I. L. Maazel
68	1982年12月30日	//	1	19	Gisèle Barreau	Sterne (2ème partie)	5000	1983年12月3日 NOP
69	1982年12月30日	M. Ch.	2	16'50	Zygmunt Krauze	Quatuor no. 3	14000	Création 1983年1月24日
70	1982年12月30日	M. O.	//	15	Jean-Claude Eloy	Comme une fleur arrachée (1ère partie)	10000	commande
71	1982年12月30日	//	1	13	Alain Daniel	Baudelaire - Les promesses d'un visage	8000	1983年11月5日
72	1982年12月30日	M. L.	2	17	Armand Petit	Le Violon du pendu conte musical du E. Chatrian	3000	Dif. 1983年1月12日 FM
73	1982年12月30日	Transg.	1	6' 4' 1'	Marc-Olivier Dupin	Symphonie no. 5 p. orgue de C. M. Widor	12000	
					(transcription p. 6 pianos et orchestre)			
					Chanson du film Casablanca "As time goes by"			
					Accord sur les lettres de F. Musique			

1982年

74	1982年12月30日	M. O.	2	17	Jean Guinjoan	Trio per archi	13000	1983年11月2日
75	1982年12月30日	O.	//	18 (1er partie)	Betsy Jolas	Préludes Fanfares Interludes Sonneries	20000	1984年1月28日 ONP
76	1982年12月30日	O.	//	16	Yoshihisa Taïra	Moksa Vimoksa	20000	Perspect. 1983年5月28日

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1983年1月16日	M. Ch.	2	20	Georgi Mintchev	Trois poèmes pour soprano et orchestre de chambre (Vase antique – Aurore - Solitude)	15000	Création 1983年11月17日
2	1983年2月23日		//	10	Henri Duplessis-Kergomard	La recette à musique	3000	Dif. 1983年3月24日 FM.
3	1983年3月25日	L.	1	1h30	Annibale Gianuario (réalisation)	Euridice de Jacopo Peri	12000	
4	1983年3月18日	//	//	1h30	Guy Robert	Euridice de Jacopo Peri	5000	
5	1983年4月1日	//	2	30'	René Koering	Avila	15000	1984年9月24日
6	1983年4月19日		//	1h13	Adrienne Clostre	Le secret ou une lecture musicale du Journal de Kierkegaard	25000	Fes. de Romans 1983年9月5日
7	1983年4月26日	M. Ch.	//	25	Jindrich Feld	Quatuor de saxophones	11000	1983年5月4日
8	1983年5月27日	//	//	18	Nicos Cornilios	L'imitation du silence	10000	1983年 Avignon
9	1983年5月27日	O. N.	1	15	Philippe Capdenat	Nadira, Variations Thème et Variations p. soprano et ré citant et orchestre	20000	Anniversaire ON 1984年11月29日
10	1983年5月31日	P. Gilson	2	30	Alain Bancquart	Tarots d'Ulysse	22000	pour Prix Gilson
11	1983年6月16日		//	21'50	Jean Schwarz	Automne	5000	Prix Italia 1983
12	1983年6月17日	M. Ch.	//	40	Denis Levaillant	Inside	15000	1983年7月9日 Fes. Angers
13	1983年6月20日	Messe	//	32	Marcel Frémot	Messe (Poème soit qui vient)	14000	1983年 Fest. Avignon
14	1983年6月21日	Mu. cl.	//	10 chaque épisode	Gilles Racot	Le jardin sonore (2 épisodes)	6000	p. l'Oreille
15	1983年6月27日	O.	//	5 (2e p.)	Betsy Jolas	Préludes Fanfares Interludes Sonneries	10000	1984年1月28日 ONF
16	1983年6月27日		//	25	Vinko Globokar	L'Introspection d'un tubiste	10000	Avignon 1983
17	1983年6月28日	M. Ch.	//	15	Bernard Cavanna	Sax domine	10000	Avignon 1983
18	1983年7月20日	//	//	18	Alain Féron	Charades (opus 1)	13000	Perspect. XXe siècle 1983年12月10日
19	1983年7月20日	O.	//	17	Jean-Louis Florentz	Les marches du soleil (2e partie)	15000	
20	1983年7月20日	Franc.	//	18	Michaël Levinas	Musique pour le Faust de Murnau	6000	Transcription p. F. Musique
21	1983年7月20日	//	//	//	Michel Decoust	//	6000	//
22	1983年7月21日	Messe	//	55	Petr Eben	Messe cum populo	15000	Avignon 1983
23	1983年8月12日	Trans.	//	18	Roger Tessier	Musique pour le Faust de Murnau	6000	France Musique
24	1983年9月7日	Orch.	//	6	Michaël Levinas	Orchestration de mélodies de C. Debussy	3000	F. Musique
24bis	1983年9月13日	//	//	18	Tristan Murail	Musique pour le Faust de Murnau	6000	Trans. F. Musique
25	1983年9月14日	Th. M.	//	1h25	Yoshihisa Taïra	Au puits de l'épervier (Th. musical - chorégraphique)	31000	Avignon 83
26	1983年9月16日	ONF	1	30	Claire Schapira	Tenebres de Profondis	22000	1984年11月17日
27	1983年9月20日	NOP	//	12	Louis Saguer	Quasi una fantasia	10000	1987年7月18日 Fep.
28	1983年9月21日	M. L.	2	13'30	Désiré Dondeyne	3 pièces caractéristiques - Catalane - Sérénade - Valse scherzo	5000	1984年10月19日 録音
29	1983年9月30日	O.	1	5'	Guy Reibel	Hommage à Berlioz	5000	1983年9月
30	1983年10月5日	M. Ch.	2	14'	Philippe Fénelon	Maipu 994	13000	1983年12月12日
31	1983年10月11日	//	1	24'	Daniel Meier	Tenebrae factae sunt	14000	1984年10月18日 (Mus. à Déc)
32	1983年10月21日	M. L.	//	15'	Georges Rabol	Fantaisie ballet (Danses noble - Adage Tango)	5000	1984年4月17日 録音
33	1983年10月28日	M. Ch.	2	13'	Luis de Pablo	Saturno	13000	Mus. à Déc. 1984年5月17日
34	1983年11月3日	Th. Mus.	1	1h20	Antoine Duhamel	Transsiberien, opéra ferroviaire	30000	Bouffes du nord 1983年11月29日～12月10日
35	1983年11月8日	Conte musical	2	20	Anne Lacassagne	La bulle du souffleur	5000	1983年10月10日 F. Musique
36	1983年11月8日	M. Ch.	//	16	Raymond Depraz	Alba V (Trio à cordes)	14000	1985年2月21日

37	1983年11月9日	O.	//	16	Patrice Mestral	Aigues-vives	18000	1984年1月7日 Mus. au présent
38	1983年11月9日	O.	1	18	Yves-Marie Pasquet	Narcissechos	16000	1985年4月20日 Mus. au présent
39	1983年11月29日	Orch.	2	6	Costin Miereanu	Orchestration de deux mélodies de Debussy	3000	
						- Coquetterie posthume		
						- Musique		
40	1983年11月30日	M. de Ch.	1	16	Alain Savouret	Chant triglotte	16000	1984年2月21日
41	1983年11月30日	M. O.	2	20	Graciane Finzi	Soleil vert	20000	1984年3月24日 (Perspectives)
42	1983年11月30日	M. L.	1	14'40	François Rauber	Quatre sérénades pour orchestre	5000	1984年6月15日 録音
43	1983年11月30日	O.	//	18	Philippe Hersant	Aztlan	21000	1985年5月31日 NOP
44	1983年12月7日	M. Ch.	//	20	Philip Cannon	Sextuor à cordes	14000	1985年11月13日 ONF
45	1983年12月8日		//	30	Marcel Goldmann	7. 7. 7. 7. pour suivre une actualité qui s'échappe (œuvre destinée au P. Italia)	20000	1984年4月
46	1983年12月9日		2	10	Gilles Racot	Au pays des sons I	3500	1983/10/1 FM Microcosmos
47	1983年12月9日		//	10	Henri Duplessis-Kergomard	Au pays des sons II	3500	1983年11月3日 FM Microcosmos
48	1983年12月9日		1	10	Walberg	Quatre paysages (sérénades)	5000	1984年6月22日 録音
49	1983年12月12日	M. L.	//	12'50	Jean-Michel Defaye	Suite a gogo	5000	1984年6月19日 録音
50	1983年12月13日	M. Ch.	2	20	Patrice Fouilaud	Le chant de l'absence	14000	1984年11月11日
51	1983年12月19日	O.	//	15	Costin Miereanu	Voyage d'hiver II	22000	NOP
52	1983年12月20日	M. Ch.	//	40	Jacques Charpentier	Etudes karnatiques 1ère partie (no 25 à 40)	18000	1985年5月28、30日
53	1983年12月20日	M. L.	//	15	Michel Magne	Les quatre éléments (la terre, l'eau, le feu, l'air)	6000	
54	1983年12月21日	M. Ch.	1	25	Michel Fischer	Stabat Mater	12000	1983年12月19日 Concert lecture
55	1983年12月21日	//	//	15	Renaud François	Les chemins de la nuit	15000	1984年11月10日 Mus. au Présent
56	1983年12月21日	O.	2	16	Iannis Xenakis	Lichens I	30000	CRPL 1984
57	1983年12月22日	M. L.	1	13'43	Jacques Metehen	4 personnages de Venise	5000	1984年6月21日 録音
58	1983年12月27日	M. Ch.	2	30	Pascal Ducourtieux	Chenillon, Chenillette (La petite chenille du Tilleul)	4500	
59	1983年12月27日	M. L.	1	15'30	Jean-Claude Naude	Athenaparthénon - Thera - Mykonos - Delos	5000	1984年10月8日 録音
60	1983年12月29日	//	//	12	Franck Bacri	Une journée dans la forêt	5000	1984年12月13日 録音
61	1983年12月29日	//	2	14	Roger Boutry	Ouverture - Valse - Polka - Final	5000	1984年1月14日 録音
62	1983年12月27日	Réal.	1	20	Denis Eininger	Réalisation de – Messe de Requiem de Pierre Clereau	10000	
25				- Chansons de Guillaume Caïetin				
63	1983年12月29日	Piano	2	18	Gérard Masson	Piano-Solo	15000	Persp. XXe s. 1984年2月25日
64	1983年12月29日		//	2'30	Christian Gouinguéné	Antienne et Répons	2000	1984年1月9日 Mus. de Chambre F. de cuivres de l'O. N. F.
65	1983年12月29日	M. Ch.	1	20	Jean-Jacques Werner	Concerto pour harpe et orchestre à cordes	18000	1985年6月6日
66	1983年12月29日	L.	//	35	Girolamo Arrigo (1ère partie)	Il ritorno di Casanova (1ère partie)	20000	1985年4月18、20、22、24、26日 Th de Genève



整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1984年3月6日	Réal.	1	25	Franck Langlois	Messe de requiem 1ère leçon de ténèbres	10000	
2	1984年3月8日	O.	2	20	Renaud Gagneux	Double concerto pour tuba - piano - orchestre	22000	1984年6月 ONF
3	1984年3月9日		//	18	Nguyen Thien Dao	L'Aube est une œuvre	22000	
4	1984年4月17日	Th. Mus.	1	20	Alain Féron	La Barrique d'Amontillado	12000	1984年4月 PC
5	1984年4月18日	Ballet	2	40	Sharon Kanach	Beaucoup de silence pour rien	5000	Dif. F. Cult. 1984年4月8日
6	1984年4月28日		1	35	Edward Hagerup Bull	Sinfonia A5 à un effort universel et humain	14000	1985年11月19日 Mus. à Découvrir
7	1984年5月9日	Messe	//	20	Robert Janssens	Messe	14000	Avignon 1984
8	1984年5月9日	M. Ch.	2	30	Jacques Lenot	Nuit d'été	20000	1984年7月28、29日
9	1984年5月10日	M. H.	1	50	Jean-Claude Naude	Grande Armée (Marche), Alice et le lièvre de mars	6000	Concours H. et Fanfare
10	1984年5月22日	M. Ch.	//	4' et 5' 30	Laurent Cuniot	L'exil au miroir	12000	1984年5月15日 Concert lecture
11	1984年6月1日	//	//	15	Griffith Rose	Son temps Océan, texte du Nathalie Michan	13000	1984年11月11日 (Mus. de Ch.)
12	1984年6月19日	//	2	25	Serge Nigg	3ème sonate pour piano	18000	1985年5月23日
13	1984年6月19日	M. E.	//	29'30	Pierre Henry	L'Ouverture de la bouche	25000	P. lt. 84
14	1984年6月19日	Piano	//	20	Carlos Roque-Alsina	Hommage	15000	Tambour 1984年6月
15	1984年6月21日	M. L.	//	10 4	Guy Luypaerts	Amérique latine no2 L'Union fait la force	6000	
16	1984年7月2日		//	14	Alain Gibert	Le retour du petit Raymond rouge	1500	
17	1984年7月4日	M. Ch.	1	21	Jean-Claude Risset	Filtres pour 2 pianos	15000	Concert 1984年5月11日
18	1984年7月13日	M. L.	//	15	Bernard Gérard	Garfield ou les Mémoires d'un chat	6000	1985年1月30日 録音
19	1984年7月4日	M. Ch.	//	19'30	Piotr Moss	Concertino pour 2 violons, 2 quatuor à cordes et orchestre	16000	D de Toulouse 1985年6月19日
20	1984年7月9日	O.	2	12	Marc Monnet	Pouf !	24000	29 ONF 1984年11月
21	1984年9月5日	M. Ch.	1	32	Gilles Racot	Jubiluda	13000	1984年9月
21[bis]	1984年7月1日	O.	//	24	Louis Saguer	Quasi una fantasia	15000	
22	1984年9月11日		2	1h45	René Koering	Avila 2e partie	27000	1984年9月28日 NOP
23	1984年9月12日	O.	//	14	Michaël Levinas	La Cloche fêlée	24000	1990年2月8日 Musiques au Perspectives
24	1984年9月13日	M. Ch.	1	21	Nicole Lachartre	Le jardin des tortues	15000	
25	1984年10月1日	Th. M.	//	15	Alain Féron	La Barrique d'Amontillado 3e tableau Le Mur	6000	
26	1984年10月23日	M. il.	2	45	Alain Savouret	Cervin	15000	
27	1984年11月5日	O. S.	1	21	Philippe Drogoz	Concerto grosso pour 3 synthétiseurs et orchestre	26000	1985年10月19日 Persp. XXe siècle
28	1984年11月5日	M. Ch.	2	13	Allain Gaussin	Quatuor à cordes "Chakra"	13000	1985年3月23日 (Persp. XXe)
29	1984年11月8日	M. lég.	1	14	Gérard Victory	Tableaux sportifs	6000	1986年4月15日 (録音)
30	1984年11月13日	Texte			Giuseppe di Leva	Texte destiné à l'Opéra de G. Arrigo "Il ritorno di casanova"	8000	
31	1984年11月13日	M. C.	2	8	Maguy Lovano	Celtique 82	6000	
32	1984年11月15日	M. lég.	1	12	Greco Casadesus	3 pièces clandestines - Le Lion amoureux - Le Tempo des chiffons - Chasse spleen	6000	1985年12月16日 (録音)
33	1984年11月19日	//	2	15	Guy-Claude Luypaerts	Les impressionnistes	6000	1985年1月22日 録音
34	1984年11月21日	Th. Mus.	1	55	Alain Féron	La Barrique d'Amontillado	12000	
35	1984年12月7日	Mus. El.	2	25	Michel Zbar	Le voyage éclate I	16000	1984年6月 (Concert lecture)
36	1984年12月11日	Comédie musique	1	45	Maurice Ohana	La Célestine 1er tableau (tragi-comique lyrique)	30000	
37	1984年12月14日	Mus. Voc.	2	16	Francis Miroglio	Habeas Corpus	17000	1985年1月19日 Perspective XXe siècle

38	1984年12月17日	M. C. (I.)	//	40	Edith Lejet	L'Homme qui avait perdu sa voix	25000	1985年5月11～17日 (NOP)
39	1984年12月17日	M. L.	//	14	Jean Claudric	Quatre danses "Retro" (Valse - Tango - Habanera - Ragtime)	6000	1985年1月23日 録音
40	1984年12月17日	//	//	15	Roger Roger	Hommage à Gershwin	6000	
41	1984年12月17日	M. cl.	//	30	Jean Schwarz	Perpetum Mobile	12000	INA. GRM 1985年4月15日
42	1984年12月18日	O.	//	18	Yoshihisa Taïra	Prolifération	20000	1985年9月20日 Perspectives
43	1984年12月19日	M. L.	1	18	Roger Pouly	L'Ile aux oiseaux	6000	1986年4月18日 (録音)
44	1984年12月19日	M. C. (Réal.)	//	23	Frank Langlois	Psautier de Clérambault – réalisation -	13000	
45	1984年12月19日	//	//	25	//	Motet - Cantate de Clérambault	15000	
46	1984年12月20日	M. cl.	2	10	Charles Clapaud	Sonoformes	3000	Dif. 1985年1月10日 F. Musique
47	1984年12月20日	O.	1	1h30	Alain Maurel	En famille	15000	
48	1984年12月20日	//	2	10	Ton That Tiet	Concerto pour violoncelle et orchestre	10000	
49	1984年12月31日	piano	//	1h10	Jacques Charpentier	Etudes karnatiques (no 41 à 72) 2e partie (fin)	20000	1985年5月28、30日 1985年6月6日
50	1984年12月31日	O.	//	23	Ton de Leeuw	Chimères	20000	1985年3月21日 Concert lecture
51	1984年12月31日	M. Ch.	1	13	François Bouche	Résonances suspensives	13000	1985年3月14日 Mus. à découvrir
52	1984年12月31日	//	//	45	Jean-Guy Bailly	Les chants d'amour de la belle cordière	25000	1986年3月13日
53	1984年12月31日	O.	2	35	Claude Ballif	Le livre du serviteur (lettres de St Paul)	20000	
54	1984年12月31日	M. Ch.	//	8	José Campana	Imago (1ère partie)	8000	Concert lecture 1985年5月4日
55	1984年12月31日	M. cl.	//	30	André Almuro	Sable memorial	10000	1985年1月21、23日 録音
56	1984年12月31日	O.	//	2h15	Girolamo Arrigo	Il ritorno di Casanova	50000	1985年4月18、20、22、24、26日 Th de Genève
57	1984年12月31日	M. cl.	//	10	Charles Clapaud	Roland et Bazile	3000	
58	1984年12月31日	Th. Mus.	//	12	Susumu Yoshida	Enka III (Le Mari de Keça) 1ère partie	10000	
59	1984年12月31日	M. cl. + piano	//	14	Daniel Teruggi	E così via pour piano et bande magnétique	10000	Concert lecture 1985年6月17日
60	1984年12月31日	O.	//	13	André Bon	Fresques (1ère partie)	15000	1988年2月13日

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1985年1月30日	O.	2	19'15	Cristóbal Halffter	Parafraasis - solore un texto propio pasado en una sonoridad de G. F. Händel	45000	1985年9月26日 Dir. Halffter
2	1985年2月13日	M. il.	//	10	Alain Gibert	Jours tranquilles à Glouville	3000	Dif FM 1985年12月27日
3	1985年3月7日	M. Ch.	1	2	J. Luis Campana	Imago (2e partie)	8000	Concert-lecture 1985年5月7日
4	1985年3月12日	O.	2	16	Ton That Tiet	Concerto pour violoncelle et orchestre (2e partie)	12000	Manca 86
5	1985年3月13日	M. Ch.	//	10	Charles Clapaud	Le monstre de Goulouksor (destiné à l'Oreille en colimaçon F. Musique)	3000	1985年3月7日 (Dif. F. Musique)
6	1985年3月18日	M. L.	1	13	André Patrick	Aquarius	6000	1986年2月28日 録音
7	1985年3月25日	O.	2	9	Didier Denis	T'aimer beaucoup, t'aimer d'amour (1ère partie)	10000	1988年2月13日
8	1985年3月26日	M. Ch.	//	19'30	Philippe Hersant	Quatuor à cordes	15000	1986年1月11日
9	1985年3月28日	M. cl.	//	10	Charles Clapaud	Le monstre de Goulouksor (2e partie)	3000	
10	1985年4月10日	Conte F. M.	//	10	Jean Pacalet	Mimile et Patachon	3000	1985年4月11日 FM
11	1985年4月12日	M. Ch.	//	19	Eugène Kurtz	Trio à cordes "Time and Again..."	17000	1985年10月29日 T. à cordes Paris
12	1985年4月12日	Ode	1	41	Tolia Nikiprowetzky	Ode funèbre	35000	1988年11月4日 NOP
13	1985年4月25日	O.	2	20	Félix Ibarrondo	Erys	25000	1986年11月22日
14	1985年4月26日	M. Ch.	//	10	Charles Clapaud	Le Monstre de Goulouksor (fin)	3000	Dif. 1985年4月18日
15	1985年5月13日	TLM	1	45	Bruno Ducol	Praxitèle (1ère partie)	15000	
16	1985年5月28日	O.	2	30	Emmanuel Nunes	Tif'ereth (1ère partie)	30000	1985年12月9日 ONF
17	1985年5月31日	//	1	26	Antoine Tisné	Concerto à Niemann	26000	1987年5月 録音
18	1985年5月31日	M. Ch.	2	18	Thomas Kessler	La Montagne ardente	13000	Concert-lecture 1985年6月3日
19	1985年6月17日	M. Ch.	//	21	F. Bernard Mâche	Iter Memor	19000	1985年11月12日 Concert-lecture
20	1985年6月27日	O.	1	24	Marcel Despard	Musique pour cuivres, cordes et timbales	24000	録音
21	1985年6月28日	O. de Cl.	2	21	Nguyen Thien Dao	Au-dessus du vent p. harpe et orchestre à cordes	20000	O. de Toulouse 1986年3月19～26日
22	1985年7月3日	M. de C.	//	18'30	Alain Fourchotte	Récifs p. flûte – clavecin – percussion	17000	1985年11月12日 (Mà Déc.)
23	1985年9月9日	O.	1	40	Elisabeth Sikora	L'Arrache-Cœur	25000	1986年9月15～18日 録音
24	1985年9月13日	M. de Ch.	2	30	Henri Pousseur	Sur le qui vive	18000	1985年11月
25	1985年9月13日	O.	//	8	Carlos Roque-Alsina	Concerto pour piano et orchestre	10000	1985/11/16 Persp. XXe siècle
26	1985年9月13日	Th. L.	//	2h Mus: (45)	Nicol Cornilios	La septième porte	30000	1985年11月7日 Th. du Chaillot
27	1985年9月19日	M. L.	//	14'15	Pierre-Max Dubois	Travail du T (toccata - tambourins - tournoiement - terminus)	7000	1986年4月22日 (録音)
28	1985年9月20日	O.	1	18	Didier Denis	T'aimer beaucoup, t'aimer d'amour (2e partie)	15000	1988年2月13日 Perspect. XXe siècle
29	1985年10月11日	M. L.	2	14	André Popp	Les Saints de Paille (St Fursquin - Ste Nitouche - Holy Ireland - St Glinglin)	7000	1986年3月24日 (録音)
30	1986年12月31日	O.	//	12	Carlos Roque-Alsina	Concerto p. piano et orchestre (2e partie)	17000	1985年11月16日 Persp. XXe siècle ONF
31	1985年10月22日	M. Ch.	//	25	Lasse Thoresen	Les trois régénérations	17000	1985年10月29日 T. à cordes Paris
32	1985年10月22日	//	//	20	Katori Makino	Intermittences V	18000	1986年3月18日
33	1985年10月31日	M. L.	//	15	Jacques Metehen	Kaléidoscope	7000	1986年10月28日 録音
34	1985年11月5日	O.	2	25	Tomas Marco	Sinfonia no3	20000	1986年4月5日 (Mus. au Présent)
35	1985年11月5日	//	//	23	André Bon	Fresques (2e partie)	11000	1988年2月13日 Perspect. XXe siècle
36	1985年11月19日	M. L.	//	17	Walberg	Il était une fois	7000	1986年4月20日 (録音)
37	1985年11月23日	O.	1	13	Michel Lorin	Impressions p. vibraphone et orchestre	7000	1986年4月11日 録音
38	1985年12月2日	//	2	13	Emmanuel Nunes	Tif'ereth	60000	1985年12月9日 ONF
39	1985年12月11日	M. L.	//	17	François Rauber	Le vieux kiosque à musique	7000	1986年4月15日 録音

40	1985年12月13日	O.	//	18	J. Luis Campana	Spliting	22000	1986年3月22日 Perspect. XXe siècle
41	1985年12月13日	M. E.	//	20	Daniel Deshays	Radio Scoop	5000	1986年4月30日 F. Culture
42	1985年12月16日	Th. Mus.	//	12 (2e partie)	Susumu Yoshida	Enka III (Les Ports de l'Enfer) 2e partie	6000	Manca 86
43	1985年12月16日	O.	1	18	Jean-Claude Wolff	Symphonie no4	19000	1988年3月5日 Mus. au P.
44	1985年12月18日	P. I.	//	30	Bruno Gillet	Scherzo	26000	1986年5月14~17日 (録音)
45	1985年12月20日	Op	//	35	Maurice Ohana	La Célestine 2e tableau	20000	
46	1985年12月20日	Livret			Odile Marcel	Livret destiné à la Célestine	5000	
47	1985年12月31日	M. Ch.	2	20	Roberto Sierra	Concierto nocturnal	20000	
48	1985年12月31日	//	1	20	Patrice Sciortino	Comptines Cosmolitaines	25000	1987年4月7日
49	1985年12月31日	M. Ch.	2	20	Philippe Leroux	L'Entourage intime	18000	1986年1月14日 (Conc. lecture)
50	1985年12月31日	M. L.	//	18	Roger Boutry	Suite pour ensemble d'archets	7000	1986年10月30日 録音
51	1985年12月31日	Couts musicaux	//	10	Frédéric Stochl	Le Petit Chaperon Loup - La Promenade -	3000	Dif. 1986年2月6日 F. Musique
52	1985年12月31日	//	//	10	Gérard Buquet	Le Petit Chaperon Loup - La chasse -	3000	
53	1985年12月31日	M. Ch.	//	15	Jean-Louis Florentz	Chant de Nyandarva (Litanies p. 4 violoncelles)	16000	
54	1985年12月31日	M. cl.	//	21	Barre Phillips	Monde empoisonné	5000	F. Culture 1985年4月30日
55	1985年12月31日	M. de Ch.	//	20	Michel Decoust	Aubes incendiées	22000	1985 Montpellier
56	1985年12月31日	M. de C.	//	25	Gérard Geay	Messe de cuiusvis toni de Ockeghem - Réalisation -	7000	
57	1985年12月31日	O.	//	23	Zygmunt Krauze	Double concerto piano - violon orchestre	27000	1989年6月15日
58	1985年12月31日	M. Ch.	//	25	Gérard Masson	Sonate Souvtchinsky Piano Violon	20000	1986年10月26日 (Conc. lecture)
59	1985年12月31日	O.	//	13	Gilbert Amy	Praeludium	35000	
60	1985年12月31日	Th Mus.	1	1h (2e partie)	Bruno Ducol	Praxitèle (2e partie)	18000	
61	1985年12月31日	O.	//	23	Guy Reibel	Etudes de Flux	28000	

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間 (分)	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1986年1月16日	M. cl.	2	10	Alain Gibert	Maitre Pierre	3000	1985年9月26日 Dir. Hallfer
2	1986年1月28日	〃	〃	130	Jean-Loup Graton	Sonal CDMC	2000	Dif. F. M. et F. C. M. 1986年6月2日から
3	1986年2月3日	Sextuor	1	20	Aubert Lemeland	Sextuor	17000	1986年11月4日
4	1986年2月3日	Trio avec piano	2	17	J. Baptiste Devillers	Quatuor "La voix murée"	17000	1986年10月
5	1986年3月20日	M. élect.	〃	3	Michel Redolfi	"Rush 1"	2000	Dif. F. M. et F. M. C. 1986年6月2日から
6	1986年3月21日	Orgue	〃	17'30	Ton That Tiet	Strasbourg 85	17000	1988年5月10日
7	1986年3月21日		〃	25	Laurent Cuniot	Les arches liminaires	16000	Concert lecture 1986年4月8日
8	1986年3月28日	Ind. CDMC	〃	1'29	Luc Ferrari	Sonal CDMC	2000	Diffusion F. M. et F. M. C. 1986年6月2日から
9	1986年4月2日	〃	〃	1'54	Henry Fourès	Sonal CDMC	2000	
10	1986年4月22日	Orch.	1	20	Armand Fuste-Lambezat	A Nigh Mirror	20000	
11	1986年4月25日	Sop. et 3 Inst.	2	17	Claude Prey	Paysages Pacifiques	20000	1986年2月13日
12	1986年4月25日	Sextuor	〃	15	Philippe Manoury	Musique	17000	1986年4月29日 Conc. lecture
13	1986年6月2日	Opéra			Betsy Jolas	Le Cyclope	35000	Avignon 1986年7月
14	1986年6月2日	Chœurs a capella	2	41	Edith Canat de Chizy	Llama	13000	1987年6月21日 Concert-lecture - SV Caillat -
15	1986年7月17日	Quintette	〃	20	Costin Miereanu	Ombres lumineuses	15000	1986年5月27日 Conc.-lecture
16	1986年7月4日	Sop. et Quintette	1	10	Alain Maurel	Révélation	20000	
17	1986年9月3日	Solo et Orch. par 2	2	45	Patrice Mestral	Concerto violon et orchestre	25000	Mus. au Présent
18	1986年10月6日	M. Lég.	1	30	Lucien Lavoute	Liberté totale	7000	録音
19	1986年10月14日	Soprano 3 Trio à cordes	2	26	Alain Bancquart	5 dits de J. Claude Renaud	22000	1987年3月17日
20	1986年10月14日	Soprano Orch. par 1	〃	18	Serge Nigg	Du clair au sombre	28000	1987年3月7日
21	1986年10月17日	M. O. P. Italia	1	21	Pierre Mariétan	Bruits	25000	1986年12月15、16日 録音
22	1986年11月13日	M. Lég.	2	24	Pierre Porte	Nuages	7000	1987年5月7日 録音
23	1986年11月14日	Quintette	〃	21	Gérard Grisey	Taléa	20000	1987年1月13日
24	1986年11月17日	Trio	〃	18'30	Alain Louvier	Envois D'écaillés	20000	1987年2月10日
25	1986年11月18日	7 Inst.	1	40	Jean-Pierre Drouet	Harreu	20000	1987年2月16～17日 Conc. lecture
26	1986年11月28日	M. L.	〃	15	Bernard Gérard	Dans les collines du Perché	7000	1987年10月27日 録音
27	1986年12月3日	B. élect.	2	10	Frédéric Stochl	L'Arbre et ses mouvements	3000	Dif. FM 1984年8月8、15日
28	1986年12月9日	M. L.	〃	15	Guy-Claude Luybaerts	Light Music suite	7000	1988年3月17日 録音
29	1986年12月10日	orgue	〃	15	Graciane Finzi	Orchestra	15000	1987年10月1日
30	1986年12月11日	P. l.	1	30	Luc Ferrari	Brise-glace	25000	1986年12月20、12日[?]録音
31	1986年12月15日	voix de femme et Int. et 7 inst.	〃	20	Leni Alexander	...est-ce donc si doux cette vie ?...	20000	1987年4月 F. Culture (Toulouse)
32	1986年12月15日	M. Lég.	〃	12	Jean Claudric	Quatre évocations	7000	1987年5月4日 録音
33	1986年12月19日	2 Inst. Musical	2	15	Gérard Buquet	Sur quel pied danser	4000	Dif. F. Musique
34	1986年12月19日	Quat. à cordes et flûte	〃	20	Isang Yun	Quintette p. flûte et quatuor à cordes	20000	
35	1986年12月19日	M. L.	1	15	Alain Goraguer	Cocktail intemporel	7000	1987年12月3日 録音
						Recherche nostalgique		
						Essai Romantique		
						Pirouettes pour une parade		
36	1986年12月22日	OP radioph.		31	Francis Gorge	La Fosse pièce radiophonique	12000	1985年10月29日 T. à cordes Paris
37	1986年12月22日	〃	〃	31	J. Jacques Birge	La Fosse pièce radiophonique	12000	1986年3月18日
38	1986年12月22日	O.	2	25	Bernard Vitet	La Fosse pièce radiophonique	12000	
39	1986年12月22日	M. L.	〃	23	Gérard Calvi	Suite à danser	7000	
40	1986年12月29日	mezzo et 3 Inst.	〃	17	Xavier Darasse	A propos d'Orphée III	20000	1987年6月2日
41	1986年12月29日	ens. vocal et élect.	1	13	Michel Zbar	Franges du songe	20000	1987年4月15日

42	1986年12月29日	Opéra	2	13	Maurice Ohana	La Célestine (fin)	30000	1988年6月16日 Opéra de Paris
43	1986年12月29日	cordes et 4 inst.	//	17	Gérard Masson	Contre blanc basse	22000	1988年3月29日
44	1986年12月29日	12 voix et 4 Inst.	//	18	Henri Kergomard	Alentour	21000	1987年4月7日 Concert-lecture
45	1986年12月29日	Jazz	//	20	Denis Badault	Paprika et Libellule	13000	1987年5月 UER (Amiens)
46	1986年12月29日	C. Mus. accordéon	//	12 (2e partie)	Jean Pacalet	Le bateau invisible	5000	dif. FM
47	1986年12月30日	baryton M. L.	1	18	Philippe Fênelon	Du blanc le jour son espace	23000	1988年1月9日
48	1986年12月30日	23 mus.	//	30	Daniel Tosi	Phonic-Design no1 eaux fortes	24000	1987年10月10日 Angers Mus. au P.
49	1986年12月30日	Sext. cordes	//	35	José Augusto Mannis	Le Messager de l'automne	17000	1986年11月25日
50	1986年12月30日	Voix O.	2	18	Georges Aperghis	L'Adieu	40000	1994年4月28日 NOP Portrait de notre temps
51	1986年12月30日	Ode Jazz	//	13	Antoine Hervé	Tant qu'il y aura des printemps	13000	1987年5月 UER (Amiens)
52	1986年12月30日	Opéra	1	35 (1ère partie)	Jean Prodromidès	La noche triste (1ère partie)	25000	
53	1986年12月30日	tuba, piano solo et 7 Inst.	2	25	Philippe Boesmans	Extases (Suite de 7 pièces)	23000	1988年3月5日 Mus. au Présent
54	1986年12月30日	Lyrique	//	20 (1ère partie)	Jean-Louis Florentz	Requiem de la vierge	20000	1988年12月15日
55	1986年12月30日		//	19	Roger Tessier	Coalescence	29000	1988年11月17日 ONF
56	1986年12月30日	Alto et Orch. par 2	1	23	Philippe Boivin	Concerto pour alto	27000	1987年5月23日
57	1986年12月30日	O [?] par 4 Ondes Martenot	2	12	Franck Bacri	Suite sur la gamme par ton	7000	1987年5月19日 録音
58	1986年12月30日	Opéra	//	15 (1ère partie)	Marcel Landowski (1ère partie)	Symphonie des amours	20000	1988年10月15日 ONF
59	1986年12月30日	M. cl.	//	25	Michel Decoust	De la gravitations suspendue des étoiles	30000	1987年3月28日 Perspect. du XXe siècle

整理番号	委嘱年月日	ジャンル	出版元	演奏時間（分）	作曲者名	作品名	委嘱料	備考
1	1987年2月5日	Quat. à cordes	2	16'30	Renaud Gagneux	Quatuor à cordes no1	19000	1987年5月19日 Concert lecture
2	1987年2月20日	16 Inst.	1	12	Gérard Condé	Culbutes	15000	1987年6月27日 Perspectives
3	1987年4月9日	Ténor Qut. Trb. Quat. à cordes	〃	25	Michel Fischer	Jenseits der Not	19000	1987年5月19日
4	1987年4月9日	O. Bois par 2 piano, [?], perc.	〃	8	Petros Korelis (1ère partie)	La Bataille de Salamine - 1er mouvement -	10000	1988年4月23日 (Persp.)
5	1987年4月28日	Clav. seul	2	17	Ton That Tiet	Dzao (9 préludes p. clavecin)	12000	1987年 Sep. RF (5 préludes)
6	1987年4月30日	Trio à cordes	〃	20	Alejandro Iglesias Rossi	Trio "Khipus"	20000	1987年11月7日 Persp.
7	1987年4月30日	Clarinette O. par 1	〃	20	Nicolas Bacri	Concerto p. clarinette et orchestre	20000	1988年6月11日 Mus. au Présent
8	1987年6月9日	1 récitant, 1 flûte	1	16	Kazuko Narita	Ainsi la grue disparut dans le ciel	16000	1987年6月16日 Concert lecture
9	1987年6月10日	Chœur a capella	〃	20	Daniel Meier	Rondeaux	18000	1988年6月8日 Concert lecture
10	1987年6月12日	6 Inst.	〃	19	Qigang Chen	Voyage d'un rêve	19000	1987年11月17日
11	1987年6月16日	Trio à cordes	2	19	Frédéric Martin	Trio à cordes Macles opus 23	19000	1987年11月7日
12	1987年6月19日	mezzo sop. O. par 2	〃	25	André Boucourechliev	Le Miroir - sept répliques pour un opéra possible	30000	1988年12月5日 Mus. en persp.
13	1987年6月2日	Soprano et M. cl.	〃	18	Riccardo Mandolini	Micro reflexiones	15000	1988年 GRM
14	1987年7月3日	orgue solo	〃	18	Nicolas Zourabichvili	Argos	18000	1987年10月27日
15	1987年7月5日	O. par 2	〃	25	Denis Cohen	Etude pour le poème	24000	1987年2月20日 M. au Présent
16	1987年9月4日	Chœur mixte (12 voix)	〃	14	Michèle Reverdy	Trois fantaisies de Gaspard de la nuit	18000	1987年10月27日 録音
17	1987年9月17日	Messe	1	19	Rémi Rousseau	Messe pour le temps de l'Eglise	10000	1987年10月25日 Egl. St. Sulpice
18	1987年10月8日	O. Bois par 2 Cuivres 4-3-2-1	〃	21	Petros Korelis	Irialk	16000	1988年4月23日 Persp.
19	1987年10月9日	O.	2	12	Didier Denis	Urbicande	15000	1988年11月26日
20	1987年10月21日	M. Lég.	〃	13	Frédéric Talgorn	Petite suite dans les idées	7000	1988年2月16日 (enregist.)
21	1987年10月27日	Ind. F. Culture	〃	4	Marius Constant	Indiculture - diverses indicatifs pour F. Culture	10000	
22	1987年10月27日	Soprano 3 Inst. bande	1	25	Tona Scherchen	Fui-te ?	21000	1987年12月15日 Concert-lecture
23	1987年10月29日	O. l.	2	13'10	J. Jacques Milteau	La musique des bruits - conte musical -	4000	
24	1987年10月29日	7 Inst.	1	33	Piotr Moss	Défets oratorio radiophonique	27000	1990年 enreg. p. P. Italia
25	1986年11月18日	7 Inst.	2	18	Carlos Roque-Alsina	Deux phases (Recondita armonia)	20000	1988年1月19日
26	1987年11月3日	12 Inst. et sprechgesang	1	16	Yizhak Sadai	Reprises	20000	1988年2月23日 Concert lecutre
27	1987年11月16日	Pièce Rad.	〃	26	Denis Levaillant	Speakers	30000	1987年12月 録音
28	1987年11月17日	5 Inst.	2	19	Edith Canat de Chizy	Kyōran	13000	1988年1月19日
29	1987年11月26日	Sop. t. bar. Chœurs Bois 42-1-3-1-2 Cui. 3-3-2	〃	40	J. Louis Florentz	Requiem de la vierge (2e partie)	25000	1988年12月15日
30	1987年11月27日	M. L.	〃	11 5	Wal-Berg	Deux décembre Thème et variations	7000	1988年3月22日 録音
31	1987年11月30日	〃	1	12	Michel Lorin	Suite irlandaise pour vibraphone et orchestre	7000	1988年6月10日 録音
32	1987年11月30日	Ms. Har.	〃	14	Désiré Dondeyne	Légende	9000	
33	1987年11月30日	M. L.	2	16	Daniel Janin	Elles, petite fille, jeune fille, vieille fille, femme, mère	7000	1988年6月6日 録音
34	1987年12月4日	O. Bois par 3-2-2-1-2, Cuiv. 4-3-2-1	〃	17	Yoshihisa Taïra	Polyedre	30000	O. P. 録音 1992年5月13～14日
35	1987年12月7日	M. L. + harpe cell.	1	14	François Rauber	Concerto p. harpe celtique et orchestre	10000	
36	1987年12月14日	3 Inst. et orch à cordes	2	20	Ladislav Kubik	Concerto grosso	26000	1987年12月3日 録音
37	1987年12月15日	Opéra	〃	50 1ère partie	Vinko Globokar	L'Armonia drammatica	30000	
38	1987年12月15日	livret J. Prod.		1h45	Jean Gruault	(livret) Livret Opéra J. Prodromidès La noche triste	10000	
39	1987年12月15日	Opéra	2	35 2e partie	Jean Prodromidès	La noche triste	20000	
40	1987年12月22日	2 pianos	〃	17	Alain Savouret	2e Cahier d'enluminures	20000	1987年4月25日 Concert-lecture
41	1987年12月23日	O. par 1	〃	17	Daniel-Lesur	Dialogues dans la nuit	30000	1988年12月2日 NOP
42	1987年12月30日	Quat. à cordes	〃	10	Susumu Yoshida	Quartettino	15000	1988年2月27日 Salon Romantique
43	1987年12月30日	Bois par 3 C. par 4-3-3-1	〃	24	Jean-Claude Risset	Phases 4 études p. orchestre	30000	1988年6月2日 (Perspectives)

44	1987年12月30日	4 Inst.	〃	17	André Bon	Suonare 2	21000	1991年4月16日 Mus. de Chambre
						Suonare 3		
45	1987年12月30日	Conte musical voix et 5 Inst.	〃	12	Steve Waring	La libellule et la grande personne	4000	Dif. le 1988年2月25日 F. M.
46	1987年12月30日	O. par 1	〃	15	Hans Jurgen Von Bose	Prozess (p. orchestre de chambre)	22000	1988年3月5日 Mus. au Présent
47	1987年12月30日	O. P. Italia	1	30	Monic Cecconi-Botella	La femme de l'ogre	32000	1989年4月 録音
48	1987年12月30日	Conte musical (voix)	2	12	Alain Gibert	Qu'est-ce qu'on achète pour un bijou ?	4000	
49	1987年12月30日	O. par 2	〃	18	Marius Constant	Concerto p. orgue de barbarie	27000	1988年4月10日 Orchestre de Cannes 録音ラジオ・フランス
50	1987年12月30日	Orch. par 1 pièce radiophonique	1	35	Gérard Garcin	Dans l'éclat du moment	30000	
51	1987年12月30日	Quat. à cordes	2	30	Sylvano Bussotti	Quatuor à cordes "Andante Favorito"	27000	1988年5月10日 アルディッティ 弦楽四重奏団



1971年 Ensembles vocaux

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Costin Mioreanu	Alba	EFM	6	1971年4月19日		済	Royan 73 8
Guy Reibel	Cantate extraordinaire		1h	1971年12月27日			monté en 71 à Vaison
Patrice Sciortino	Prisons	EFM	20	1971年9月8日			

1972年 Ensembles vocaux

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Milko Kelemen	Monogatari		12				

## 1974年 Ensembles vocaux

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
André Boucourechliev	Thrène	1	31	1974年2月26日			Pour Px Italia
Hubert Auriol	Phrénologie	EFM	15	1974年3月19日			
Marcel Goldmann	Hervé	//	35	1974年2月26日			Pour Atelier de Création
Gérard Massias	Caliban-Cannibale		30	1974年4月16日			Prix Italia
Betsy Jolas	Voix premières		30	1974年5月7日			Prix Italia

1974年 Lyrique

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Antoine Duhamel	Le Défunct (2e partie)	EFM	25	1974年1月14日		済	Prix Italia
Yvan[sic] Semenoff	Le Défunct (1ère partie)	〃	10	1974年4月9日			
Marius Constant	Le jeu de Ste Agnès		65	1974年9月18日			

1970年 Symphonique

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Lucien Duchemin	Symphonie	EFM	28	1970年12月29日			

1971年 Symphonique

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Paul Arma	Convergence de mondes arrachés (2e partie)	EFM	37	1971年4月7日			

1972年 Symphonique

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Louis Saguer	Sine Domine	EFM	11	1972年3月21日	1973年4月10日	1974年11月	à Serge Blanc
Akira Tamba	Sunyata		27'30"	1972年8月22日	1973年3月22日	1974年1月27日 F. M.	à Bancquart
Alain Abbott	Préludes pour orchestre	EFM	14'10"	1972年10月4日	1973年7月	1975年10月16日	S. Roux
Michel Rateau	Trois musiques pour orchestre	〃	11	1972年10月6日			

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Daniel Meier	Semen	EFM	15	1973年1月23日	1973年6月4日		S. Roux
Janos Komives	Pop symphonie		22	1973年5月8日			
M. Mitrea-Celerianu	Rin no. I pour orchestre	Salabert	15	1973年5月11日			
Louis Saguer	Concerto grosso (anonyme)			1973年6月6日			pour Nice
Louis Saguer	Cinque Ricercari (Frescobaldi)			1973年6月6日			Pour Lille
Philippe Drogoz	Eclatement 2	EFM	9	1973年6月7日			
Ton That Tiet	Ngu Hang II		19	1973年6月15日		1974年6月25日	
Pierre Israël-Meyer	Kitsch-Eurydice	EFM	17'20	1973年6月15日			pour Nice
Gérard Masson	Ici c'est la tyrannie	EFM	1h[?]	1973年6月15日		済	pour Festival 1974
Louis Saguer	Balli da lo scolaro			1973年6月21日			pour Nice
Patrice Mestral	Surfaces granuléées	EFM	16	1973年10月2日			
Paul Arma	Cinq résonances pour orchestre	EFM	15'45	1973年10月2日			



## 1974年 Symphonique

作曲者名	作品名	出版元	演奏時間	委嘱年月日	送付日	初演日	備考
Christobal Halffter	Procesional		23	1974年2月5日		済	XXe siècle
Michel Zbar	Le Voyage	EFM	20	1974年3月6日		ストラスブール	Px Italia
Fr. Bernard Mâche	Le jonc à trois glumes	〃	11'30	1974年5月28日			
Iannis[ <del>sic</del> ] Xenakis	Erikhthon		15	1974年6月4日		1974年7月12日 F. M. (放送)	XXe siècle
Maguy Lovano	Spirale	EFM	18	1974年10月10日			
Maurice Ohana	T'Haran-Ngo		22	1974年12月2日			

【資料 3】 作品審査委員会に作品を送付した作曲家の一覧

Aaron, M. et Y.  
Abbado, Marcello  
Abbate, Louis  
Abel, Jean  
Abelin, M.  
Absil, Jean  
Acbron, Joseph  
Acuna, Sepulveda  
Adam, Frédéric  
Adam-Walrand, Jean-Christophe  
Adamis, Michaël  
Ade, Erich  
Adomian, Lan  
Aga, Lucien  
Ager, Klaus  
Aiache, Paul  
Aitken, Hugh  
Aitken, Robert  
Alarcon, Denis  
Alberto, Hans  
Albin, Roger  
Albright, William  
Alderighi, Dante  
Alessandrescu, Alfred  
Alexandrovitch, Georges  
Alexys, Max  
Alfonso, Javier  
Alix, René  
Alix, Victor  
Allamard-Carny, Odette  
Allende, P. Humberto  
Allier, Maurice  
Almuro, André  
Altisent, Juan

Alvin, Erik  
Amann, G.  
Ambrosius, Germaine  
Amiot, Jean-Claude  
Ammann, Benyro  
Ancelin, Pierre  
Ancona, Solange  
Andres, Bernard  
Andrico, Michel  
Andriessen, Hendrich  
Andriessen, Jurriaan  
Andriessen, Louis  
André, Jean-Louis  
Angebaud (Docteur P.)  
Angelsen, Georges  
Angerer, Paul  
Anhalt, Istvan  
Annunziata, Michaël  
Antheil, George  
Antill, John  
Apotheloz, Jean  
Applebaum, Edward  
Archer, Violet  
Arezzo, Pierre  
Arizaga, Rodolfo  
Arkus, Mario  
Arma, Paul  
Armando, G.  
Arnell, Richard  
Arney, Jacques  
Arnic, Blaz  
Arnold, John  
Arnold, Malcolm  
Arnoux, Georges  
Aronowicz, Dan  
Arrachart, Jean-Marc

Arseneault, Raynald  
Arvay, Pierre  
Aschner-Aranyi, Gyorgy  
Astorg, Georgette  
Asvadzadourian, Léon  
Auclert, Pierre  
Auda, Alain  
Augeard, Sandrine  
Aulas, Francisque  
Avidom, Menachem  
Avril, Mireille  
Babadjanian, A[rno]  
Babier, A.  
Bacarisse, Salvador  
Bacevictus, Vytankas  
Bacewicz, Grazyna  
Back, Sven-Erik  
Baculewski, Krzystof  
Badings, Henk  
Baervoets, Raymond  
Bagge, Gustave  
Bagot, Maurice  
Baichère, Clément  
Bailly, Colette  
Bailly, Jean-Guy  
Baird, Tadeusz  
Baker, Ernest  
Bakes, Lotte  
Balassa, Sándor  
Bando, Gyula  
Banks, Don  
Barat, J. Ed.  
Barat-Pepper, Eliane  
Barati, George  
Barber, Samuel  
Barboteu, Georges

Bardel, S. (Melle)  
Bardi, Benno  
Bardwell, W. Eliane  
Bargielski, Zbigniew  
Bariller, Robert  
Barleau, Claent  
Barlow, C. M.  
Barlow, Fred  
Baron, Maurice  
Baronian, Vartkes  
Baronsupervielle, Mme  
Barreau, Gisèle  
Barrière, Etienne  
Barriet, Raphaël  
Barsanki  
Barsukoff, Serge  
Barthélemy, Pierre  
Bartrand, Jean  
Bartsch, Charles  
Bassett, Leslie  
Bassot, Nadine  
Bastia, Pascal  
Bate, Stanley  
Baubet-Gony, P[ierre]  
Baudinet, J. Marie  
Baudo, Serge  
Baumann, Dr. Otto  
Baumann, Max  
Baumgartner, Jean-Paul  
Baur, Jürg  
Baurrel, Yvan  
Bausier, G.  
Baussart, Georges  
Bauzin, Pierre-Philippe  
Bayer, Francis  
Bazelon, Irwin

Bean, E.  
Beaulavon, Gilberte  
Becerra, G.  
Beck, Georges  
Becker, Günter  
Becker, John J.  
Béclard d'Harcourt, Mme  
Bedford, David  
Bédouin, Paul  
Béesau, Joseph  
Belgrand, Jean-Louis  
Belin, Jean  
Belkin, Alan  
Bellecour, Maurice  
Belliard, Maxime  
Bemers, Piet  
Ben-Haim, G.  
Ben-Zwie, Yitzchak  
Benary, Peter  
Benda, Hector  
Bendersky, Pierre  
Benetière-Goudon, Lucienne  
Beney, Alain  
Benjamin, A.  
Benoit-Granier (Mme)  
Bensasson, Menahem  
Bentoïu, Pascal  
Bentzon, Niels Viggo  
Berberian, Annik  
Béreau, J[ean]-S[ébastien]  
Berg, Gunnar  
Berg, Josef  
Berger, Arthur  
Berger, Michel-Guy  
Berger, Theodor  
Berkeley, Lennox

Berlinski, Jacques  
Berlioz, Gabriel-Pierre  
Bermat, Alain  
Bernard, Armand  
Bernard, Jacques  
Bernard, Jeanne (Roussel)  
Bernard, Olivier  
Bernard, Robert  
Bernaud, Alain  
Bernheim, Marcel  
Bernier, René  
Bernstein, Léonard[Leonard]  
Berson, Jean  
Bertelin, A.  
Berthe, Marcel  
Berthelot, René  
Berthet, François  
Berthier, Jacques  
Bertouille, Gérard  
Bertrand, Marcel  
Beruel, Tredez-Reibel  
Bervily, Edouard  
Betove (Lévy, Michel-Maurice)  
Bettinelli, Bruno  
Beugnot, Jean-Pierre  
Beyer, Frank Michaël  
Beyon, Jean-Claude  
Bezançon, Guy  
Bianchini, Virginie  
Bienvenu, Lily  
Bilber, F.  
Billoret, Marcel  
Binet, Jean  
Birtwistle, Harrison  
Bizet, Jean  
Bjelik, Martin

Bjelinski, Bruno  
Bjorussow, Arm  
Blahnik, Roman  
Blaise, Felix  
Blanc, Jean-Robert  
Bland, William  
Blanquer, Amando  
Bleuse, Marc  
Bloch, Ernst  
Bloch, Georges  
Bloch, Thomas  
Blomdahl, Karl-Birger  
Blondeau, Adolphe  
Blum, Robert  
Blyton, Carey  
Boder, Gerd  
Boehmer, Konrad  
Boesmans, Philippe  
Bogdali, Robert  
Bohac, Josef  
Boisgallais, Jacques  
Boisselet, Paul  
Bolle, Ulysse  
Bon, André  
Bon, Maarten  
Bonaldi, Bernard  
Bonelot, Louis-Gérard  
Bonet, Narcis  
Bonis, Mel (Mme A. Domange)  
Bonnal, Ermend  
Bonnard, Alain  
Bonneton, Albert  
Bonneton, Charles  
Bonom, Marce-Chassang Marie  
Bontempelli, Bruno  
Boone, Charles



Borchard, Adolphe  
Bordell, Brian  
Bordes, Henri  
Borgulya, András  
Borkövec, Pavel  
Borresen  
Borris, Siegfried  
Bortz, Daniel  
Borusiak, Marcel  
Boruta, André  
Boscovitch, Alexandre Variah  
Bosmans, Arthur  
Bosse, Denis  
Boucard, M.  
Bouillard, Amadée-Cécile  
Bourbon et Casteillo  
Bourdeaux, Lucien  
Bourdon, Emile  
Bourgault-Ducoudray  
Bousch, François  
Boutron, Madeleine  
Boutry, Roger  
Boyce, William  
Boyer, Felix  
Bozay, Attila  
Bozza, Eugène  
Bracquemont, Marthe  
Braga, Antonio  
Braillard, Jean-Christophe  
Brandmuller, Theo  
Braun, Peter-Michael  
Braunfels, Milail  
Brautigam, Volker  
Bravnicar, Matija  
Braxton, Antony  
Brero, Cesare

Bretagne, Pierre  
Bretschneider, Max  
Breuilh, Robert  
Breuillot, André  
Brewaeys, Charles  
Brian, Elias  
Brideau, Pierre  
Brillant, Alfred  
Brindle, Reginald  
Brisemur, Tazyna (Mme)  
Brizzi, Aldo  
Brodin, Yves  
Bron, Edouard  
Brott, Alexander  
Brouard, Carmen  
Brousse, Pierre  
Brown, Charles  
Brown, Earle  
Brown, Harry  
Brugk, Hans Melchior  
Brun (Abbé F.)  
Brun, François-Julien  
Brunner, Adolph  
Bruno, Giuseppe  
Brussemans, Michel  
Bruzdowicz, Joanna  
Bucchi, Valentino  
Buck, Ole  
Buder, Ernst Erich  
Buffard (Monsieur)  
Bukovy, William  
Bull, Edward Hagerup  
Buller, John  
Bunk, Gérard  
Burnier, Lucien  
Burt, Francis

Bury, Edward  
Bush, Alan  
Bush, Geoffrey  
Bussotti, Sylvano  
Butterworth, Arthur  
Butting, Max  
Cabart, Géo  
Caby, Robert  
Calbi, Otello  
Calmel, Roger  
Camilleri, Charles  
Camot, Maurice  
Campolieti, Luigi  
Canavas, Joseph  
Canet, Jacques  
Cannon, Philip  
Capdenat, Philippe  
Capoianu, Dumitru  
Capponi, Fritz  
Carcel, Ralph  
Carden, Cornelius  
Carella, Franz  
Caremes, François  
Carillo, Julián  
Carme, Marcel  
Carme, Pierre  
Carmerlo, Françoise  
Carpentier, John Alden  
Carpentier, Pierre  
Carradot, André  
Carre-Chesnay, Thierry  
Carreño, Inocente  
Carrisan[sic], C[élanie].  
Carrière-Rives, Michel  
Carter, Elliott  
Casadesus, Francis

Casadesus, Henri  
Casadesus, Marius  
Casagrande, Alessandro  
Casanova, André  
Casanova, Francis  
Casazione, Lang  
Casella, Alfredo  
Casken, John  
Casonka, Paul  
Cassigneul, Nelly  
Cassini, Pietro  
Castellangs, Eveneio  
Castérède, Jacques  
Castro, Juan José  
Catoire, Jean  
Cazaban, Costin  
Cazalix, Adrienne-Guy  
Cecconi-Botella, Marie  
Celci, Cesare  
Celeriana, Mihai Milres  
Cellier, Alexandre  
Ceremuga, Josef  
Cerf, Jacques  
Cervetti, Sergio  
Chadal, Marcelle  
Chagrin, Francis  
Chailley, Jacques  
Chailly, Luciane  
Chajes, Julius  
Challand, René  
Chambraud, Gabriel  
Chamoux, André  
Champagne, Claude  
Chapple, Brian  
Charles, Edouard  
Charlier, Jacques

Charpentier, Christian  
Charpentier, Louise  
Charron, Damien  
Chatelain, Roger  
Chatillon, Ernest  
Chaumette, Gabriel  
Chaun, Frantisek  
Chedorge, Marc  
Chef d'Orge, Guy  
Chevreuille, Raymond  
Chihara, Paul  
Christeller, Eva  
Cicurel, Raymond O.  
Cigrang, Edmond  
Cikker, Ján  
Ciry, Michel  
Cittanova, Darius  
Clairmon, Alex  
Clais, Tristan  
Claqué, Yves  
Clark, June  
Clark, Robert Kerys[?]  
Claude, Florent  
Claudien, Henri  
Clavareau, de la Mensbrughe  
Clément, Gilles  
Clément, Nicola  
Clément-Marot, André  
Clergue, Jean  
Clérisse, Robert  
Cliquet-Pleyel, H.  
Clostre, Adrienne  
Clovrez, Victor Paul  
Coates, Gloria  
Cochereau, Pierre  
Cohn, James

Cole, Keith  
Colin, Georges  
Colin, Jeanne D. C.  
Collet, Henri  
Compère, G.  
Condé, Gérard  
Condette, Armand  
Connolly, Justin  
Consoli, Mar Antoine  
Constant, Franz  
Constantinidis, Iannis  
Constantisnescu, Paul  
Conte, Pierre  
Conyngham, Barry  
Cooke, Arnold  
Cooper, Paul  
Copland, Aaron  
Coq, Marcel Sabrin  
Coquatrix, Bruno  
Coquet, O[dile].  
Corgi, Azio  
Cornayre, Denis  
Cornman, Robert  
Corselis, R.  
Cortese, Enrico  
Cortese, Luigi  
Cosma, Edgar  
Cosma, Vladimir  
Costère, Edmond  
Cotapos, Acario  
Couat, Alfred  
Coulthard, Jean  
Coubey, Paul  
Courtin, Jean  
Coutriaux, Jean  
Cowell, John

Cox, Harry  
Creston, Paul  
Creuze, Roland  
Cruz, Ivo  
Cummings, Conrad  
Cunningham, Arthur  
Cureaudeau, F.  
Cuvelier, André-Marie  
Czarnecki  
D'Abrancourt, André  
Da Silva, Antoine  
Dadder, Ernst  
Dafov, J.  
Daguillon, Jacques  
Dakin, Charles  
Dalby, Martin  
D'Alessandro, Raffaele  
Dalmy, Max  
Damais, Emile  
Damase, Jean-Michel  
D'Ambrosi, Dante  
Dandelot, Georges  
Danne, Edgar  
D'Archambeau, Pierre  
D'Argoeuves, Michel  
Dard, Janin A.  
Darras, Lucien  
Daucé, Edouard  
Dauly, Gabrielle  
Dauphin, Madeleine  
D'Auriol, Hubert  
Daussion, Ghislain  
D'Autezac, Léo Arnold  
Dautremer, Marcel  
Davasse, M. J.  
David, Gyula

David, Jacques  
David, Thomas Christian  
D'Avranches, Chanoine  
De Amezaga, Teresa H.  
De Angélis, Auguste  
De Banfield, Raffaello  
De Barbandere, J.  
De Bellis, Enzo  
De Bortoli, Robert  
De Bouillé, Fernand  
De Bourguignon, F.  
De Bozi, Harold  
Debrieu, Lucien  
De Cardelus, F. L.  
De Castéra, René  
Dechavanne, René  
De Cocq, Rosine  
Decouais, René  
De Crail, Eric  
Decroos, Michel  
Decsenyi, Janos  
Defontaine, Madeleine  
Defosse, Henry  
Defossez, René  
Degenne, Pierre  
Dehan, Jean-Marc  
Dela, Maurice  
De la Croix, Jacques  
Delage, Maurice  
Delahaye, Cécile  
Delanbre (Mme)  
Delapierre, André  
Delepierre, B.  
De L'Espée, Jean  
De la Presle, Jacques  
De la Rochefoucauld, François



De Lassus St. Geniès, André  
De la Tour du Calame, Abbé André M.  
Del Corona, Rodolfo  
Delerue, Georges  
Delgiudice, Michel  
De Lioncourt, Guy  
Delius, Frederic  
Delord, Etienne  
Delorient, Hugues  
Delsarte, André  
Del Tredici, David  
Deltour, Emile  
Deltour, Léon  
Delune, Louis  
De Maigret, Ivan  
De Maleingreau, Paul  
De Manziarly, Marcelle  
Démarest, Michel  
De Marliave, Henry  
Demarquez, Suzanne  
De Marville, Roger  
Demessieux, Jeanne  
De Middeleer, Y.  
De Miollis, Antoinette  
De Monfred, Avenir  
Demoulin, Jean-Vincent  
Demuth, Norman  
Denis, Didier  
Denisov, Edison  
Denoux, Maurice  
De Pablo, Luis  
De Pachmann, Lionel  
De Pelken, Nicolas  
Depelsenaire, Jean-Marie  
De Percin de Seilh, Max  
De Polignac, Armande

De Raousset-Soumabre  
Derbès, Jean  
Derevins, Jean  
De Riviel, Manne  
De Roye, Ev.  
Dervaux, Pierre  
De Saussine, Henri  
Deschênes, Bruno  
Desenclos, Alfred  
Despiau, Gaston  
Desrez, Maurice  
Dessargnes, Gontran  
D'Estrade Guerra, Oswald  
De Tissot, Even  
De Torne, B. c/o Vainio  
De Trajan, Saint-Inès  
Detweiler, Alan  
Devcic, Marko  
De Vellonbrosa, Amédée  
De Verneuil, Raoul  
Devevey, Pierre  
Devincre, Gilles  
Devos, Gérard  
Devreux, Gilles  
Devriès, Ivan  
Dhaine, Jean-Louis  
Diamond, David  
Di Domenica, Robert  
Diederich, Raymond  
Diessel, Karl  
Dillard, Michel  
Dillmann, Klaus  
Dillon, Henry  
Di Martino, Aladino  
Dismas Jelenska, Jean  
Dittrich, Paul-Heinz

Djemil, Enyss  
Dobos, Kálmán  
Dobronie, Anton  
Dobrowolski, Andrzej  
Dodane, Charles  
Dohl, Friedhelm  
Doin, G.  
Doire, René  
D'Olivera Jackouska, Suzanne  
Donatoni, Franco  
Dondeyne, Désiré  
Dont, Lewis  
Dorati, Antal  
Dortort, Marcel  
Dosse, Gilbert  
Douane, Jules  
Doué, Jean  
Douël, Jean  
Doutez, Emile  
Douno, Beinsa  
Dourian, Ohan  
Dourson, Paul  
Do Valle, Raoul  
Doysie, Abel  
Draby Kurtz, Arthur  
Dumitrescu, Ian  
Dumoulin, Maxime  
Dupérier, Jean  
Dupin, François  
Du Plessis, Hubert  
Dupriez, Christian  
Durtet, Emmanuel  
Du Sorbier, B.  
Dussaut, Robert  
Duvauchelle, Pierre  
Duvivier, A.

Eben, Petr  
Eder, Helmut  
Edinger, Henri  
Egk, Werner  
Eisbrenner, Werner  
Eisenmann, Will  
Eisenstein, Alfred  
Eisenstein, Silvia  
Ellinger, Albert  
Ellis, David  
Eloy, Jean-Claude  
Emer, Michel et Gérard  
Emmanuel, Maurice  
Engelbrecht, Richard  
Engelmann, Hans Ulrich  
Englebert, André  
Englert, G. G.  
Enriquez, Manuel  
Eprinchard, Marcel  
Erb, Marie-Joseph  
Erzsébet, György  
Escher, Rudolf  
Escobar, Luis  
Espla, Oscar  
Estelle, André  
Estevez, Antonio  
Estienne, Louis  
Estrada, Julio  
Etler, Alvin  
Ettel, Pol.  
Evangeliste, Franco  
Evanghélatos, Antiochos  
Eychenne, Marc  
Eysevsky, Ch.  
Ezanno, Renée  
Falcinelli, Rolande

Famy, Jean-Claude  
Farina, Edouardo  
Fark, Julien  
Farnes, Fridjov  
Faucheur, Marcel  
Faucheux, Geneviève  
Faus Rodriguez, José  
Febel, Reinhard  
Fébvre-Longeray  
Féjourn, Simone  
Feld, Jindrich  
Feldman, Ludovic  
Feldman, Morton  
Féline, Jacques  
Fellegara, Vittorio  
Fellner, Sepp  
Fenelon, Philippe  
Fenigstein, Victor  
Ferenc, Farkas  
Ferenc, Szabo  
Fernandés, Armando José  
Ferneyhough, Brian  
Ferrand-Teulet, Denise  
Ferrari, Giorgio  
Ferras, Yves  
Ferré, Léo  
Ferrero, Lorenzo  
Ferreté, Léon  
Ferrier-Jourdain, Lucien  
Ferroud, P. O.  
Février, Henry  
Fheodoroff, Nikolaus  
Ficat, Anne  
Filleul, Henry  
Filleul, Jacques  
Finaly, Marc-Hugo

Fine, Vivian  
Finney, Ross Lee  
Fiorda, Giuseppe Nuccio  
Fischer, Eric  
Fischer-Larsen, Eric  
Fiume, Orazio  
Flament, Edouard  
Fleischmann, Aloys  
Flem, Kjell  
Flemming, Weis  
Fletcher, Grant  
Fleurier, Jean  
Fleutelot, Léo  
Fliege, Hermann  
Flillet Braem, Edvard  
Florens, L.  
Florentz, Jean-Louis  
Flothuis, Marius  
Flugelman, Maximo  
Foray, Pierre  
Fordell, Erik  
Foret, Félicien  
Fornerod, Aloÿs  
Fort, Robert  
Forterre, Henri  
Fortner, Jack  
Fortner, Wolfgang  
Foss, Lukas  
Foster, Stefen  
Foucoud, Max  
Fouret, Maurice  
Fournier, Camille  
Fraggi, M.  
Fragny, Robert de  
Frakhoï, Karoly  
Franceries, Marc

Franck, Marcel  
Franck, Maurice  
Franco, Fese Nana  
Frantisek, Domazlicky  
Frantz, Michel  
Frauli, Henri  
Fréchon, Lucien  
Fredez-Beryel  
Freitas Branco, Luis de  
Frémiot, Marcel  
Fréscor, Pierre  
Fresson, Armande  
Frid, Géza  
Frima, Roger  
Frischknecht, Hans Enger  
Fritsch, Werner L.  
Froberville, Philippe de  
Frumerie, Gunnar de  
Fuga, Sandro  
Fuhrer, S.  
Fuleihan  
Fumet, Raphaël ※Stanislas Fumet の frère  
Fürst, Paul Walter  
Fürstenau, Wolfram  
Fuste-Lambezat, Michel  
Gabrielle-Corty, Marseille  
Klaus, Egge  
Labey, Marcel  
Labodie, Pierre  
Labrouve, Jorge  
Labunski, Félix  
Laburda, Jiri  
Lacbord, M. F.  
Lachman, H.  
Lachmann, H.  
Lacombe, Hervé

Lacome d'Estalensx  
Lacour, Guy  
Ladmirault, Paul  
Lafarge, Marcel  
Lainé, Jacques  
Lakner, Jeboshna  
Laks, Simon  
Lam, Man-yee  
La Mantaine, John  
Lambert, Marius  
Lambotte, Lucien  
Lambro, Philippe  
Lancen, Serge  
Landau, Fred  
Landowski, Marcel  
Landré, Guillaume  
Langevin, Claude  
Langlais, Jean  
Langlais, Jean-Roger  
Langlais, Théo  
Lannoy, Robert  
Lantier, Paule-Maurice  
Lantier, Pierre  
Larbaletier, L.  
Largueze, Jacques  
Lasala, Angel E.  
Lashermes, Jean  
Lasry, Jacques  
Lasson, Guy  
Lathève, Claude  
Laty, Claude  
Lauber, Joseph  
Lauber, Marianne  
Lauber, Marianne  
Laubier, Claude  
Laubry, Jean-Jacques



Launis, Armas  
Laurent, Gabriel  
Laurent, Lucien  
Lauro, Antonio  
Lavagne, André  
Lavranga, Denis  
Lavry, Marc  
Lazar, Filip  
Lazarof, Henri  
Le Borne, Fernand  
Le Boucher, Maurice  
Le Bourgeois, Gaston  
Leblanc, Jean  
Leblent, Robert  
Leca, Henry  
Lechner, Konrad  
Leclair, Jean-Marie  
Leddre, Gersö  
Leduc, Jacques  
Lee Noël  
Lees, Benjamin  
Lefebvre, Claude  
Lefever, Thom  
Le Grand, Robert  
Legros, Jean  
Leguay, Jean-Pierre  
Leguerney, J.  
Lehmann, Hans Ulrich  
Lehmann, Siegfried  
Leidinger, Jacques  
Leifs, Jon  
Leinert, Friedrich  
Leleu, Jeanne  
Lemaire, Jean  
Le Meurès, Georges  
Lemire, Claude

Lenkanf, Robert  
Lenormand, Henry-François  
Leone, Gustavo  
Lepelletier, A.  
Lepetit, Pierre  
Leplin, Emmanuel  
Lermyte, André  
Le Roux, François  
Le Roux, Joseph  
Le Roux, Maurice  
Lesieur, Emile  
Leskovic, Bogomir  
L'Espée, Jean  
Lessing, Walter  
Letac, Bernard  
Leval, Charles  
Level, Pierre-Yves  
Levesque, G.  
Levick, Hugh  
Levin, Gregory  
Levinson, Gerald  
Levol-Darribère  
Levy, Lazare  
Lévy, Michel-Maurice  
Lewi, Maurice  
Lewis-Comas  
Licari, René  
Lichdlm, Inguar  
Lidell, Claire  
Lieberman, Rolf  
Liebermann, Lowell  
Lifchitz, Max  
Ligavan, Pierre  
Lilien, Ignacy  
Lipkin, Mancolm  
Lipnitzki, Boris

Lipovsek, Marijan  
Lisal, Perine  
List, Roger  
Llorca, Hervé  
Lloret, Jean  
Lodoïska, Joachime  
Loevendie, Théo  
Lohse, Fred  
Loisel, Jean-Jacques  
Lomon, Ruth  
Longtin, Michel  
Lonquich, Heinz Martin  
Loos, Armin  
Lopez Graca, Fernando  
Lorrain, Denis  
Lothar, Mark  
Loucheur, Raymond  
Louël, Jean  
Louiguy  
Lourié, Arthur  
Louvier, Alain  
Lovano, Maguy  
Lovelock, William  
Lovreglio, Eleuthère  
Lübbe, Wolfgang  
Lubin, Ernest  
Lucas Anderson  
Lucas, Leighton  
Lucheesi, Roger  
Luciuk, Jùliùsz  
Ludwig, Joachim  
Lugnet, E.  
Lumsdaine, David  
Luongo, Armand  
Lutèce, Jean  
Lutoslawski, Witold

Lutz, Roland  
Lutzow-Holm, Ole  
Luypaerts, Guy  
Ma Hiao Ts'nin  
Maayni, Ami  
Macari-Lepeuve, Marcelle  
Maceda, José  
Maconchy, Elizabeth  
Madeleine, Robert  
Maebaut, Antonio  
Maes, Jef  
Maggiar, Maurice  
Magin, Miloscz  
Magotteaux, E.  
Maguire, Jan  
Maillard-Acker, René  
Maillot, Jean  
Mainardi, Enrico  
Mainka, Jürgen  
Maixandau, Marie-Véra  
Majary, Hajoie  
Makedonski, Kiril  
Malanski, Artur  
Malcolm, George  
Malec, Ivo  
Malherbe, Edmond  
Malipiero, Francesco  
Malipiero, Riccardo  
Malsio, José  
Mamy, Jacques  
Mancel, Charles  
Manen, Christian  
Manén, Joan  
Manevich, Alexandre  
Manfrin, Carmen  
Maniet, René

Mannino, Franco  
Manoukian, Adrienne  
Manoury, Philippe  
Manouvrier, Albert  
Manzoni, Giacomo  
Marc, Edmond  
Marcelin, Emile  
Marchand, L.  
Marchat, Laurent  
Marcilly, Paul  
Marcland, Patrick  
Marco, Tomas  
Marescotti, André-François  
Maret, Léon  
Margat, Yves  
Margoni, Alain  
Marie, Jean-Etienne  
Marie, William  
Marie-Frédérique  
Mariétan, Pierre  
Marin, Tulio  
Marinkovitch, Georges  
Marion, Serge  
Mariotti, E.  
Maros, Rudolf  
Maros, Rudolf  
Marot, André-Clément  
Marsik, Armand  
Martecclin  
Martignoni, Robert  
Martin, Charles  
Martin, Emile  
Martin, G.  
Martin, Payns  
Martin, Victor  
Martineau, Paul

Martinet, Jean-Louis  
Martino, Donaldo  
Martinon, Jean  
Martinu, Bohuslav  
Mary, Frédérick  
Mary, S.  
Maske, Hans  
Massias, Gérard  
Masson, Fernand  
Masson, Gérard  
Mata, Eduardo  
Mather, Bruce  
Mathey, Paul  
Mathias, William  
Mathis, Edmond  
Maticic, Janez  
Matsudaïra, Yoritsuné  
Matsumara[sic]  
Matteo, Piccillo  
Matton, Roger  
Matys, Jiri  
Maunier, Pierre  
Maurat, Edmond  
Maurice, Paule  
Mavrommatis, Georges  
Mawby, Colin  
Mawet, Emile  
Maxence, Paule  
Mayers, Emerson  
Mazellier, Jules  
McCarty, Frank  
McIntyre, Paul  
McQuattie, Sheila  
Meale, Richard  
Mechem, Kirke  
Mein, Jean

Meister, Karl  
Melo, G. S.  
Mendelsohn, Alfred  
Mendez, Michel  
Mendoza-Hava, Jaine  
Merck, Armand  
Mercure, Pierre  
Mercureanu, Dan  
Merlet, Michel  
Mersson, Boris  
Mertzig, René  
Mesmin d'Estienne, Henri  
Meulemans, Arthur  
Meunier, Gérard  
Meyer, Emerson H.  
Meyer-Tormin, Wolfgang  
Meyerowitz, Jan  
Mezeray, A.  
Michaël, Edward (Ben Michaël, Edward)  
Michaelides, Solon  
Michans, Carlos  
Michel, Paul-Baudoin  
Michio, Mamiya  
Migaux, Pierre  
Mignan, Edouard  
Migot, Georges  
Mihailescu  
Mihalovici, Marcel  
Mihaly, Andras  
Mikhailov, Stephan  
Milan, Henri  
Milban, A. M.  
Milloecker, Charles  
Miquel, Olivier  
Miquel-Favret, Rolande  
Mira, Rafael-Angel

Mirallès, Vincent  
Mirandolle, Ludovicus  
Miroglio, Francis  
Misraki, Paul  
Missa, Edmond  
Mitz, Charles  
Mme Lozack  
Mme Melinger  
Moëne, Alain  
Moeschinger, Albert  
Moisello, Louis  
Mompou, Federico  
Monfeuillard, R.  
Monier, Pierre  
Monlouy, Cécile  
Monnet, Marc  
Monnikendam, Marius  
Monteil, Monique  
Monvoisin, René et Irénée  
Moore, Douglas  
Moran, Robert  
Morançon, Guy  
Morawetz, Oscar  
Moreau, Claude  
Morel, François  
Morel, Jean-Marie  
Moroi, Makoto  
Mortari, Epilogo  
Mortensen, Finn  
Morthenson, Jan W.  
Mottkan, Hans  
Mottu, Alexandre  
Moulaert, Pierre  
Mouravieff, Léon  
Mouret, Jean-Joseph  
Moyse, Louis



Mueller, Florian  
Mullenbach, Alexandre  
Muller, Karl Francsz  
Müller, Ludwig  
Müller, Paul  
Müller-Pfalz, K. Friedrich  
Münster, Robert  
Murail, Tristan  
Murgier, Jacques  
Musgrave, Theo  
Nabert, Christian  
Nabokov, Nicolas  
Nafilyan, Henri  
Nagatomi, Masayuki  
Nanaureils  
Nat, Yves  
Natko, Devcic  
Naudier, André  
Naudot  
Naureils  
Nazarian, Avedis  
Nedenbran, Max  
Nejedly, Vit  
Nelhybel, Vaclav  
Nelson, Paul  
Nemerdowski, A.  
Nerini, Emile  
Neseritis, Andreas  
Neugeboren, Henrik  
Nezepith [Nezeritts]  
Nguyen Dinh Chien  
Nicolas, Mickey  
Nicot, Maurice  
Nielsen, Carl  
Nielsen, Svend  
Nielsen, Tage

Niemann, Walter  
Nigg, Serge  
Nihashi, Junichi  
Nikolov, Lazare  
Nilsson, Bo  
Nin-Guhnell, Joaquin  
Ninnin, François  
Niverd, Lucien  
Niverd, Raymond  
Noda, Ryo  
Noda, Teruyuki  
Nohar, Yvonne  
Noll, André  
Nono, Luigi  
Nordheim, Arne  
Norgard, Per  
(Novotony, Jan R.) ※作曲家ではないがファイルはある  
Nowka, Dieter  
Noyon, Joseph  
Nunes, Emmanuel  
Nussio, Otmar  
Nystroem, Gösta  
Obouhow, Nicolas  
Oboussier, Philip  
O'Bready, Frédéric  
O'Brien, Joan  
Ohana, Maurice  
Ohki, Masao  
Olagner, Marguerite  
Oldbaum, Arthur  
Oleg, Alexandre  
Olivier, François  
Olkusnik, Joachim  
Olmos, Ricordo  
Olsen, Poul R.  
O'Molony, Kathleen

O’Rama, Corinne  
Orban, Marcel  
Orgensen, Avel Borup  
Orr, Robin  
Osterc, Slovko  
Otakor, Astricil  
O’Tooles, O.  
Otte, Hans  
Outin, Daniel  
Ouzounoff, Daniel  
Ovanin, Nikola Léonard  
Owens, Robert Us  
Pabor, Karol  
Paccagnini, Angelo  
Paciorkiewicz, Iadeusz  
Padunobur, A.  
Paësiello, Gislaine  
Pagliano, Pierre  
Paik, Byung-dang  
Paillet, Joseph  
Palacio, Pedro  
Palan, Manuel  
Paliachierli  
Pallis, Marco  
Palpant, Bruno  
Palster, Roman  
Panach, Eduardo  
Panni, Marcello  
Papadopoulos, Serge  
Papapietro, Philippe  
Papineau-Couture, Jean  
Papp, Layos  
Paquet, Jean  
París, Alain  
Park, Gordon  
Parodi, Renato

Parsons, Harry  
Partlander, George  
Partos, Vedoën  
Parwez, Akmal  
Pascal, André  
Pascal, Claude  
Passani, Emile  
Pastor, Paul  
Patachich, Ivan  
Pathier, A.  
Patin, Jonel  
Patorini-Casadesus, Régina  
Patterson, Paul  
Paul, Alice  
Pavck, Joseph  
Payne, Anthony  
Pazman, Georges  
Païta, François  
Pearlman, Martin  
Pedon, Madeleine  
Pellemeulle, Ed.  
Pénan, Roger  
Pendleton, Ed. et Aline  
Penhersi, Zbigniew  
Penterses, James  
Pentland, Barbara  
Pépin, Clermont  
Peragallo, Mario  
Perez, Maurice  
Pergament, Moses  
Périer, Alain  
Perle, George  
Pern, Jacques [Daguillon, Jacques]  
Pernette, Roger  
Pero, Hans  
Pero-Cadery

Perrault, Michel  
Perrenoud, Jean-Frédéric  
Perrin, Jean  
Perrin, Jean-Jacques  
Perthuis-Bazin  
Pesko, Zoltan  
Petit, Jean-Louis  
Petitgirard, Alain  
Petko-Stainov  
Petra Basacopol, Carmen  
Petrassi, Goffredo  
Petric, Ivo  
Petridis, Pedro  
Pettersson, Allan  
Peyssies, Marcel  
Pezzati, Romano  
Philiba, Nicole  
Philipp, Franz  
Philippart, Renée  
Philippot, Michel  
Piantoni, Louis  
Piara, M.  
Picard, Jacques  
Picard, Jean  
Piccirillo, Matteo  
Pichareau, Claude  
Picheran, Marcel  
Pierick-Houdy, Pierre  
Pierjat, Alis  
Pierné, Paul  
Pierre, Frédéric  
Pierre, Jacques  
Pierre, Jean-Robert  
Piesen, Ferdinand  
Pigot, Albert  
Piguet, Michel

Pillney, Karl-Hermann  
Pillois, Jacques  
Pinchard, Max  
Pinilla, Enrique  
Pipkov, Lubomir  
Pipon, Lucien  
Pirot, Camille  
Pissa, Hildia  
Pizzetti, Ildebrando  
Plaja, J. B.  
Plancon, Paul  
Planel, Robert  
Plantard, Rolande  
Platon, Georges  
Plé, Simone  
Plicque, Eveline  
Pociello, Christian  
Pohl, Frédéric  
Polešva, Jaromer  
Pollet, Marcel  
Pomey, Jean-Marie  
Poneigh, Jean  
Poniridy, Georges  
Ponse, Luctuor  
Ponsin, Marcel  
Ponthus, Jean  
Poot, Marcel  
Porcelijn, David  
Porte, Jacques  
Portet-Roma, Jaime  
Porton, François-Gilles  
Potter  
Pouget, René  
Pouget, Yves (Madame)  
Pouinard, Alfred  
Poulteau, Pierre

Prado, Armeida  
Preger, Léo  
Premru, Raymond  
Prévost, André  
Prevost, Jackie  
Priaulx, Rainier  
Prieto, Julio  
Prin, Yves  
Procaccini, Teresa  
Prokapiou, Stavros  
Prokopius, Franz  
Prosev, Thoma  
Prous, Jeanne  
Pry, Louis  
Ptaszynska, Marta  
Puech, Janet  
Puget, Alex et Vincent  
Puig-Roget, Henriette  
Pulli, Jaakko  
Quatrefages, Robert  
Quérat, Marcel  
Queyroux, Yves  
Quignard, René  
Quinton-Savarit  
Rabey, Pierre  
Rabol, Georges  
Rabrushka, Aaron  
Rachet, Adèle  
Racol, Maurice  
Radic, Dusan  
Raff, Tony (Madame)  
Raffat de Railhac  
Raitchev, Alexandre  
Rajicic, Stanojlo  
Ramet, Didier  
Ramette, Yves

Ramirez, Franco. F.  
Ramous, Gianni  
Ramovs, Primož  
Rands, Bernard  
Ranki, György  
Rapf, Kurt  
Raphael, Günter  
Raquillet, Daniel  
Rasch, Kurt  
Rasmussen, Karl Aage  
Rathaus, Karl  
Raxach, Enrique  
Raynaud, Philippe  
Rea, William  
Reboisson, Jeanne  
Rebotier, Jacques  
Rechid, Djemal  
Reculard, Jean  
Redel, Martin Christophe  
Reeder, Haydn  
Regelly, Hélène  
Reimann, Aribert  
Reiner, Karl  
Reitlinger, Guy  
Reizenstein, Franz  
Remascha, F.  
Renault, André  
Renié, Henriette  
Renier Van der Velden  
Restif, Andrée  
Retchitzky, Mayor [Marcel]  
Reveyron, Joseph  
Reynolds, Roger  
Ribary, Antal  
Ribollet, Albert  
Richardson, Alan



Rieti, Vittorio  
Rieunier, Jean-Paul  
Rihm, Wolfgang  
Rimbaut, Pierre  
Rinadolo, Rinaldi  
Rinck, Albert Robert  
Riondy, Lucien  
Riotte, André  
Rissel, Keith  
Risset, Jean-Claude  
Ritter, Helmut  
Rivière, Jean-Pierre  
Robillard, Raymond  
Rochart, Andrée  
Rochberg, George  
Rodney Bennett, Richard  
Rodriguez, Alberto  
Roesgen-Champion, Marguerite  
Roger, Denise  
Roger, Edmond  
Roger, Emile  
Rogiseter, Jean  
Rogister, Jean  
Rohr, Robert  
Roisier, René  
Roland, Alphonse  
Roland, Claude Robert  
Rolin, Etienne  
Rolin, Etienne-Frédéric  
Rollin, Jean  
Rolnick, Neil B.  
Rolwes, Heinz  
Roman, Johan H.  
Romane, Paul  
Romanette, Janine  
Romano, Léonce

Roquin, Louis  
Rorem, Ned  
Ros, Antonio Fernandez  
Rose, Alfred  
Roselius, Ludwig  
Rosen, Jérôme  
Rosenberg, Hilding  
Rosenlecker, Georges  
Rosier, Edmée [Pseudo]  
Rosier, Robert  
Rossum, Terdencla van  
Rostain, Lucienne  
Rota, Nino  
Rotondi, Umberto  
Röttger, Heinz  
Roullin, François Ellie  
Rousseau, Norbert  
Rouvière, Maxime  
Rövenstrunck, Bernhard  
Rovsing, Olsen  
Rovsing, Olsen Paul  
Roy, Alphonse  
Rozsa, Miklos  
Rubin de Cervin, Ernesto  
Rubin, Marcel  
Rudajev, Alexandre  
Ruders, Paul  
Rudzinski, Witold  
Rueff, Jeanine [Janine ?]  
Ruggles, Carl  
Ruspontini, Angelo  
Ruyneman, Daniel  
Ryterband, Roman  
S. Moninszko, J. Fitelberg  
Sabbagh, Iaounik  
Sadai, Yizhad

Saenz, Pedro  
Saeverud, Harald  
Sagaev, Dimitar  
Sala, André  
Salter, Morel  
Saminsky, Lazare  
Samuel, Gerhard  
Sandor, Veress  
Sandry, Hermann  
Sandères, Valérie  
Sangra, Domingo  
Sansonetti, Marcelle  
Santa-Cruz, Domingo  
Santamaria, Gaëtan  
Santoro, Galiano  
Sapiejevski, Jerzy  
Sarai, Tibor  
Sari, Josef  
Sarkozy, Istvan  
Sarteur, Lucien  
Sary, Laszlo  
Sato, Kimi  
Saudek, Vojtech  
Sauder, Vojtech  
Sauvageot, H. [Madame]  
Saux, Gaston  
Saxton, Robert  
Saylor, Bruce  
Scarlatti, Bruno  
Scelsi, Giacinto  
Schadel, Frédéric  
Schaefers, Anton  
Schafer, Murray  
Schafer, Murray  
Schat, Peter  
Schelb, Josef

Schelle, Josef  
Schenke, Jean-Gustave  
Schierbeck, Paul  
Schiller, Armin  
Schindler, Gerhard  
Schirlé, A. J.  
Schirren, Fernand  
Schiske, Karl  
Schlaxos, Georges  
Schliepe, Ernst  
Schlippe, Gerhard  
Schlosser, Paul  
Schlotmann, Werner  
Schmidt, Franz  
Schmidt-Wunstorf, Rudolf  
Schmit, Camille  
Schneider, Horst  
Schneider, René  
Schneider, Urs Peter  
Schnittke, Alfred  
Schoeck, Othmar  
Schoemaker, Maurice  
Schollum, Robert  
Scholz, Erwin Christian  
Schönbach, Dieter  
Schönfeld, Günter  
Schonherr, Max  
Schotzenberger, J. P.  
Schu, Marcel  
Schubert, Manfred  
Schubirz, Georg  
Schugalte, Michaël  
Schulie, Bernard  
Schultz, Herbert  
Schurmann, Gérard  
Schützenberger, Jean-Paul

Schuster, Giora  
Schwaen, Kurt  
Schwantner, Joseph  
Schwartz, A. Paul  
Schwartz, Francis  
Schwertsik, Kurt  
Sciarrino, Salvatore  
Sciortino, Patrice  
Scogna, Flavio  
Scolari, Henri  
Scotto, Marc César  
Sculthorpe, Peter  
Searle, Humphry  
Sedlmayr, Artur  
Seiber, Matyas  
Seierl, Wolfgang  
Seiter, Hebert  
Sekely, Endre  
Sekmidseder, Ludwig  
Selcuk, Timur  
Semenoff, Yvan  
Semler-Collery, Jules  
Sengers, H. Y. Mle  
Seni, Elizabeth  
Sentis, José  
Serane, Jean  
Sérant, Dominique  
Sérilhac, René  
Seringès, Ch.  
Serocki, Kazimierz  
Serrano, Jacques  
Serre, Jacques  
Serrette, François  
Seter, Mordecai  
Sevet, Léon  
Sfetsas, Kyriacos

Sgrizzi, Luciano  
Sheriff, M.  
Shinohara, Makoto  
Shishido, Mutsuo  
Shore, Claire  
Sicilianos, Yorgo  
Siebert, Friedrich  
Sigmund, Oskar  
Sikora, Elisabeth  
Sikorski, K.  
Sikorski, Tomasz  
Silberman, Bénédict  
Silesu, Lao  
Sillamy, Jean-Claude  
Silvestri, Constantin  
Simon, Frédéric  
Simon-Vermot, C.  
Simonis, J. M.  
Simons, Netty  
Singer, Malcolm J.  
Singer, Sigismond  
Sinon, C. P.  
Siohan, Robert  
Sipush, Kresimir  
Sissilianos, Yargo  
Sjogren, Emil  
Sjukur, Slamet A.  
Skalkottas, N.  
Skekely, Endre  
Skerjanc, L. M.  
Skerl, Dane  
Sklenicka, Karel  
Skrowaczewski, Stranislav  
Sluszanska, Amélie  
Smith Brindle, Reginald  
Smith, John Rushby

Smith, Russell  
Soby Labey, Ch.  
Soccio, Giuseppe  
Sohal, Naresh  
Sokorski, Jezzy  
Solatti, Franck  
Soler-Casabon  
Somer, Louis  
Somers, Harry  
Sonnenfeld, Kurt  
Sonneville, René [Cassini, P.]  
Soproni, Jozsef  
Soret, Maurice  
Souc, Lucien  
Soudry, Georges  
Soulès, Bernanrd  
Soyer, André  
Spector, Erwin  
Spehnan, Timothy Mather  
Spence Lyons, David  
Spirea, André  
Spisak, Michel  
Spitzmuller, Alexandre  
Squire, Cyril James  
Srawley, Stephen  
Stachowsky, Marec  
Stadlmair, Hans  
Staehlin, Pierre  
Staelenberg, Renée  
Staempfli, Edward  
Stalin, Georges  
Stallaert, Alphonse  
Stancanelli, Sergio  
Standford, Patric  
Stanley, John  
Starer, Robert

Steffen, Wolfgang  
Stehman, Jacques  
Steidel, Mark  
Stein, Egon L.  
Steinmetz, Carl  
Stekel, Eric-Paul  
Stern, Marcel  
Stevens, James  
Stewart, Robert  
Stibilj, Milan  
Still, William Grant  
Stilman, Julia  
Stögbauer, Johannes [Isidor]  
Stoyanov, Vesseline  
Straesser, Joen  
Strange, Allen  
Strider, R. Hayes  
Strum, Paul  
Stubbs, W. E.  
Stubss, Thomas  
Stutschewsky, Joachim  
Subotnick, Morton  
Succar, Toufic  
Sucharickul, Somtow  
Suder, Joseph  
Sueyoshi, Yasuo  
Sugar, Rezso  
Surinach, Carlos  
Sussman, Ettel  
Sutermeister, Heinrich  
Swanson, Howard  
Swayne, Giles  
Sydeman, William  
Szabelski, Boleslaw  
Szabo, Ferenz  
Szalowski, Antoni



Szekely, Endre  
Szervanszky, Endré  
Szöllösy, András  
Szonyi, Ersébet  
Szulc, Joseph  
T. Stefani, J. Eitelberg  
Taduta, Sigismund  
Tahourdin, Peter  
Taïra, Yoshihisa  
Takács, Jeno  
Tal, Joseph  
Tamba, Akira  
Tang, Truong  
Tansman, Alexandre  
Tapia, Tolman  
Tardif, Henri (abbé)  
Tarp, Eric  
Tartarin, A.  
Tate, Phyllis  
Taverner, John  
Tavernier, Marc  
Taylor, Clifford  
Taylor, Dean C.  
Tcherepnin, Alexandre  
Tcherepnin, Ivan  
Tcherepnin, Serge  
Tedesco, Casternuovo  
Temprement, Jean  
Ténaro, L.  
Terrade, Roger  
Terrier Laffailles, Anne  
Terzakis, Dimitri  
Terzian, Alicia  
Tessier, Roger  
Testi, Flavio  
Teuscher, Wolfgang

Teyseyre, J. [Madame]  
Tharichen, Werner  
Theil, Eritz  
Theodorakis, Mikis  
Theodoroff, Nikolaus  
Theurer, André  
Thévenin, Henri  
Thiebat, Pierre  
Thiérac, Jacques  
Thimnonien, René  
Thiriet, André  
Thiriet, Maurice  
Thirion, Louis  
Thiry, Albert  
Thobrither, Joseph  
Thoeodorr, Nikolaïs  
Thomas, André  
Thomas, Henry  
Thommesson, Olav Anton  
Thouvigny, Bernard  
Timnory, Gabriel  
Tisné, Antoine  
Tlil, Amali  
Toch, Ernst  
Ton That Tiêt  
Tore, Torlind  
Tortelier, Paul  
Tosar, Hector  
Tottoli, L.  
Tournier, Franz  
Tournier, Marcel  
Tourrel, Raoul  
Toussaint, J. Jacques  
Toussaint, Jean-Jacques  
Trajkovic, Vlastimir  
Treibmann, Karl Ottomar

Tremblay, Gilles  
Tremblot de la Croix, Francine  
Tremisot, E.  
Trémois, Marcel  
Trépart, Emile  
Trevillot, Hervé  
Trimble, Lester  
Trojahn, Manfred  
Trone, Karel  
Turchi, Guido  
Turcon, Léopold  
Turel, Séverin  
Turski, Zbigniew  
Tuukkanen, Kalervo  
Tuxen-Bang, Carlos  
Twardowski, Romuald  
Uchida, Masato  
Ugoletti, Paolo  
Uhl, Alfred  
Ungary, Tamas  
Uny, Raoul  
Urbanner, Erich  
Usmanbas, Ilhan  
Uzandizaga  
Vacchi, Fabio  
Vackar, Dalibor C.  
Vaillant, Raymond  
Valcourt, Jean  
Vale, Sydney  
Valek, Jiri  
Valen, Fartein  
Valéry, Claude  
Vallée, Georges-Robert  
Vallerand  
Vallier, Jacques  
Valls [Walls ?], Manuel

Valls, Joseph  
Van Cleef, Edouard  
Van Delden, Lex  
Vandelle, Bomuald  
Van de Port, Théodore  
Van de Walle, Maurice  
Van Gucht, Julien  
Van Heesbeke, Georges  
Van Hemel, Oscar  
Van Hoof, Jef  
Van Maele, G.  
Van Rossum, Frederik  
Van Rund, G.  
Van Runs, G.  
Van Vlijmen, Jan  
Van, Itsvan  
Van-Tuồng. N'Guyen  
Varigault, Eugène  
Varona, Lewis  
Varvoglis, Marios  
Vasquez, Edmundo  
Vaucienne, François (Madame)  
Vecsey, Jeno  
Veerhoff, Carlos H.  
Vellones, Pierre  
Veress, Sandor  
Veretti, Andrew  
Vermeiren, Jef  
Véronis, Jean  
Verroust, Victor  
Versepuy, Mario  
Vertongen, Lucien  
Verzieux, Ch.  
Vetsera, Walter  
Veyrier, Jacques  
Vibert, Mathieu

Vic, Claude-Henri  
Victory, Gérard  
Vierne, Louis  
Vieux, Jeanne  
Vigot, Thérèse  
Viguier, M. L. (Mme.)  
Vilen, Asko  
Villa-Lobos, Héitor  
Villatoro, Joaqim [Joaquim ?]  
Ville, Albert Cherker  
Villette, Pierre  
Vincenzo, Cinque  
Viollier, Renée  
Viozzi, Giulio  
Vitray, Jacques Philippe  
Vittoria, Mario  
Vladiguerov, Pontolio  
Vlavianos, Lakis  
Vochery, Henri  
Vogel, Wladimir  
Vogler, Georg Josef  
Vogt, Hans  
Voirin, Jean  
Voirpy, Alain  
Volckaert, Jean  
Volkonsky, André  
Volly, Cor. Kovaes Koltai  
Von Eeckhouste  
Von Wrochem, Klauss  
Voormoler, Alex  
Voss, Friedrich  
Vostrak, Zbinek  
Vredenburg, Max  
Vuataz, Roger  
Vuillemin, Louis  
Wagner, Joseph

Wahl, Helmut  
Wahl-Hugon, Myriam  
Walker, Ernest  
Walle (Van de)  
Walters, Gareth  
Watkins, Daniel  
Watling, Ray  
Wayenberg, Daniel  
Webber, Lloyd  
Weddington, Maurice  
Wehding, Hans Hendrik  
Weigl, Karl  
Weill, Pierre  
Weinberg, Bernard  
Weinberg, Henry  
Weinberger, J.  
Weiner, Léo  
Weiner, Stanley [fiche では Wiener, Stanley]  
Weinzweig, John  
Weis, Flauning  
Weisgall, Hugo  
Wellejus, Henning  
Weller, Donald  
Wellesz, Egon  
Wen-Chung, Chou  
Wendel, Martin  
Weninger, Léopold  
Wenisch, Henri  
Wenning, Hermann  
Werder, Félix  
Werner, Fritz  
Werner, Georges  
Werner, Jean-Jacques  
Westergrand, Swend  
Weyer, Jules  
Weymouth, Daniel

White, John  
Wiener, Gaston  
Wiéner, Jean  
Wiernik, Adam  
Wieth-Knudsen, Asbjörn  
Wildberger, Jacques  
Wildgans, Friedrich  
Wilfred, Joseph  
Wilkinson, Marc  
Will, Edouard  
Williamson, Malcolm  
Willis, Richard  
Wilson, George Balch  
Wiren, Dag  
Wirstiuk, E.  
Wissmer, Pierre  
Wittenbach, Jung  
Wittinger, Robert  
Wohl, Helmut  
Wohlhauser, René  
Wolff, Félicien  
Wolff, Jean-Claude  
Won, Yong Sook  
Wood, Christopher  
Wuorinen, Charles  
Wyschnegradsky, Ivan  
Xanthoudakis, Haris  
Xenakis, Iannis  
Yakovleff, E. [Madame]  
Yashiro, Akio  
Youngerman, Duncan  
Yuasa, Joji  
Yun, Isang  
Zádor, Eugen  
Zaikowsky, Renée  
Zaikowsky, Renée [Madame]

Zaren, Mirtcho  
Zbar, Michel  
Zbinden, Julien-François  
Zecchi, Adone  
Zehnacker, Serge  
Zeisl, Erich  
Zelenska Dismas, Jean  
Zender, Hans  
Zevaco, P.  
Ziems, Harry  
Ziino, Ottavio  
Zimmermann, Bernd Alois  
Zinsstag, Dolf  
Zinsstag, Gérard  
Zipoli, Domenico  
Zotta, Luigi  
Zumaque, Francisco  
[Mme Van de Wiele] ※作曲家ではなくスコアを送付した人物の名  
[Offenbach, Jacques]  
[Omar Khayyam de Robāiyat]  
[Onslow, Georges]  
[Paladivle, E.]  
[Quantz]  
[Reger, Max]  
[Respighi]  
[Schola Cnatorum de Nantes]  
[Schubert, Franz]  
[Stamitz, Carl]  
[Sweelinck, Jean Pieters]  
[Tailleferre, Germaine]